

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第353集

# 篠館跡発掘調査報告書

一般国道283号仙人峠道路改築事業関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団  
埋蔵文化財センター

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第353集  
 篠館跡発掘調査報告書正誤表

Page No.	Line	False	True
59	35	1:60	1:600
133	30		(遺物No.) 6
139	28		(遺物No.) 153
153	29	277 鑿	277 鉄鋌
172	38	1:100	1:1000
248	28	03201	03208

しのだてあと  
篠館跡発掘調査報告書

一般国道283号仙人峠道路改築事業関連遺跡発掘調査

## 序

本県には、旧石器時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地が各地に分布しております。これら先人の貴重な文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは私達県民に課せられた重大な責務であります。

一方、本調査の原因となりました一般国道283号“仙人峠道路”改築事業を例にあげるもなく、現代社会を豊かにし、快適な生活を送るための地域開発も県民の切実な願いであります。埋蔵文化財の保護・保存と地域開発という相容れない要素を持つ事業の調和のとれた施策が今日的課題となっております。

当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、埋蔵文化財保護の立場にたって、県教育委員会文化課の指導と調整のもとに開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡について発掘調査を行い、その記録を残す措置をとってまいりました。

本書は、一般国道283号“仙人峠道路”改築事業に関連して、平成10年から11年度に行われた篠館跡発掘調査の結果について収録したものであります。調査の結果、早瀬川左岸の尾根上に立地する16世紀を中心とした館跡であることが明らかになりました。曲輪や堀跡からは青磁をはじめとする陶磁器や甲冑に使われた漆塗りの小札等の遺物が出土しており、周辺に散在する館跡との関連性や当時の社会状況を考える上での貴重な資料を提供することができました。

この本書が広く活用され、斯学の研究に寄与するとともに埋蔵文化財に対する関心と理解をいっそう深めることに役立つことを切に希望いたします。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成にご協力とご支援を賜りました遠野地方振興局土木部、遠野市教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より感謝申し上げます。

平成12年9月

財団法人 岩手県文化振興事業団  
理事長 千葉浩一

## 例 言

1. 本報告書は、岩手県遠野市上郷町細越第16地割字赤羽根94番地6ほかに所在する篠館跡発掘調査の結果を収録したものである。
2. 本遺跡の発掘調査は、一般国道283号“仙人峠道路”改築事業に伴い、県教育委員会文化課・遠野地方振興局土木部の協議を経て、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。
3. 発掘調査は、平成10～11年度に実施したものである。委託者は遠野地方振興局土木部である。
4. 岩手県遺跡登録台帳番号と調査時の遺跡各次略号は、以下のとおりである。  
遺跡登録台帳番号 …… MF76-0298  
遺跡略号 …… SND-98・SND-99
5. 調査期間と調査面積と野外調査担当者は、以下のとおりである。  
平成10年4月15日～11月2日／11,550㎡／小笠原 健一郎・熊谷 佳恵  
平成11年4月15日～11月5日／7,750㎡／小笠原 健一郎・北田 勲(7月1日～11月5日)  
藤原 賢徳(4月15日～6月30日)
6. 調査の室内整理期間と整理担当者は、以下のとおりである。  
平成10年11月4日～平成11年3月31日／小笠原 健一郎・熊谷 佳恵  
平成11年11月8日～平成12年3月31日／小笠原 健一郎・北田 勲
7. 本報告書の執筆は、小笠原健一郎が担当している。
8. 自然科学関連の分析鑑定と保存処理は、次の方々と機関に依頼した。(敬称略)  
炭化物年代測定……………バリノ・サーヴェイ(株)  
石質鑑定……………花崗岩研究会  
樹種同定……………高橋利彦(木工舎ゆい)  
鉄製品の保存処理……………新日本製鐵(株)釜石文化財処理センター(平成10年度)  
岩手県立博物館(平成11年度)
9. 座標原点の測量および空中写真撮影は、次の機関に依頼した。  
座標原点の測量……………(株)イチイ土木コンサルタント  
地形測量……………(株)ハイマーテック  
空中写真……………東邦航空株式会社
10. 本報告書の作成にあたり、次の方々ならびに機関からご指導とご協力をいただいた。(敬称略)  
遠野市教育委員会、遠野市立博物館、本堂 寿一(北上市立博物館)、佐々木 勝(岩手県教育委員会)、  
室野 秀文(盛岡市教育委員会)、吉永 陽三(佐賀県立九州陶磁文化館)、中野 晴久(常滑市民俗資料館)、  
藤澤 良祐・青木 修(瀬戸市埋蔵文化財センター)、仲野 泰裕・森 達也(愛知県陶磁資料館)、  
佐々木 満(甲府市教育委員会)、篠原 芳秀・鈴木 康之(広島県立歴史博物館)、  
室伏 徹(勝沼町教育委員会)、山口慶一・内野 正(東京都埋蔵文化財センター)。
11. 野外調査にあたっては遠野市と地元の方々に多大なるご協力をいただいた。
12. 本遺跡から出土した遺物および調査にかかわる資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管してある。

## 本文目次

序	
例言	
I. 調査に至る経過	3
II. 遺跡の位置と環境	3
1. 遺跡の位置	3
2. 遺跡周辺の地形と地質	5
3. 基本層序	7
4. 歴史的環境	8
5. 周辺の遺跡	13
III. 調査の方法と室内整理	19
1. 野外調査の方法	19
2. 室内整理の方法	20
IV. 検出された遺構と遺物	24
1. 概要	24
2. 曲輪・切岸	24
3. 堀跡・土塁・切岸	61
4. 掘立柱建物跡	78
5. 竪穴住居跡	80
6. 柱穴列	82
7. 石積	88
8. 集石	93
9. 土坑	105
10. 焼土遺構	117
11. 出土遺物	129
V. まとめ	165
1. 縄張について	165
2. 遺物について	167
3. 篠館跡の時期について	169
VI. 各種の鑑定と自然科学分析	173
1. 炭化物年代測定	173
2. 同樹種定	176
報告書抄録	248
職員一覧	249

## 図版目次

第 1 図	岩手県における遺跡の位置図	1	第43 図	3号堀跡・3号土塁・3号切岸	67
第 2 図	遺跡位置図	2	第44 図	4号堀跡・4号土塁・4号切岸	69
第 3 図	遺跡周辺の地形図	4	第45 図	5・6・7号堀跡、5・6号土塁(1)	71
第 4 図	遺跡周辺の地形分類図	6	第46 図	5・6・7号堀跡、5・6号土塁(2)	73
第 5 図	基本土層柱状図	7	第47 図	8・9号堀跡、7・8号土塁(1)	75
第 6 図	遺跡周辺の傾斜分類図	8	第48 図	8・9号堀跡、7・8号土塁(2)	77
第 7 図	阿曾沼氏系図	10	第49 図	1号掘立柱建物跡	79
第 8 図	遠野南部氏系図	12	第50 図	1号竪穴住居跡(1)	80
第 9 図	周辺の遺跡分布図	15	第51 図	1号竪穴住居跡(2)	81
第10 図	周辺の城館分布図	17・18	第52 図	1・2号柱穴列(1)	83
第11 図	グリッド配置図	19	第53 図	1・2号柱穴列(2)	84
第12 図	実測凡例図	22	第54 図	3号柱穴列	85
第13 図	1号曲輪	24	第55 図	4号柱穴列	86
第14 図	2号曲輪	25	第56 図	5号柱穴列	87
第15 図	3号曲輪・1号テラス状遺構	27	第57 図	1号石積(1)	88
第16 図	4号曲輪	28	第58 図	1号石積(2)	89
第17 図	5号切岸・5号曲輪・6号切岸	29	第59 図	1号石積(3)	90
第18 図	6号曲輪・7号切岸	31	第60 図	2号石積(1)	91
第19 図	7号曲輪・8号切岸	33	第61 図	2号石積(2)	92
第20 図	8号曲輪・9号切岸	35	第62 図	1号集石	93
第21 図	9号曲輪	36	第63 図	2号集石	94
第22 図	10号曲輪	38	第64 図	3・4・5号集石	95
第23 図	11号曲輪・9号切岸・1号武者走り状遺構 ・2号武者走り状遺構	40	第65 図	6・7・8号集石	97
第24 図	11号曲輪	41	第66 図	9号集石	98
第25 図	12号曲輪	42	第67 図	10号集石(1)	99
第26 図	13号曲輪・9号切岸(1)	43	第68 図	10号集石(2)	100
第27 図	13号曲輪・9号切岸(2)	44	第69 図	11号集石	101
第28 図	14・15号曲輪(1)	45	第70 図	12号集石(1)	102
第29 図	14・15号曲輪(2)	46	第71 図	12号集石(2)	103
第30 図	16・18・20・21・22号曲輪(1)	47	第72 図	13号集石	104
第31 図	16・18・20・21・22号曲輪(2)	48	第73 図	1・2・3・4号土坑	106
第32 図	20・22号曲輪(1)	51	第74 図	5・6・7・8号土坑	108
第33 図	20・22号曲輪(2)	52	第75 図	9・10・11・12号土坑	110
第34 図	23号曲輪	53	第76 図	13・14・15・16・17号土坑	112
第35 図	24号曲輪・8号切岸	54	第77 図	18・19・20・21・22・23号土坑	114
第36 図	25・27号曲輪、11・12号切岸(1)	56	第78 図	24・25・26・27・28号土坑	116
第37 図	25・27号曲輪、11・12号切岸(2)	57	第79 図	1・2・3・4・5・6号焼土遺構	118
第38 図	28・29・30号曲輪、13・14号切岸(1)	59	第80 図	7・8・9・10号焼土遺構	120
第39 図	28・29・30号曲輪、13・14号切岸(1)	60	第81 図	11・12号焼土	122
第40 図	1号堀跡・1号土塁・1号切岸	62	第82 図	遺構配置図(1)	123・124
第41 図	2号堀跡・2号土塁・2号切岸	64	第83 図	遺構配置図(2)	125
第42 図	2号土塁	65	第84 図	遺構配置図(3)	126
			第85 図	遺構配置図(4)	127

第 86 図	遺構配置図 (5) . . . . .	128	第 105 図	出土遺物 19 (金属 7) . . . . .	152
第 87 図	出土遺物 1 (青磁) . . . . .	133	第 106 図	出土遺物 20 (石製品・石器 1) . . . . .	154
第 88 図	出土遺物 2 (白磁) . . . . .	134	第 107 図	出土遺物 21 (石製品・石器 2) . . . . .	155
第 89 図	出土遺物 3 (染付 1) . . . . .	135	第 108 図	出土遺物 22 (石製品・石器 3) . . . . .	156
第 90 図	出土遺物 4 (染付 2) . . . . .	136	第 109 図	出土遺物 23 (石製品・石器 4) . . . . .	157
第 91 図	出土遺物 5 (染付 3) . . . . .	137	第 110 図	出土遺物 24 (石製品・石器 5) . . . . .	158
第 92 図	出土遺物 6 (国産陶器 1) . . . . .	139	第 111 図	出土遺物 25 (石製品・石器 6) . . . . .	159
第 93 図	出土遺物 7 (国産陶器 2) . . . . .	140	第 112 図	出土遺物 26 (羽口・炉壁・鉾滓) . . . . .	160
第 94 図	出土遺物 8 (国産陶器 3) . . . . .	141	第 113 図	出土遺物 27 (羽口・炉壁・鉾滓) . . . . .	161
第 95 図	出土遺物 9 (錢貨 1) . . . . .	142	第 114 図	出土遺物 28 (土器 1) . . . . .	162
第 96 図	出土遺物 10 (錢貨 2) . . . . .	143	第 115 図	出土遺物 29 (土器 2) . . . . .	163
第 97 図	出土遺物 11 (錢貨 3) . . . . .	144	第 116 図	出土遺物 30 (土器 3) . . . . .	164
第 98 図	出土遺物 12 (錢貨 4) . . . . .	145	第 117 図	推定俯瞰縄張図 . . . . .	166
第 99 図	出土遺物 13 (金属器 1) . . . . .	146	第 118 図	篠館跡縄張図 . . . . .	171・172
第 100 図	出土遺物 14 (金属器 2) . . . . .	147	第 119 図	科学分析 1 (年代測定資料) . . . . .	175
第 101 図	出土遺物 15 (金属器 3) . . . . .	148	第 120 図	科学分析 2 (同樹種定資料) . . . . .	177
第 102 図	出土遺物 16 (金属器 4) . . . . .	149	付図 1	現況地形図	
第 103 図	出土遺物 17 (金属器 5) . . . . .	150	付図 2	遺構詳細平面図	
第 104 図	出土遺物 18 (金属器 6) . . . . .	151	付図 3	遺構詳細俯瞰図 (西側)	
			付図 4	遺構詳細俯瞰図 (東側)	

## 写真図版目次

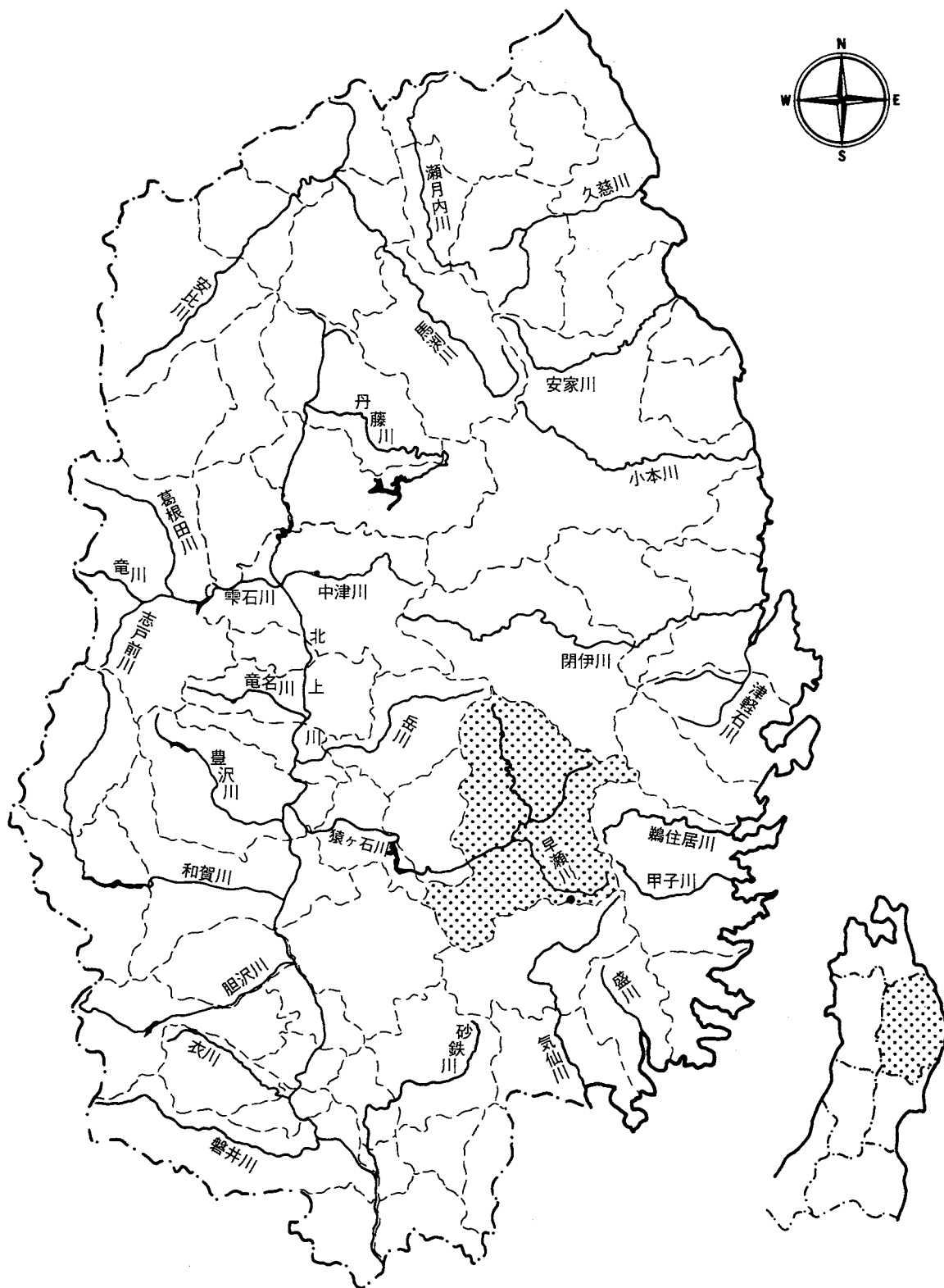
写真図版 1	空中写真 (1) . . . . .	181	写真図版 22	24・25・27・28・29・30号曲輪 . . . . .	202
写真図版 2	空中写真 (2) . . . . .	182	写真図版 23	1号堀跡・1号土塁・1号切岸 . . . . .	203
写真図版 3	空中写真 (3) . . . . .	183	写真図版 24	2号堀跡・2号土塁・2号切岸 . . . . .	204
写真図版 4	瀬戸・美濃系鉄釉陶器 (1) . . . . .	184	写真図版 25	2号堀跡・2号土塁・空中写真 (5) . . . . .	205
写真図版 5	瀬戸・美濃系灰釉陶器 (1) . . . . .	185	写真図版 26	3号堀跡・3号土塁・3号切岸 . . . . .	206
写真図版 6	瀬戸・美濃系灰釉陶器 (2) . . . . .	186	写真図版 27	4号堀跡・4号土塁・4号切岸 . . . . .	207
写真図版 7	瀬戸・美濃系鉄釉陶器 (2)・中国産赤絵 . . . . .	187	写真図版 28	5・6号堀跡、5号土塁 . . . . .	208
写真図版 8	青磁 . . . . .	188	写真図版 29	5・6号堀跡、6号土塁 . . . . .	209
写真図版 9	白磁 . . . . .	189	写真図版 30	7・8号堀跡、8号土塁 . . . . .	210
写真図版 10	染付 (1) . . . . .	190	写真図版 31	8・9号堀跡、8・9号土塁 . . . . .	211
写真図版 11	染付 (2) . . . . .	191	写真図版 32	空中写真 (6)・1号掘立柱建物跡 . . . . .	212
写真図版 12	遺跡近景・基本土層 . . . . .	192	写真図版 33	1号竪穴住居跡 . . . . .	213
写真図版 13	空中写真 (4) . . . . .	193	写真図版 34	1・2号柱穴列 . . . . .	214
写真図版 14	1号曲輪 . . . . .	194	写真図版 35	2号柱穴列 . . . . .	215
写真図版 15	2号曲輪 . . . . .	195	写真図版 36	3号柱穴列 . . . . .	216
写真図版 16	3・4・5・6・7号曲輪 . . . . .	196	写真図版 37	4号柱穴列 . . . . .	217
写真図版 17	8・9・10・11号曲輪、6・8号切岸・武者走 . . . . .	197	写真図版 38	5号柱穴列 . . . . .	218
写真図版 18	12・13・14・15号曲輪・7号切岸 . . . . .	198	写真図版 39	1号石積 . . . . .	219
写真図版 19	11・16・17号曲輪 . . . . .	199	写真図版 40	2号石積、1・2号集石 . . . . .	220
写真図版 20	18・19・20・21・22号曲輪・2号テラス . . . . .	200	写真図版 41	3・4・5・6号集石 . . . . .	221
写真図版 21	9・11・12号切岸、23・25・27号曲輪、2号武者走 . . . . .	201	写真図版 42	7・8・9・10号集石 . . . . .	222



写真図版43	11・12・13号集石、遺物出土状況	223	写真図版56	出土遺物3(錢貨1)	236
写真図版44	1・2・3・4号土坑	224	写真図版57	出土遺物4(錢貨2)	237
写真図版45	5・6・7・8号土坑	225	写真図版58	出土遺物5(錢貨3)	238
写真図版46	9・10・11・12号土坑	226	写真図版59	出土遺物6(金属器1)	239
写真図版47	13・14・15・16号土坑	227	写真図版60	出土遺物7(金属器2)	240
写真図版48	17・18・19・20・21号土坑	228	写真図版61	出土遺物8(金属器3)	241
写真図版49	22・23・24・25号土坑	229	写真図版62	出土遺物9(金属器4)	242
写真図版50	26・27・28号土坑、空中写真(7)	230	写真図版63	出土遺物10(石器・石製品1)	243
写真図版51	1・2・3・4号焼土遺構	231	写真図版64	出土遺物11(石器・石製品2)	244
写真図版52	5・6・7・8号焼土遺構	232	写真図版65	出土遺物12(羽口・炉壁・鉢滓)	245
写真図版53	9・10・11・12号焼土遺構	233	写真図版66	出土遺物13(土器1)	246
写真図版54	出土遺物1(染付)	234	写真図版67	出土遺物14(土器2)	247
写真図版55	出土遺物2(染付・国産陶器)	235			

## 表目次

第1表	周辺遺跡の一覧表	14
第2表	周辺の城館一覧表	16
第3表	青磁観察表	134
第4表	白磁観察表	137
第5表	染付観察表(1)	137
第6表	染付観察表(2)	138
第7表	赤絵観察表	138
第8表	国産陶器観察表	141
第9表	錢貨観察表	145
第10表	金属器観察表(1)	152
第11表	金属器観察表(2)	153
第12表	石製品・石器観察表(1)	153
第13表	石製品・石器観察表(2)	159
第14表	羽口・炉壁・鉢滓観察表	161
第15表	土器観察表	164
第16表	木製品観察表	164
第17表	骨角器観察表	164
第18表	曲輪一覧表	166



第1図 岩手県における遺跡の位置図



0 200m

第2図 遺跡位置図

## I. 調査に至る経過

「篠館跡」は「一般国道 283 号“仙人峠道路”改築事業」の施行に伴ってその事業区域内に位置することから発掘調査することとなったものである。

現在の一般国道 283 号は、仙人峠付近に狭隘な仙人トンネル (L=2.5 km、W=5.1 m) を含む 3.4 km の未改良区間があり、急勾配、急カーブが連続する非常に厳しい道路状況となっている。このような状況にもかかわらず、交通量は大型車をはじめとして年々増加しており、以前より釜石市をはじめとして強い改築要望があった路線である。

このような要望を受けて、建設省及び岩手県では検討を重ね、平成 4 年度より全体延長 L=18.6 km におよぶ「“仙人峠道路”改築事業」に着手することとなったものである。計画道路は自動車専用道路として計画され、「安全性の確保」とともに「交流圏域の拡大」、「リゾート利用の拡大」等、様々な整備効果が期待されている。計画期間の釜石側 13.2 km は建設省が工事を担当し、遠野側の 5.4 km については「“仙人峠道路”として岩手県で対応することとなっている。

「“仙人峠道路”改築事業」にかかる埋蔵文化財の取扱いについては建設省三陸国道工事事務所より平成元年 8 月 1 日付、建東陸調第 89 号「一般国道 283 号の改築計画区域に係わる埋蔵文化財の分布調査について（依頼）」の文書によって岩手県教育委員会に対して分布調査を依頼したのが最初である。依頼を受けた岩手県教育委員会では分布調査を実施し、その結果は平成 4 年 11 月 19 日付、事務連絡「一般国道 283 号の仙人峠道路の改築区域に係わる埋蔵文化財の分布について」で連絡された。

その連絡を受けた遠野地方振興局土木部では、道路計画区域が「篠館遺跡」の範囲内にかかることが確認されたことから、平成 9 年 4 月 21 日付、遠地土第 195 号「埋蔵文化財発掘調査の通知について」にて岩手県教育委員会を通して文化庁へ通知した。

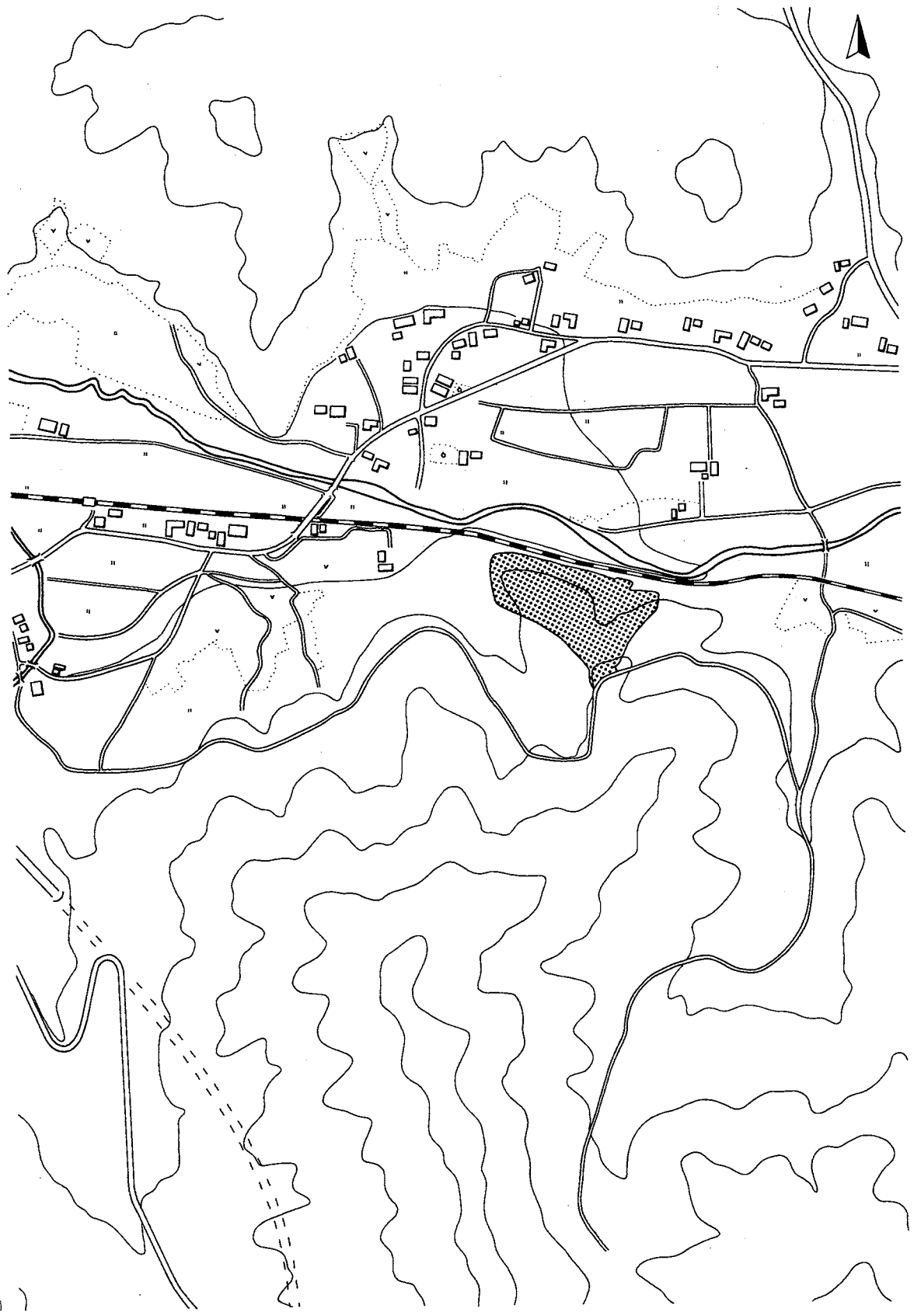
その後、岩手県教育委員会では、遠野地方振興局へ平成 9 年 4 月 30 日付、教文第 7-24 号「周辺の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」にて確認調査の必要の旨を通知した。

通知を受けた遠野地方振興局土木部では、平成 9 年 5 月 21 日付、遠地土第 336 号「埋蔵文化財確認調査について（依頼）」にて岩手県教育委員会に確認調査依頼を行い、平成 9 年 7 月 23 日に確認調査が実施された。その結果、詳細調査が必要と認められたことから、発掘対象面積 19,300 m<sup>2</sup> について（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターで発掘調査をすることとなったものであり、平成 10 年度は 11,550 m<sup>2</sup> について発掘調査を実施し、残りの 7,750 m<sup>2</sup> を平成 11 年度に調査するものである。

## II. 遺跡の位置と環境

### 1. 遺跡の位置

篠館跡の所在する遠野市は、北上山地の中南部に位置する遠野南部家一万三千石の城下町である。遺跡は第 2 図に示すように J R 釜石線平倉町駅の東南東約 800 m にあり、仙人峠から西流し猿ヶ石川に合流する早瀬川の右岸に舌状に張り出す赤羽根峠、秋丸峠や仙人峠へ通じる街道筋を一望できる尾根上に立地している。



第3図 遺跡周辺の地形図

南部家の居城であった鍋倉城跡からは約10 km東に位置する。猿ヶ石川流域は、東和町に昭和40年に完成した田瀬ダムを境にして上・下流に分けられており、遠野市はその上流域にあたる。北上山地は、老年期山地がその後の地殻変動によって隆起準平原化したもので、山地に続く丘陵縁辺部に小規模な段丘と沖積地が観察される。

遺跡は、国土地理院発行の2万5千分の地形図「遠野」N J-54-14-5-3（一関5号-3）の図幅に含まれ、北緯39度40分47秒、東経141度8分40秒付近にあたる。標高は400.3～504.3 mで、現況は山林である。

遠野市の東側は上閉伊郡大槌町・釜石市、西側が稗貫郡大迫町・東和町・上閉伊郡宮守村・江刺市、南側が気仙郡住田町、北側が下閉伊郡川井村の2市4町2村と隣接している。総面積は661.93 km<sup>2</sup>、人口2万3千人（平成12年1月1現在）を有する古来より内陸と沿岸を結ぶ中核都市である。

## 2. 遺跡周辺の地形と地質

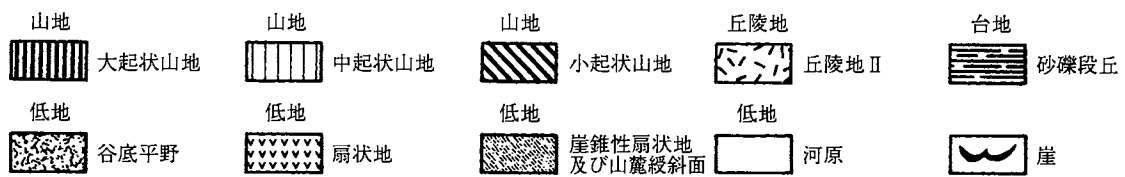
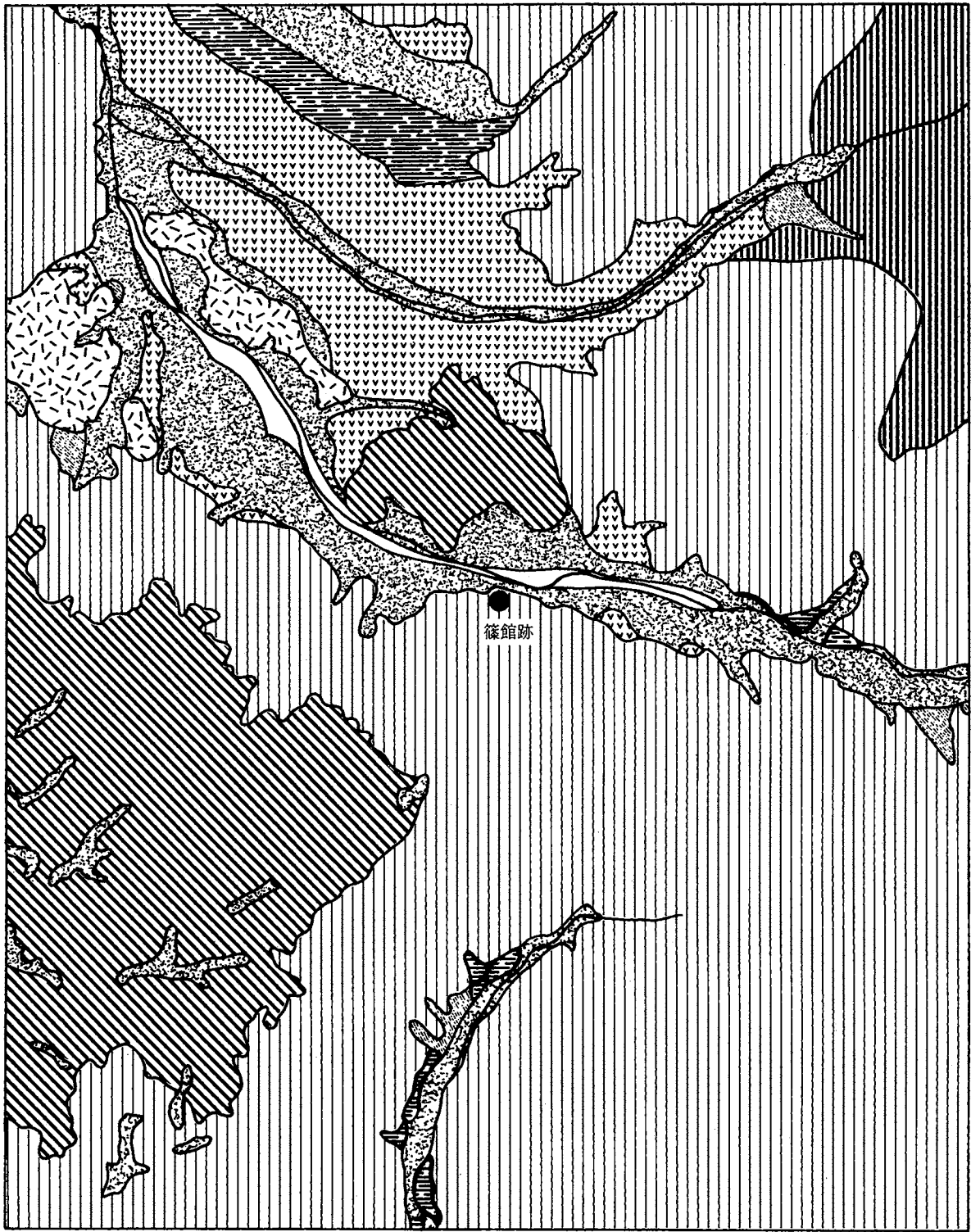
柳田国男が『遠野物語』の冒頭で「遠野郷は今の陸中上閉伊郡の西の半分、山々に取り囲まれたる平地なり。」とその地勢を著しているように、遠野市の市街地は遠野盆地といわれる中起伏山地に囲まれた谷底平野に位置している。町並みや水田の広がる平野を石上山（1038.1 m）、高清水山（797.7 m）、物見山（917.1 m）、耳切山（874.9 m）、六角牛山（1294.0）等のなだらかな山々が南と北から包むように遠野盆地を形成している。薬師岳（1644.9 m）の幽谷に源を発する猿ヶ石川により解析された細長い平野が延びる北の遼遠には、古来より霊峰として信仰の対象であった北上山系の最高峰である早池峰山（1914.0 m）の偉容を望むことができる。

また、遠野盆地は猿ヶ石川（73.1 km）や小鳥瀬川、早瀬川、来内川によって形成されたものであり、北上山系中最大の遠野・土淵花崗岩体の分布域である。その分布域はほぼこの谷底平野にあたる。

早瀬川は、釜石市との境にある仙人峠付近に源を発する流れ17.1 kmの猿ヶ石川の支流で、上郷町の平野原、宇南林一帯で扇状地を発達させ周囲の谷底平野との間に若干の比高差を持ちながら、支流の猫川や中沢川、河内川を合流して物見山と高清水山の狭隘部（標高約260 m）で来内川とほぼ同じに猿ヶ石川に注ぐ。支流の猫川も扇状地を形成して早瀬川に板沢で合流する。猿ヶ石川は、その1 km下流で流路を南から西に変え、南北の小、中起伏山地を解析しながら両岸に台地と河岸段丘を発達させ花巻市内で北上川と合流する。

遺跡は、早瀬川により形成された谷底平野に面する中起伏山地の北端に位置し、北側の小起伏山地との狭隘部の早瀬川の標高は約390 mである。約10 km西方の猿ヶ石川との合流点付近とは約130 mの比高差がある。

遺跡付近は、遠野花崗岩体と五葉山花崗岩体が貫入する二疊紀の粘板岩と輝緑凝灰岩、石灰岩の分布地帯で、遺跡はこの粘板岩が形成する山体の尾根の先端に位置している。遺跡内に露出しているこの粘板岩体には、激しい褶曲の跡がみられる。石灰岩の分布地帯には鍾乳洞が発達しており、遺跡の東南東約6 kmの地点には滝観洞、南約8.5 kmには岩手県立博物館により4ヶ年（平成7～10年）にわたって学術調査が行われていた小松洞穴がある。

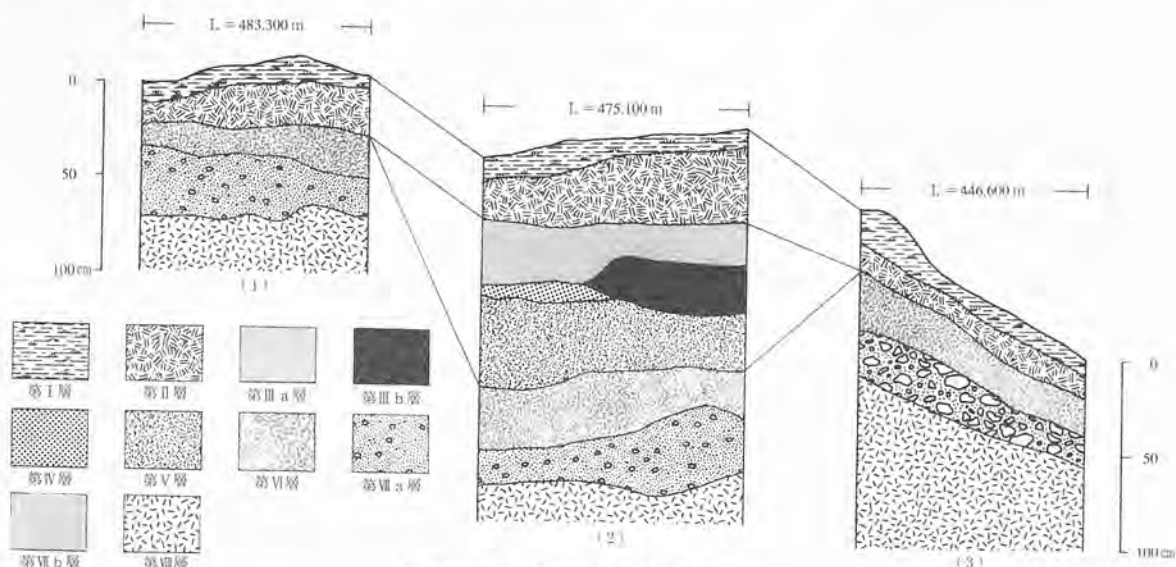


第4図 遺跡周辺の地形分類図

### 3. 基本土層

調査区は長さ約260 m、高低差約93 m、南から北西方向に「く」の字形に張り出した舌状の尾根にあり、北側は堆積岩の岩盤が露出する断崖である。東西は尾根を境に急傾斜を呈し、地点により若干の違いがあるが表土下の地層はほぼ一様である。調査区は、昭和の半ばまで草地として野焼きと草刈が繰り返されており、中世の遺構検出面である第Ⅵ層と第Ⅲ層までの自然堆積層は平均で約30 cm前後極めて薄い。第Ⅵ層は削平により構築された切岸あるいは曲輪の検出面であり、第Ⅲ層は盛土により構築された曲輪の検出面である。また、調査区は尾根に立地していることから第8図は調査区の尾根の西側の斜面（ⅣD4 h グリッド）（2）、調査区中央の尾根筋付近（ⅣD4 h グリッド）（1）と調査区の尾根東斜面（ⅣD3 c グリッド）（3）における深堀りの土層断面で、これを遺跡の基本土層とした。

調査区内で盛土による普請が行われた箇所には全て第Ⅳ層が検出されている。この層には炭化物が検出されている。また、曲輪の整地層となる第Ⅲ層は、第Ⅴ層や第Ⅵ層、第Ⅶ層の土が用いられている。



第5図 基本土層柱状図

第Ⅰ層：（10YR2/3）黒褐色土表土。層厚は8～16 cmと薄く、小礫を多く含んでいる。

第Ⅱ層：10YR3/3暗褐色土で層厚は12～40 cm。

第Ⅲ a 層：10YR4/4褐色土 層厚17～35 cm。遺構検出面。曲輪構築時の整地層で、尾根東西の帯曲輪と尾根筋の曲輪の拡幅部にみられる。尾根の地山の削平による盛土である。

b 層：10YR3/4暗褐色土 層厚は25～26 cm。a層と同様に曲輪構築時の整地層である。

第Ⅳ層：黒褐色土（10YR2/3） 層厚6～8 cm。炭化物を含む。旧表土層で盛土により普請された曲輪下にみられ第Ⅴ層とともに館構築以前の土層がそのまま残存する。

第Ⅴ層：暗褐色土色（10YR3/4）層厚30～48 cm。上部に炭化物を含む。

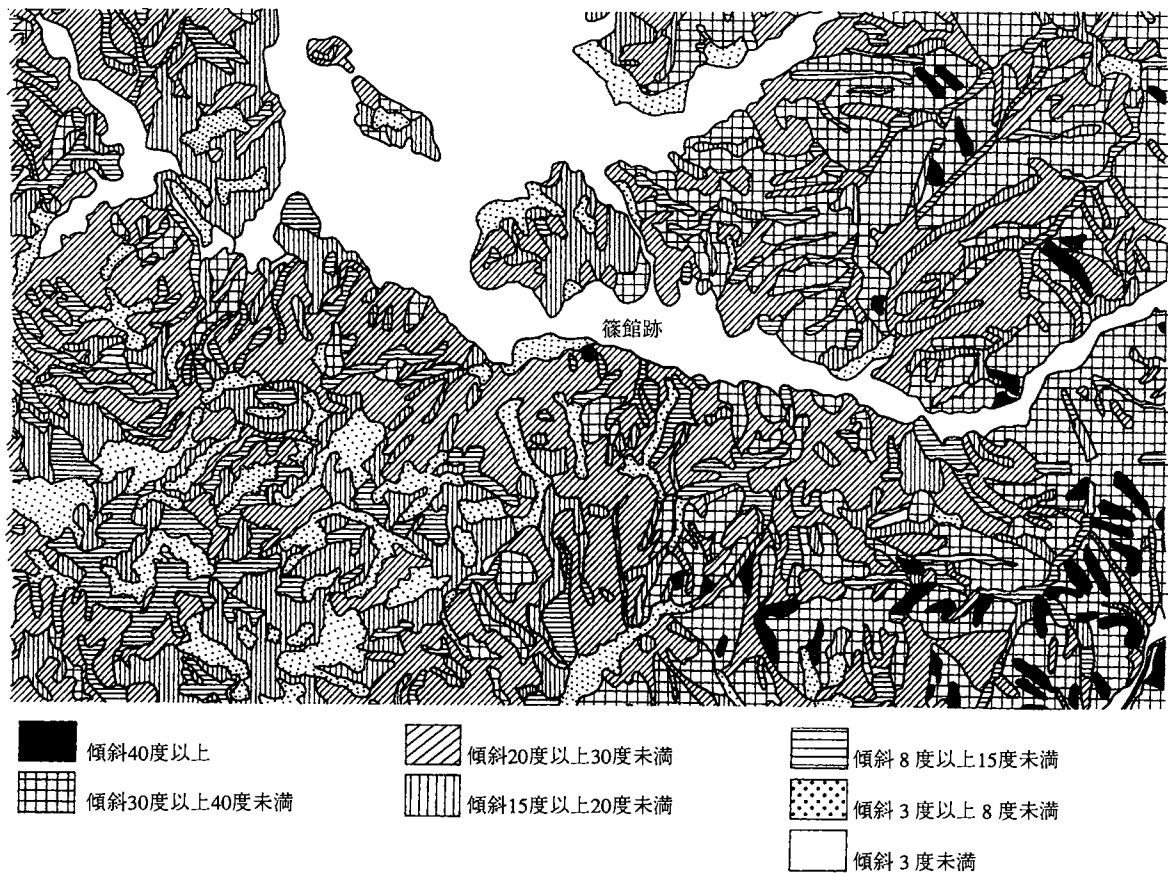
第Ⅵ層：褐色土（10YR4/4）層厚10～37 cm。小礫を含む。削平により普請された遺構検出面である。

第Ⅶ a 層：黄褐色土（10YR5/6）層厚18～44 cm。中～大礫を含む。

b 層：暗褐色土（10YR3/4）層厚16～27 cm。中～大礫を含む。

第Ⅷ層：オリーブ褐色粘土（2.5Y4/4）下部は頁岩の岩盤で調査区の基盤層を成す。層厚不明。





第6図 遺跡周辺の傾斜分類図

#### 4. 歴史的環境

篠館跡の位置する遠野市一帯は、中世には源頼朝の御家人であった下野の阿曾沼氏が地行し、近世には同南部氏が八戸より移住し治めていた地域にあたることから『岩手県史』、『遠野市史』、『阿曾沼興廢記』等からこの地域の歴史を外観し、篠館が存続していたと考えられる中世を中心に歴史的背景を明らかにしておきたい。

##### (1) 阿曾沼氏入部以前の遠野地方

遠野の名が歴史に登場するのは「日本後紀」卷二十一に弘仁2年(811)按察使兼征夷大將軍文室(屋)綿麻呂の征討の論功行賞について

「(前略) 陸奥国の蝦夷等代を歴、時を渉りて辺境を侵し乱り、百姓を殺略す。是を以てかけまくも畏き柏原朝廷の御時に、故従三位大伴宿禰弟麻呂を遣て伐平し給ひき。而余燼猶遣て鎮守未だ息ず、又故大納言坂上大宿禰田村麻呂等を遣て伐平しめ給ふに、遠閉伊村を極て略々掃除てしかども、山谷に逃隠て頭を尽て究殄すことをえずなりにたり。茲に因て正四位上文室朝臣綿麻呂を遣て、其傾覆勢に乗て伐平掃治しむるに、副將軍等各心を同し力を勦せ、忘殉心以て身命を惜まず勤仕奉り、幽遠く薄伐、巢穴を破覆して遂に其種族を絶て、復一二の遺も無刃戎解却、転餉をも停廢つ。其功勞を量は上治賜に足となも御念す。故是を以て其仕奉状の重軽の隨に冠を賜、治賜くと宜云々。(下略)」との記載がみられ、延暦16年から始まる坂上田村麻呂による征夷がすでに遠野地方にも及んでいたことがみうけられる。しかし、これ以前の遠野地方について

の明確な記録はなく伝承や『日本書紀』、『延喜式』等の朝廷側の東国観から窺い知るのみである。

周辺の閉伊郡は早くから開拓されており『續日本紀』巻七の靈龜元年（715）十月の条に「於閉村。便建郡家。」の記載がある。気仙郡は同じく延暦二十年（801）に置かれている。

『日本後紀』によれば「遠閉伊村」の名が記載された弘仁二年（811）の条には「弊（閉）伊」の名もみられ「遠閉伊」は「閉伊」とは区別されて使われていたと考えられる。この弘仁二年には和我（和賀）、稗縫（稗貫）、斯波（紫波）の三郡も置かれている。また、『遠野南部家文書』寛永四年（1627）の知行印紙には、「遠閉伊」が転訛により「拾戸」の記載もみられる。

創建が大同元年とされる市内松崎町矢崎の灌漑堰の口碑や慈覚大師（円仁）による遠野七観音創建、観音彫像を嘉祥年間（848～851）とする伝承から、『遠野市史』は遠野地方の本格的な開発を9世紀前半頃と比定している。

また、安倍氏と遠野地方の関係を直接著した資料はないが、『遠野物語』（65・66・67・68）や『遠野物語拾遺』（7・122）、『上閉伊郡志』等の安倍貞任と八幡太郎義家に纏わる多くの地名、伝承は遠野地方への安倍氏の影響力を窺わせるものである。

続く平安時代の末期に奥州を統一した平泉の藤原氏との関係については、「按ずるに、史上に名高き源右府の愛馬生接及び磨墨も、もと奥州藤原氏の進献にかかるといへば、当時之に依れる義経が亦、藤原氏領域内なる閉伊の愛馬を得たりとすること、必ずしも否定すべきにあらざらん。」という『上閉伊郡志』の記載や伝承が残るだけである。

## （2）阿曾沼氏入部以後の遠野

『岩手県史』や『阿曾沼興廢記』によれば、文治五年（1189）の後三年の役によって奥州藤原氏が滅亡すると、陸奥国は鎌倉幕府の統治下に置かれ、新たに入部してきた関東御家人に支配されることになった。当地方を与えられたのは阿曾沼四郎広綱である。

またこの時、南部次郎光行は糠部五郡を賜り、所領を持った御家人を奉行することになったのは当初平泉に居館した葛西三郎清重である。阿曾沼広綱の所領した遠野保は上郷と下郷の遠野十二郷で、この十二郷を『上閉伊郡志』では、以下のような範囲としている。

『阿曾沼興廢記』と『遠野古事記』には、「上郷は村の名知れず。」としている。

下六郷＝達曾部・田瀬・鱒沢・綾織・奥（小）友・宮森（守）、

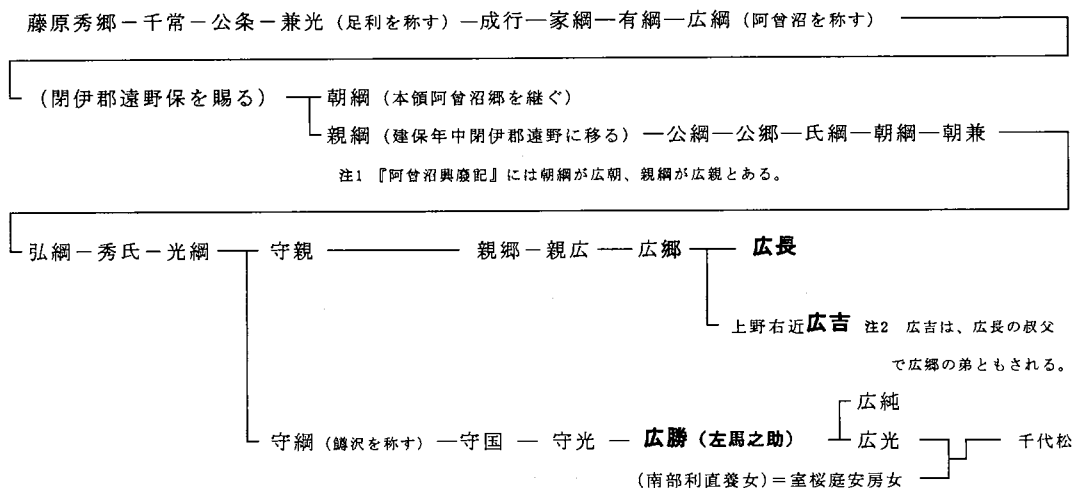
上六郷＝南郷（左比内・細越・板沢・平倉・中沢・糠前・青笹）、北郷（土淵・柄内・飯豊・柏崎・伏出・五日市）、

一郷（附馬牛・東禅寺・駒木・矢崎）、一郷（大槌・橋野・金沢・吉里吉里・栗林・鶉住居）、一郷（釜石・甲子・平田）、

一郷（豊間根・大沢・織笠・船越・山田）、一郷（横田・鶉崎・新里）、

篠館跡は、この上六郷の南郷、細越に位置する。

『宇夫方家乗』によれば、広綱は当時の慣習に従って自らは本領下野（現栃木県）阿曾沼郷に居住し、遠野には一族の宇夫方広房を代官として派遣しこれを治めさせている。実際に阿曾沼氏が遠野に入ったのは又次郎親綱で、その時期は保年間（1213～1218）と考察される。当初、居城は、遠野邑護摩堂山（現松崎町光興寺）に横田城（第10図57）を築き、以来阿曾沼広郷により鍋倉城跡（現遠野市民公園）に横田城が移転される天正年間までの三百数十年間遠野統治の中心となり、阿曾沼広綱が遠野保の地頭職に就いた文治五年から阿曾沼広長が領主の地位を失う慶長五年（1600）までの約400間は阿曾沼氏時代と呼ばれる。



『阿曾沼氏略系』鈴木吉十郎撰、『鱒沢氏系図』より

### 第7図 阿曾沼氏系図

この間に遠野地方も大きく開拓整備され、近世遠野南部氏による支配につながっていくことになるが、完全な「遠野」の名が文書に顕れるのは、建武元年(1334)の北畠顕家が南部師行に下した国宣の「遠野町え自他領より入荷役銭取立濫觴の件」では、古代にあった「遠閉伊」は「遠野保」に転じている

#### 国宣

阿曾沼下野権守朝綱代、朝兼申。遠野保事申状、子細見状、所詮、不日追却面懸左衛門尉以下之輩、可沙汰付朝兼、使節遅延者、可有其咎者也、依国宣達如件。

建武元年八月三日

大藏権少輔清高奉

南部又次郎殿

(『阿曾沼興廢記』より)

戦国時代には阿曾沼氏は周辺の大槌氏、気仙の千葉氏、南の葛西氏や後の伊達政宗、北の南部氏の狭間にあって幾多の合戦を余儀なくされる。主な合戦は以下の通りである。

永享九年(1437)三月	秀氏	岳波太郎、大槌孫三郎の侵攻	北朝三戸南部守行の救援討死
宝徳二年(1450)	光綱	葛西氏の臣金成右京太夫政実の来襲	
永正年中(1504～1520)	親郷（親広？）	葛西春胤に援兵	大崎氏攻め
弘治三年(1557)		葛西軍の来襲	西風館の合戦
天正七年(1579)	広郷	葛西氏の臣只野民部、及川土佐、千葉安房らの来襲	
天正年間(1573～91)	広郷	岩谷堂攻め	
天正十九年(1591)	広長	九戸の乱参戦	

16世紀後半になると、天下統一の動きを察した阿曾沼広郷は、天正七年（1579）七月に織田信長に白鷹の献上し所領安堵の御朱印をもらっている。

〔前略〕信長公の居城美濃の岐阜へ参着して、使札へ鷹を添て差出す。この時信長より謝礼の返簡を送られる（中略）。

未申通候處音問令祝着候。抑白鷹數雖多為到来、雪白之鷹未見及、希有之義相叶本懐、自愛無他日。恐々謹言。

巳卯七月二十日

信長

遠野孫次郎殿

〔『阿曾沼興廢記』より〕

しかし、信長が本能寺に倒れてから、豊臣秀吉には一切音信せず天正十八年（1590）の小田原城攻めにも参陣しなかったため、翌年の奥州仕置で広郷は領地没収の危機を一族の蒲生氏郷の取りなしで小田原参陣を果たした南部家の附庸となることで免れている。

また、広郷は居城を中世的山城であった旧城（第10図57）を鍋倉城（同54）に移転する。新横田城（鍋倉城）は、猿ヶ石川と早瀬川を外堀、来内川を内堀にした惣構であり、その間に町屋を入れ来内川の内側には諸士の屋敷を構えて直接城の守りにしながら要所に社寺を配した近世的城下町を造り上げた。松崎にあった一日市を移転させたり六日町を整備したり現在の市街地の原型はこの時の区画によるものである。新城の建設にあたっては『阿曾沼興廢記』の「遠野孫次郎広郷居城転移之事」では当時かなりの幹礫があったことが察せられる。また鍋倉城普請役は、上野広吉である。

阿曾沼氏を没落されることになる鱒沢左馬之助広勝は、阿曾沼秀氏の孫守綱から四代の孫である。16世紀末の鱒沢氏は本家と比肩する勢力であり、両者の間が緊迫した状況であったことが葛西晴胤から阿曾沼広長への書状で窺われる。

「急度啓入候。仍て兼て使者を以て、不能音問候事、心元無く次第候。随て信安、世田米下向の事、来二日に治定候。之に依て、大儀千万候共、世田米迄越し来り然るべく候。将又、鱒沢其口追出候に付、其方生害なしなされたき由、たしかに伝聞候。少しも油断の儀候ては言語同断候。談余の段、重ねて注意に及ばれ候間、略筆候。」

神無月二十六日

晴信

遠野孫次郎殿

追啓候。鱒沢被官共引入候て、其方生害なさせべき候間、返々油断すまじく候。

〔『岩手県史』所載『南部寛政記録』より〕

### （3）阿曾沼氏追放と南部氏の入部

慶長五年（1600）7月関ヶ原の合戦に際し、阿曾沼広長は徳川方につき南部家の旗下に上杉景勝討伐のため最上に出陣するが、配下の鱒沢左馬之助広勝は病を理由に出陣していない。遠征中に起きた稗貫・和賀の一揆の鎮圧を理由に南部利直は最上から10月3日花巻城に入る。機を同じくして、鱒沢広勝は、家老上野右近広吉、平清水駿河とともに兵を起し横田城を奪い、五輪峠で帰陣する広長の帰路を遮り世田米に追いやった。

『上閉伊郡志』によれば、篠館はこの「鱒沢左馬助広勝の一族関口某」、また早瀬川と釜石への街道を挟んで対峙する駒込館（瓜ヶ森館）も「鱒沢左馬助の一族平清水某の居りしところ」と伝えられる。

『阿曾沼興廢記』はこの原因を鱒沢左馬之助の野心私欲としているが、広郷の横田城移転による人身の離反と伊達と南部の大豪族に挟まれた阿曾沼氏がその中立政策のために広郷以来伊達よりの政治方針をとったこと、また南部信直、利直が当時本家阿曾沼氏に匹敵する力を持っていたとされる鱒沢氏を利用して対抗させた可能性は否定し得ない。さらに、広勝と広長の間には領地問題がありこれを仲裁した利直配下桜庭安房の裁定を広長が不服に思いこれを暗殺しようとしたこと。信直の葬儀（慶長4年）に広長が参列しなかったこ

とが最終的には阿曾沼氏を滅ぼすことを利直に決意させたのではないかと推察される。

阿曾沼広長は領地を奪還のために伊達正宗の後援を得、慶長6年(1601)三月に兵を起すが目的を果たせず兵を世田米に引くが、鱗沢左馬助広勝はこの住田の平田坂の合戦で討ち死にしている。『貞山公尊伝』巻二十一「慶長六年」の項には、この時海路伊達正宗の別動隊は釜石に入り狐崎に攻め落したとの記載がある。

同年秋、再び赤羽根峠から攻め入るが(赤羽根の合戦)、篠館跡より早瀬川下流にある刃金館(第10図23)館主平倉新兵衛(討死)、板沢館(同12)館主板沢平蔵らの働きで阿曾沼軍を撃退している。赤羽根合戦の古戦場跡は、篠館跡か南西へ約1.5kmに位置する。

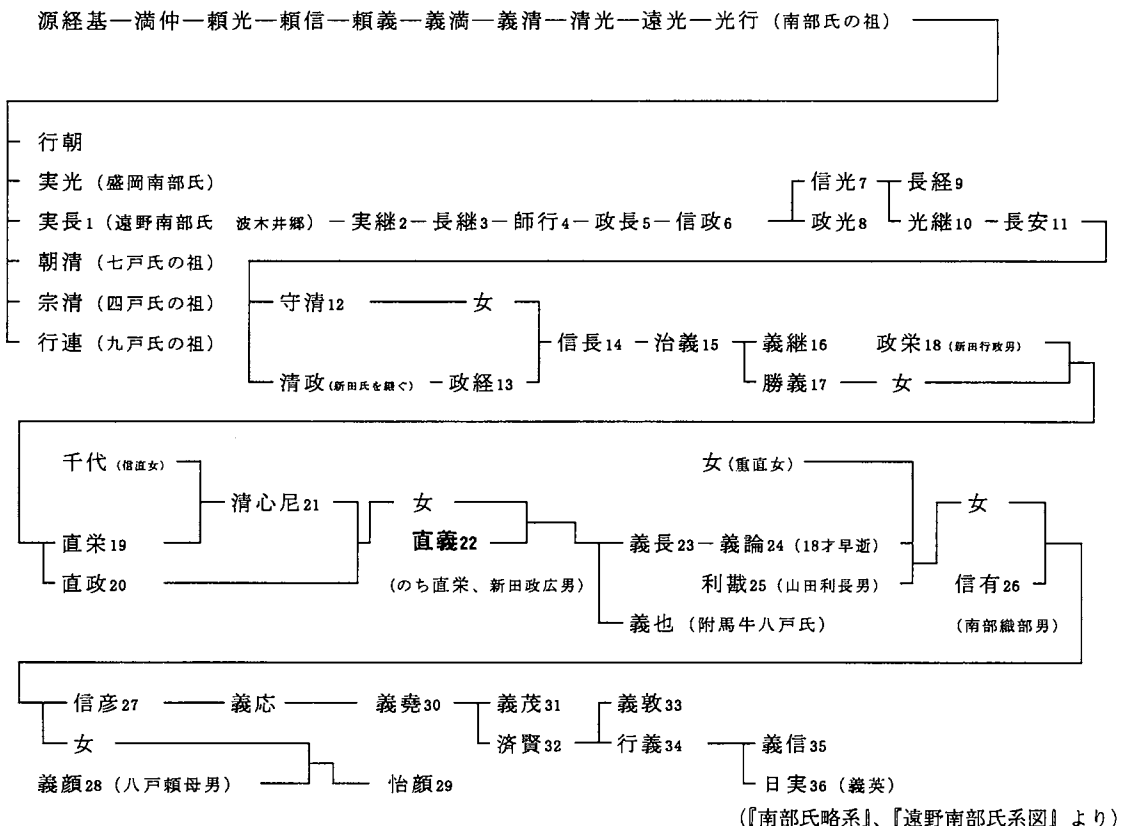
三度同年十一月、広長は小友樺坂峠の合戦で戦うが風雪と平清水駿河の奮戦により敗北し、この合戦で完全に遠野領主の地位を失った阿曾沼氏は仙台へと落ち延び、以後伊達藩に客分として幕末に至る。

翌慶長七年(1602)には、南部との連合軍が大槌、釜石へ攻め入り阿曾沼・伊達氏の勢力が一掃されている。

この政変の論功行賞で、政変の首謀者上野広吉は横田城城代として知行二千石が与えられるが、その後病没して家は断絶する。平清水駿河は、釜石村を所領し知行一千石を賜り南部家江戸屋敷詰家老となるが、慶長十九年(1614)大阪冬の陣に際し南部家から出奔する婿の北十左衛門信景を江戸でもてなしたことを夏の陣後にとがめられ切腹。左馬之助の嫡子忠右衛門は、知行三千石を所領するものの、その後謀反の廉で利直から切腹させられ鱗沢氏は滅亡する。

『阿曾沼興廢記』によれば、上野広吉死後の領主不在の期間が遠野における最も混乱した時代とされ、これを治めたのは八戸弥六郎直義、後の直栄である。南部利直により寛永四年(1627)八戸より遠野に移り、城下町を整備し遠野南部家として15代にわたり遠野地方を治め幕末に至る。

(『遠野市史』より)



第8図 遠野南部氏系図

## 5. 周辺の遺跡

### (1) 篠館跡周辺の遺跡

平成10年末の岩手県教育委員会のまとめでは、遠野市内には309ヶ所、住田町には103ヶ所の遺跡が登録されているが、本遺跡が気仙郡との境界に位置する城館であることから、第9図には猿ヶ石川の支流である早瀬川流域と赤羽根峠を挟んで気仙川の支流坂本川の流域を中心とする範囲に所在する遺跡の分布を示した。

これらの遺跡の分布状況をみると、平安時代の遺跡は遠野市青笹町の太田遺跡と（第9図7）上郷町の番屋遺跡（同40）のみであり、沖積段丘に縄文時代の遺跡が集中し、台地上には篠館跡をはじめとした中世の城館跡が数多く分布するという特徴を示している。高瀬Ⅰ遺跡に代表される奈良から平安時代の遺跡は、遠野市内の矢崎や鶉崎、土淵などの猿ヶ石川沿いに集中している。

このような遺跡の分布域の相違は、立地する地勢と大きく係わるものと考えられるが、『日本後紀』にある坂上田村麻呂による「遠閉伊村」への征夷とその後の開拓や土地利用との関係を考察する上で興味深い事実である。

### (2) 遠野周辺の城館跡

第10図には、阿曾沼氏の最後の居城であった横田城（後の遠野南部氏の居城鍋倉城）跡を中心に遠野市一帯の城館を図に示した。市内の遺跡309ヶ所の内61ヶ所が城館跡である。この61ヶ所の中で時代が中世と確認されているものが45遺跡あり、中世城館は全体の約15%を占める。

これら城館の立地を見ると典型的な選地の特徴が良く現れている。城館のほとんどが平野に張り出す尾根の先端部あるいは台地上に築城されており、防御と領地の支配に主眼をおいた選地であることが読みとれる。

街道や領地の平野部を一望する要所には、横田城をはじめ、宇夫方氏が築城した西風館（第10図53）、鱒沢左馬之助の居館である鱒沢館（同48）や忠義を説いて鱒沢・南部に滅ぼされた日渡玄浄の日渡館（同80）、建武元年に面（白）懸左衛門が占領したと伝えられる高館（同45）等歴史にその記録を留める主要な城館が配置されている。

早瀬川沿いにも浜峠・笛吹峠へ街道に臨む白（丑）館、板沢館、刃金館が、また篠館跡、駒込（瓜ヶ森）館は住田や釜石への街道筋を眼下にする軍略上重要且つ防御に利を得た地に築城されている。

平野部に位置するものは上野右近広吉の居館である谷地（上野）館（同52）と阿部館の2遺跡のみである。谷地館は、『宇夫方家譜』や『阿曾沼家乗』によれば宇夫方氏の居城であり、宝暦二年（1450）の葛西領の気仙郡東山の金成正実の侵攻後には、西風館（同53）が築城されている。

旧横田城の選地について、『遠野市史』（第一巻 阿曾沼氏時代）は親綱が当初その居城を遠野盆地のほぼ中央に位置する踊鹿山（現八幡山）に定めたのを神夢に託してこれを護摩堂山（現在の松崎町光興寺）に移転したのは八幡山が統治には優れるが合戦時の防御に劣るためではないかと後代の兵学者が推察したという伝承に言及している。

また、『遠野物語拾遺』131話には、“金の鶏や漆万杯（「漆が万杯地中に埋まっているという長者伝説」）”の伝承が、角城館・八幡沢館をはじめとする多くの館跡で伝えられていることがおさめられている。

篠館跡にもこれと同様の伝説が伝えられており、「四葉の葛の下に宝物が埋められている」という口碑を調査中に館跡の下に住む古老から何度か耳にしている。これは、前書の「五つ葉のウツギ」が「四葉の葛」

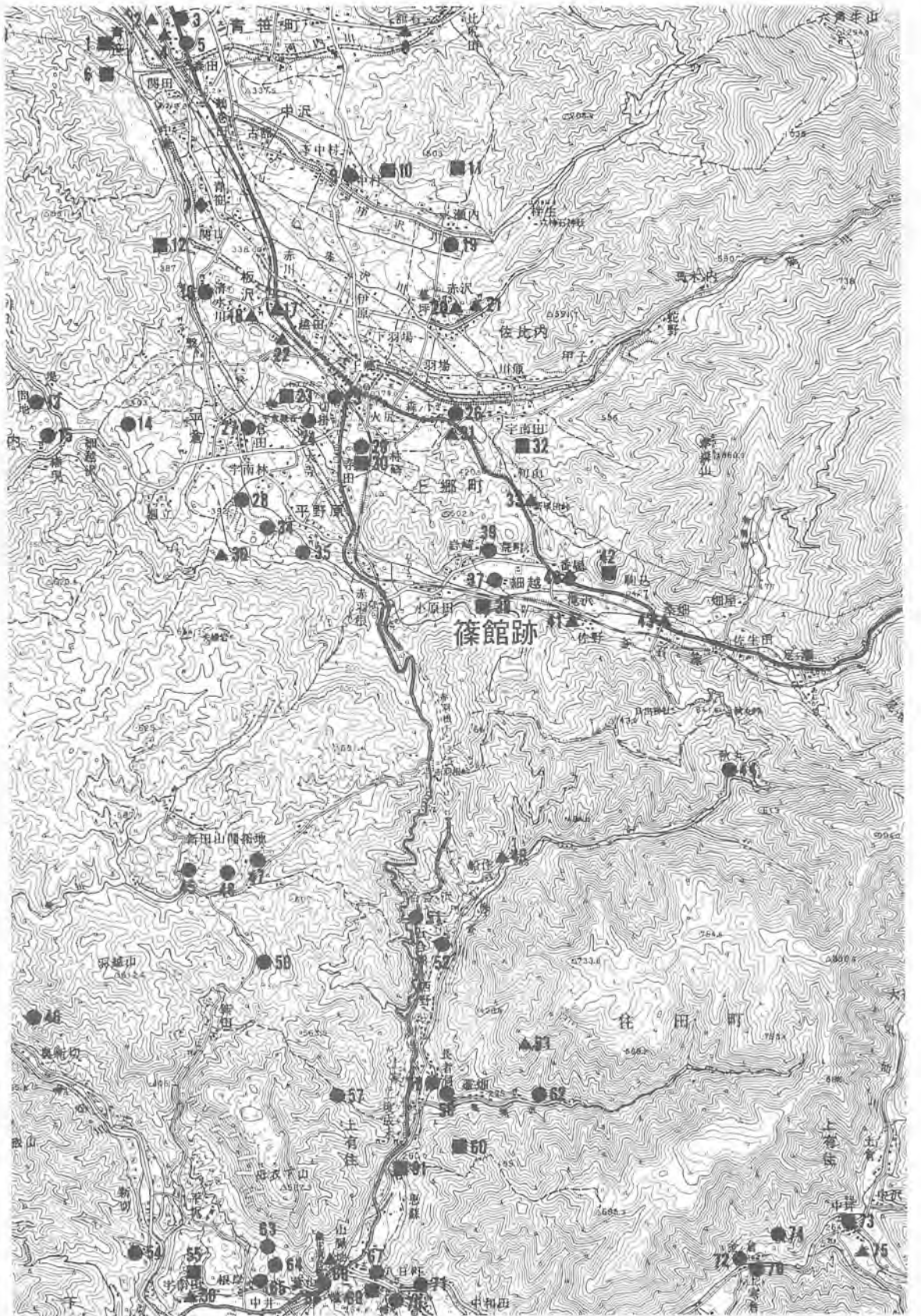
に転じたものと考えられる。

また、上郷町の伝承を集めた『上郷聞書』には、遺跡の所在する上郷町細越地域に伝わる伝承として、篠館の主と瓜ヶ森館の主が、弓矢で合戦をしてその矢が真ん中近くで触れ合い途中の小川に落ち、その後この場所では、小雨の降る夜は決まって小豆を洗うようなザクザクという音が聞こえてくるといい、土地の人々はこの場所を「小豆洗い」と呼ばれている伝承が掲載されている。

これらは、いずれも館あるいはその館主とそのに住む民との関係を示す一種のメタファーとも考えられるものである。篠館跡のように川に断崖を呈す尾根に比高差約100mにわたって普請が施された館を見上げていた当時の人々の畏敬の想いや普請を実行した館主の権力と財力を窺い知らされるものである。

第1表 周辺の遺跡一覧

No	遺跡名	種別	時代 / 備考		No	遺跡名	種別	時代 / 備考	
1	山根館(山根チャシ)	城館跡	中世	堀、土塁、平場、帯郭	40	番屋	集落跡	縄文 平安	縄文土器(晩期)、土偶、石皿 石棒、須恵器、土師器
2	合田	散布地		土器	41	滝ノ沢	散布地		
3	八幡Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	42	駒込館(瓜ヶ森館)	城館跡	中世	平場、帯郭
4	八幡Ⅰ	散布地		土器	43	桑畑	散布地		土器
5	下関	散布地	縄文	縄文土器	44	秋丸	散布地	縄文	縄文土器(中期)
6	白館(丑館)	城館跡	中世	堀、平場	45	新田Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器(後期)
7	太田	散布地	縄文・平安	石皿、石弾、土師器	46	梨ノ木	散布地	縄文	縄文土器(前期)
8	館石	散布地		土器	47	新田山Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器(後期)
9	館山麓	散布地	縄文	石皿、石鏃	48	新田山Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器(後期)
10	中沢Ⅱ	城館跡	中世	平場、土塁、空堀	49	船作	散布地		土師器、土器
11	中沢館	城館跡	中世	堀、土塁、平場	50	老の洞	散布地	縄文	縄文土器(後・晩期)
12	板沢(大洞)館	城館跡	中世	堀、平場、帯郭	51	上の平	散布地	縄文	縄文土器(後・晩期)
13	同地	散布地	縄文	縄文土器(晩期)	52	五合畑	散布地	縄文	縄文土器(後・晩期)
14	細越沢	散布地	縄文	縄文土器(晩期)	53	田山	散布地		
15	権現	散布地	縄文	縄文土器、石斧、石鏃	54	羽穴	散布地	縄文	縄文土器(後期)
16	清水川Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器(後期)、石棒、石斧	55	根岸城(平田館)	城館跡	中世	腰郭
17	赤川一里塚	一里塚	江戸		56	根岸	散布地		
18	清水川Ⅱ	散布地		土器	57	二度成木	散布地	縄文	縄文土器(晩期)
19	瀬内	集落跡	縄文	縄文土器(前末~中初期)、石斧	58	長者洞	散布地	縄文	縄文土器(中・後・晩期)
20	暮坪前	散布地		土器	59	上家	散布地	縄文	縄文土器(晩期)
21	赤沢	散布地		土器	60	狐石城	城館跡	中世	円形平場
22	越田	散布地		土器	61	樋ノ口城	城館跡	中世	
23	刃金館	城館跡	中世	堀、平場、帯郭、土塁	62	蓬畑	散布地	縄文	縄文土器(後期)
24	平倉観音	散布地	縄文	縄文土器(後期末)、注口土器	63	中井	散布地	縄文	縄文土器(中・後期)
25	切掛	散布地	縄文	縄文土器、石鏃	64	沢田	散布地	縄文	縄文土器(後期)
26	森ノ下Ⅱ	散布地	縄文	縄文壺	65	熊野山常光寺	散布地	縄文	縄文土器(後期)
27	地崎	集落跡	縄文	縄文土器(晩期)、石斧、石鏃	66	御殿平	散布地		
28	平倉	散布地	縄文	縄文土器、磨製石斧	67	山脈地	散布地	縄文	縄文土器(後・晩期)
29	林崎	散布地	縄文	縄文土器(前末~中初期)、土偶 磨製石斧、石鏃、石匙、石鏃	68	蔵王洞穴	洞穴	縄文	縄文土器(前期~晩期)
30	林崎館	城館跡	中世	堀、帯郭	69	上有住城(八幡城)	城館跡	中世	郭、腰郭、堀
31	森ノ下Ⅰ	散布地・城館跡			70	八日町	散布地	縄文	縄文土器(後期)
32	太田館	城館跡	中世	堀、土塁、平場、帯郭	71	八日町裏	散布地	縄文	縄文土器(後・晩期)
33	滑田一里塚	一里塚	江戸		72	清水	散布地	縄文	縄文土器(後期)
34	平野原	散布地	縄文	縄文土器(中期)、石器	73	中塚Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器(晩期)
35	平野原Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	74	横大洞	散布地	縄文	縄文土器(後期)
36	宇南林	城館跡			75	中塚Ⅱ	散布地		
37	岩崎	散布地	縄文	縄文土器	76	上寒倉	散布地	縄文	縄文土器(後期)
38	篠館(関口館)	散布地	縄文	縄文土器、石鏃、石鏃					
		城館跡	中世	土塁、空堀、平場、帯郭					
39	寺屋敷	散布地	縄文	縄文壺					



第9図 周辺の遺跡分布図



第2表 周辺の城館一覧

	遺 跡 名	時 代
1	山根館 (山根チャシ)	中世
2	鼻 (花) 館	
3	貞任砦	
4	西館	中世
5	新谷館	中世
6	白館 (丑館)	中世
7	大葛館	
8	福島館	
9	平清水館	中世
10	中沢Ⅱ	中世
11	中沢館	
12	板沢 (大洞) 館	中世
13	駒木館	中世
14	及川館	
15	奥友館 (小友館)	中世
16	藤倉館 (篠倉館)	中世
17	高館	中世
18	鷹島屋館	中世
19	槻館	中世
20	小友館内	
21	小友南館	中世
22	小屋平館 (鮎見館)	中世
23	刃金館	中世
24	小田館	中世
25	八幡館	中世
26	高館	縄文・中世
27	落合館	中世
28	守河館	中世
29	加賀屋敷 (迷岡館)	
30	林崎館	中世
31	森ノ下Ⅰ	中世
32	太田館	
33	小下館	中世
34	熊の洞館 (宮守館・小沢館)	中世
35	神成館 (出張館・中居館)	中世
36	高畑館	中世
37	館森館	中世
38	篠館 (関口館)	縄文・中世
39	宇南林	
40	石倉館	中世
41	深沢館	中世

	遺 跡 名	時 代
42	駒込館 (瓜ヶ森館)	中世
43	備中館 (ビッキ館)	中世
44	館	縄文・中世
45	高館	中世
46	茶臼館 (八幡館・一夜館)	中世
47	鳴沢館	中世
48	鱒沢館 (上町館)	中世
49	西門館 (みさ崎館)	
50	聖	中世
51	鱒沢館	
52	谷地館 (上野館)	中世
53	西風館	中世
54	鍋倉城	中世～近世
55	横田城 (護摩堂館)	中世
56	光興寺館	中世
57	東館	
58	角鼻館	
59	真立館	中世
60	松崎館	
61	矢崎館	
62	阿曾沼館 (堀内館)	中世
63	駒木館	中世
64	八幡座館 (八幡館)	中世
65	大洞館	
66	阿倍館	中世
67	阿部館 (阿部屋敷)	中世
68	五日市館	中世
69	柏崎館	中世
70	須崎館	中世
71	大將館	
72	火鼻館	
73	枡内館	中世
74	角城館 (久手館)	中世
75	沢の口館	
76	本宿館	中世
77	大槌館	
78	山口館	中世
79	西内館	中世
80	日渡館	中世～近世
81	大萩館	
82	大野館	中世

<参考・引用文献>

- (1) 中川久夫・他(1963)：北上川中流域の第四系および地形 北上川流域の第四紀地史(2) 地質学雑誌第69巻第811号
- (2) 中川久夫・他(1981)：第四系「北上川流域地質図(二十万分の一)」 長谷川地質調査事務所
- (3) 磯 望(1978)：北上山系開発地域土地分類基本調査(盛岡)．岩手県．
- (4) (1988)：遺跡 埋文報第2集 (財) 岩手県埋蔵文化財センター
- (5) 「南部叢書」：「阿曾沼興廢記」
- (6) 「岩手史叢」：「内史略」(一)
- (7) 「遠野市史」
- (8) 「岩手県史」
- (9) 「吾妻鏡」 「遠野南部家文書」
- (10) 「日本後紀」
- (11) 「上郷間書」(1993)
- (12) 「上郷間歩」(1994)
- (13) 高橋與右衛門他(1988)：笹間館跡発掘調査報告書文振報第124集(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- (14) 斉藤博司他(1994)：猪川館跡発掘調査報告書文振報第203集(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- (15) 小山内透他(1998)：松本館跡発掘調査報告書文振報第256集(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- (16) 杉沢昭太郎他(1997)：白井坂Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書文振報第248(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- (17) 瀬川司男他(1980)：東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書第53集(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター



第10図 周辺の城館分布図

### Ⅲ. 調査の方法と室内整理

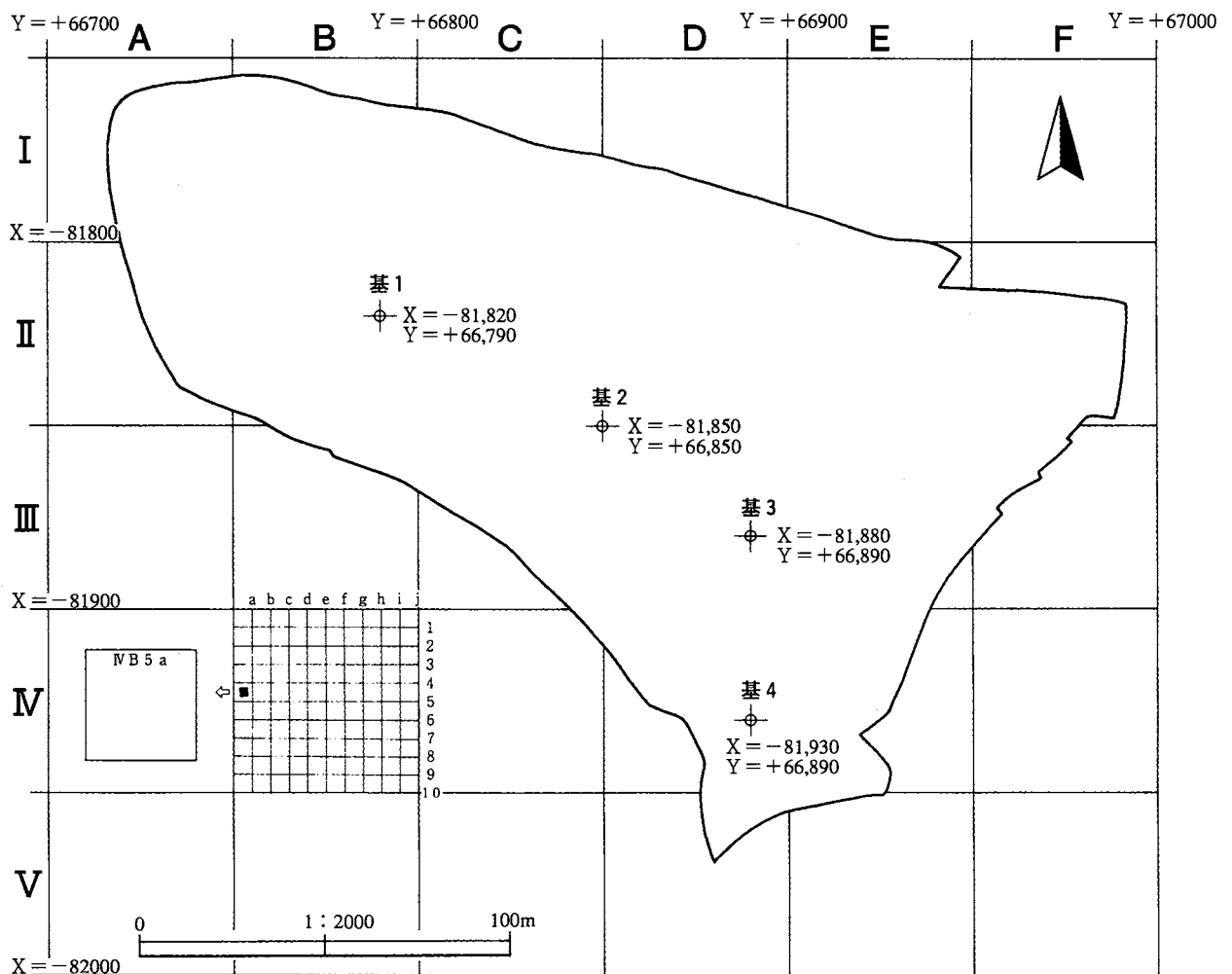
#### 1. 野外調査の方法

##### (1) 調査区のグリッド設定

グリッドの設定にあたっては、平面直角座標第X系の調査座標を用いた。座標原点は $X = -81,750.000$ 、 $Y = +66,700.000$ である。この座標原点から遺跡全体を一辺50mの大グリッドに区画し、原点から東方向へはアルファベットの大文字A～Y、南方向へはI～Vの番号を付し、これを組み合わせて北西隅を基準点に、IB、IVDというように表示した。小グリッドは大グリッドを10等分して $5 \times 5$ mに区画し、東方向へはa～j、南方向へは1～10を付している。調査区の名前は、大区画と小区画の組み合わせでII C 3j・IV D 9bというように呼称している。また、便宜的に $2.5 \times 2.5$ mグリッドをm II C 3 i-j、IV D 9-10bと呼称した。

各基準点の成果値と杭高（標高）は次の通りである。

基準点1	$X = -81,930.000$	$Y = +66,890.001$	$H = 491.836$ m
基準点2	$X = -81,880.000$	$Y = +66,890.000$	$H = 479.535$ m
基準点3	$X = -81,850.000$	$Y = +66,850.000$	$H = 472.711$ m
基準点4	$X = -81,820.001$	$Y = +66,790.000$	$H = 452.763$ m



第11図 グリッド配置図

## (2) 粗掘と遺構検出・遺構精査と遺物の取り上げ

雑物撤去と刈払い作業から開始し、試掘トレンチ、粗掘、遺構検出、精査の順に進めた。表土が約20cm前後と薄いことから、粗掘から人力により調査を実施し、重機（ユンボ）は、土捨てのみに使用した。

検出された遺構は、曲輪および柱穴状土坑を除くその他の遺構類は4分法、土坑類については2分法を原則として精査を行い、必要に応じて適宜併用している。記録として必要な図面および写真撮影は、精査の各段階において行っている。

現況地形図及び遺構詳細平面図の作成は写真測量により行い、各々の遺構は従来の簡易的な遺り方測量で行った。また、曲輪・堀跡・切岸・土塁については、光波トランシットによる測量により平面図を作成した。実測図の縮尺は、1/20を基本として平面図と断面図を作成した。なお、曲輪・堀跡・切岸・土塁については1/100、集石については1/10～1/20の平面図を作成している。

遺構内の出土遺物は、埋土の場合は上部・下部に分けて取り上げ、床面及び床面直上の遺物は、必要に応じて番号を付し、写真撮影・図面作成後に取り上げた。

本遺跡は、ほぼ全面が遺構になっているため、木材・土砂搬出用に造られた路面から採取された遺物を遺構外出土遺物とし、設定したグリッドを附して取り上げた。なお、これらの遺物は上位の遺構からの崩落の可能性が高いためそれらの遺構も記録した。

## (3) 写真撮影

野外調査での写真撮影は、6×7cm判カメラ1台（モノクロ）と35mm判カメラ2台（モノクロ、カラー・リバーサル）を使用し、遺構・遺物の検出状況や出土状況を必要に応じて撮影している。他にポラロイドカメラ1台をメモ的な用途として使用した。撮影にあたっては、撮影状況を記した「撮影カード」を事前に写し、整理時の混乱を防止した。また、平成10年度調査終了間近にラジコンヘリによる空中写真（4×5in：モノクロ、6×6cm：カラー）の撮影、平成11年度調査終了間近に小型飛行機による空中写真（同右）の撮影を実施している。

## (4) 広報活動

埋蔵文化財に対する啓蒙活動の一環として、見学希望者に対しては随時対応するとともに、平成10年10月24日（土）に調査成果を公開する現地説明会、平成11年10月2日（土）に現地公開を開催している。

## 2. 室内整理の方法

### (1) 作業手順

室内整理は現状で残った遺物の水洗・注記から開始し、各遺構ごとの仕分け、遺物の接合復元、遺物の実測、拓本、遺構・遺物のトレース、遺物の写真撮影、遺構・遺物図版、写真図版の順に作業を進めた。これらの作業と平行して遺物の計測、原稿の執筆、各種の鑑定・分析を行い報告書に掲載している。

### (2) 遺構

遺構図面は、点検後必要に応じて第2原図を作成した。現況地形図と遺構詳細平面図は写真測量より作成し、現況地形図は縮尺1/200、遺構詳細平面図が縮尺1/100として委託業者と粗図段階で数度打ち合わせを行い、点検指示を与えトレースまで行った。また、単独の遺構として必要と思われるものについては、これと光波トランシット測量による1/100平面図と照合させながら第2原図を随時作成した。

また、各遺構（曲輪・堀跡等）の面積が大きいため平面図は、遺構配置図をもってあてている。ただし、各断面図にはその位置を示すために平面・断面模式図（曲輪・堀跡・土塁・切岸1/400、600、900）を掲載している。

遺構図版は以下の縮尺を原則としたが一部変更もあり、それぞれスケールあるいは縮尺率を付している。掘立柱建物跡 1/60、竪穴住居跡 1/60、柱穴列 1/40～60、集石 1/40、石積 1/40、土坑・焼土遺構 1/40、各部断面 1/40～60等である。断面図中の石はS、攪乱はCで図示している。なお、土層がほぼ一様な曲輪・切岸等の断面図には適宜柱状図を使用している。

方位は座標軸からの角度で、平面図における北印も座標北（基準点1における真北方向角は、 $-0^{\circ}29'26.0''$ 西偏する）を示している。曲輪の面積はその輪郭線をデジタル式のプランメーター（エリアカーブメーター）によって3回計測し、この平均値を記載した。竪穴住居の面積は床面の輪郭線を同様の方法で計測した。

また、遺構の表現は凡例（第12図）に示すとおりである。

### （3）遺物

遺物は洗浄後全出土遺物を点検し、口縁部・底部の反転可能なものを実測すること  
実測や拓本の必要なものを選択した後登録して注記・接合を行った。全体の遺物量が少ないことや小破片の  
ものが多いことから、実測・拓本の必要のないものは写真掲載のみにとどめている。

実測した遺物の選択基準としては、

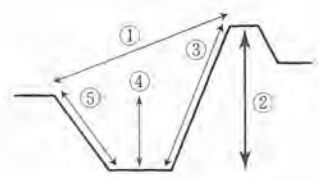
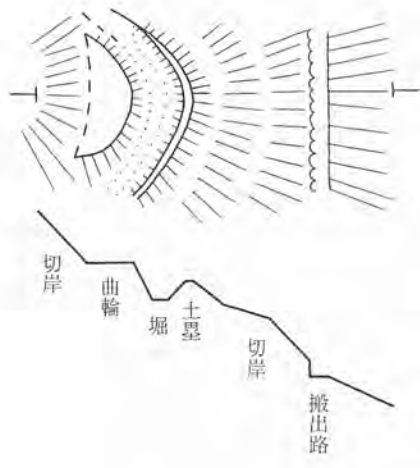
報告書に掲載した遺物の選択基準は、陶磁器については口縁部や底部の反転が可能なものを原則として実測し、他は写真掲載のみにとどめた。土器には完形品や復元が可能なものがなかったため適宜、拓影と断面実測を行った。石器および石製品、鉄製品は出土した全てを記載した。

掲載遺物の図版の縮尺率は、次の通りである。陶磁器・土製品・石製品・鉄製品が1/2、土器・土器拓影が1/2、大型の石製品が1/3を原則としているが、遺物の大小に応じては適宜縮尺を変え、図版ごとにスケールを付してある。

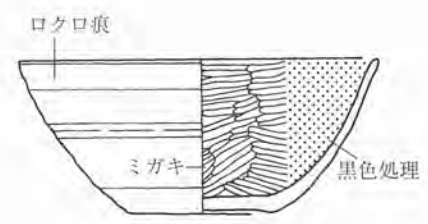
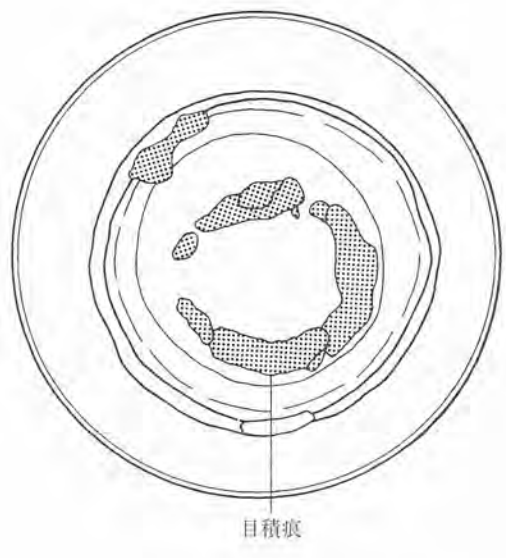
遺物の調整技法等の表現は凡例に示す通りである。


## 凡 例


1. 本報告書に掲載した遺構実測図に付した方位は、国家座標第X系による座標北を示す。
2. 表中の法量の推定値は( )、残存値は< >で表示した。
3. 挿図中に使用したスクリーン・トーンは以下のとおりである。
4. 堀跡・塁壁の計測位置と呼称は以下のとおりとした。
5. 基本土層断面図にはローマ数字を、遺構内の土層は算用数字を用い、攪乱箇所にはcを記した。
6. 堀の下場は縄張図に合わせ点線(⋯)、切岸の下場は波線(---)で表記している。





- ① 実効堀幅
- ② 垂直壁高
- ③ 実効法高
- ④ 垂直高
- ⑤ 外壁法高



 石製品の磨面・鉄軸・焼土

 灰釉

 羽口の外面・焼こげ

 黒漆

 スス

 礫・S

第12図 実測凡例図

## IV. 検出された遺構と遺物

### 1. 概要

遺構は、南から調査区中央で北西に屈曲する尾根を中心に分布しており、北側は、鉄道防備林のため調査区から除外されたが、調査区の遺構分布状況や防備林内の地形から断崖をそのまま天然の防御施設として使われていたものと考えられ、遺構は存在しないと推定される。調査前に行われた伐採した木材の搬出路の敷設のため重機によって遺構の一部が攪乱されていたが、現況で曲輪や堀が確認できるほど遺構の残存状況は良好であった。遺構はすべて削平された平坦地あるいはその整地層直下で検出されている。遺物や検出状況から館の時期を明確に14世紀以前に遡る資料が得られなかったため遺構の時期については15世紀以降を前提として記載した。

また、調査区の標高455m付近で縄文土器が集中して出土しているが遺構は検出されなかった。

検出された遺構は掘立柱建物跡1棟、石積2基、集石13基、堀跡9条（内堅堀3条）、柱穴列5基、土坑28基、曲輪30ヶ所、土塁8基、切岸15ヶ所、武者走り状遺構2ヶ所、テラス状遺構2ヶ所、焼土遺構12基である。堅堀3条は調査区外に延びている。なお遺跡の全体は調査区外にも広がっており曲輪6ヶ所、堅堀1条が存在する。これらについては縄張図とまとめて言及する。掲載に当たっては、堀跡と土塁・切岸、曲輪と切岸が連続しているため、これらをまとめながら記載している。

### 2. 曲輪と切岸

曲輪は30カ所を検出した。形態や位置から主郭、副郭、帯曲輪、連絡曲輪、腰曲輪に分類した。また幅2m前後の通路状の遺構を武者走り状遺構、極小規模の削平地をテラス状遺構として登録、併記した。

#### 1号曲輪（帯曲輪）

遺構（第13・82図 写真図版14）

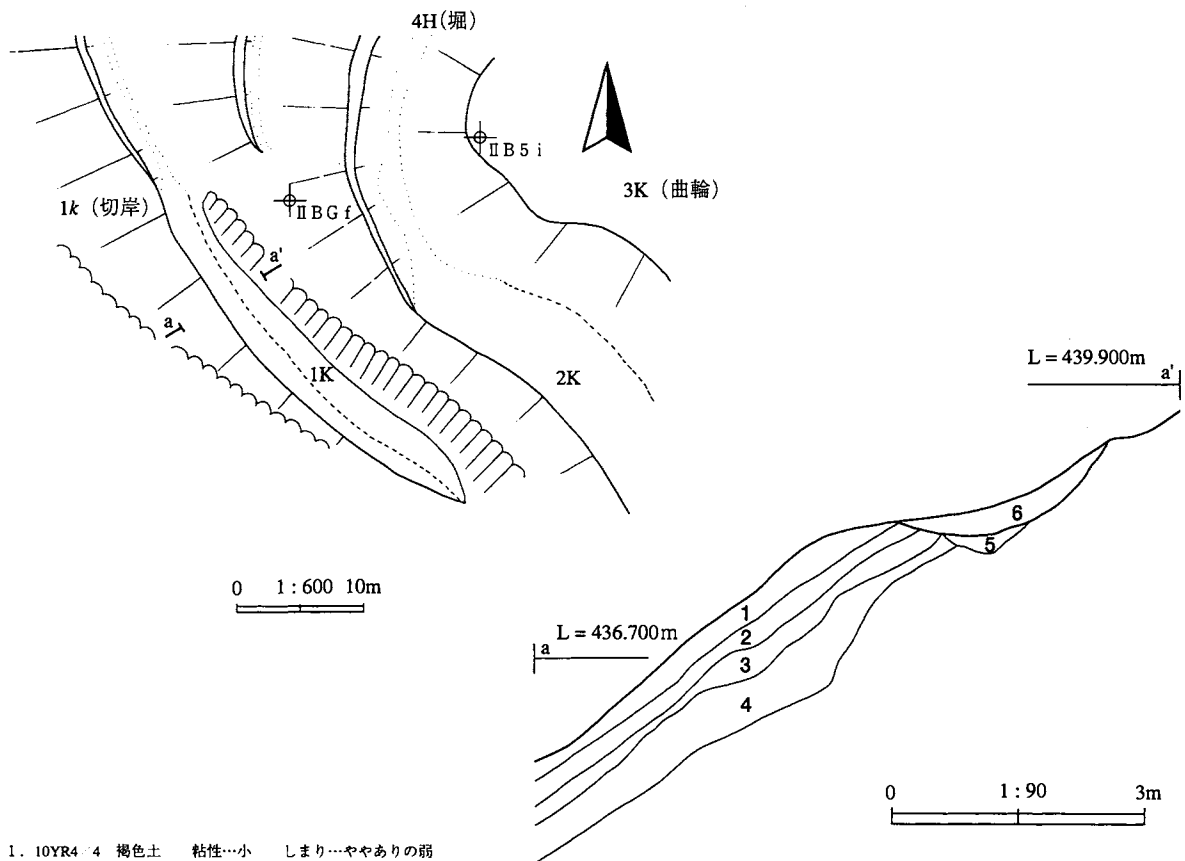
<位置> 調査区ⅡB5d～ⅡB10hグリッド、標高437.7～438.6mに位置する。6～8号集石が配置されている。

<規模・形態> 規模は、長軸35.6m、短軸2.4m、面積57.6㎡で、2号堀の南端からに続き、尾根の南西側谷に沿ってつくられている。方向は、ほぼ北西―南東で、最大比高差約16mの1号切岸により防御されている。1号曲輪は2号堀と2号土塁を埋め立てて構築されており集石はその後に配備されている。尾根の東側25号・27号曲輪も同様の規模の8・9号堀を埋めて改築されていることから1号曲輪は25・27号曲輪とほぼ同期に埋め立ての普請により構築されたものと考えられる。

<埋土> 褐色土が主体となって構成されている。

<出土状況> 北西端から煙管(215)が検出面から出土している。

<時期> 実効堀幅から16世紀後半～17世紀頭と考えられる。



1. 10YR4 / 4 褐色土 粘性…小 しまり…ややありの弱
2. 10YR2 / 3 黒褐色土と10YR3 / 3 暗褐色土の混合土 粘性…小 しまり…ややあり
3. 10YR3 / 4 暗褐色土と10YR5 / 6 黄褐色土の混合土 粘性…小 しまり…ややあり
4. 2.5Y4 / 3 オリーブ褐色粘土質土 粘性…小 しまり…ややあり
5. 10YR4 / 4 褐色土 粘性…中 しまり…ややあり
6. 10YR5 / 4 にぶい黄褐色土 粘性…小 しまり…ややあり

第13図 1号曲輪

## 2号曲輪 (帯曲輪)

遺構 (第14・82図 写真図版15)

<位置> 調査区 II B 7 h ~ III C 5 d グリッド、3号曲輪の南側谷斜面4号切岸下の標高447.3~449.5mに位置する。

<規模・形態・機能> 規模は、長軸50.0m、短軸6.7m、面積243.6㎡を測る。帯状の曲輪である。3号曲輪の南西から南側を回り4号曲輪の南西側に達する。II B 7 h グリッド付近で4号堀に続いている。

方向は、ほぼ北西-南東で、3号切岸により防御されている。

<普請・作事> 4号堀と4号土塁を埋めて普請されている。4号土塁上場が曲輪の南西側縁にあり3号曲輪の南西側縁との実効堀幅は11~13mを測る。作事の痕跡はみられない。

<埋土> 3号曲輪の普請時に削平されたと考えられる。褐色土が主体となって構成されている。この盛り土直下には多量の炭化物を含んだ旧表土と考えられる層が存在する。

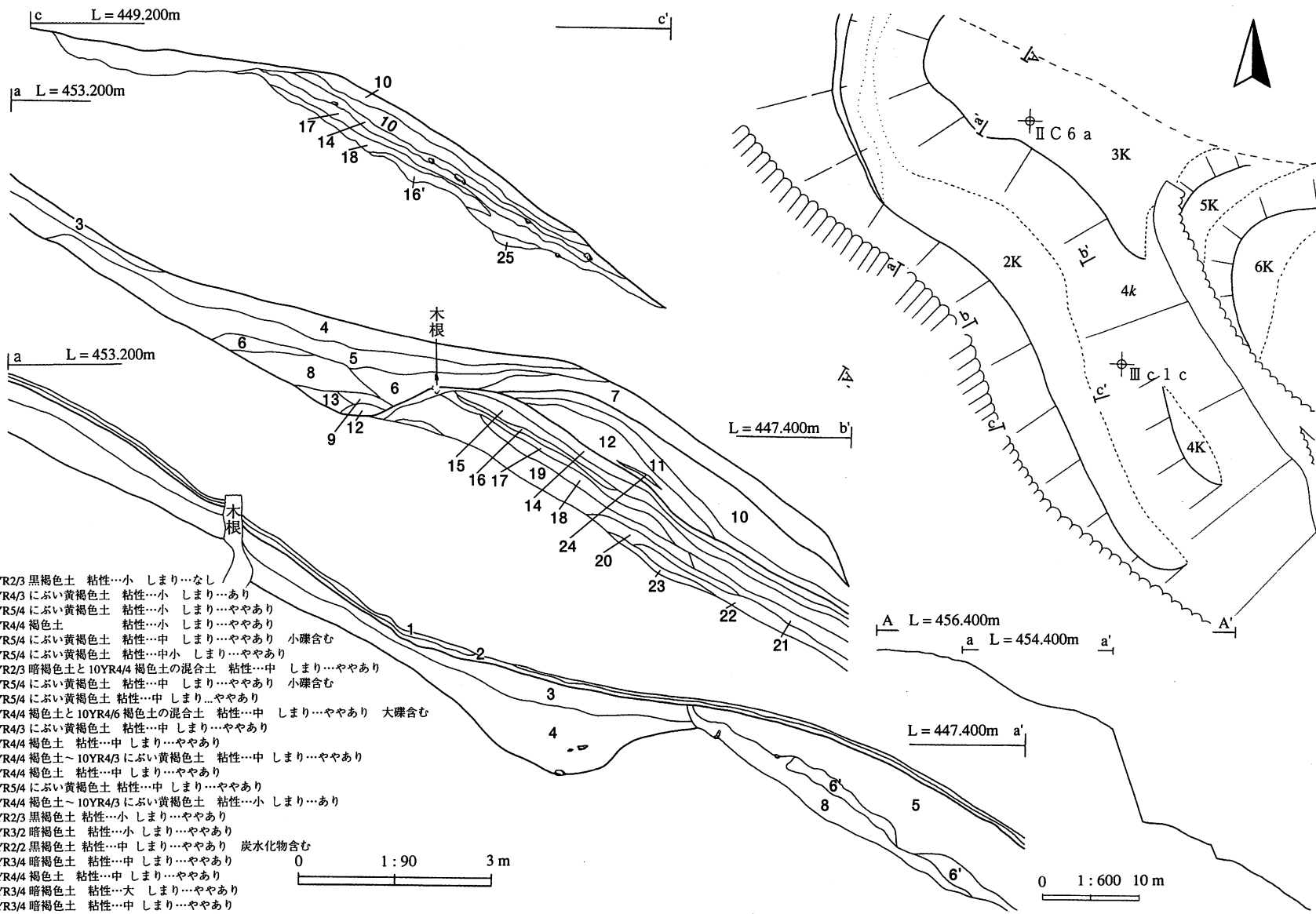
遺物 (第87・97・100図 写真図版8・59)

<出土状況> 青磁(2)、白磁(43)、古銭(205)、筭(213)、鉄鏃(256)、鉄鍋、火箸、土器等が出土している。

<時期> 実効堀幅から16世紀後半~17世紀初頭と考えられる。



第14図 2号曲輪



1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性…小 しまり…なし
2. 10YR4/3 におい黄褐色土 粘性…小 しまり…あり
3. 10YR5/4 におい黄褐色土 粘性…小 しまり…ややあり
4. 10YR4/4 褐色土 粘性…小 しまり…ややあり
5. 10YR5/4 におい黄褐色土 粘性…中 しまり…ややあり 小礫含む
6. 10YR5/4 におい黄褐色土 粘性…中 小 しまり…ややあり
6. 10YR2/3 暗褐色土と10YR4/4 褐色土の混合土 粘性…中 しまり…ややあり
7. 10YR5/4 におい黄褐色土 粘性…中 しまり…ややあり 小礫含む
8. 10YR5/4 におい黄褐色土 粘性…中 しまり…ややあり
9. 10YR4/4 褐色土と10YR4/6 褐色土の混合土 粘性…中 しまり…ややあり 大礫含む
10. 10YR4/3 におい黄褐色土 粘性…中 しまり…ややあり
11. 10YR4/4 褐色土 粘性…中 しまり…ややあり
12. 10YR4/4 褐色土～10YR4/3 におい黄褐色土 粘性…中 しまり…ややあり
13. 10YR4/4 褐色土 粘性…中 しまり…ややあり
14. 10YR5/4 におい黄褐色土 粘性…中 しまり…ややあり
15. 10YR4/4 褐色土～10YR4/3 におい黄褐色土 粘性…小 しまり…あり
16. 10YR2/3 黒褐色土 粘性…小 しまり…ややあり
16. 10YR3/2 暗褐色土 粘性…小 しまり…ややあり
17. 10YR2/2 黒褐色土 粘性…中 しまり…ややあり 炭水化物含む
18. 10YR3/4 暗褐色土 粘性…中 しまり…ややあり
19. 10YR4/4 褐色土 粘性…中 しまり…ややあり
20. 10YR3/4 暗褐色土 粘性…大 しまり…ややあり
21. 10YR3/4 暗褐色土 粘性…中 しまり…ややあり
22. 10YR4/4 褐色土 粘性…中 しまり…ややあり
23. 10YR5/3 におい黄褐色土 粘性…大 しまり…ややあり
24. 10YR3/4 暗褐色土と10YR2/2 黒褐色土の混合土 粘性…小 しまり…ややあり
25. 10YR2/3 黒褐色土 粘性…小 しまり…ややあり

### 3号曲輪（副郭）

遺構（第16・82図 写真図版16）

＜位置＞調査区ⅡB4h～ⅡC6cグリッド、標高452.3～455.1mに位置する。

＜規模・形態・機能＞ 規模は長軸30m、短軸（9）m、面積322.7㎡で、馬蹄形を呈する。下位にある4号堀との実効法高は約7m、4号堀・4号土塁との実効堀幅は尾根付近で約11m、南側で約13mを測る。下位の4号切岸の最大傾斜角度は約40°を有する。

尾根筋上にある曲輪の最下段に位置する。下位に構築された堀4条と土塁4基、切岸4カ所を見渡し、北と西側を遠眺する防御の中心と考えられる。平地からの比高差は約54mを測る。主郭である11号曲輪に次ぐ面積を有し副郭的機能を持った曲輪と考えられる。北、西、南辺は4号切岸に接する。切岸の下端には北側から南西側に4号堀がめぐり、南側は2号曲輪が配置されている。東側は尾根上部に続く5号曲輪が5号切岸を挟んで続く。

＜普請・作事＞ 大部分は、尾根の削平により構築されているが、曲輪南東側の4号切岸付近は盛り土によりつくられている。北側については断崖を呈するため自然地形を利用したものと考えられる。検出面は曲輪の先端部付近まで重機による攪乱の痕があり、柵列等の作事の痕跡は検出されなかった。4号堀及び2号曲輪への連絡は、曲輪の西端下に構築された1号テラス状遺構を通じて行ったと考えられる。

＜埋土＞ 削平された地山の褐色土によって整地されている。表土は均一で薄く、層厚約20cmの黒褐色土が主体となる。15～17世紀初頭と考えられる。

遺物（第95図 写真図版56）

＜遺物・出土状況＞ 内黒の坏片1点と永楽通寶（176）が検出面から出土している。南辺下位の7号切岸下場付近からは青磁片、鉄鍋片、染付片が出土している。

### 1号テラス状遺構

遺構（第16図 写真図版12・25）

＜位置・形態・普請・埋土＞調査区ⅡB4h～ⅡC6cグリッド、標高451.4～452.3mに位置する。面積は6.3㎡で、半円形を呈する。4号切岸の上部に踊り場状に削平により構築されている。4号堀と3号曲輪の中間に位置し、これらの連絡通路の役割を有していたと考えられる。削平により構築されている。出土遺物はなく、作事の痕跡も検出されていない。埋土は、黒褐色土主体で構成されている。

＜時期＞15～17世紀初頭と考えられる。

### 4号切岸

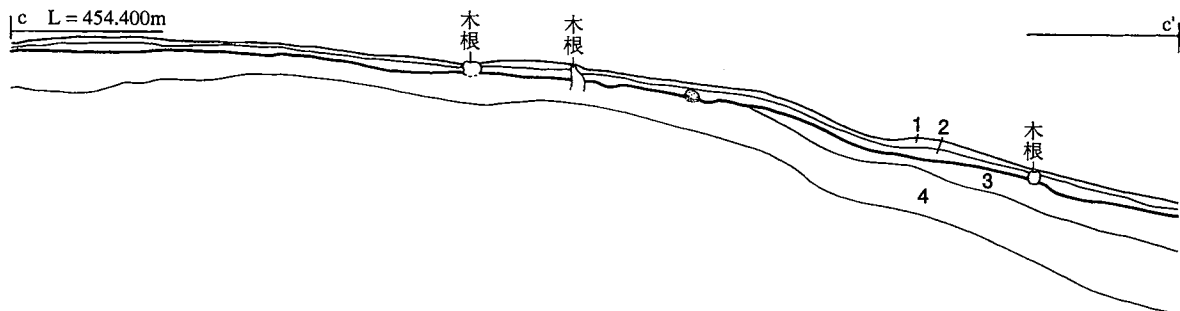
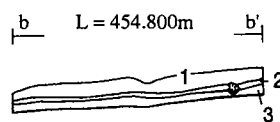
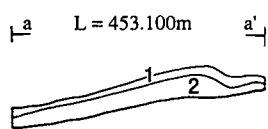
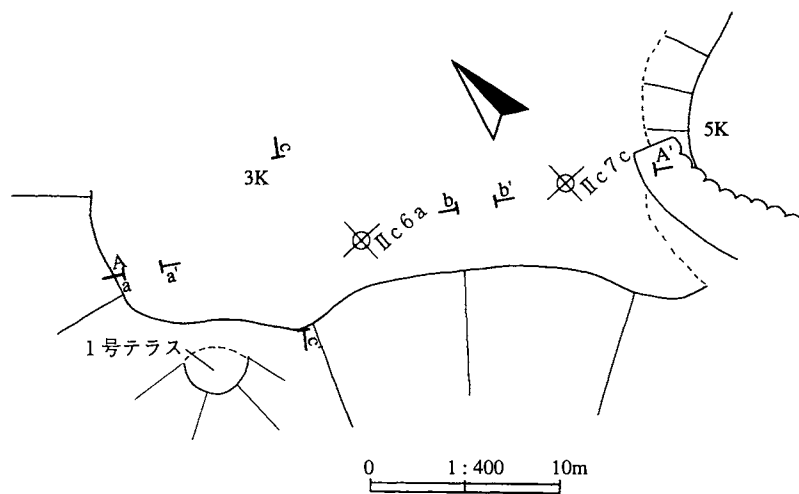
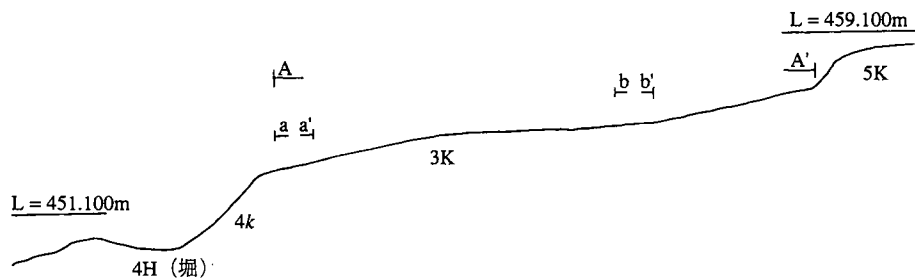
遺構（第16・82図 写真図版16）

＜位置＞調査区ⅡB4h～ⅡC6cグリッド、標高449.5～452.3mに位置する。

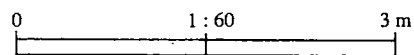
＜規模・時期＞ 3号曲輪を北—西—南を囲んで防御する切岸で、削平により構築されているが1号曲輪の南端中央ⅡC4aグリッド付近は一部が盛り土されている。最大傾斜角度は40°、4号堀からの実効法高は7m、垂直壘壁高は4.3mを測る。16世紀後半～17世紀初頭と考えられる。

遺物（第87・89・100図 写真図版8・56・59）

＜出土状況＞古銭(179)、小札(210)、青磁(11・14)、染付(102)、土器、炉壁等が出土している。



1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性…小 しまり…なし
2. 10YR4/3 におい黄褐色土 粘性…小 しまり…あり
3. 10YR5/4 におい黄褐色土 粘性…小 しまり…ややあり
4. 10YR4/4 褐色土 粘性…中 しまり…ややあり



第15図 3号曲輪・1号テラス状遺構

#### 4号曲輪

遺構 (第16・82図 写真図版16)

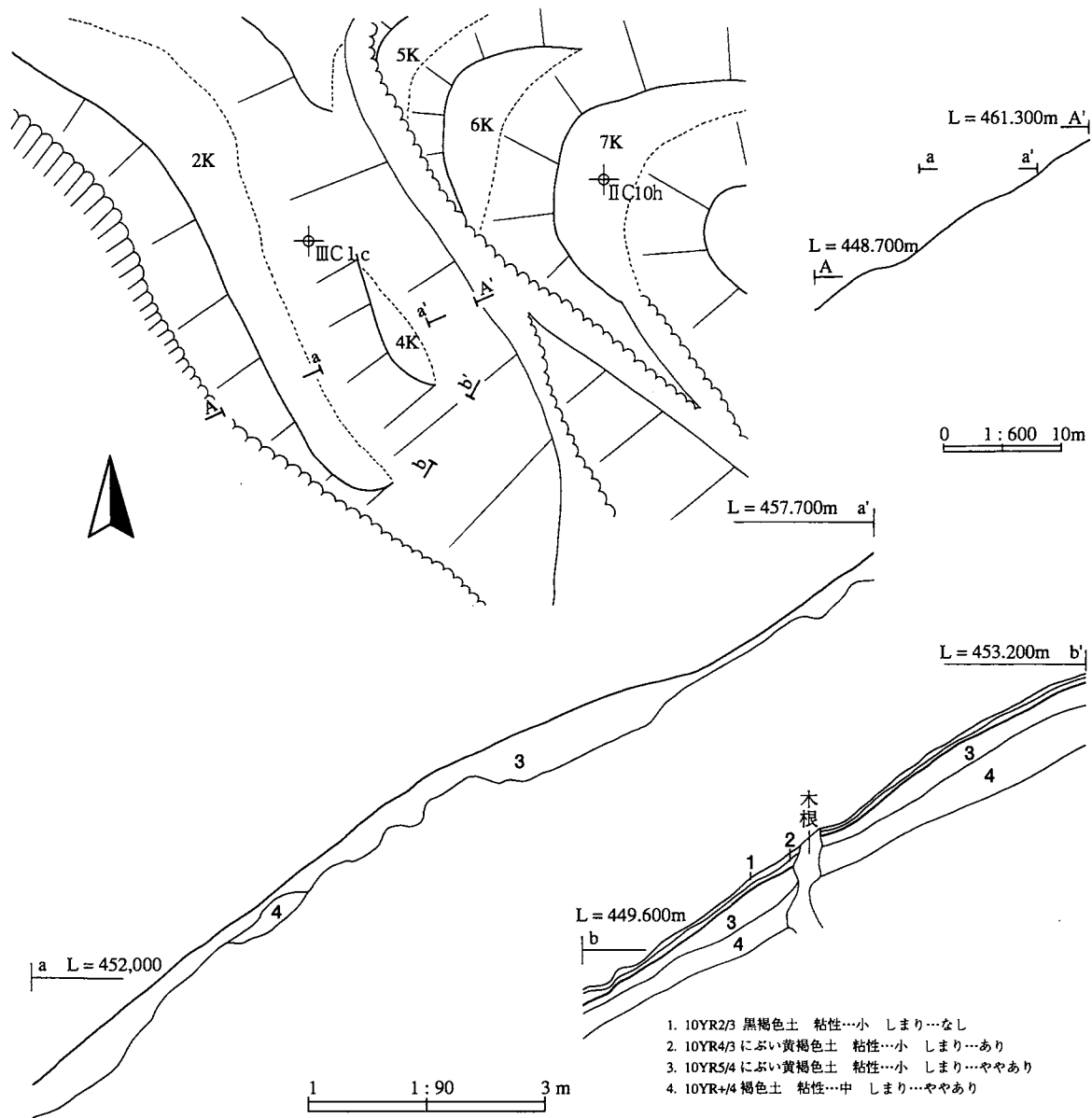
<位置> 調査区ⅢC1d～ⅢC3eグリッド、標高455.3～456.2mに位置する。4号切岸の南斜面にあった重機による攪乱層の下から検出された。面積20.5㎡を測る。

<規模・形態> 規模は、長軸11.7m、短軸2.7m、面積20.5㎡で、槍先形を呈する。

<普請・作事> 盛土により構築されている。3号曲輪方向の尾根筋と西側調査区外の6号堀に対しては横矢掛け的な位置にあるとともに5～7号曲輪と2号曲輪の中央に位置する。作事の痕跡は検出されなかった。

<埋土> 暗褐色土が主体となって構成されている。出土遺物はない。

<時期> 15～17C初頭と考えられる。



第16図 4号曲輪

### 5号曲輪（連絡曲輪）

遺構（第17・82図 写真図版16）

<位置>調査区ⅡC 8 d～ⅡC 4 f グリッド、標高457.6～458.5 mに位置する。

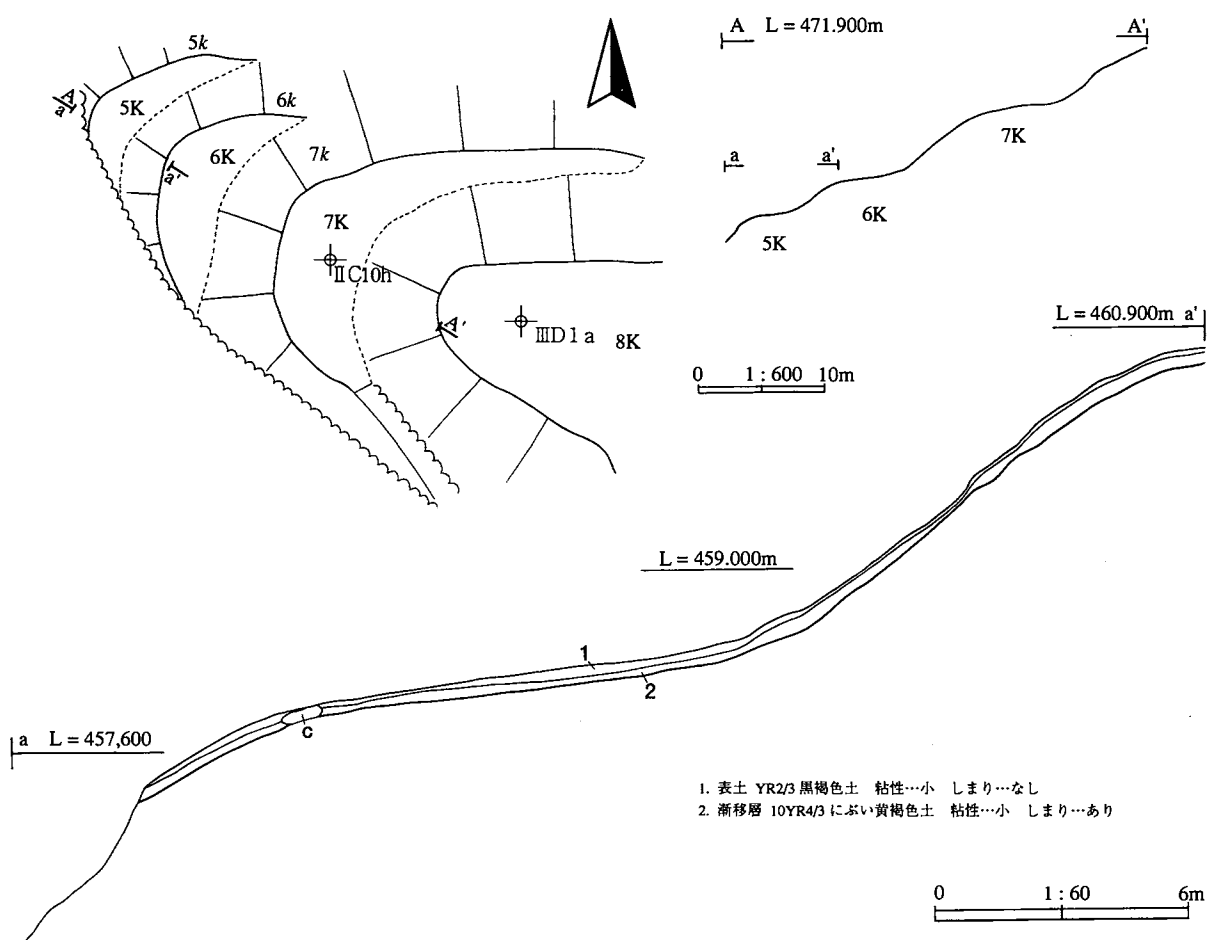
<規模・形態・機能> 規模は、長軸（14.5）m、短軸3.9 m、面積（43.9）m<sup>2</sup>で、半月型を呈する。西辺は5号切岸で3号曲輪に接し、北側は鉄道防備林内の断崖へと続く。南側の曲輪縁辺は重機によって攪乱され消失している。東側は比高1.7 mの6号切岸で6号曲輪に続く。3～8号曲輪の間（比高差約16 m）に普請された小曲輪の最下位に位置する。面積も小規模であることから上位と下位の曲輪間の連絡機能を持っていたと考えられる。

<普請・作事>普請は削平により成されており、作事の痕跡は検出されていない。削平された地山の褐色土により整地がほどこされている。

<埋土>遺物（第100・109図 写真図版59・64）

<出土状況> 鉄鍋片(230)が検出面から出土している。また埋土中から磨石（109）が出土している。

<時期>15～17世紀初頭と考えられる。



第17図 5号切岸・5号曲輪・6号切岸

## 5号切岸

遺構（第17・82図 写真図版16・25）

<位置>調査区ⅡC5e～ⅡC6dグリッド、標高455.1～457.6m、3号曲輪と5号曲輪の中間に位置する。

<規模・時期>比高差は2.5mを測り、3号曲輪の東端、5号曲輪の北—西—南を巡る。削平により構築されているが、南側は重機により攪乱を受け消失している。

遺物（第92図 写真図版6）

<土状況>瀬戸・美濃系陶器皿（144）が検出面から出土している。

<時期>15～17世紀初頭と考えられる。

## 6号切岸

遺構（第18・82図 写真図版17・25）

<位置>調査区ⅡC8d～ⅡC4fグリッド、標高457.6～458.5mに位置する。

<規模・埋土形態> 削平により5号曲輪と6号曲輪間に構築され、尾根の北側は鉄道防備林に続く。傾斜角度は尾根先端部で約35°、実効法高は約6mを測る。出土遺物はなく、作事の痕跡も検出されていない。

## 6号曲輪（連絡曲輪）

遺構（第18・82図 写真図版16・25）

<位置>調査区ⅡC10e～ⅡC5gグリッド、標高459.9～460.7mに位置する。

<規模・形態・機能> 規模は、長軸18.2m、短軸5.3m、面積73.0㎡で、三日月形を呈する。3号曲輪と8号曲輪間（比高差16m）に普請されたテラス状の曲輪の中段に位置する。5号曲輪と同様に曲輪間の連絡機能を持っていたと考えられる。西側は6号切岸で下段の4号曲輪に接し、東側は7号切岸で7号曲輪に続く。5号曲輪と7号曲輪との比高差はそれぞれ1.7m、5.0mを測る。

<普請・作事>削平により普請されており、作事の痕跡はみられない。削平された地山の褐色土により整地されている。南端の一部は、重機により削平され消失している。

<埋土>表土は薄く、層厚約15cmの黒褐色土が主体となって構成されている。

遺物（第110図 写真図版64）

<出土状況> 礫石器（293）が検出面から出土している。

## 7号切岸

遺構（第18・82図 写真図版18）

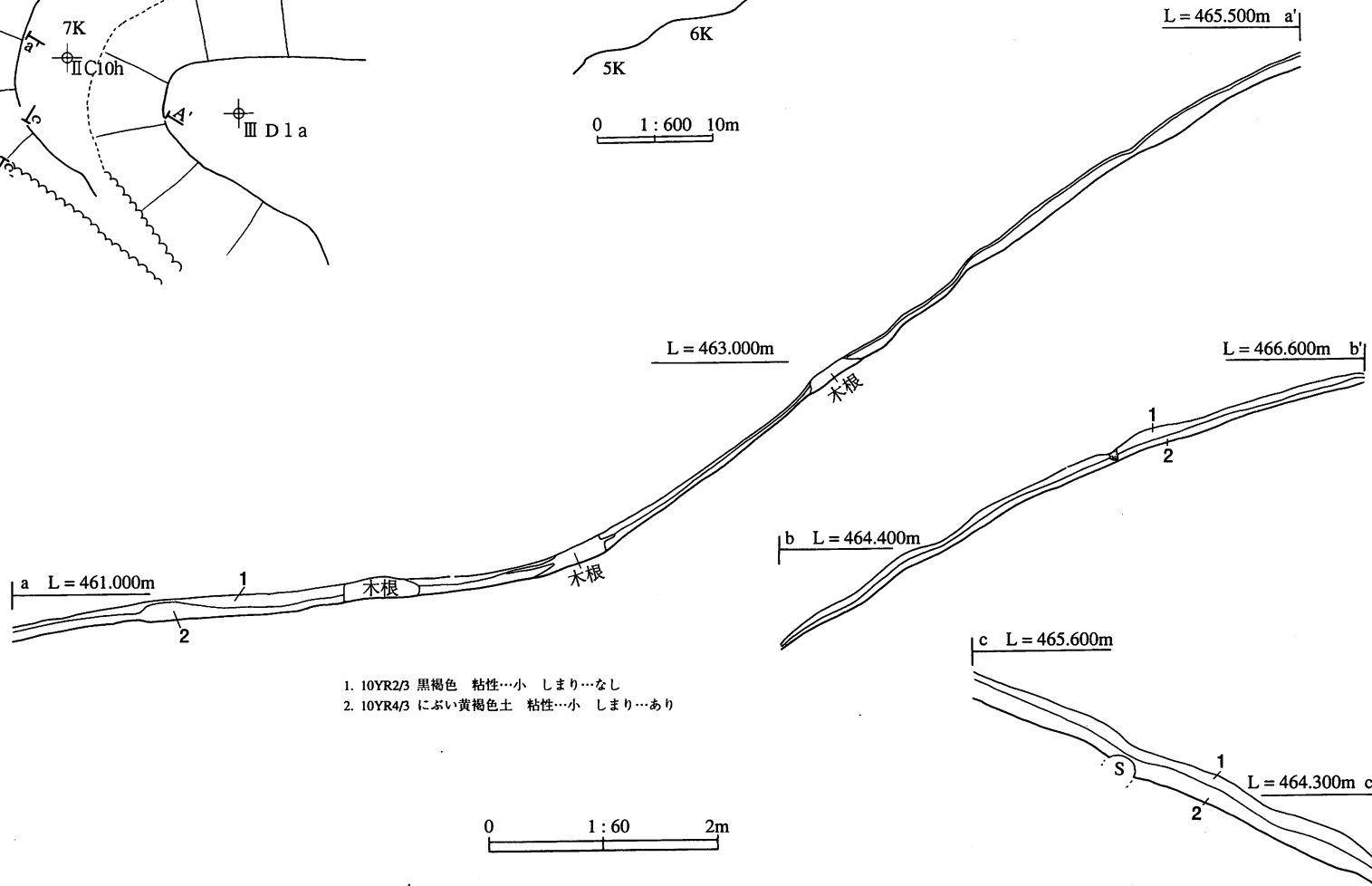
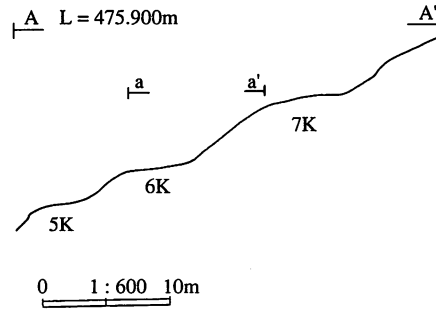
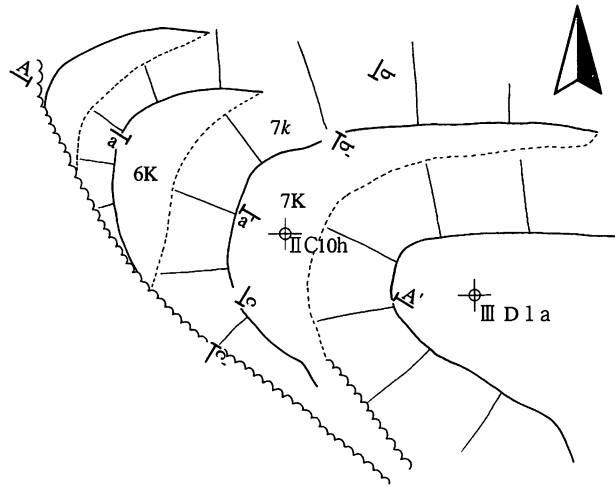
<位置>調査区ⅡC8d～ⅡC4fグリッド、標高457.6～458.5mに位置する。

<規模・形態> 削平により6号曲輪と7号曲輪間に構築され、尾根の南側は重機により攪乱されている。傾斜角度は尾根先端部で34°、実効法高は8mを測る。北側の傾斜角度は30°を測り、そのまま鉄道防備林内の断崖へと続いている。作事の痕跡は検出されていない。

遺物（第67・89・90図 写真図版8・54）

<出土状況>青磁（5）、染付（55・124）、白磁、古銭、楔、鉾等が出土している。

第18図 6号輪・7号切岸



1. 10YR2/3 黒褐色 粘性…小 しまり…なし
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 粘性…小 しまり…あり

## 7号曲輪（連絡曲輪）

遺構（第19・82図 写真図版16）

＜位置＞調査区ⅢC 1 h～ⅡD 8 bグリッド、標高465.7～466.8 mに位置する。

＜規模・形態・方向・機能＞ 規模は、東西の最大6.9 m、南北22.3 m、面積161.8 m<sup>2</sup>の楕先形を呈する。尾根北側は、8号切岸に沿って8号曲輪下段を巻く様に構築されているが、南側は重機により攪乱を受けて消失しているため不明である。また、ほぼ同じ標高の尾根北側ⅡD 9 d～ⅣE 4 bグリッドにはこの7号曲輪と連絡する東斜面の24号曲輪が検出されているため、11号曲輪（主郭）周辺尾根筋にある曲輪間の連絡の他に西斜面から東斜面の曲輪への連絡機能を有すると考えられる。7・13・23・24曲輪の配置は周到な防御機能を持っていたと考えられる。東側は8号切岸で上段の8号曲輪に続く。

＜普請＞削平により普請されている。作事の痕跡は検出されなかった。地山の褐色度により整地されている。

＜埋土＞表土は薄く整地層から炭化物が検出されている。

遺物（第110図 写真図版10・64）

＜出土状況＞ 染付（69）、礫石器（294）が検出面から出土している。

＜時期＞15～17世紀初頭と考えられる。

## 8号切岸

遺構（第19・35・82図 写真図版17）

＜位置＞調査区ⅡC 8 d～ⅡC 4 fグリッド、標高457.6～458.5 mに位置する。

＜規模・形態＞ 削平により7号曲輪と8号曲輪間に構築され、尾根の南側は重機により攪乱されているが、北側は鉄道防備林内の断崖に続く。傾斜角度は尾根先端部で約40°、実効法高は5 mを測る。作事の痕跡も検出されなかった。

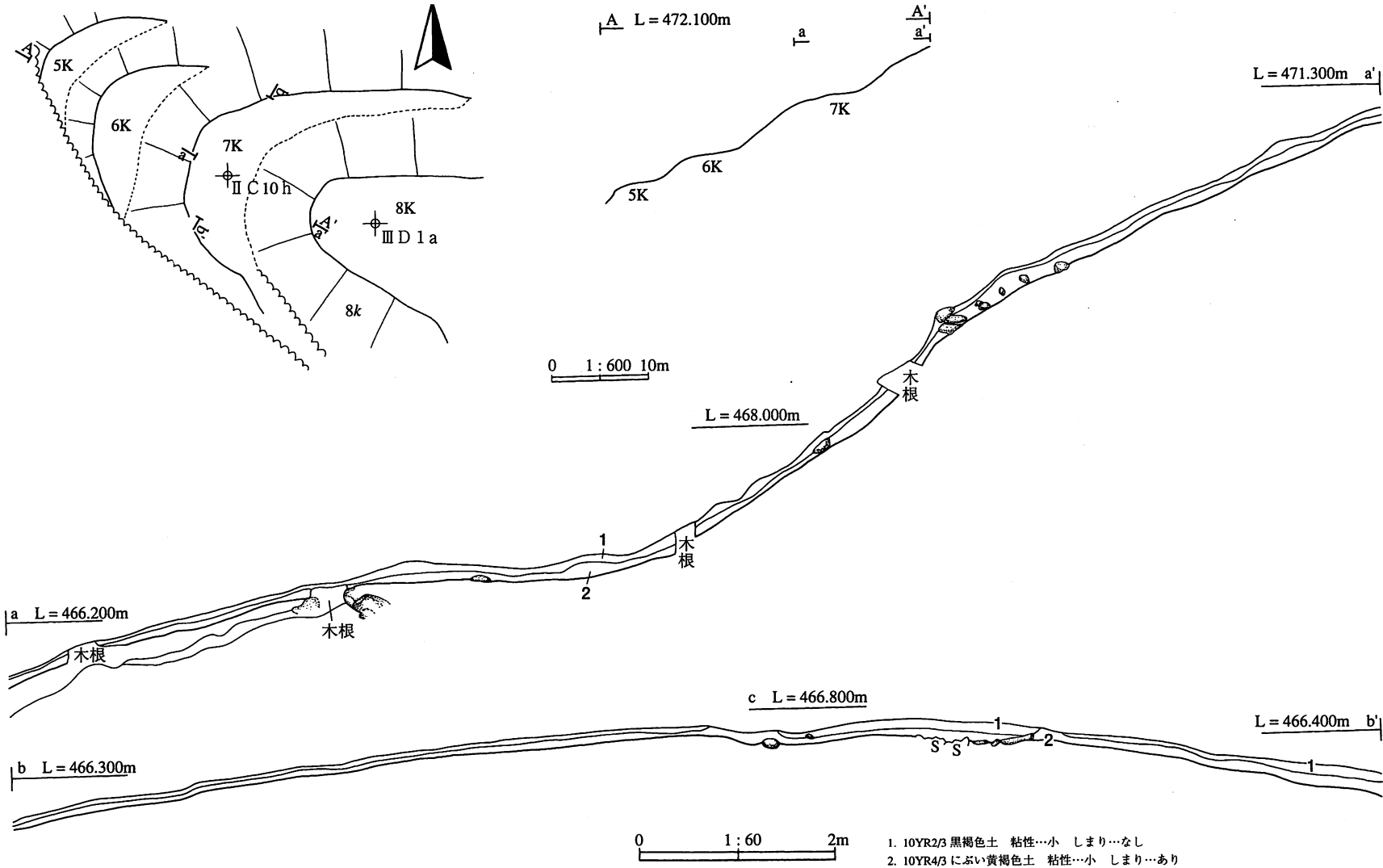
遺物（第88・89・92図 写真図版8・9・10）

＜出土状況＞染付（72・79・80・81・95・98・100・111）、青磁（7・17）、白磁（24・29・36・48）、瀬戸・美濃系陶器（141）等が出土している。

＜時期＞15～17世紀初頭と考えられる。



第19図 7号曲輪・8号切岸



## 8号曲輪（副郭）

遺構（第20・82図 写真図版17・25）

＜位置＞調査区ⅡC 10 i～ⅢD 2 bグリッド、標高471.1～472.6 mに位置する。

＜規模・形態・機能＞ 規模は、長軸16.1 m、短軸12.3 m、面積177.0 m<sup>2</sup>で、馬蹄形を呈する。

普請は尾根の削平によりなされ、方向は、ほぼ北西－南東で、北から西と南側をめぐる8号切岸により防御されている。3号曲輪に次ぐの規模の曲輪であり3号曲輪と同様に副郭に準ずる曲輪と考えられる。7号曲輪との比高差は、4.3 mを測る。

＜普請＞尾根筋に沿った曲輪中央部は削平により普請されているが、曲輪の南西辺と北辺の切岸付近は盛り土により構築されている。南西辺の盛り土は最大約40 cm。北辺の盛り土は約30 cm。盛り土下層には旧表土層（南西辺層厚15 cm）が残存し、地山の褐色土により整地されている。

＜作事＞曲輪中央部ⅢD 1 aグリッドから3号柱穴列が、また11～17号土坑が検出された。3号柱穴列は掘立柱建物跡の可能性も考えられるが、対応する柱穴は検出されず、正確な曲輪の機能については不明である。

＜埋土＞表土は薄く、層厚約20 cmの黒褐色土が主体で構成され、地山の褐色土により、整地されている。

遺物（第101・110図 写真図版10・55・60・64）

＜出土状況＞ 検出面から染付（68・75・76）、瀬戸美濃系陶器（130）、火鉢（173・174）、鉄鍋（219・232）、鎌（220）、磨石（296）等が出土している。

## 9号切岸（第20・82図 写真図版19・21）

遺構 ＜位置＞調査区ⅡD 10 b～ⅣD 4 dグリッド、標高473.1～481.1 mに位置する。ⅢD 2 c～ⅢD 6 cとⅣD 4 d～ⅣD 6 d付近で攪乱のため消失しているが8号曲輪と9号曲輪間を北端にし11号曲輪の西辺をまわりながら南部は5号堀の北側法面に連続するものと考えられる。

＜規模＞ 削平により5号曲輪と6号曲輪間に構築され、南側はⅢD 3 c～ⅢD 4 cグリッド付近は重機により攪乱されているが南側は主郭西側に続いている。傾斜角度は尾根付近で35°、主郭西側で37°を測る。北側は防備林内の断崖へと続き主郭を囲んで東側に巡る。

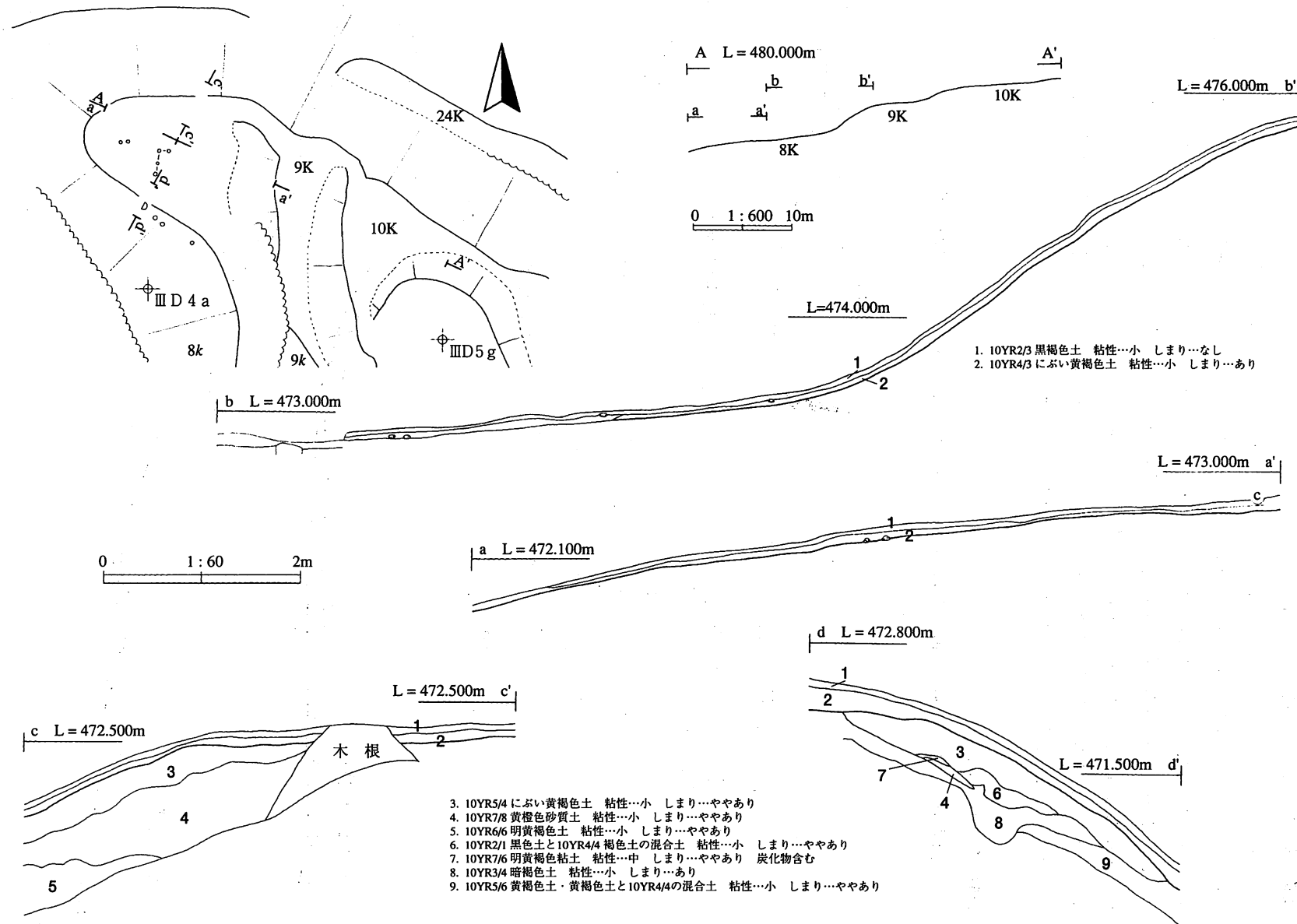
＜普請・埋土＞削平により構築されているが、ⅢD 7 e～ⅢD 8 eグリッド付近は地山の石を敷きその上に褐色土を盛って普請されている。西側の最大傾斜角度は約40°、実効法高は5.9～11.2 mを測る。尾根が屈曲する10号曲輪北側の傾斜角度は37°、実効法高は約10 m、主郭南東側の側最大傾斜角度は約50°、23号曲輪との実効法高は15.1～16.2 mを測る。主郭である11号曲輪を直接防御する9号切岸は他の切岸と比しても際だって防御性が高められている。

遺物（第87・88・89・92・96・102・104・107図 写真図版8・9・54・57・60・62・63）

＜出土状況＞青磁（2・15）、白磁（21・25・26）、古銭（183・194・195・200・201・207）、染付（61・70・83・93・97・114・118・123）、瀬戸・美濃系陶器（135・136・138・149・171）、火打鎌（212）、鉞（239）、硯（318）、砥石等が出土している。他の切岸に比して検出遺物量が多いのは、上段にある主郭からの廃棄によるものと考えられる。

＜時期＞15～17世紀初頭と考えられる。

第20図 8号曲輪・9号切岸



9号曲輪（連絡曲輪）

遺構（第22・82図 写真図版3・17・31）

<位置> 調査区ⅢD 1 c～ⅢD 3 dグリッド、標高475.5～476.0mに位置する。

<規模・形態・機能> 規模は、長軸10.8m、短軸5.5、面積55.2㎡で、鉞先形を呈する。尾根の削平により普請され、褐色土により整地が施されている。正面の北西側は9号切岸により8号曲輪と画されているが、8号曲輪への連絡は曲輪の西北端から9号切岸の北側を通るように通路が敷設されている。

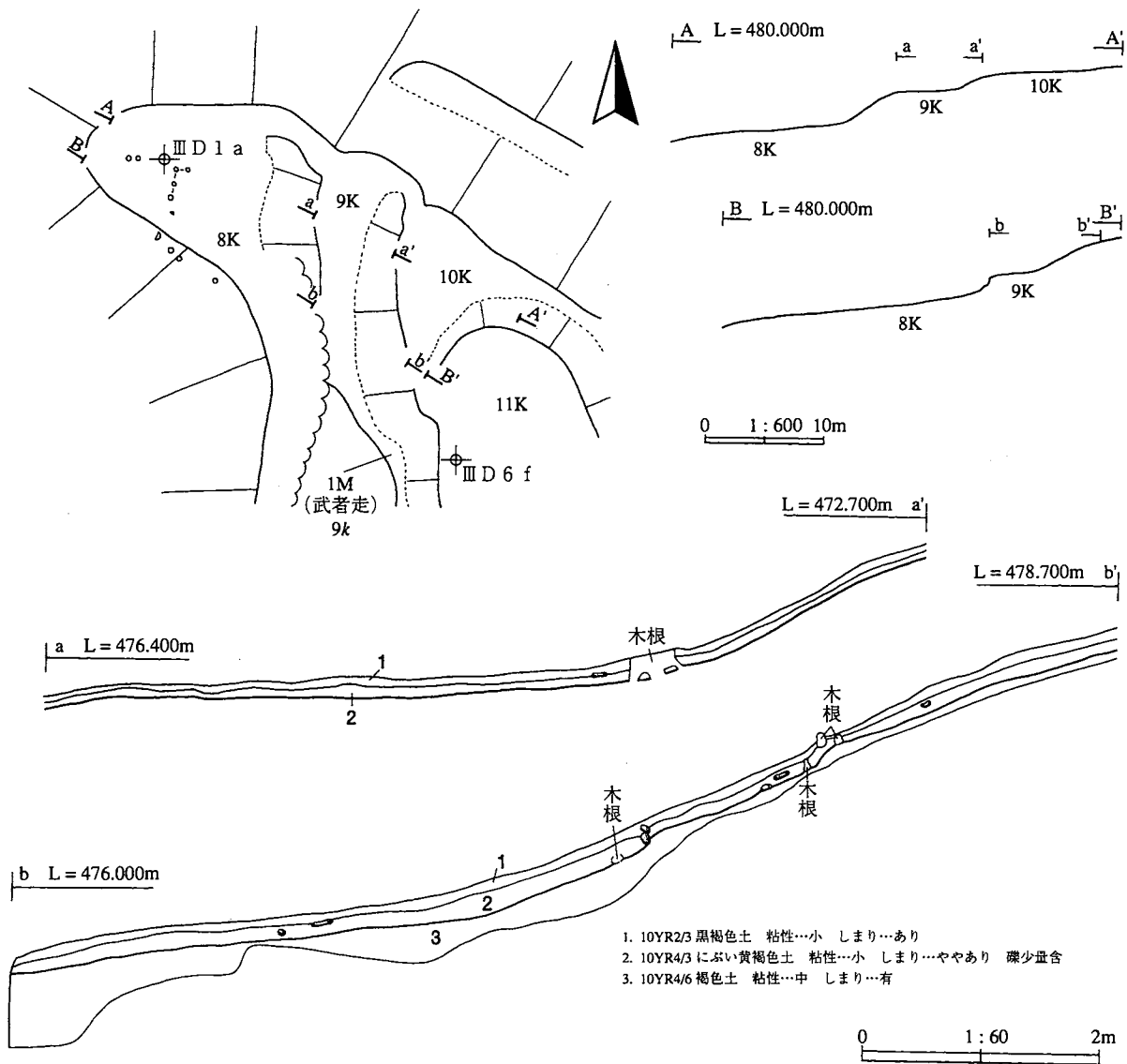
10号曲輪とともに、主郭と8号曲輪の間に位置するためこれらの連絡的機能を持っていたと考えられる。

また、9号曲輪の南側即ち主郭西側の9号切岸には武者走り状遺構があり、主郭と直接連絡している。

<埋土> 表土は薄く約20cmの黒褐色土が主体となって構成されている。

遺物（写真図版60）

<出土状況 時期> 鍋（246）が検出面から出土している。15～17世紀初頭と考えられる。



第21図 9号曲輪

## 10号曲輪（連絡曲輪）

遺構（第22・82図 写真図版3・17・25・31）

＜位置＞調査区ⅢD1e～ⅢD3fグリッド、標高476.5～477.9mに位置する。

＜規模・普請・埋土＞ 規模は、長軸13.3m、短軸10.0m、面積90.4㎡で、鎌形を呈する。8号曲輪と11号曲輪の間を結ぶ機能を持っていたと考えられる。尾根の屈曲点に位置し北側は9号切岸上端に沿って2号武者走り状遺構に続く。削平によって構築されている。作事の痕跡は検出されていないが、整地層下から5号土坑が検出された。地山岩盤上に褐色土により整地されている。

遺物（第88・92・102・107図 写真図版9・10・55・60・63）

＜出土状況＞ 白磁（28・39～42・44）、染付（77）、瀬戸・美濃産陶器（129・143・167）、刀子（224）、鋏（254）、硯（291・317）、基石が検出面から出土している。

＜時期＞ 遺物から15～17世紀初頭と考えられる。

## 1号武者走り状遺構

遺構（第23・82図 写真図版17・32）

＜位置＞調査区ⅢD4d～ⅢD7eグリッド、標高475.1～479.4mに位置する。

＜規模・機能＞ 規模は、長さ16.3m、幅3.2～1.6m、11号曲輪北西辺12号集石の南西に沿いながら10号曲輪を通らず直接9号曲輪の南西端を連絡している。尾根の屈曲点西側に位置し、東側には2号武者走り状遺構が平行する。

＜普請・作事＞ 12号集石付近は盛土により構築され、北端部の9号曲輪南西部は削平により普請されている。作事の痕跡は検出されていない。出土遺物はない。

＜埋土＞ 地山岩盤上に褐色土を主体に整地されている。

＜時期＞ 遺物から15～17C初頭と考えられる。

## 2号武者走り状遺構

遺構（第23・82図 写真図版21・32）

＜位置＞調査区ⅢD3h～ⅢD10aグリッド、標高475.3～479.8mに位置する。

＜規模・機能＞ 規模は、長さ37.5m、最大幅2.8m、11号曲輪北東端から東辺に沿い11号曲輪の南東部にまで続く。北側の起点付近は武者溜まり状に広がっている。主郭の東辺肩からの比高差は約2mを測る。武者走り下位の9号切岸は平均約40°の傾斜角を測る。主郭の東側の防備と8号堀方向からの敵の侵入にたいする防御機能を持っていたと考えられる。

＜普請・作事＞ 盛土により構築されている。柵列等の作事の痕跡は検出されていない。

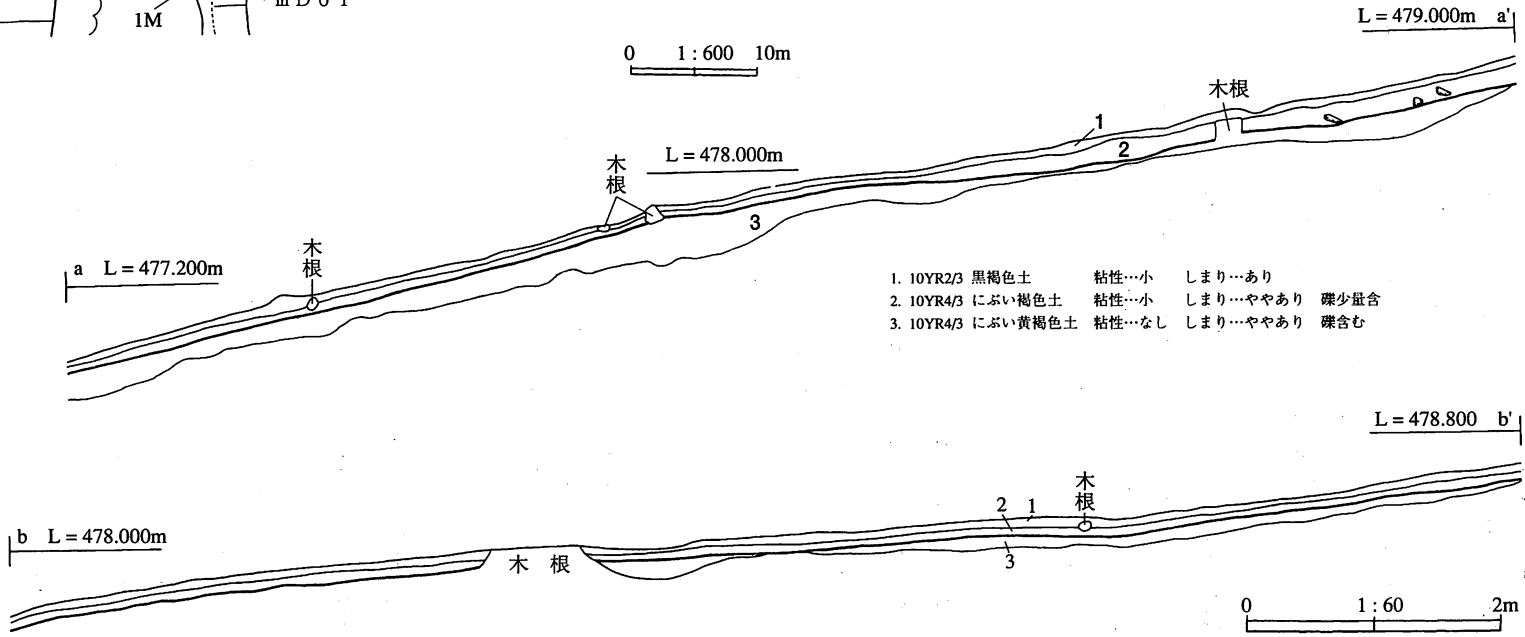
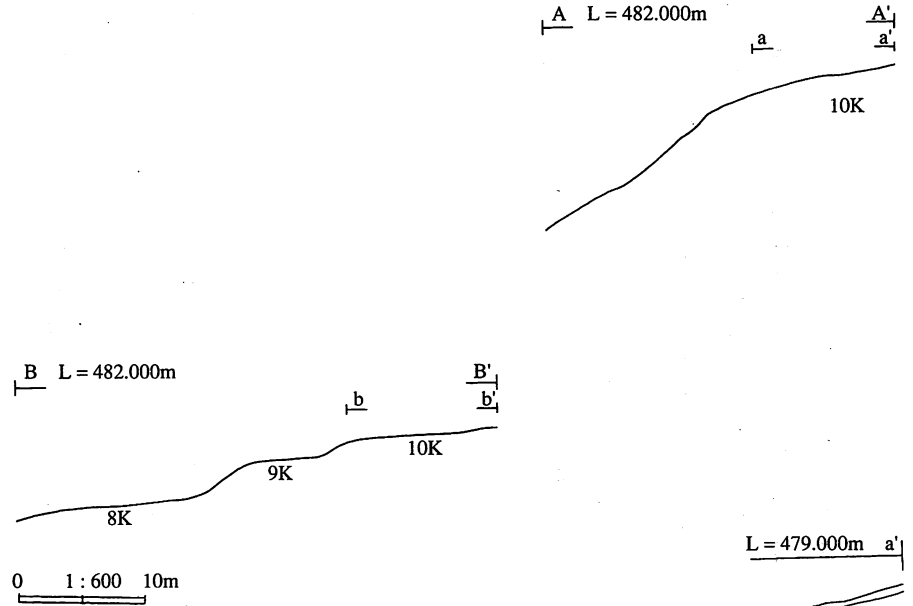
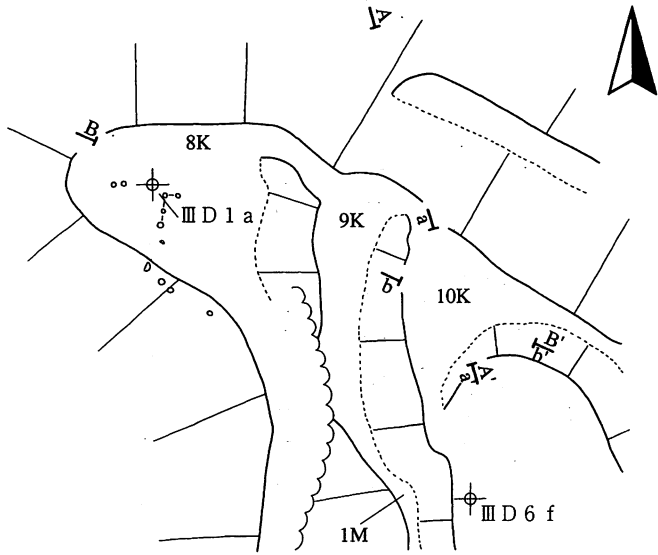
＜埋土＞ 地山岩盤上に褐色土を主体に整地されている。

遺物（写真図版6・10）

＜出土状況＞ 染付（84）瀬戸・美濃系灰釉陶器（137）が検出面から出土している。

＜時期＞ 遺物から15～17世紀初頭と考えられる。

第22図 10号曲輪



- 1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性…小 しまり…あり
- 2. 10YR4/3 にぶい褐色土 粘性…小 しまり…ややあり 礫少量含
- 3. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 粘性…なし しまり…ややあり 礫含む

## 11号曲輪（主郭）

遺構（第23・24・82図 写真図版17・19・32）

＜位置＞調査区ⅢD 4 e～ⅢD 2 iグリッド、標高478.5～481.9mに位置する。

＜規模・形態＞ 規模は、長軸37.5m、短軸19.3m、面積638.6㎡（境界含）で、馬蹄形を呈する。方向は、ほぼ北-南で、9号切岸により防御されている。数10cmの高低差により三段に分かれており、下段は面積200.8㎡（標高478.5～479.8m）、中段は面積94.6㎡（標高480.1～480.4m）、上段は面積170.3㎡（標高481.～491.9m）を有し、調査区内最大の面積を有する曲輪で主郭と考えられる。9号曲輪へは1号武者走り状遺構により連絡が可能であり、曲輪の南東側からは16、18号曲輪へは通路がもうけられ、18号曲輪から22号曲輪へと続いている。

また、主郭北東から東側9号切岸縁辺のⅢD 4 iからⅢE 10 aには2号武者走り状遺構があり主郭東側の防御機能が高められている。

＜普請＞曲輪の普請は、中央部は削平、東西の両辺1・2号石積付近は盛り土により構築されている。

西側の拡幅部の面積は約120.0㎡で、旧表土に地山の石（層厚約1m）と褐色土（層厚20～70cm）により整地が施されている。南北には長さ8.0m、幅0.7m、幅0.7mにわたり土留めのためと考えられる1号石積が検出された。この石積北端部の1号武者走り状遺構付近には多量の石が集められた、12号集石が検出された。

また、10号、11号、13号集石が中段と上段との境界付近から3基検出された。

＜作事＞曲輪上段ⅢD 8 g～ⅢD 9 hグリッドに1号掘立柱建物跡が検出された。1号掘立柱建物跡プラン内で2号土坑、3号土坑が検出され、またⅣD 1 f～ⅢD 10 iグリッド10号切岸下場に沿って1号、2号柱穴列が検出された。2号柱穴列は1号柱穴列の約1.4m南に沿った位置で検出された。

＜埋土＞検出面上部の表土は薄くほぼ均一で層厚約20cmの黒褐色土を主体に構成される。整地層は石積の主郭内側と主郭外縁（幅約3m）付近までは旧表土上に地山の褐色土を盛って構築されているが、曲輪外縁から切岸にかけては、石敷き（層厚最大1.0m）と盛り土（層厚最大約0.5m）により人為的な整地層が構築されている。また、主郭の東側2号石積付近約32.0㎡も同様の構築が成されている。

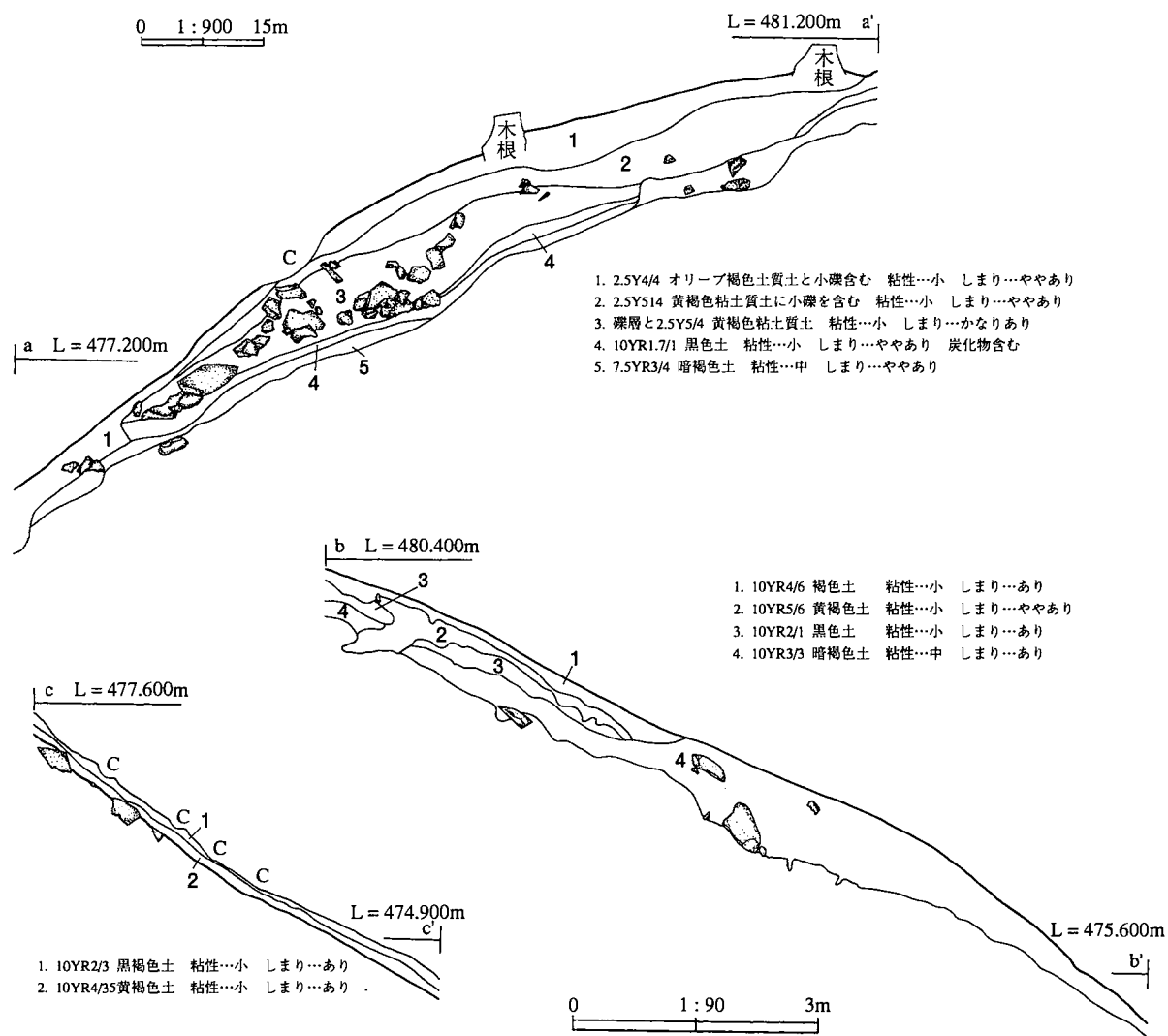
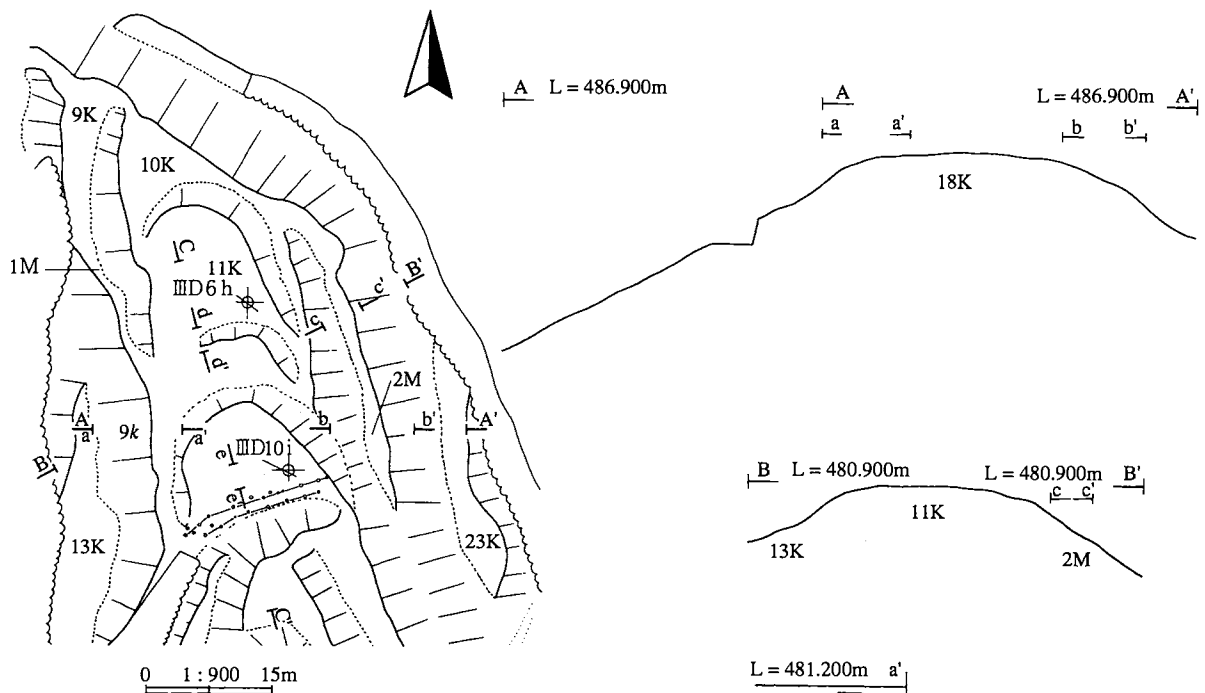
遺物（第87・88・90・92・93・94・96・99・102・103・107図

写真図版6・7・9・10・55・57・58）

＜出土状況＞12号集石上部からは羽口や石臼片、炉壁が検出されている。石臼片はこの他にも曲輪上段部から検出されるなどの散乱状況から、人為的に廃棄または破壊されたものと考えられる。

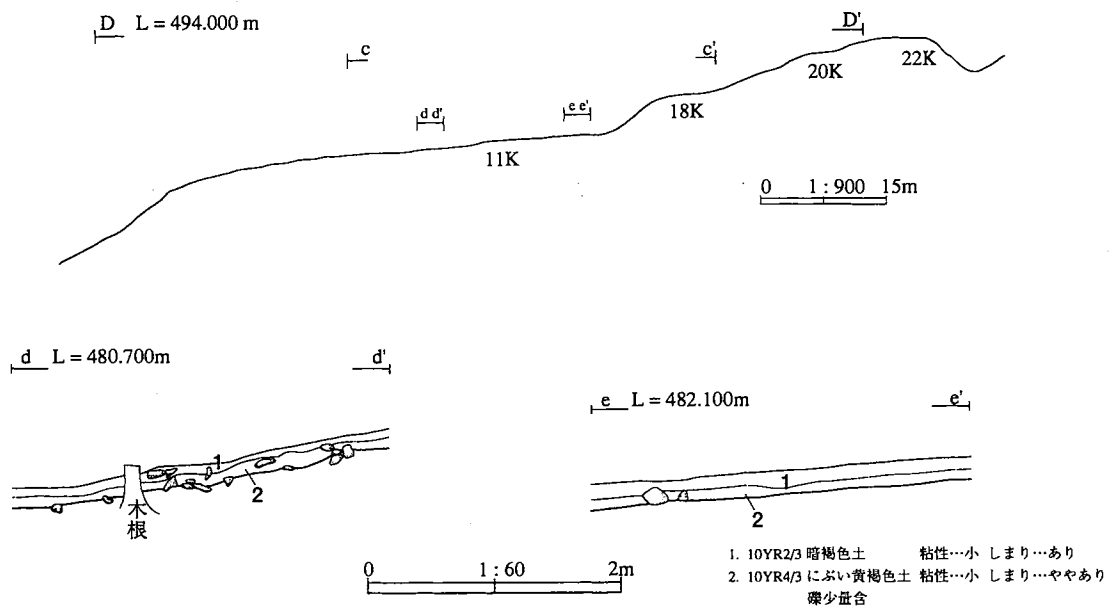
青磁（3）、白磁（20・34・35・45）、染付（53・57・74・106・108）、瀬戸・美濃系陶器（128・142・145～147・159・162・163・166）、唐津産陶器（170）、古銭（182・199）、釘（221・222・250）、石臼（300・307）、砥石（287・288・325・332）、炉壁、基石等が検出面から出土している。

＜時期＞ 遺物や炭化物（1号石積内郭側の整地層、1号柱穴列P 6埋土中）の年代測定結果（1430～1440年±50）から15世紀前半～17世紀初頭と考えられる。



第23 11号曲輪・9号切岸・1号、2号武者走り状遺構





第24図 11号曲輪

### 12号曲輪（腰曲輪）

遺構（第25・82図 写真図版18）

<位置>調査区ⅣD 1 a～ⅣD 4 aグリッド、標高469.0～470.2mに位置する。

<規模・形態・機能> 規模は、長軸（17）m、短軸（7）m、面積（42.5）㎡で、半月形を呈する。盛り土により構築されている。調査区外の南側下には6号堀が存在している。6号堀が西側の通路として使用され、虎口に続くと推定されることから斜面下の調査区外にある5ヶ所の曲輪とともにこれを防御する機能を持つと考えられる。

<普請・作事>盛り土により普請されている。作事の痕跡は検出されていない。

<埋土>上部の曲輪を普請した際に削平された褐色土が主体となって構成されている。盛り土下には旧表土層が残る。また、現地性がない焼土塊も埋土から検出されている。

遺物（第89・92・96・101図 写真図版6・7・54・56）

<出土状況>染付（52）、瀬戸・美濃系陶器（153・169）、古銭（197・202）、釘（278）が出土している。

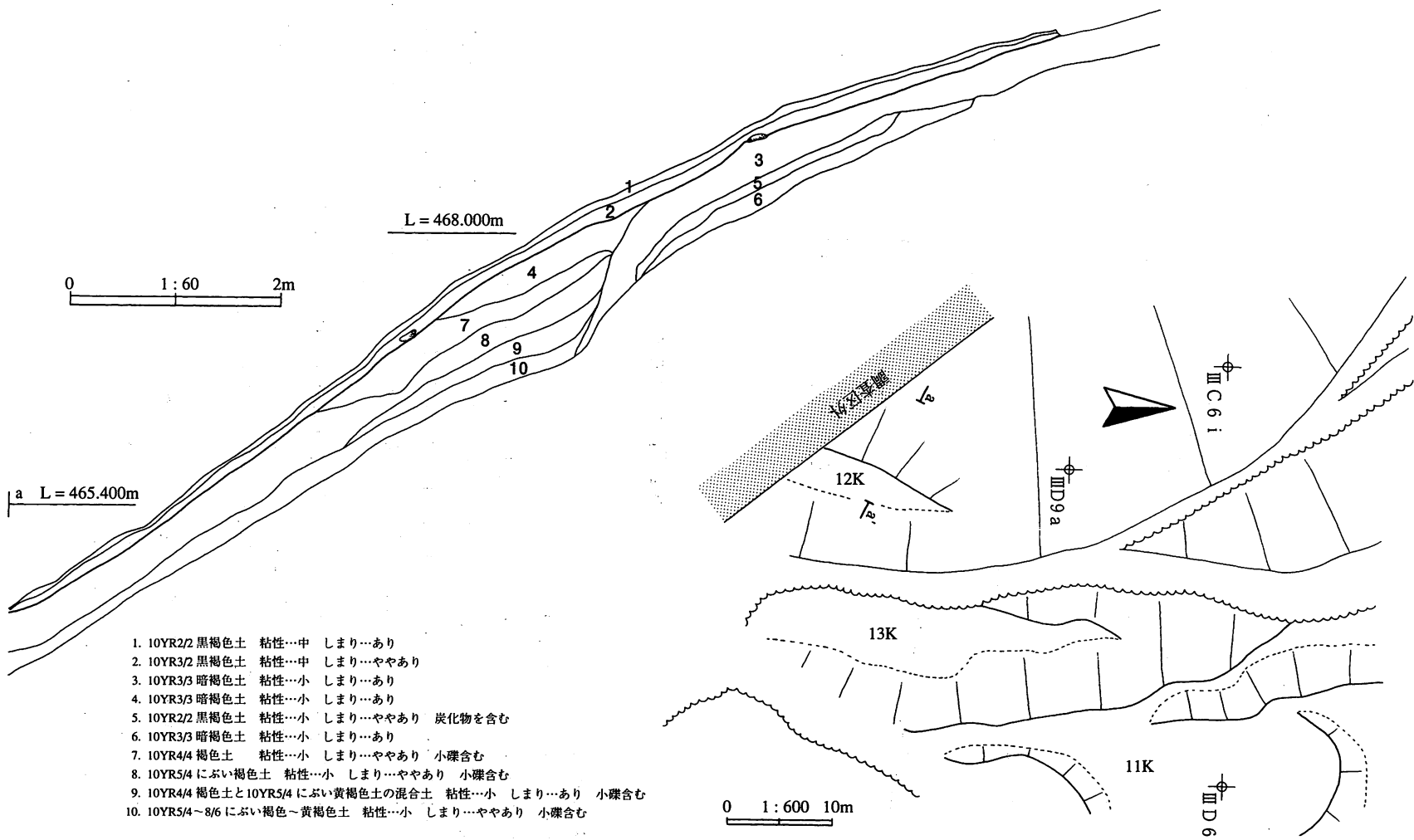
<時期> 15～17世紀初頭と考えられる。

L = 470.400m a'

L = 468.000m

0 1:60 2m

a L = 465.400m



- 1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性…中 しまり…あり
- 2. 10YR3/2 黒褐色土 粘性…中 しまり…ややあり
- 3. 10YR3/3 暗褐色土 粘性…小 しまり…あり
- 4. 10YR3/3 暗褐色土 粘性…小 しまり…あり
- 5. 10YR2/2 黒褐色土 粘性…小 しまり…ややあり 炭化物を含む
- 6. 10YR3/3 暗褐色土 粘性…小 しまり…あり
- 7. 10YR4/4 褐色土 粘性…小 しまり…ややあり 小礫含む
- 8. 10YR5/4 におい褐色土 粘性…小 しまり…ややあり 小礫含む
- 9. 10YR4/4 褐色土と10YR5/4 におい黄褐色土の混合土 粘性…小 しまり…あり 小礫含む
- 10. 10YR5/4～8/6 におい褐色～黄褐色土 粘性…小 しまり…ややあり 小礫含む

0 1:600 10m

第25図 12号曲輪

### 13号曲輪（帯曲輪）

遺構（第26・27・82図 写真図版18）

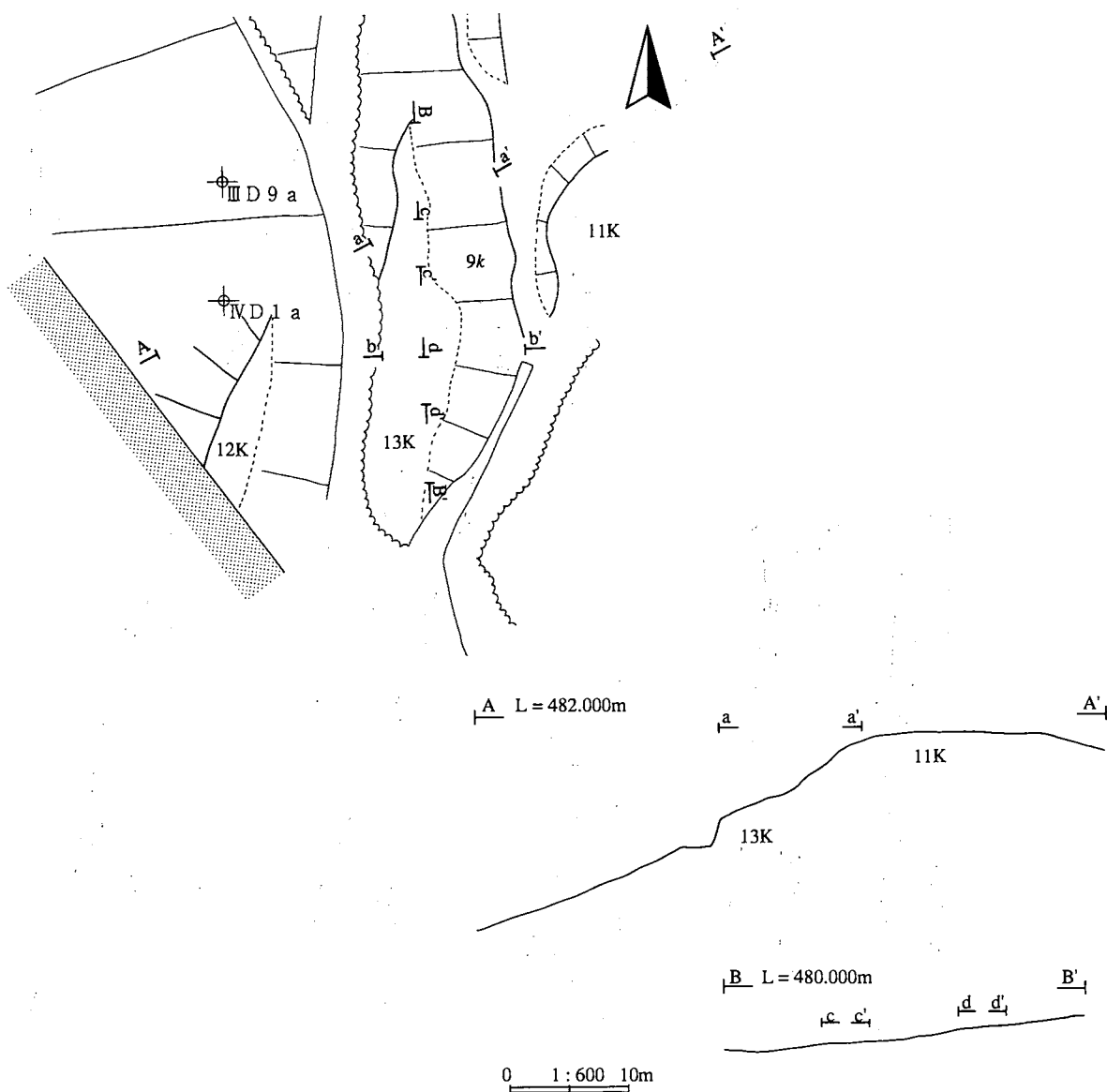
<位置>調査区ⅢD7c～ⅣD5dグリッド、標高474.1～477.7mに位置する。

<規模・形態・普請> 規模は、長軸42m、短軸7m、面積155.7㎡で、帯状を呈する。南側のⅣD5c～ⅣD7f付近は重機攪乱により消失しているが5号堀に続くと推定される。8号切岸により防御され、12号曲輪とともに尾根西側からの敵の侵入に対する防御施設の機能を有すると考えられる。主郭との比高さは3.8～4.9mを測る。盛り土により普請されている。作事の痕跡はみられない。主郭普請時に削平された褐色土が主体となって構成されている。盛り土直下には多量の炭化物を含んだ旧表土と考えられる層が存在する。

遺物（第96・102図 写真図版57・60）

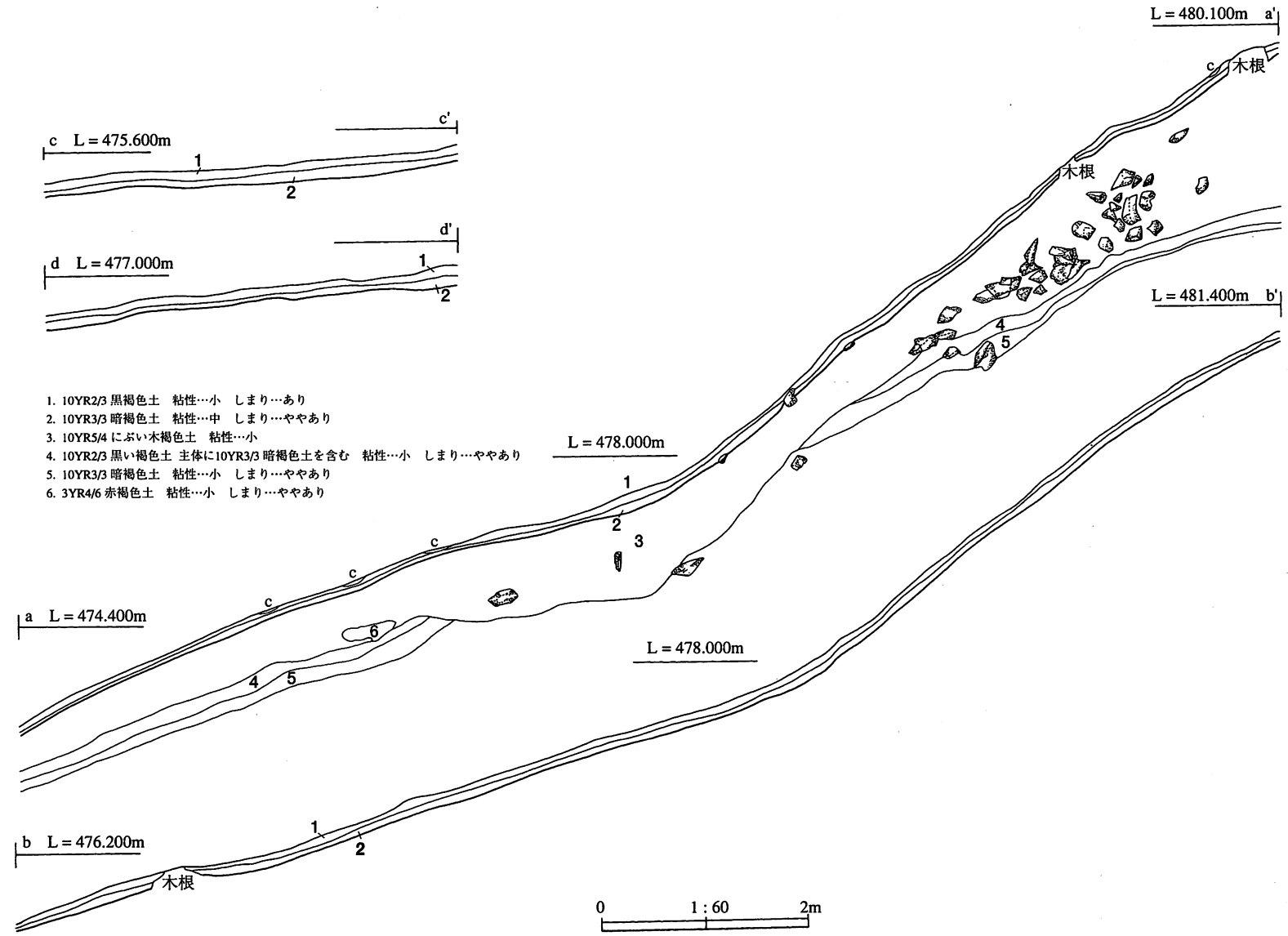
<出土状況> 染付（66）、古銭（178）、刀子（223）が出土している。

<時期> 15～17世紀初頭と考えられる。



第26図 13号曲輪・9号切岸 (1)

第27図 13号曲輪・9号切岸(2)



### 14号曲輪（帯曲輪）

遺構（第28・29・84図 写真図版18）

<位置>調査区ⅢC5h～ⅢC9iグリッド、標高459.1～460.8mに位置する。

<規模・形態> 切岸の整地層下からトレンチ調査により検出された。攪乱により南部と北西側の一部が消失しているが、検出された規模は、長軸（22.5）m、短軸（3.5）、面積（42.8）㎡で、不整な三日月形を呈する。谷沿いに侵入する敵に対する防備のために上段の15号曲輪とともに構築され、その後整地層下に埋められたものと考えられる。

<普請・作事> 削平により普請されている。作事の痕跡は検出されていない。

<埋土> 黒褐色土が主体となって構成されている。現地性がない焼土塊も検出されている。

<出土状況> 出土遺物はない。

<時期> 15～16世紀前半と考えられる。

### 15号曲輪（帯曲輪）

遺構（第28・29・84図 写真図版18）

<位置>調査区ⅢC7j～ⅣC1iグリッド、標高463.1～463.3mに位置する。

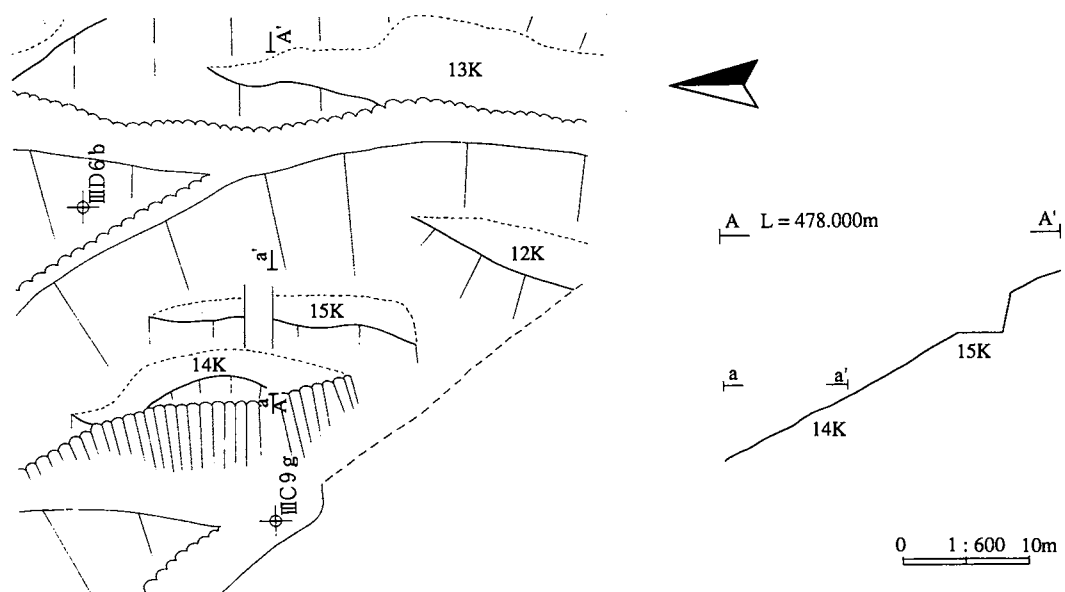
<規模・形態・機能> 規模は、長軸21.5m、短軸2.8m、面積（41.3）㎡で、不整な槍先形を呈する。切岸の整地層下からトレンチ調査により検出された。谷沿いに侵入する敵に対する防備のために下段の14号曲輪とともに構築され、その後整地層下に埋められたものと考えられる。曲輪西側から4号焼土遺構が検出された。

<普請・作事> 削平により普請されている。作事の痕跡は検出されていない。

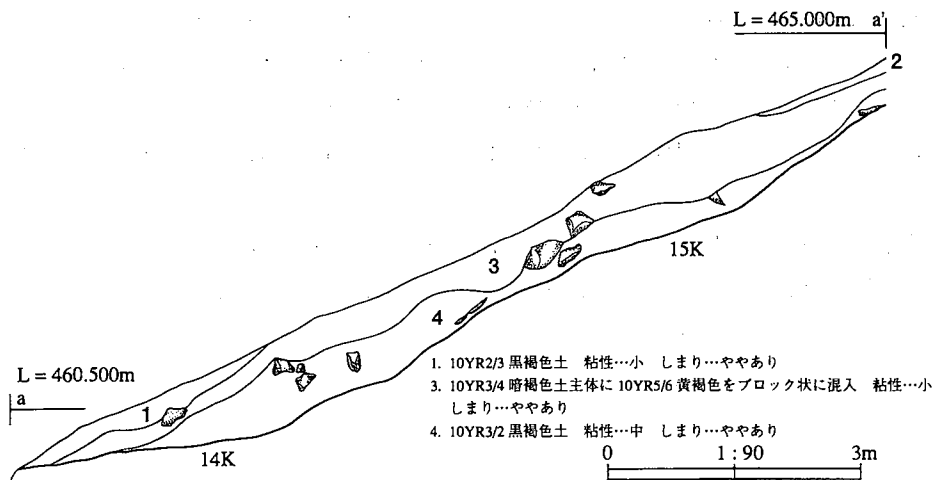
<埋土> 黒褐色土が主体となって構成されている。現地性がない焼土塊も検出されている。

<出土状況> 出土遺物はない。

<時期> 15～16世紀前半と考えられる。



第28図 14号・15号曲輪（1）



第29図 14号・15号曲輪 (2)

### 16号曲輪 (帯曲輪)

遺構 (第31・82図 写真図版19・32)

<位置>調査区ⅣD 1j～ⅣE5aグリッド、標高482.9～484.7mに位置する。

<規模・方向・普請> 規模は、長軸20.0m、短軸2.5m、面積50.0㎡を測り。方向は、ほぼ北北西—南南東で、主郭の南東側2号切岸上部に構築されている。16号曲輪は、1号竪穴住居跡と17号曲輪を埋めて構築されており、検出面からは11・12号焼土遺構が検出された。

<埋土> 黒色土、黒褐色土が主体となって構成され、人為堆積を呈する。現地性のない焼土塊も検出された。

遺物 (第92・97・103・104・107・108図 写真図版5・10・58・61・62・63・64)

<出土状況> 染付 (77) 瀬戸・美濃系陶器 (132・133)、古銭 (189)、釘 (236・237)、鑿 (277)、鍋 (269・274)、鉄鏝 (276)、銅製品 (234)、砥石 (322・323・329) が出土している。

<時期> 遺物から16世紀前半～17世紀初頭と考えられる。

### 17号曲輪 (腰曲輪)

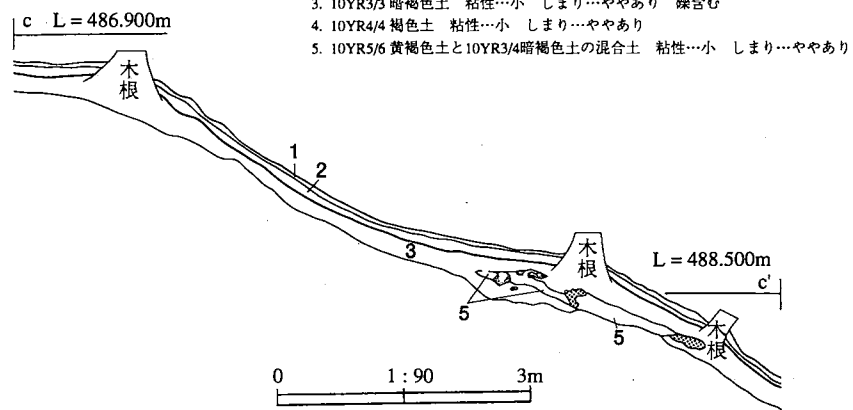
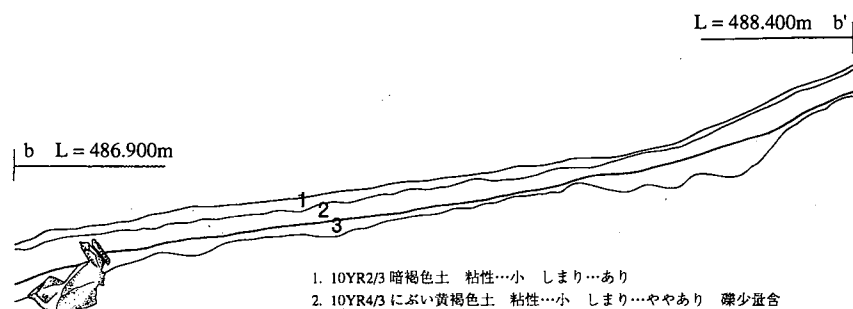
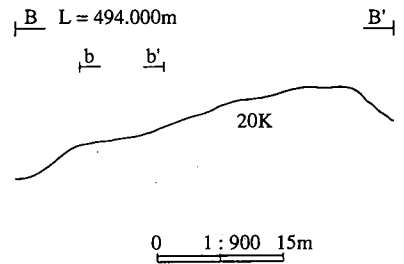
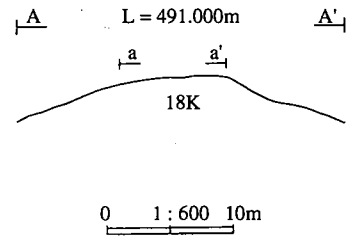
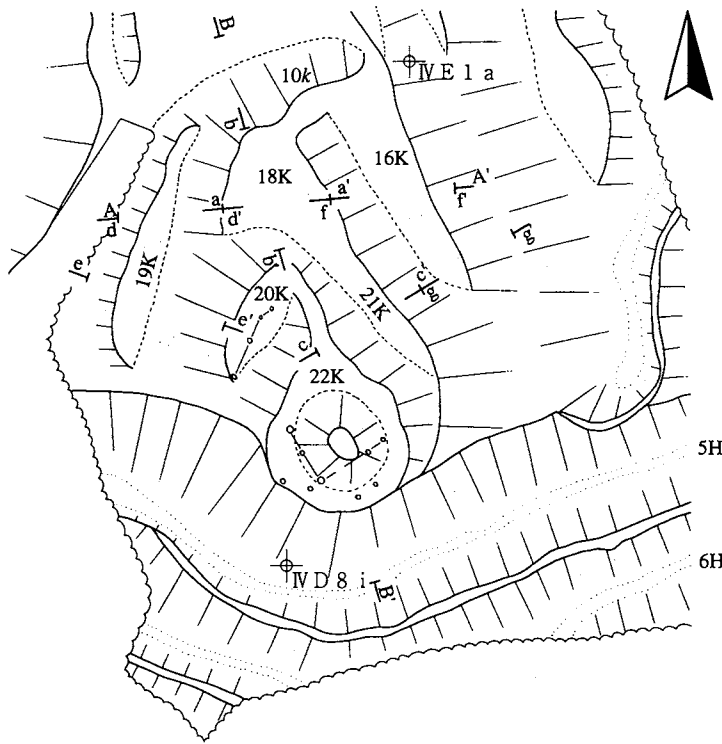
遺構 (第85図 写真図版19)

<位置>調査区ⅣD 3 j～ⅣE 4 a～グリッド、標高483.7～484.3mに位置する。

<規模・方向> 規模は、長軸9.0m、短軸1.5m、面積10.9㎡を測り。不整な台形を呈する。方向は、ほぼ北北西—南南東で、主郭の南東側9号切岸上部、11号輪整地層下から検出された。

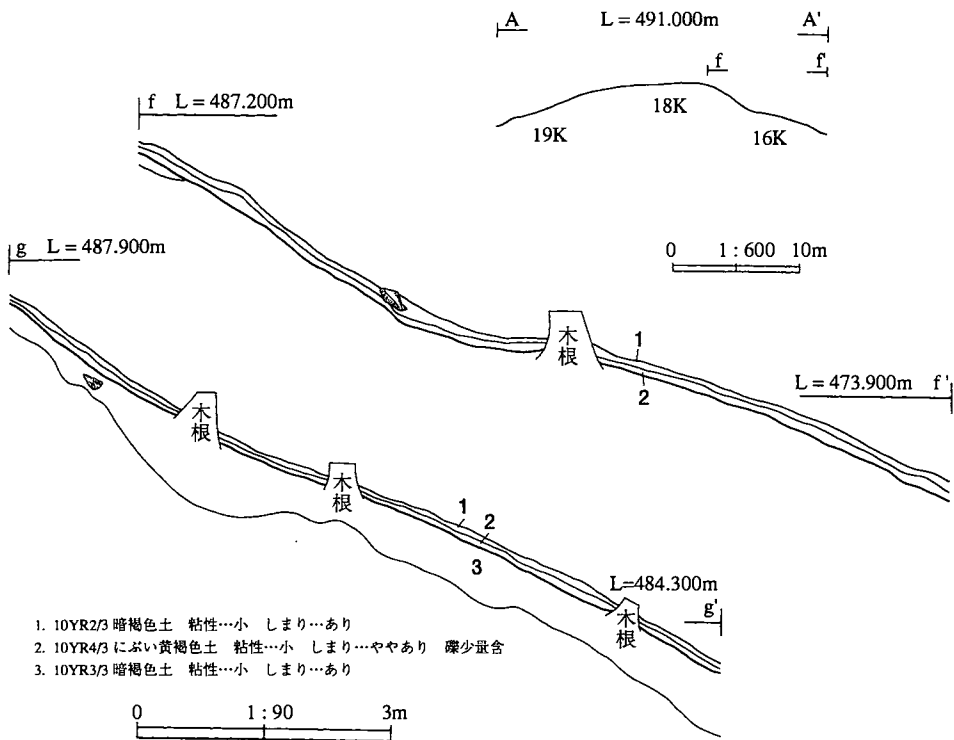
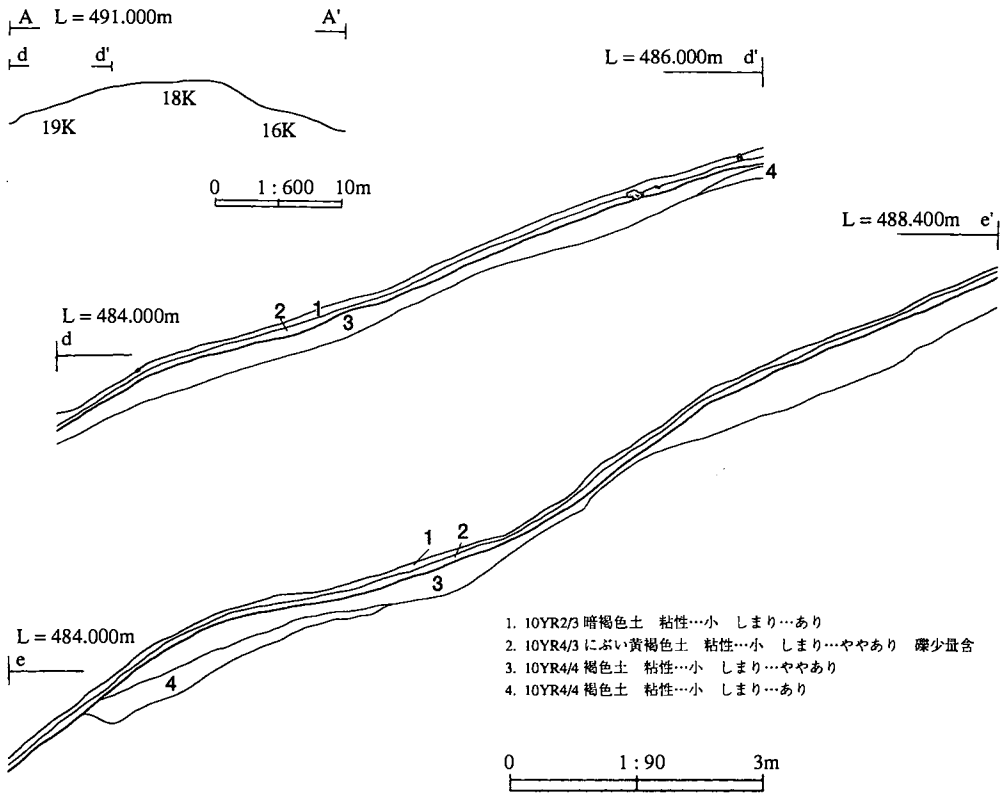
<普請・作事> 削平により構築され、黒色土と黒褐色土が主体となって構成され、現地性のない焼土塊も検出された。検出面から18～20号土坑と近接して切岸から21号土坑の4基の柱穴状小土坑が検出された。出土遺物はない。

<時期> 遺物から15～16世紀と考えられる。



1. 10YR2/3 暗褐色土 粘性…小 しまり…あり
2. 10YR4/3 におい黄褐色土 粘性…小 しまり…ややあり 礫少量含
3. 10YR3/3 暗褐色土 粘性…小 しまり…ややあり 礫含む
4. 10YR4/4 褐色土 粘性…小 しまり…ややあり
5. 10YR5/6 黄褐色土と10YR3/4暗褐色土の混合土 粘性…小 しまり…ややあり

第30図 16号・18号・20号・21号・22号曲輪(1)



第31図 16号・18号・20号・21号・22号曲輪(2)



## 10号切岸

遺構 (第30・31・82・85図 写真図版32)

<位置>調査区ⅢD 10 i～ⅣD 6 fグリッド、標高473.1～481.1mに位置する。18号曲輪の北側から19号曲輪の西側を廻り5号堀に達する。ⅣD 2 f～ⅣD 4 d付近で攪乱のため一部を消失している。

<普請・埋土>削平により構築されている。最大傾斜角度は約38°を測る。1号・2号柱穴列と関係する遺構は検出されなかった。埋土は、黒褐色土が主体となって構成されている。

遺物 (第87・88・90図 写真図版5・8・9・10・55)

<出土状況・時期>青磁(6)、白磁(19・22)、染付(64・78・107・120)、国産陶器(134)等が出土している。15～17世紀初頭と考えられる。

## 18号曲輪(腰曲輪)

遺構 (第30・82・85図 写真図版20・32)

<位置>調査区ⅣD 3 g～ⅣD 4 gグリッド、標高486.0～487.1mに位置する。

<規模・形態> 規模は、長軸10.7m、短軸8.3m、面積57.9㎡を測り、鋏先型を呈する。11号曲輪南の10号切岸の上段に位置する。北端部には10号焼土が検出された。10号切岸を挟んで下位にある1・2号柱穴列は18号曲輪の平場を利用した舞台上構築物の支柱の可能性も考えられるが、関連する遺構は検出されていない。

遺物 (第93・103図 写真図版6・61)

<出土状況・時期> 国産陶器(150)、金属製品(233)、刀子(270)出土している。また、下位の11号曲輪からは、天目茶碗が出土している。15～17世紀初頭と考えられる。

## 2号テラス状遺構

遺構 (第85図 写真図版20・32)

<位置>調査区ⅣD 2h～ⅣD 3fグリッド、標高483.7mに位置する。

<規模・形態> 規模は、長軸7.2m、短軸1.3m、面積6.4㎡を測り、弦月形を呈する。16号曲輪の整地層下から検出された。主郭と18号曲輪間の10号切岸に位置する。北端部には7号焼土が検出された。

<埋土・時期> 褐色土が主体となって整地が施され堅く敲き占められている。遺物は出土していない。

<時期>検出状況から館の最終的な縄張にはなく15～16世紀前半と考えられる。

## 19号曲輪

遺構 (第31・82・85図 写真図版20・32)

<位置>調査区ⅣD 2 g～ⅣD 5 fグリッド、標高483.6～484.6mに位置する。3号焼土遺構を伴う。

<規模・形態・普請> 規模は、長軸17.6m、短軸2.7m、面積35.5㎡で、槍先形を呈する。10号切岸により防御されている。南側は削平により構築されている。2号テラスを埋めた後に、構築された可能性が高いと考えられる。普請の際の土砂は下位の13号曲輪の普請に利用されたものと考えられる。作事の痕跡は検出されなかった。埋土は黒褐色土が主体となって構成されている。

遺物 (第90図 写真図版10)

<出土状況・時期> 染付(121)が検出面から出土している。15～17C初頭と考えられる。

## 20号曲輪（連絡曲輪）

遺構（第32・82・85図 写真図版20・32）

＜位置＞調査区ⅣD 4i～ⅣD 8hグリッド、標高486.0～487.1mに位置する。

＜規模・形態＞ 規模は、長軸10.4m、短軸3.6m、面積26.0㎡を測り、木葉形を呈する。

＜普請・作事＞削平により構築されている。普請時の土砂は下位の13号曲輪の構築に利用されたものと考えられる。4号柱穴列を伴う。曲輪の規模が小さいことから主郭と22号曲輪の連絡的機能を持った曲輪と考えられる。4号柱穴列を柵列と断定しうる資料は得られなかった。＜埋土＞表土は浅く小礫を含む黒褐色土が主体となって構成されている。また、現地性のない焼土塊が検出された。

遺物（第149・116図 写真図版61・67）

＜出土状況・時期＞小札（262）、漆塗椀（399）が出土している。15～17C初頭と考えられる。

## 21号曲輪（連絡曲輪）

遺構（第30・82・85図 写真図版20・32）

＜位置＞調査区ⅣD 4i～ⅣE8aグリッド、標高487.9～489.6mに位置する。

＜規模・形態＞ 規模は、長軸16.6m、短軸2.5m、面積29.2㎡を測り、不整形を呈する。北側は通路状の傾斜地で18号曲輪に続く。整地層下の地山直上から6号焼土遺構が検出されたが、拡幅などの改築跡は検出されなかった。22号曲輪と16号曲輪との比高差はそれぞれ1.6mと3.6mを測る。

＜普請・作事＞曲輪西側の下場は削平によって構築されているが東側は盛土により構築されている。作事の痕跡は検出されなかった。＜埋土＞ 黒褐色土が主体となって構成されている。また、現地性のない焼土塊が東側の曲輪肩から検出された。

遺物（第87・116図・写真図版8・9・67）

＜出土状況＞青磁（18）、白磁（31）、骨角器（400）が検出面から出土している。

＜時期＞ 遺物から15～16世紀と考えられる。

## 22号曲輪（物見曲輪）

遺構（第32・33・82・85図 写真図版20・32）

＜位置＞調査区ⅣD 6 i～ⅣD 7 jグリッドに位置する。標高492.1～493.4mに位置する。

＜規模・形態・普請＞ 規模は、長軸13.0m、短軸10.8m、面積33.8㎡で、不正な円形を呈する。尾根を削平して構築されている。曲輪中央には円形を呈する微高地（2.8×3.2m）が検出された。

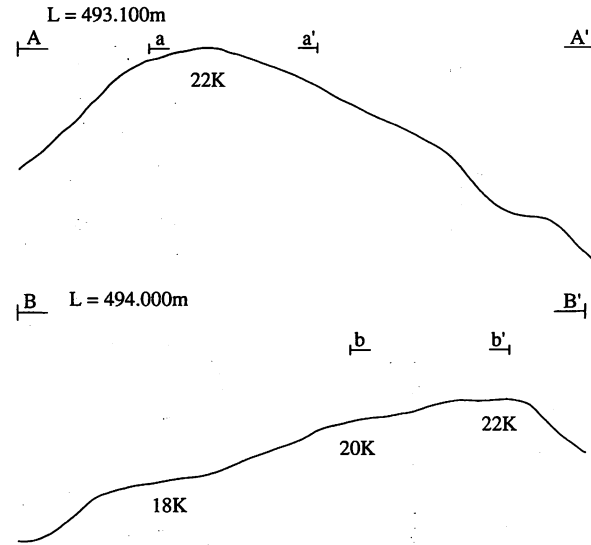
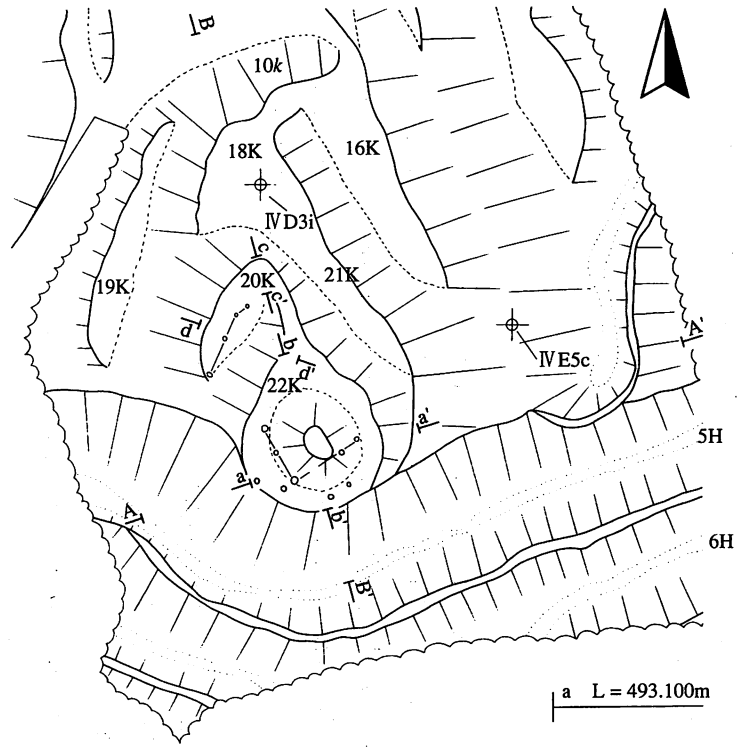
＜普請・作事＞削平により構築されている。微高地を取り囲むように5号柱穴列と土坑4基が検出された。22号曲輪は調査区内では最も標高が高く眺望も効くため5号柱穴列は物見櫓台跡の可能性も考えられるが、完全に対応する柱穴は検出されなかった。＜埋土＞ 表土は薄く黒褐色土が主体となって構成されている。

遺物（第88図・写真図版9）

＜出土状況＞ 白磁（33・49・50）が検出面から出土している。

＜時期＞ 遺物から15～17世紀初頭と考えられる。

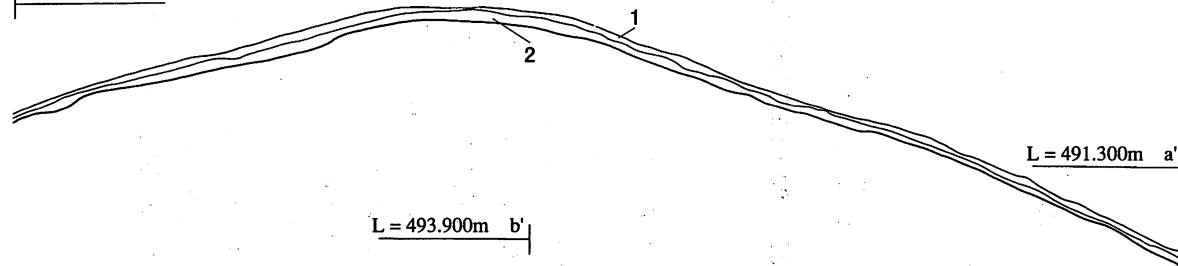
第32図 20・22号曲輪(1)



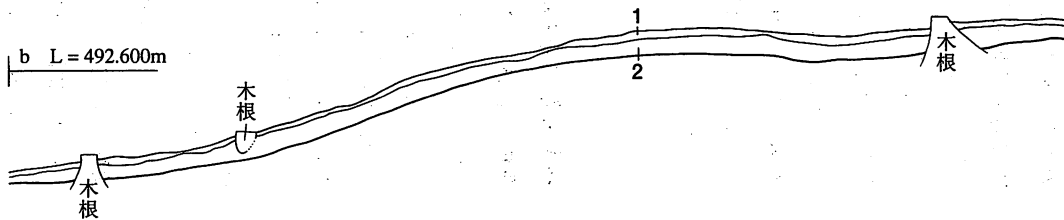
0 1:600 10m

- 1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性…小 しまり…なし
- 2. 10YR4/4 褐色土 粘性…小 しまり…ややあり 小礫等10%含む

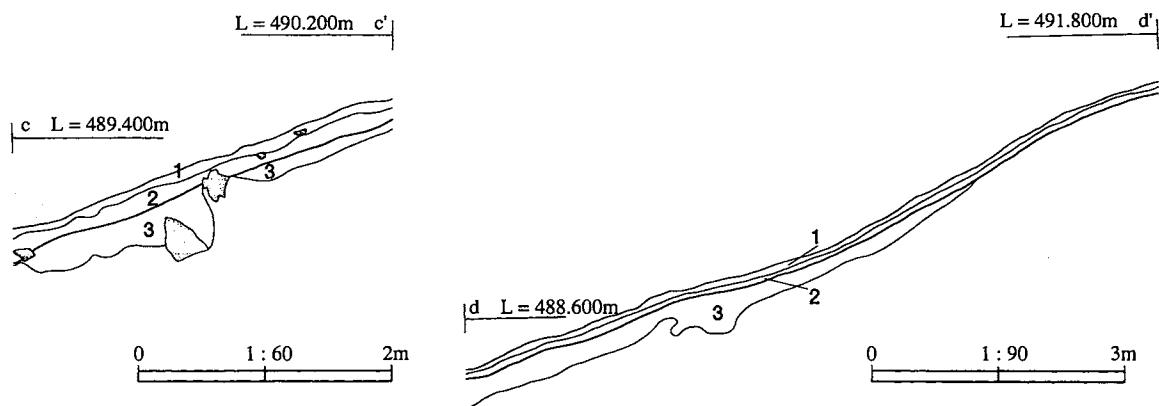
a L = 493.100m



b L = 492.600m



0 1:90 3m



第33図 20・22号曲輪 (2)

1. 10YR2/3 暗褐色土 粘性…小 しまり…あり
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 粘性…小 しまり…ややあり 礫少量含
3. 10YR4/4 褐色土 粘性…小 しまり…ややあり

### 23号曲輪

遺構 (第34・82図 写真図版21)

<位置>調査区ⅢE 2 e～ⅣE 2 cグリッド、標高460.9～474.3mに位置する。

<規模・形態・埋土> 規模は、長軸57.7m、短軸5.1m、面積176.1㎡を測る帯状の曲輪である。主郭の南東側8号堀の北側から主郭東辺に平行し、北東部は緩やかに湾曲する地山面に沿って25号曲輪と27号曲輪同様に北東方向に転向する。25～27号曲輪の北端を登る敵に対しては23号曲輪の南端部が横矢掛けの位置にあり主郭直下の最後の防御施設である。主郭東側との比高差は7.3～8.6mを測る。

<普請・作事>主郭及び10号切岸を削平した土砂を旧表土上に盛って構築されている。下段の2ヶ所の曲輪(25号・27号)とともに東側の谷からの侵入に対する三重にわたる防御施設の最上段にある。表土は薄く黒褐色土が主体となって構成されている。

遺物 (第93・103・110図 写真図版7・10・61・63)

<出土状況・時期>染付(91・95)、天目茶碗(156・157)、釘(238)、石臼(309)等が検出面から出土している。15～17世紀初頭と考えられる。

### 24号曲輪 (帯曲輪)

遺構 (第35・82図 写真図版22)

<位置>調査区ⅡD 9 d～ⅢE 4 bグリッド、標高467.5～468.9mに位置する。

<規模・形態・方向> ⅡD 1 g～ⅢD 4 a付近は重機により攪乱を受けており正確な形状は把握できないが、帯状を呈すると考えられる。検出された規模は、長軸51m、短軸(3.0)m、面積(186.9)㎡を測る。主郭一体の北から北東側防備のために普請された曲輪で、西端は尾根上の7号曲輪への連絡的機能を持っていたと考えられる。9号切岸を挟んだ10号曲輪との比高差は6.1mを測り、北側は鉄道防備林内の断崖へと続く。

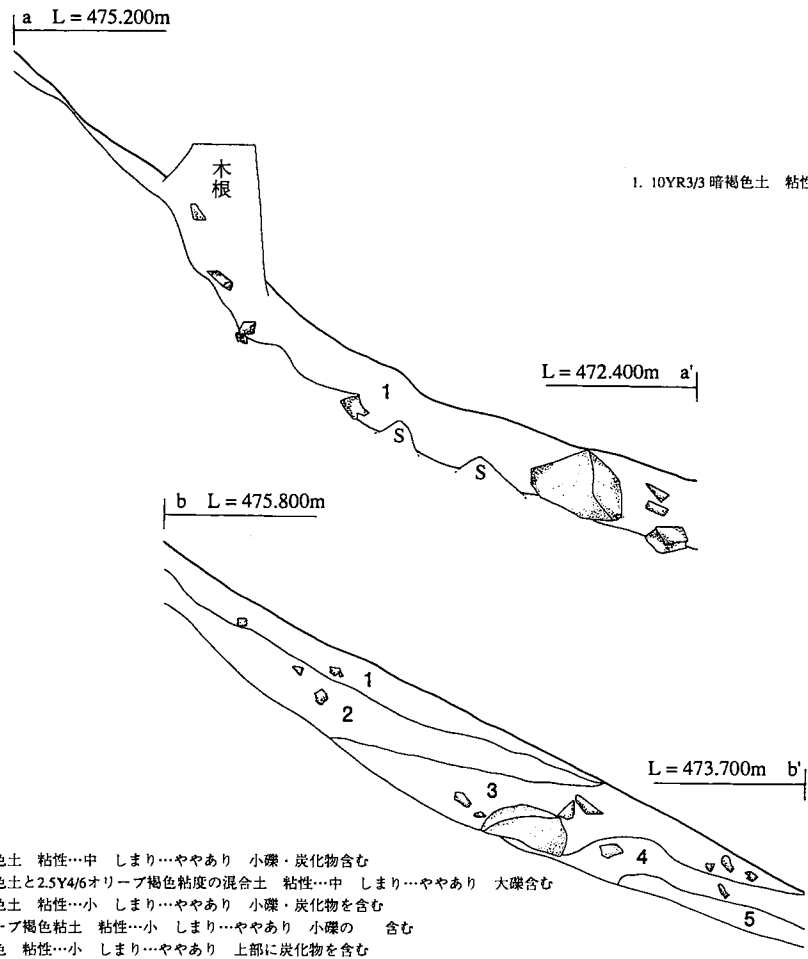
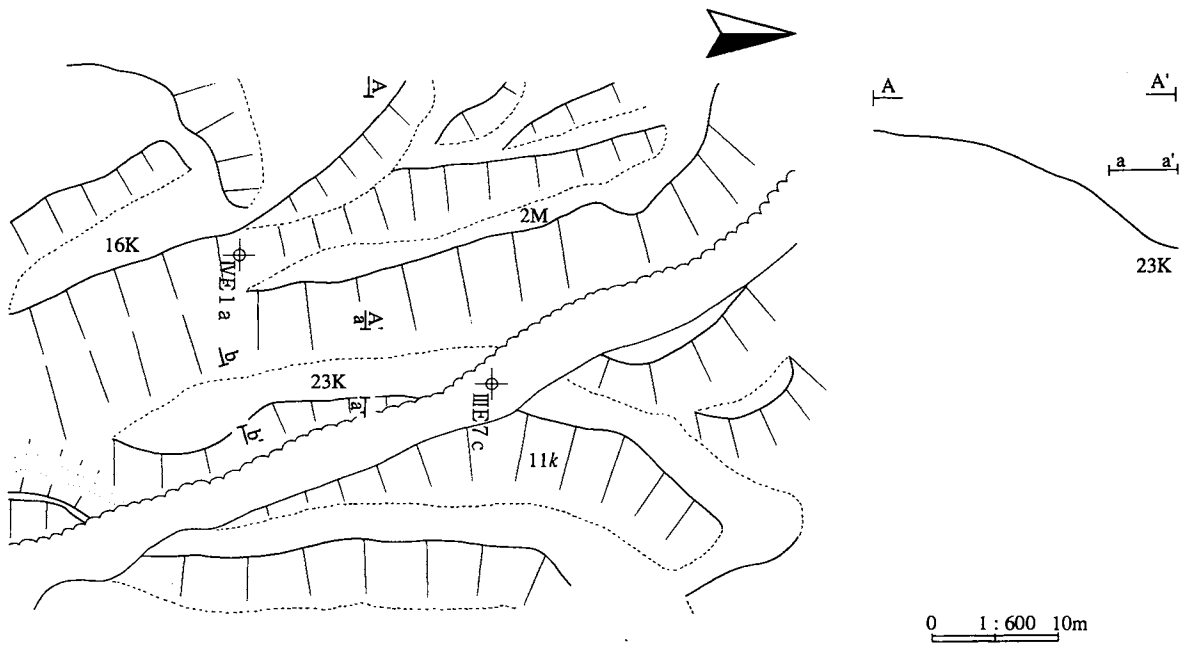
<普請・作事>削平により構築され改築、作事の痕跡は検出されなかった。

<埋土> 黒褐色土が主体となって構成されている。

遺物 (第88・97・104・105図 写真図版54・58・62)

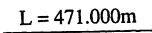
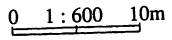
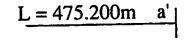
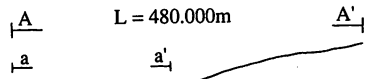
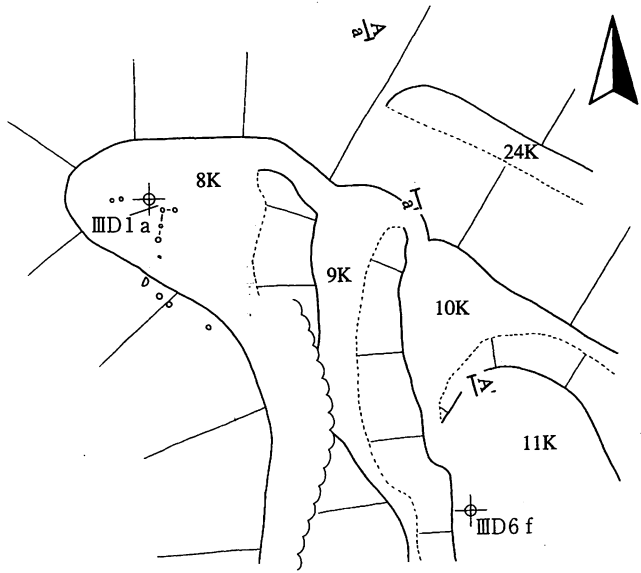
<出土状況>染付(88)、古銭(206)、鐺(273)、火箸(245)等が出土している。

<時期> 遺物から15～17世紀初頭と考えられる。

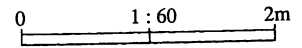
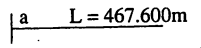


1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性…中 しまり…ややあり 小礫・炭化物含む
2. 10YR2/3 黒褐色土と2.5Y4/6オリブ褐色粘度の混合土 粘性…中 しまり…ややあり 大礫含む
3. 10YR2/3 黒褐色土 粘性…小 しまり…ややあり 小礫・炭化物を含む
4. 10YR4/4 オリブ褐色粘土 粘性…小 しまり…ややあり 小礫の 含む
5. 10YR2/3 黒褐色 粘性…小 しまり…ややあり 上部に炭化物を含む

第34図 23号曲輪



1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性…小 しまり…なし
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 粘性…小 しまり…あり
3. 10YR4/4 褐色土 粘性…小 しまり…あり 植根多し



第35図 24号曲輪・8号切岸

## 25号曲輪（帯曲輪）

遺構（第36・37図 写真図版21・22）

＜位置・規模＞調査区ⅢE3e～ⅣE2eグリッド、標高455.5～470.9mに位置する。規模は、長軸49.7m、短軸5.3m、面積169.7㎡で、帯状の曲輪である。南部はⅣE2eグリッドで重機により攪乱されているが、この攪乱部で8号堀と7号土塁は25号曲輪に繋がっていたと考えられる。下位の27号曲輪もほぼ同様の構造・機能を持つことから25号曲輪・27号曲輪・23号曲輪が東側の三重の防御施設となっている。23号曲輪と27号曲輪との比高差はそれぞれ、6.1～5.2m、6.7～5.0mを測る。26号曲輪と8号堀の北側を埋めて構築されている。

遺物（写真図版7・8・55）

＜出土状況・時期＞ 青磁（9）、染付（86・117）、天目茶碗（160）が検出面から出土している。16世紀後半～17世紀初頭と考えられる。

## 26号曲輪（腰曲輪）

遺構（第86図 写真図版31）

＜位置＞調査区ⅢE4g～ⅣE3fグリッド、標高454.7～468.2mに位置する。

＜規模・形態・方向＞ 27号曲輪埋土の確認トレンチ調査から検出された。南部はトレンチにより消失している。検出された規模は、長軸（9.6）m、短軸5.5m、面積（43.5）㎡を測り、不整形を呈する。25号曲輪整地層下の8号堀はⅢE4eグリッド消失し、これに付随して構築された7号土塁が26号曲輪に続く。8号堀・7号土塁と同時期に構築され、その後25号曲輪普請時に埋められたものと考えられる。

＜普請・作事＞ 削平により構築されている。作事の痕跡は検出されなかった。遺物は検出されていない。

＜時期＞ 15～16世紀前半と考えられる。

## 11号切岸

遺構（第36・37図 写真図版21）

＜位置＞調査区ⅣE2c～ⅢE3eグリッド、標高458.5～474.3m、23号曲輪と25号曲輪の中間に位置する。

＜規模・普請＞北東側は13号切岸南側に達し、南側はⅣE3dグリッドで8号堀と接する。比高差は5.2～6.1m、ⅢE4dグリッド付近の傾斜角度は40°に達する。削平により構築され、15～17世紀初頭と考えられる。

遺物（第90・91・108図 写真図版7・9・10・64）

＜出土状況＞白磁（19）、染付（94・103）、赤絵（126・127）、天目茶碗（159・162）、砥石（332）が出土している。

## 27号曲輪（帯曲輪）

遺構（第36・37図 写真図版21・22）

＜位置＞調査区ⅢE4g～ⅣE3fグリッド、標高454.7～468.2mに位置する。

＜規模・形態・方向＞ 規模は、長軸51.1m、短軸4.4m、面積130.4㎡を測り、帯状を呈する。東側に造られた最初の防御施設で、川からの比高差は54mを測る。25号曲輪との比高差は2.9～4.7mを測る。南側ⅣE2g～ⅣE5f付近は曲輪の肩から続く8号土塁が検出されており、重機により攪乱されたⅣE5f周辺には9号堀と8号土塁の起点があったと考えられる。この形態は25号曲輪とほぼ同じ構造であり、規模も殆ど同じであることから同様の機能を持つと考えられる。

〈普請・作事〉盛土により構築されている。断面から、上位の25号曲輪の普請時に9号堀が埋められ、27号曲輪も同時に普請されたと考えられる。作事の痕跡は検出されなかった。

〈埋土・時期〉褐色土が主体となって構成されている。16世紀後半～17世紀初頭と考えられる。

遺物（写真図版8）

〈出土状況〉青磁（12）が検出面から出土している。

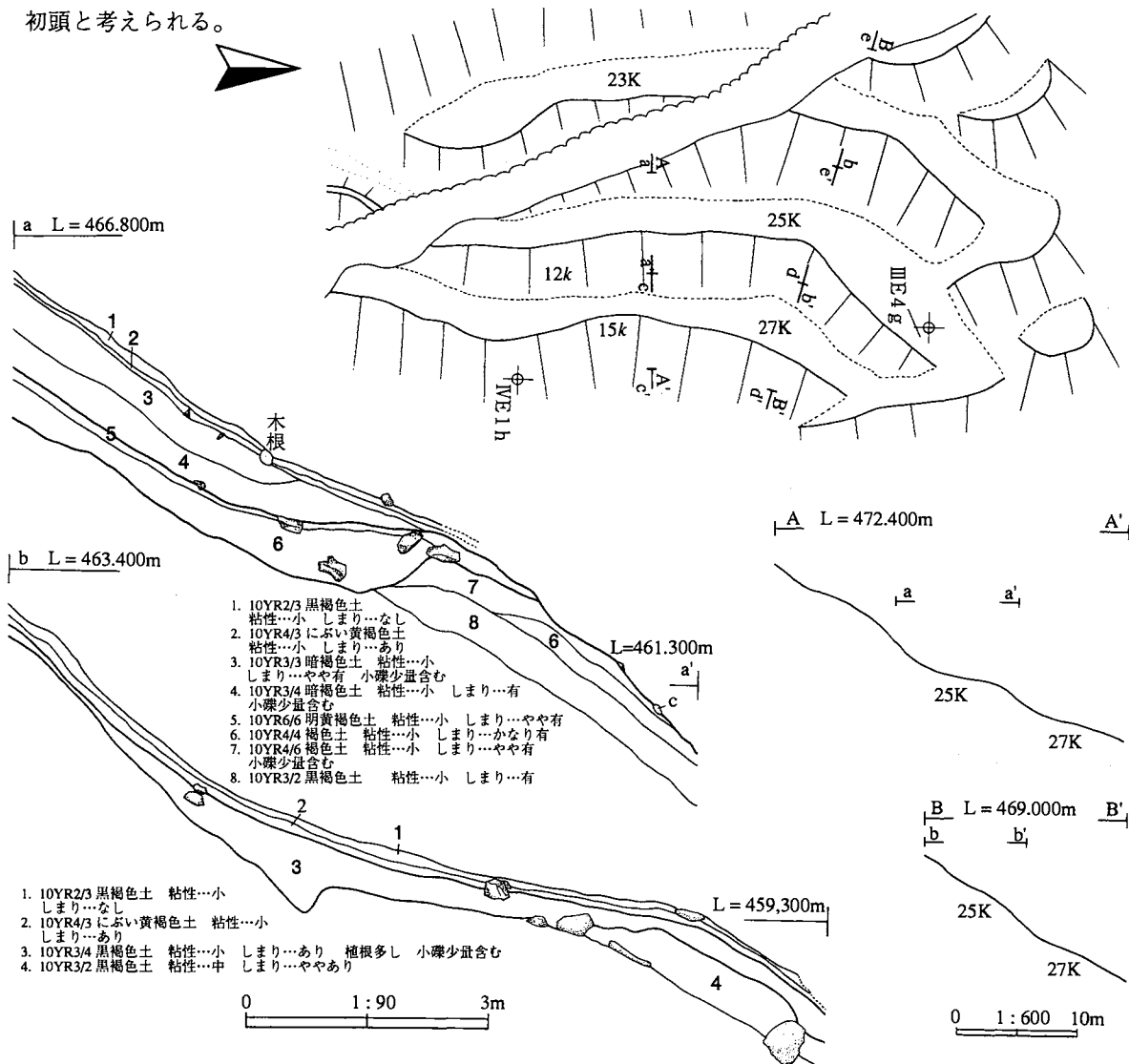
### 12号切岸

遺構（第36・37・82図 写真図版21）

〈位置〉調査区ⅢE 4 g～ⅣE 2 fグリッド、標高468.0～454.1m、25号曲輪と27号曲輪の間に位置する。

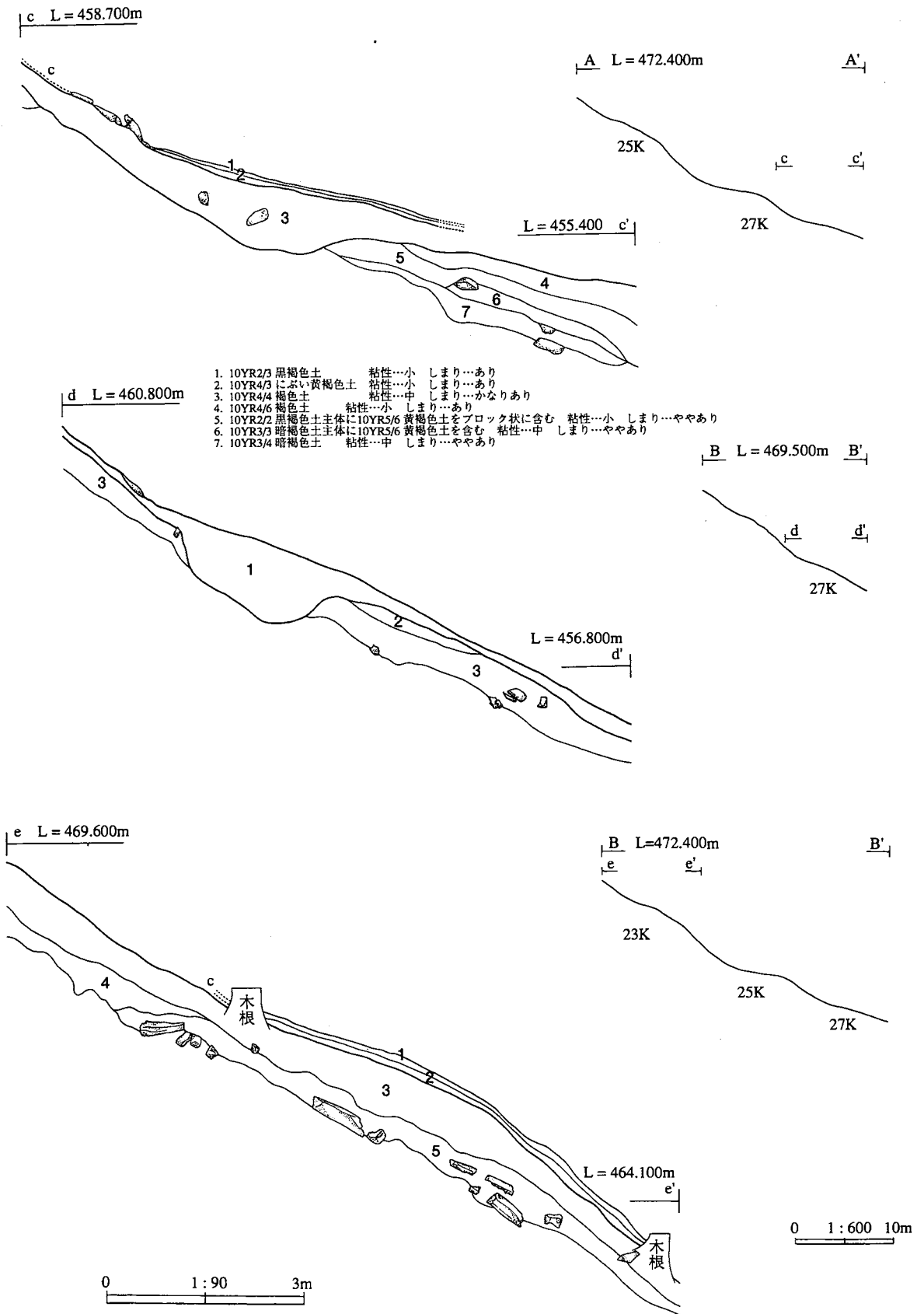
〈規模・普請〉北東側端のⅢE 4 g～ⅢE 4 hグリッド付近は傾斜が緩み25号曲輪と27号曲輪の通路として使われ、調査区外の東側の谷には虎口があったものと考えられる。南西側はⅣE 2 eグリッドで攪乱を受けているが9号堀の基部に達していたと考えられる。比高差は5.0～6.7m、最大傾斜角度は35°を測る。作事の痕跡は検出されなかった。

〈埋土・出土状況・時期〉暗褐色土が主体となって構成されている。遺物は出土していない。15～17世紀初頭と考えられる。



第36図 25号・27号曲輪、11号・12号切岸（1）





第37図 25号・27号曲輪、11号・12号切岸(2)

## 28号曲輪（腰曲輪）

遺構（第38・39・82図 写真図版22）

＜位置＞調査区ⅢE 2 b～ⅢE 3 cグリッド、標高464.9～465.1 mに位置する。

＜規模・形態＞

4号曲輪と28号曲輪の間に配備された小曲輪である。規模は、長軸8.5 m、短軸1.6 m、面積18.9 m<sup>2</sup>を測り、三日月形を呈する。主郭の北東方向にあり、下位の23号曲輪と25号曲輪に対しては横矢掛けの位置にある。また、これらの曲輪の北端部は通路状に連結されておりこれが館の東側の虎口につながると考えられるが、28号曲輪はこれを眼下に見下ろす位置にあり虎口方向に対し正面を防備する機能を持っていたと考えられる。

＜普請・作事＞削平により構築されている。作事の痕跡は検出されなかった。

＜埋土＞ 黒褐色土が主体となって構成されている。

＜出土状況＞ 中国産青磁染め付けが検出面から出土している。

＜時期＞ 遺物から16世紀中頃と考えられる。

## 13号切岸

遺構（第38・39・82図 写真図版50）

＜位置・規模・普請＞調査区ⅢE 1 e～ⅢE 3 fグリッド、標高462.5～457.7 m、23号曲輪北東端と29号曲輪の間に位置する。北側は鉄道防備林内の断崖に続き南側は25号曲輪の北西辺に達する。比高差は4.8 m、傾斜角度は43°を測る。削平により構築されている。作事の痕跡は検出されなかった。

＜埋土・出土状況・時期＞ 黒色土が主体となって構成されている。遺物は出土していない。15～17世紀初頭と考えられる。

## 29号曲輪（腰曲輪）

遺構（第38・39・82図 写真図版22）

＜位置＞調査区ⅢE 1 f～ⅢE 2 gグリッド、標高462.5～456.4 mに位置する。

＜規模・形態＞ 規模は、長軸7.3 m、短軸3.9 m、面積27.7 m<sup>2</sup>を測り、不整形台形を呈する。曲輪北側は鉄道防備林内の傾斜角度約50～60°の断崖に続く。30号曲輪との比高差は9.8 mを測る。調査区東側の谷から侵入する敵に対しては横矢掛けの位置にあり、また25号曲輪と27号曲輪に対しても同様の位置にあり、9号集石も配備されている。館の東側の虎口も谷筋付近と考えられることから、29号曲輪は西側の1号曲輪と同様に谷筋から侵入する敵と虎口周辺の防御機能を下位の30号曲輪とともに有していたと考えられる。

＜普請・作事＞削平により構築されている。作事の痕跡は検出されなかった。

＜埋土＞ 黒色土が主体となって構成されている。

＜出土状況・時期＞遺物は出土していない。遺物から15～17世紀初頭と考えられる。

## 14号切岸

遺構（第38・39・82図 写真図版50）

＜位置・規模・時期＞調査区ⅢE 1 g～ⅢE 2 iグリッド、標高446.6～456.4 mに位置する。29号曲輪と30号曲輪の間に構築され、比高差9.8 m、傾斜角は32°を測る。北側は鉄道防備林内の断崖に続く。27号曲輪の東に達する。削平により構築されている。作事の痕跡は検出されなかった。黒褐色土が主体となって構成されている。遺物は出土していない。15～17世紀初頭と考えられる。

## 15号切岸

遺構 (第38・39・82図 写真図版21・50)

<位置・規模> 調査区ⅢE 5 h～ⅣE 4 i グリッド、30号曲輪の北東から27号曲輪の東を廻り5号堀跡に達する。削平により構築されているが下部は自然傾斜を利用し調査区の東側谷筋に続いている。

遺物 (第110図 写真図版63)

<出土状況 時期> 染付 (96)、石臼 (310) が出土している。15～17世紀初頭と考えられる。

## 30号曲輪 (腰曲輪)

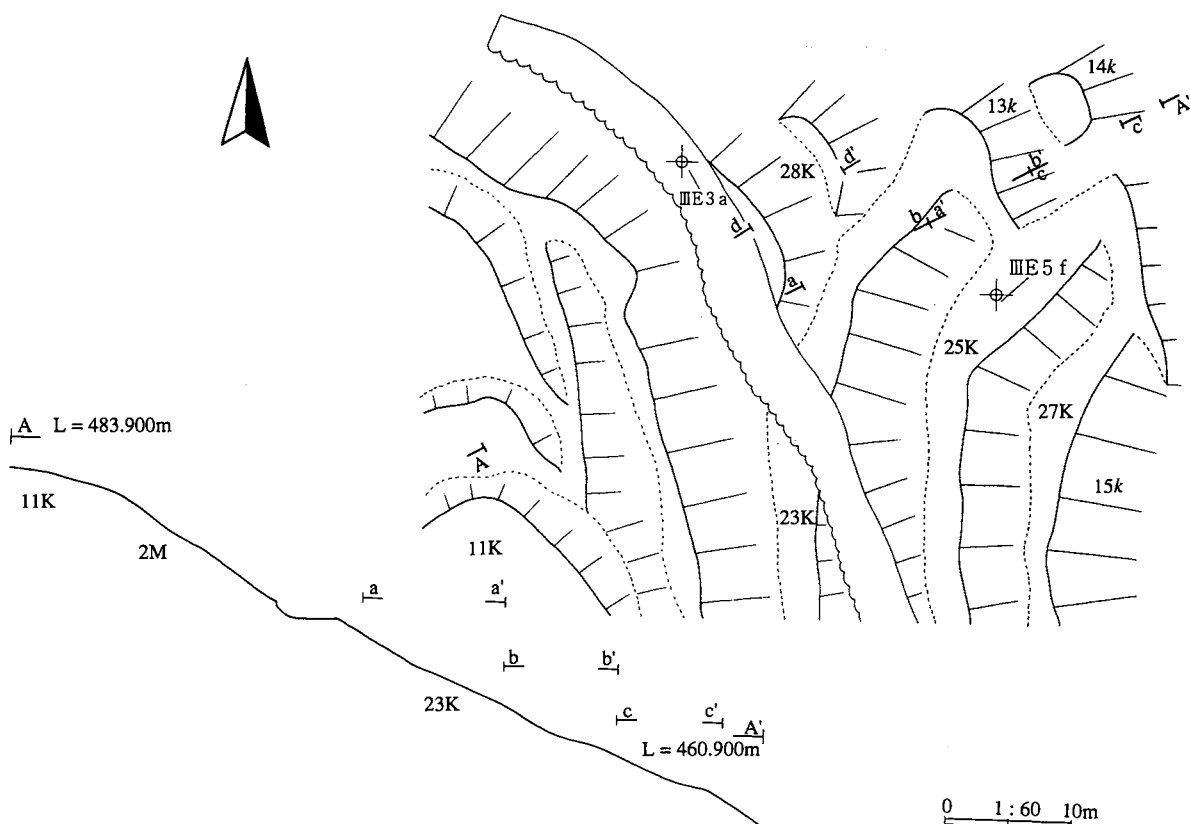
遺構 (第38・39・82図 写真図版22・50)

<位置> 調査区ⅡE 10 i～ⅢE 2 j グリッド、標高446.6～447.2mに位置する。

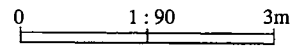
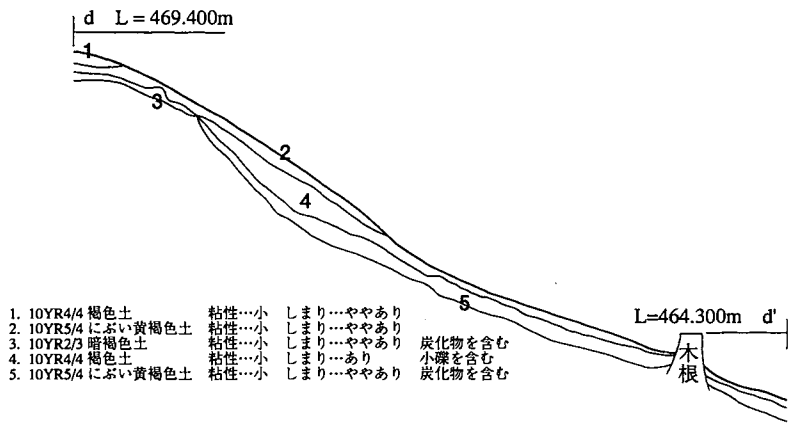
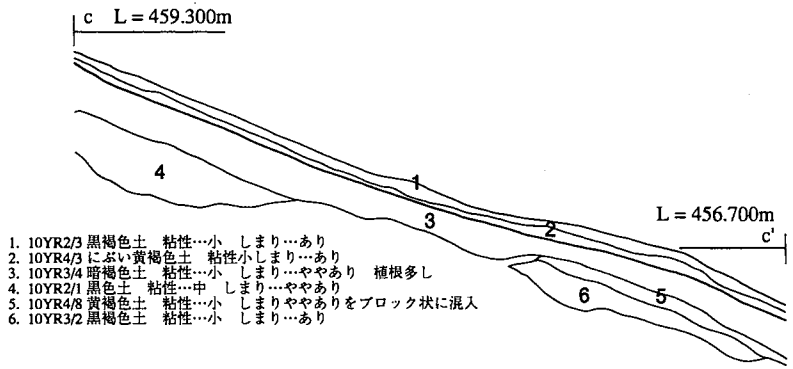
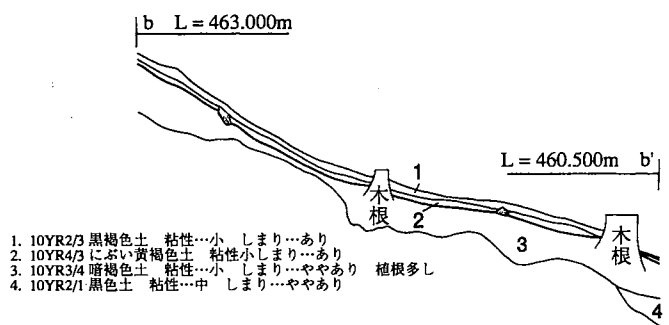
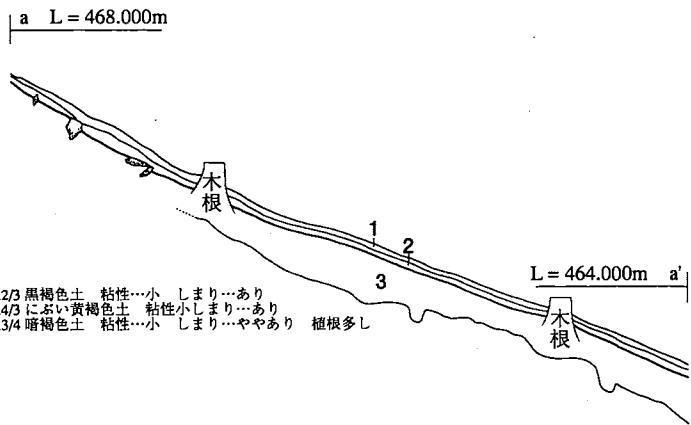
<規模・形態> 規模は、長軸9.6m、短軸2.0m、面積13.7㎡を測り、三日月形を呈する。曲輪の北側は鉄道防備林内の断崖で、東側は谷を一望する断崖に面している。谷からの敵の侵入と27号曲輪から直線的に主郭に向かう敵に対しては横矢掛けの位置に当たる。また、館の東側の虎口は30号曲輪下の谷付近と考えられるため虎口周辺の防御機能を持っていたと考えられる。谷の入り口からの比高差は約46mを測る。

<普請・作事> 削平により構築されている。作事の痕跡は、検出されなかった。

<出土状況・時期> 遺物は出土していない。15～17世紀初頭と考えられる。



第38図 28・29・30号曲輪、13・14号切岸 (1)



第39図 28・29・30号曲輪、13～14号切岸(2)

### 3. 堀跡・土塁・切岸

堀跡は9条、土塁は8基を登録し関連する切岸3ヶ所を併記した。

#### 1号堀跡

遺構（第40・82図 写真図版23・25）

＜位置＞調査区IA5 i～IA9 hグリッド、標高421.1～425.8 mに位置する。

＜規模・形態・方向＞ 規模は、尾根を巻いて長さ28.2 mにわたり検出された。南西端は重機により攪乱を受け完全に消失している。北端部は自然地形を利用しIA4 iグリッド付近で断崖に続いている。尾根から北側は縦堀状に造られ、方向はほぼ南南西―北北西に延びる。尾根から北端部の比高差は3.4 mを測る。1号土塁とともに尾根の西側最下段の防御施設で、平地からの比高差は約25 mを測る。1号切岸下部約10 m、IA6 j～IA8 i付近はより削平され傾斜が加えられている。この地点までの実効堀幅は6 m、実効法高3 mを測る。

＜普請・埋土・時期＞地山の褐色土を掘り込んで構築されている。暗褐色土が主体となって構成されている。出土遺物はない。15～17世紀初頭と考えられる。

#### 1号土塁

遺構（第40・82図 写真図版23・25）

＜位置＞調査区IA4 i～IA9 hグリッド、標高420.6～425.0 mに位置する。1号堀西側外縁に構築されている。

＜規模・形態＞ 調査区内で検出された全長は25.7 mを測る。西端は重機による攪乱のため消失している。北端は1号堀とともにIA4 iグリッドまで延びている。方向は北端部から尾根中央ではほぼ北北東―南南西で、尾根中央から南側はほぼ北―南に延びる。尾根筋の北西側からの敵の進入を防ぐために1号堀とともに構築された最下段の防塁である。

＜普請・埋土・時期＞地山褐色土を掘り込んで構築されている。1号堀を掘った際の土を敲き締めた敲き土塁である。基底幅は2.1～3.7 m、上幅0.5～0.9 m、1号堀との垂直壘壁高は0.4～1.0 mを測る。作事の痕跡は検出されなかった。第5層に黒褐色の旧表土層があり、盛土は褐色土が主体となって構成されている。遺物は検出されていない。15～17世紀初頭と考えられる。

#### 1号切岸

遺構（第40・82図 写真図版23・25）

＜位置＞調査区IA5 j～II B9 gグリッド、標高421.7～437.7 mに位置する。

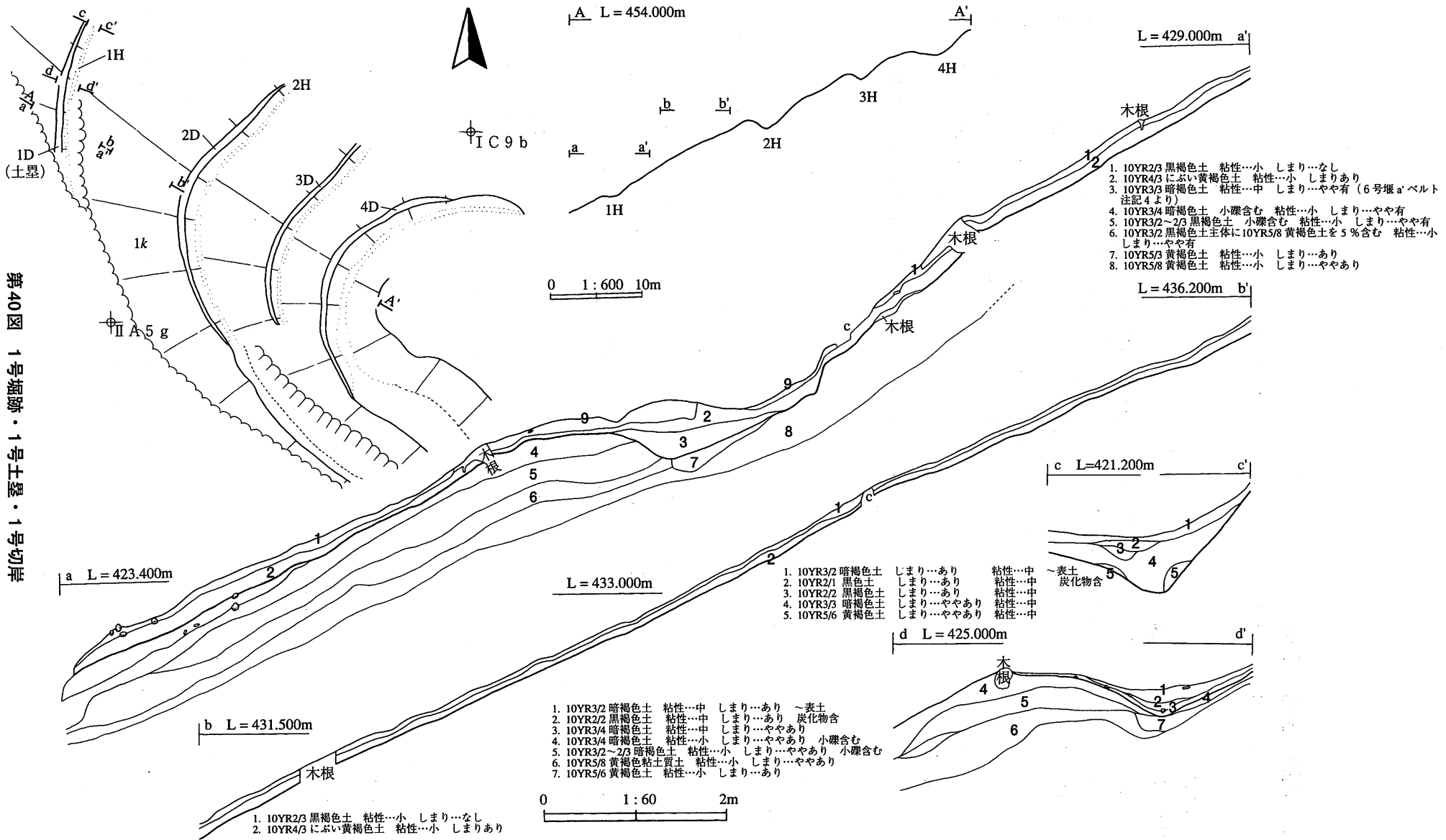
＜規模・普請＞ 1号堀と2号堀間に構築されており、この間の比高差は約15 mを測る。南西側の一部は重機により攪乱を受けている。1号堀と1号土塁より下位は自然地形がそのまま利用されており、調査区西側の谷は沢が流れる天然の水堀になっている。

＜普請＞削平により構築されているが1号堀から10 m付近はより強く削平が加えられ40°の急傾斜を呈する。上部の2号土塁までの傾斜角度は約30°を測る。傾斜の変化地点では旧表土が残存し、これより南側は傾斜はほぼ均一で40°を測り、2号土塁下に沿って南側の谷まで達する。

遺物（第99図 写真図版59）

＜出土状況＞ 鉄鏃（208）が1点出土している。

第40図 1号堀跡・1号土壘・1号切岸



## 2号堀跡

遺構（第13・41・82図 写真図版24・25）

〈位置〉調査区ⅠB7f～ⅠB10c～ⅡB5dグリッド、標高429.5～437.7mに位置する。

〈規模・形態・方向〉 規模は、尾根を巻いて長さ48.6mにわたり、2号土塁に沿って検出された。ⅠA10c～ⅠB7fグリッドの尾根筋から北側は1号堀と同様に竪堀状に普請され断崖まで延びている。南側はⅡB5c～ⅡB5dグリッドで1号曲輪に続いている。方向は、北側が北東—南西、尾根中央から南側は尾根を等高線上に巻き南西側は北西—南東に延びる。2号土塁とともに尾根筋の北西方向からの侵入する敵に対す防御施設である。

〈普請〉地山の褐色土を掘り込んで構築されている。またⅡB5d～ⅡB9fグリッドでは1号曲輪の整地層下から2号堀と2号土塁の延長部が検出され、2号堀の総延長は70.4mを測る。1号曲輪下で検出された堀の延長部は堀幅0.8～1.5mで当初検出された2号堀に比して規模が小さいため、縄張の変更に伴い改築が行われたと考えられる。3号土塁との実効堀幅は11.0m、実効法高7.0mを測る。

〈埋土・時期〉暗褐色土が主体となって構成されている。出土遺物はない。15～17世紀初頭、改築の時期は16世紀後半と考えられる。

## 2号土塁

遺構（第13・41・42・82図 写真図版24・25）

〈位置〉調査区ⅠB7e～ⅠB10b～ⅡB5cグリッド、標高429.6～437.6m、2号堀西側外縁に位置する。

〈規模・形態〉 検出された全長は50.6mを測る。北端はⅠB7fグリッド付近で断崖に達し消滅し、南端部はⅡB5cグリッド付近で1号曲輪に続いている。2号堀に沿って検出された。ⅠA10c～ⅠB7fグリッドの尾根筋から北側は1号土塁と同様に竪土塁となり断崖まで延びている。南側はⅡB5cグリッドで1号曲輪に続く。方向は、北側が北東—南西、尾根中央から南側は尾根を等高線上に巻き南西側は北西—南東に延びる。基底幅2.1～4.5m、上幅0.6～1.5m、2号堀からの最大垂直壘壁高は1.4mを測る。2号堀とともに尾根筋の北西方向からの侵入する敵に対す防壘である。

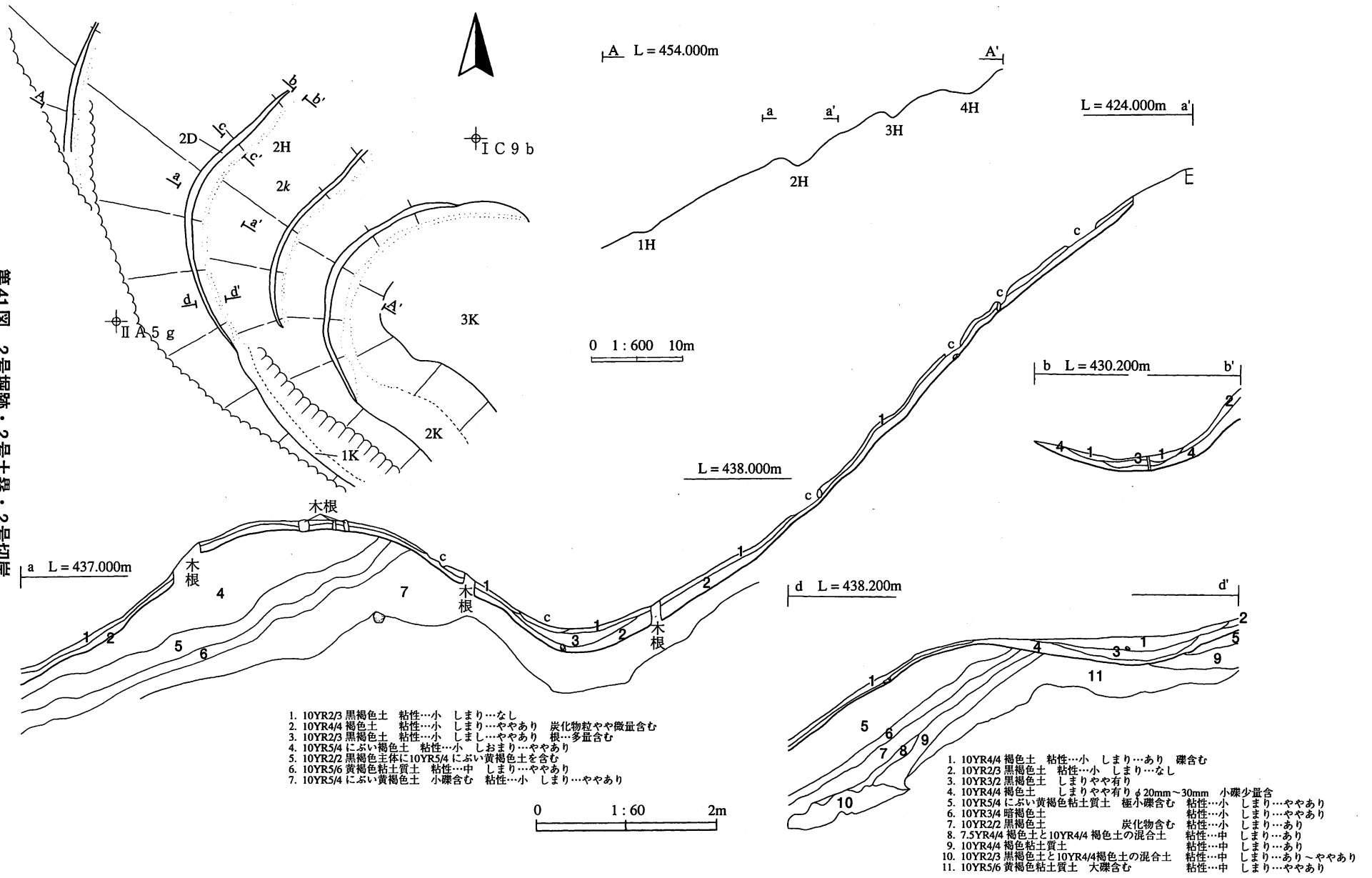
またⅡB5d～ⅡB9fグリッドでは、2号堀と同様に1号曲輪の整地層の下から2号土塁の延長部が検出され、2号土塁の総延長は72.1mを測る。1号曲輪下で検出された土塁の延長部は基底幅1.5～2.5m、上幅0.4～0.6m、垂直壘壁高は0.2～0.3mで当初検出された2号土塁に比して規模が著しく小さいため、合戦に備え改築が行われたと考えられる。

〈普請・作事〉2号堀を掘った地山褐色土を旧表土上に盛り上げた敲き土塁である。作事の痕跡は検出されなかった。

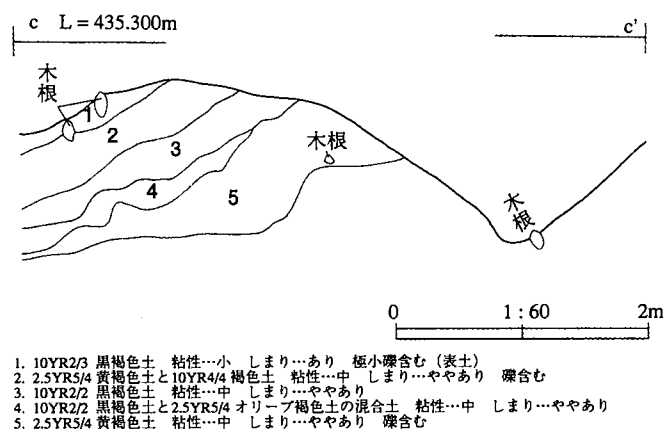
〈埋土・出土状況〉第5層に黒褐色の旧表土層があり、盛土は褐色土が主体となって構成される。遺物は検出されていない。

〈時期〉 遺物から15～17世紀初頭と考えられる。

第41図 2号堀跡・2号土壘・2号切岸







第42図 2号土塁

### 2号切岸

遺構 (第41・82図 写真図版24・25)

<位置>調査区I B 7 f ~ II B 5 d グリッド、標高430m~444mに位置する。

<規模・普請>2号堀と3号土塁間に地山を削平して普請されている。北側は鉄道防備林内続き尾根を巻いて南西側は3号土塁下に達する。尾根筋付近の実効法高は13.7mを測る。また、切岸下部の傾斜角度は40°、上部は30°を測る。傾斜の変化地点では旧表土が残存し、これより尾根南西側の切岸は最大42°に達する。

遺物 (写真図版66)

土器 (374) が出土している。

### 3号切岸

遺構 (第43・82図 写真図版25・26)

<位置>調査区I B 9 i ~ III C 5 c グリッド標高に位置する。標高438~449mに位置する。

<規模・普請>3号堀と4号土塁間に地山を削平して普請されている。北側は鉄道防備林内続き南側は尾根を巻いて4号土塁から2号曲輪の南西側からに達する。尾根筋付近の実効法高は約11m、傾斜は35°を測る。

<埋土・出土状況・時期> 暗褐色土が主体となって構成されている。15~17世紀初頭と考えられる。

遺物 (写真図版8・54・62)

青磁 (17)、染付 (125)、鍋片 (263) が出土している。

### 3号堀跡

遺構（第43・82図 写真図版25・26）

＜位置＞調査区ⅠB9h～ⅡB3e～ⅡB5eグリッド。標高437.9～444.0mの2号堀と4号堀の中間に位置する。

＜規模・形態・方向＞ 規模は、尾根を巻いて長さ26.2mにわたり検出された。北側はⅠB3eグリッドで断崖に達する。2号堀と4号堀の様に尾根の西側を帯曲輪に普請することなく下位の1号曲輪を眼下に一望する横矢掛けの位置（ⅡB5e）まで延びている。同一形態の防御施設を連続させない縄張がなされたと考えられる。北端部は1号堀・2号堀と同様に豎堀になっており尾根から北端部の比高さは6.7mを測る。また、2号堀から3号堀を見ると3号土塁が上下の部の役割を果たし見通しが利かないように普請されている。1号堀・2号堀と同様に尾根筋の北西方向から侵入する敵に対する防御施設であるとともに1号曲輪に対する防御施設と考えられる。

＜普請＞地山の褐色土を掘り込んで構築されている。4号土塁までの実効法高は8m、3号土塁と4号土塁間の実効堀幅は11mを測る。改築の跡は検出されなかった。

＜出土状況・時期＞ 出土遺物はない。実効堀幅の規模から時期は16世紀後半～17世紀初頭と考えられる。

### 3号土塁

遺構（第43・82図 写真図版25・26）

＜位置＞調査区ⅠB9ha～ⅡB3e～ⅡB5eグリッド、標高429.6～445.0mに位置する。平行する3号堀の西側外縁に構築されている。

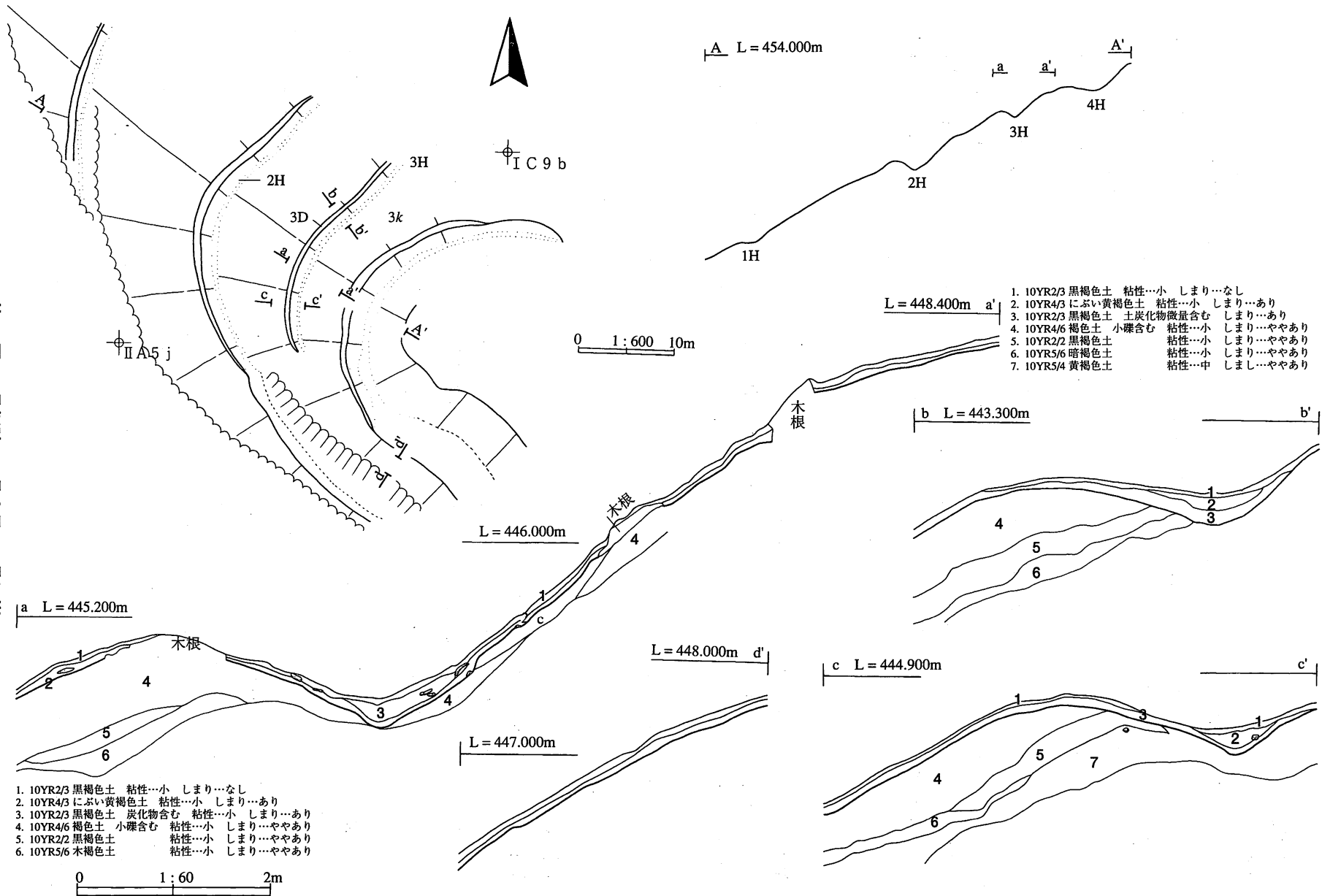
＜規模・形態＞ 検出された全長は38mを測る。尾根から北側は豎土塁となり3号堀と同様に断崖に達している。この間の比高差は6.7mを測る。方向はⅠB9hからⅡB3eが南西―北東、ⅡB3e～ⅡB5eはほぼ南北に延びる。また、3号堀との垂直塁壁高は0.8mを測る。3号堀とともに北西側からの敵の進入を防ぐために構築された防塁であるとともに、南側下位にある1号曲輪に対する防御施設であると考えられる。3号堀と3号切岸を挟んだ4号土塁までの実効堀幅は11mを測る。

＜普請・作事＞3号堀を掘った地山褐色土を旧表土上に盛り上げた敷き土塁である。最大基底幅は3.4m、最大上幅は1.2mを測る。柵列等の作事の痕跡は検出されなかった。

＜埋土・遺物出土状況＞盛土は地山の褐色土が主体となって構成されている。遺物は検出されていない。

＜時期＞実効堀幅の規模から16世紀後半～17初頭と考えられる。

第43図 3号烟跡・3号土塁・3号切岸



- 1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性…小 しまり…なし
- 2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 粘性…小 しまり…あり
- 3. 10YR2/3 黒褐色土 土炭化物微量含む しまり…あり
- 4. 10YR4/6 褐色土 小礫含む 粘性…小 しまり…ややあり
- 5. 10YR2/2 黒褐色土 粘性…小 しまり…ややあり
- 6. 10YR5/6 暗褐色土 粘性…小 しまり…ややあり
- 7. 10YR5/4 黄褐色土 粘性…中 しまり…ややあり

- 1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性…小 しまり…なし
- 2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 粘性…小 しまり…あり
- 3. 10YR2/3 黒褐色土 炭化物含む 粘性…小 しまり…あり
- 4. 10YR4/6 褐色土 小礫含む 粘性…小 しまり…ややあり
- 5. 10YR2/2 黒褐色土 粘性…小 しまり…ややあり
- 6. 10YR5/6 木褐色土 粘性…小 しまり…ややあり

#### 4号堀跡

遺構 (第44・82図 写真図版25・27)

<位置>調査区ⅡC1c～ⅡB3g～ⅢC91bグリッド、標高444.3～450.6mに位置する。

<規模・形態・方向> 規模は、尾根を巻いて長さ50mにわたり検出された。同じ調査区西側に位置する下位の1～3号堀とは北端部の形態が異なり、上段の3号曲輪を防御するために北端部は尾根を巻いてⅡC2cグリッド付近の断崖まで続いている。また南側はⅡB7hグリッド付近で2号曲輪に続いている。4号土塁とともに尾根筋の北西方向から侵入する敵に対す最大の防御施設である。平地からの比高差は約50mを測る。

<普請>地山の褐色土を掘り込んで構築されている。4号堀を挟んだ4号土塁と3号曲輪間の尾根付近の実効堀幅は11.0m、実効法高7.0mを測る。また、4号堀に続く2号曲輪は断面から4号堀と4号土塁を埋めて構築されており、ⅡB7h～ⅡC1aグリッドの2号曲輪下から検出された堀の長さは19.8m、実効堀幅は9～18mを測る。4号堀は堀底の幅が1.4～2.1mと1号～3号堀に比して際だって大きく通路や帯曲輪の役割も果たしていたと考えられる。

<埋土> 褐色土が主体となって構成されている。

遺物 (第99・100・114・115図 写真図版59・66)

<出土状況> 鉛の弾丸(226)、土器 (358・359) が検出面から出土している。2号曲輪下に埋没していたⅡB8jグリッドから釘 (267)、楔 (272)、鉄製の弾丸(271)、土器 (382～385・389～391) が出土している。

<時期> 15～17世紀初頭、改築の時は実効堀幅等の規模から16世紀後半と考えられる。

#### 4号土塁

遺構 (第14・44・82図 写真図版25・27)

<位置>調査区ⅡC1a～ⅡB3f～ⅡB7gグリッド、標高444.3～448.8m、4号堀の外縁に位置する。

<規模・形態> 検出された全長は50mを測る。北端はⅡC1aグリッド付近で断崖に達し消滅し、南端部はⅡB7gグリッド付近で2号曲輪に続いている。4号堀とともに北西側からの敵の進入を防ぐために構築された防壁土塁である。

<普請・作事>4号堀を掘った地山褐色土を旧表土上に盛り上げた敲き土塁である。基底幅は3.5～5.0m、上幅は0.6～1.1mを測る。4号堀と同様に2号曲輪下から4号土塁の南端部が19.8mにわたり検出された。またⅡB7g～ⅡB7hグリッド付近は、土塁の拡幅の痕跡が検出され、4号堀を挟んだ3号曲輪までの実効堀幅は改築により7mから9mに拡幅されている。柵列等の作事の痕跡はない。

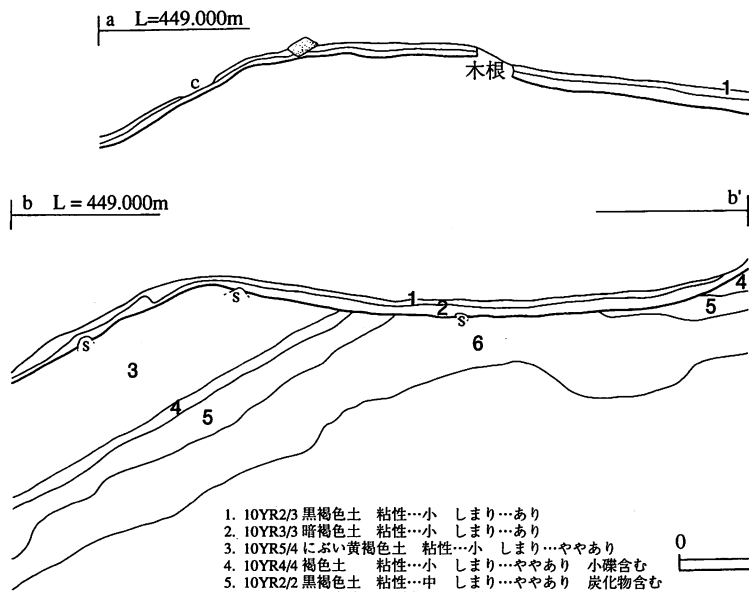
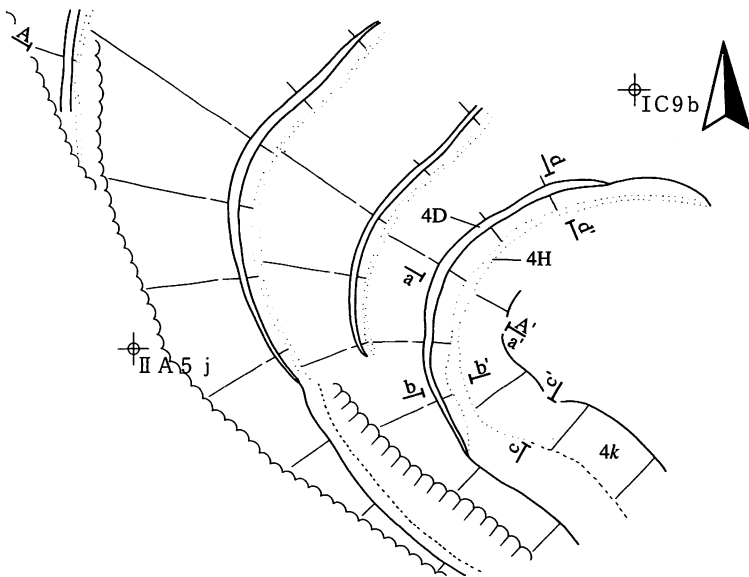
<埋土・出土状況>ⅡB7gグリッドから北側は単純な敲き土塁を呈するが、ⅡB7g～ⅡB8iグリッドにおける土塁断面には3層にわたって敲き締められた痕跡が検出された。また、拡幅部分も同様に3層にわたり構築されている。このような周到な土塁の普請跡が検出されたのは数メートルの区間だけである。この区域は地山が湾曲し小規模な谷状を呈しているため土砂の崩落を防ぐ普請が行われたものと考えられる。

遺物 (第89図 写真図版54)

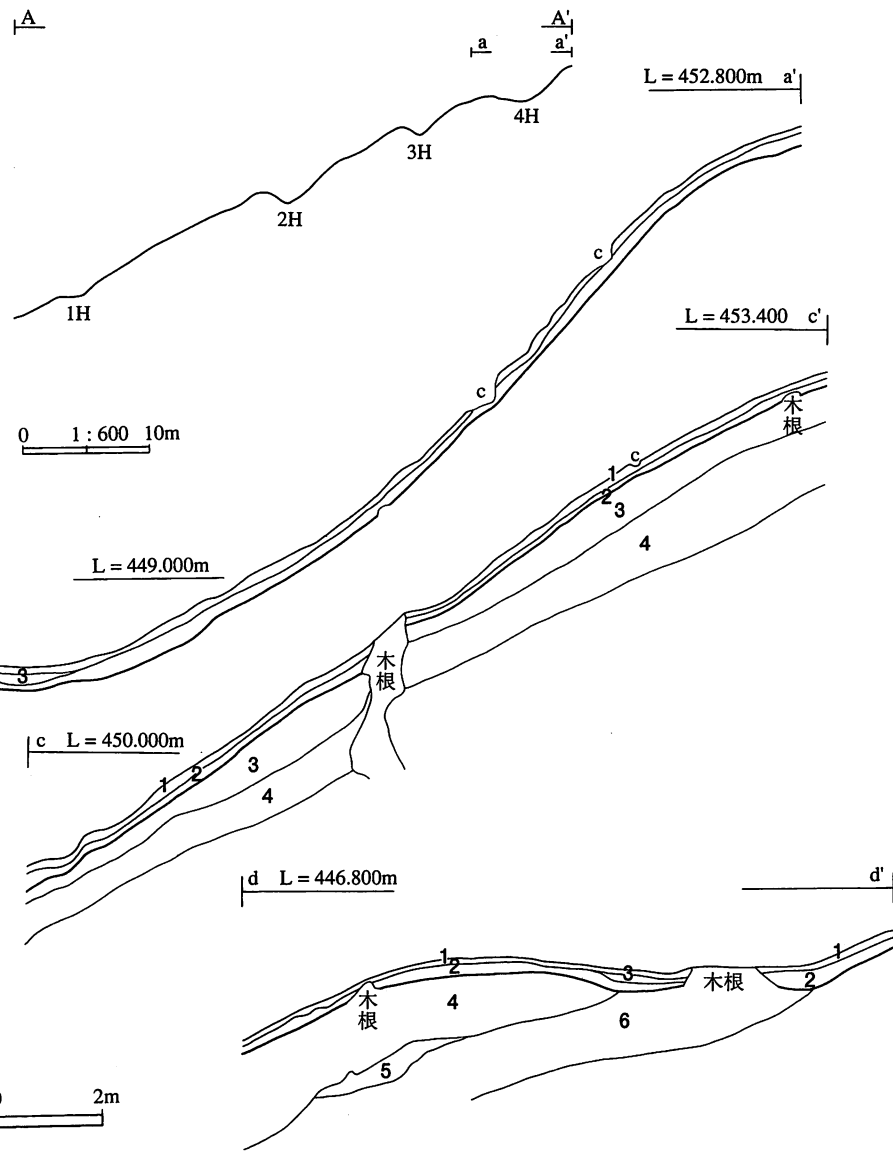
<出土状況>染付角皿 (58)

<時期> 15～17世紀初頭、改築の時期は実効堀幅から16世紀後半と考えられる。

第44図 4号堀跡・4号土壁・4号切岸



1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性…小 しまり…あり
2. 10YR3/3 暗褐色土 粘性…小 しまり…あり
3. 10YR5/4 にぶい黄褐色土 粘性…小 しまり…ややあり
4. 10YR4/4 褐色土 粘性…小 しまり…ややあり 小礫含む
5. 10YR2/2 黒褐色土 粘性…中 しまり…ややあり 炭化物含む
6. 10YR4/4~3/4 褐色から暗褐色土 粘性…小 しまり…ややあり



## 5号堀跡（竪堀）

遺構（第45・46・82・86図 写真図版28・29・50）

〈位置〉調査区ⅣD 5 e～ⅣD 10 j～ⅣF 3 aグリッド、標高456.6～483.0に位置する。

〈規模・形態・方向〉 規模は、最大実効法高7.3 m、最大実効堀幅9 m、検出された全長は85.4 mを測る。断面形はV字形の薬研堀である。空堀で、堀切続きの竪堀である。尾根の西側ⅣD 8 dグリッドから東端までは5号土塁・6号堀が平行する二重竪堀をなす。方向は、尾根の西側は西北西―東南東、尾根の中央で屈曲し東は南南西―東北東に延び東端は谷筋に達する。ⅣD 5 e～ⅣD 5 cグリッド付近で重機の攪乱により消失しているが、13号曲輪に繋がるものと考えられる。尾根付近の22号曲輪南側との垂直壘壁高は4.6 m、実効法高は7.3 m、傾斜角41°を測る。また、南側5号土塁との垂直壘壁高は1.4～2.0 m、実効法高は3.4 m、法面傾斜角度34°を測る。また、東斜面ⅣE 7 f～ⅣE 4 jグリッドにおいて断面から堀改築の跡が検出された。改築前の堀幅は1.1 m、深さ0.8 mを測り、断面形はV字形を呈する。

6・7号堀と同様に尾根南側からの敵の侵入を防ぐ機能を有し、調査区外の竪堀とともに四重に配置された竪堀の最も内郭側の堀である。東側と西側の平均傾斜角度はそれぞれ30°、20°を測る。

〈普請〉尾根から西斜面にかけては風化したスレートの岩盤、東側は褐色土層を掘り込んで構築されている。5号堀は6号堀とともに同時期に改築が行われ、5号土塁もこの際に普請された可能性が考えられる。尾根から西側ではこれらの痕跡が検出されていない。初期の5号堀埋土は自然堆積を呈さず、5号土塁と15号切岸と同じ土により一気に埋没していることから、館が普請された初期の5号堀と6号堀は東斜面に単純に配置された竪堀であり、その後堀切続きの竪堀に改築された可能性も考えられる。

〈埋土〉 自然堆積は稀薄で層厚は約25 cm、暗褐色土が主体となって構成されている。また、改築前の堀埋土は礫混じりの褐色土により構成される。

〈出土状況・時期〉 遺物は検出されていない。15～17世紀初頭と考えられるが、改築の時期が2号曲輪普請と同じ16世紀後半の可能性が高い。

## 5号土塁（竪土塁）

遺構（第45・46・82・86図 写真図版28・29・50）

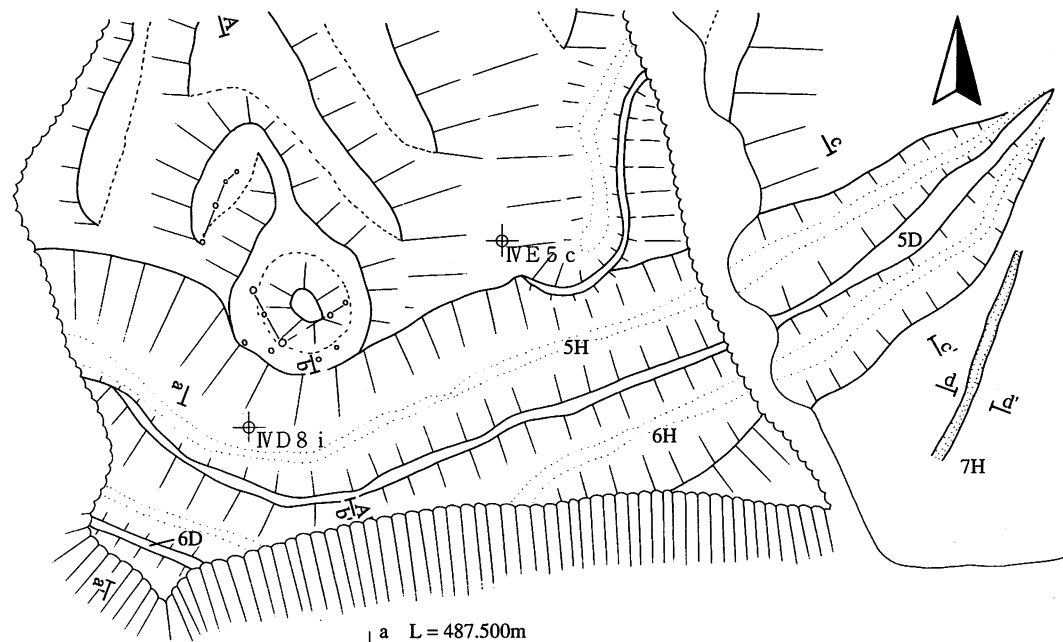
〈位置〉調査区ⅣD 7 f 6～ⅣD 10 j～ⅣF 3 aグリッド標高456.8～490.4 mに位置する。平行する5・6号堀の中間に位置する。

〈規模・形態〉検出された全長は86.3 mを測る。西端は重機による攪乱のため消失しているが、ⅣD 5 c付近で13号曲輪に繋がると考えられる。東端は5号堀・6号堀とともに谷筋まで達している。方向は西斜面ではほぼ北西―南東で尾根中央で屈曲し東側は西南西から東北東尾根に延びる。5号堀と6号堀とともに南側からの敵の進入を防ぐ役割を持つ竪土塁である。基底幅は6.0～8.4 m、上幅0.7～2.5 m、尾根付近の5号堀と6号堀との最大実効法高は、それぞれ3.4 mと5.6 mを測る。5号堀と6号堀との垂直壘壁高はそれぞれ、2.5～3.6 mと2.0～1.4 mを測る。

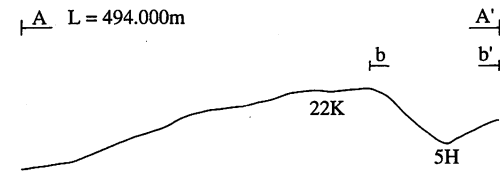
〈普請〉西側は風化スレートの岩盤を削りだして構築されているが、尾根中央から東側は5号堀と6号堀を掘り込んだ礫混じりの褐色土を盛って敲き締めた敲き土塁である。

〈出土状況・時期〉 遺物は検出されていない。16世紀後半から17世紀初頭と考えられる。

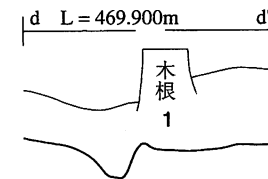
第45図 5・6・7号堀跡、5・6号土塁(1)



A L = 494.000m



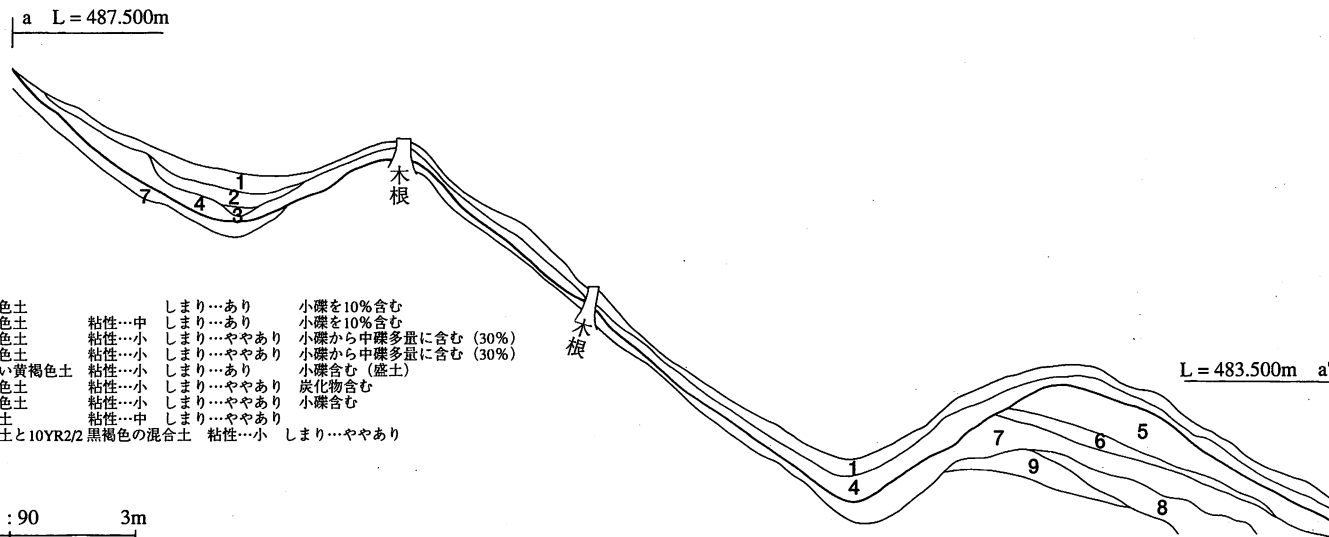
d L = 469.900m



1. 10YR3/4 暗褐色土 粘性…小 しまり…あり

0 1:600 10m

a L = 487.500m



- |                                 |      |          |                   |
|---------------------------------|------|----------|-------------------|
| 1. 10YR2/2 黒褐色土                 | 粘性…中 | しまり…あり   | 小礫を10%含む          |
| 2. 10YR2/1 黒褐色土                 | 粘性…小 | しまり…あり   | 小礫を10%含む          |
| 3. 2.5YR3/2 黒褐色土                | 粘性…小 | しまり…ややあり | 小礫から中礫多量に含む (30%) |
| 4. 2.5YR4/2 暗褐色土                | 粘性…小 | しまり…ややあり | 小礫から中礫多量に含む (30%) |
| 5. 10YR5/4 にぶい黄褐色土              | 粘性…小 | しまり…あり   | 小礫含む (盛土)         |
| 6. 10YR2/2 黒褐色土                 | 粘性…小 | しまり…ややあり | 炭化物含む             |
| 7. 10YR2/3 黒褐色土                 | 粘性…小 | しまり…ややあり | 小礫含む              |
| 8. 10YR4/4 褐色土                  | 粘性…中 | しまり…ややあり |                   |
| 9. 10YR4/4 褐色土と10YR2/2 黒褐色色の混合土 | 粘性…小 | しまり…ややあり |                   |

0 1:90 3m

## 6号堀跡（竪堀）

遺構（第45・46・82・86図 写真図版28・29・50）

＜位置＞調査区ⅣD10f～ⅣF6aグリッド、標高456.1～487.9m、5号土塁と6号土塁の中間に位置する。

＜規模・形態・方向＞VD1h～VD10eグリッド付近で林道建設により一部消失しているが、検出された全長は（63）mを測る。方向は、尾根から東はほぼ南南西－東北東、消失した尾根の中央で屈曲し西側は南南東から西北西号で調査区外の谷まで延びている。東斜面末端は谷筋に達する。東側と西側の平均傾斜角度はそれぞれ29°、28°を測る。

堀幅は尾根付近で7.6～8.7m、実効法高は3.9～5.8mを測る。また調査区外までの総延長は約160mを測る。断面形はV字形を呈する。空堀で、堀切続きの竪堀である。5号堀とともに二重竪堀を成す。また、ⅣE7g～ⅣF4aグリッドで6号堀改築の跡が検出された。改築前の堀幅は1.1m、深さ0.8mを測り、断面形はV字形を呈する。また、ⅣE10hグリッドの尾根中央付近の5号土塁南側との垂直壘壁高は0.9mと極端に浅くなっているため、5号堀に沿いに主郭方向への通路に利用されたことが考えられる。調査区外の6号堀の北側には6ヶ所の曲輪も配置されており、虎口への通じた6号堀を防御した縄張りと考えられる。

＜普請＞尾根から西斜面にかけては風化スレートの岩盤、東斜面は地山褐色土を掘り込んで構築されている。この付近の実効堀幅は9m、実効法高は7mを測る。尾根から東側の平均傾斜角度は30°を測る。改築前の堀の埋土は自然堆積を呈さず5号堀同様に5号土塁の盛り土と同じ褐色土により埋められていた。6号堀は5号堀と同時期に改築が行われたものと考えられる。

＜埋土＞自然堆積は稀薄で層厚は約27cm、黒褐色土が主体となって構成されている。また、改築前の堀埋土は礫混じりの褐色土により構成される。

＜出土状況・時期＞遺物は検出されていない。15～17世紀初頭と考えられるが、改築の時期は5号と同様に16世紀後半と考えられる。

## 6号土塁（竪土塁）

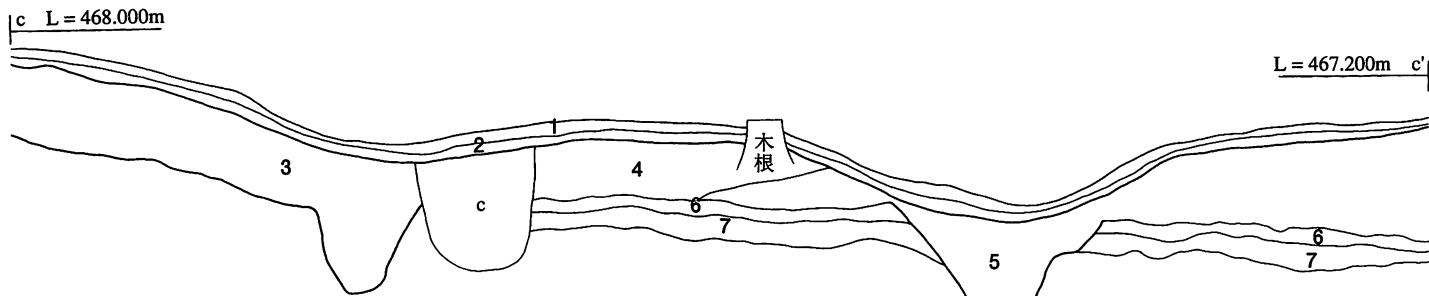
遺構（第45・46・82・86図 写真図版28・29・50）

＜位置＞調査区ⅣD10f～VD1hグリッド、標高481.7～486.1mに位置し、6号堀の南側に沿って検出された。

＜規模・形態・普請＞林道や搬出路建設のために削平を受けおり調査区内で検出された全長は8.4mを測る。東斜面の6号堀沿いには検出されず、調査区外では6号堀に沿って約64mにわたり確認された。方向は、ほぼ西北西－東南東で、尾根南側からの敵の進入を防ぐ機能を持つ。5号土塁西側とは異なり6号堀を掘った土をそのまま堀南側外縁に積み上げ敲き締めた敲き土塁である。基底幅は3.1～4.5m、上幅0.6～0.7m、垂直壘壁高は1.2～1.24mを測る。

＜埋土・時期＞自然堆積層は約20cmの暗褐色土で、盛り土は地山の礫混じりの褐色土で構成される。遺物は検出されていない。16世紀後半～17世紀初頭と考えられる。

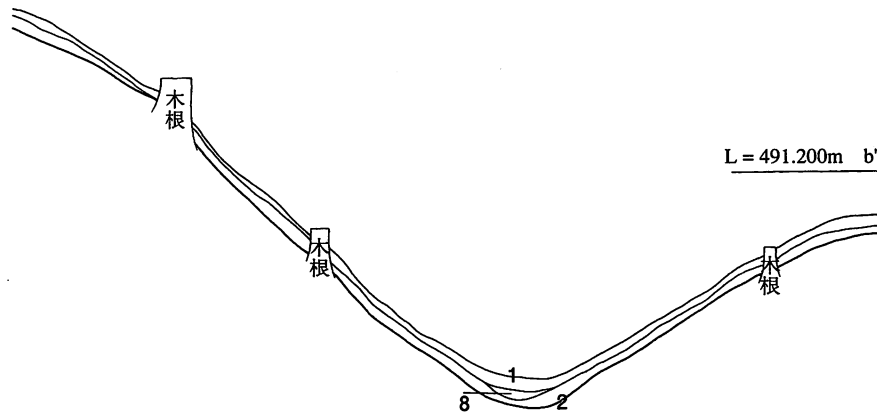




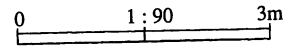
L = 467.200m c'

- |                                      |       |          |              |
|--------------------------------------|-------|----------|--------------|
| 1. 10YR2/2 黒褐色土                      | 粘性…なし | しまり…あり   | 小礫含む         |
| 2. 10YR3/2 暗褐色土                      | 粘性…中  | しまり…ややあり | 小礫含む         |
| 3. 10YR4/3 にぶい黄褐色土                   | 粘性…小  | しまり…ややあり | 小礫含む         |
| 4. 10YR4/3 褐色土に10YR5/4にぶい黄褐色土を粒子状に混入 | 粘性…小  | しまり…ややあり | 粘性…小 しまりややあり |
| 5. 10YR4/3 にぶい黄褐色土                   | 粘性…小  | しまり…ややあり |              |
| 6. 10YR3/2 黒褐色土                      | 粘性…小  | しまり…ややあり |              |
| 7. 10YR4/3 にぶい黄褐色土                   | 粘性…小  | しまり…ややあり | 小礫含む         |
| 8. 10YR3/3 暗オリーブ褐色土                  | 粘性…小  | しまり…ややあり |              |

b L = 493.700m



L = 491.200m b'



第46図 5・6・7号堀跡、5・6号土塁(2)

## 7号堀跡（竪堀）

遺構（第45・82・86図 写真図版30）

＜位置＞調査区ⅣE 9 i～ⅣF 6 aグリッド、標高459.6～473.1mに位置する。

＜規模・形態・方向＞ 規模は、18.8mにわたり検出された。断面形はV字形を呈する。方向はほぼ南南西―北北東に延びる。堀幅0.9～1.0m、深さ24～73cmを測る。他の堀に比べると極端に規模が小さい。東側の谷筋に沿っているため自然に雨水で流失したものと考えられる。林道を挟み尾根を越えた南西側調査区外には7号堀の延長部（一部林道により攪乱）が約90mにわたって現況で確認された。調査区外の法高は約7m、堀幅は約8mを測る。

＜普請＞調査区東側の谷筋の自然地形を利用し地山の褐色土を掘り込んで構築されている。

＜埋土＞埋土は黒色土が主体となって構成されている。遺物は出土していない。

＜時期＞15～17世紀初頭と考えられる。

## 8号堀跡

遺構（第47・85・86図 写真図版30・31）

＜位置＞調査区ⅣD 8 c～ⅢE 2 eグリッド、標高457.9～480.1mに位置する。

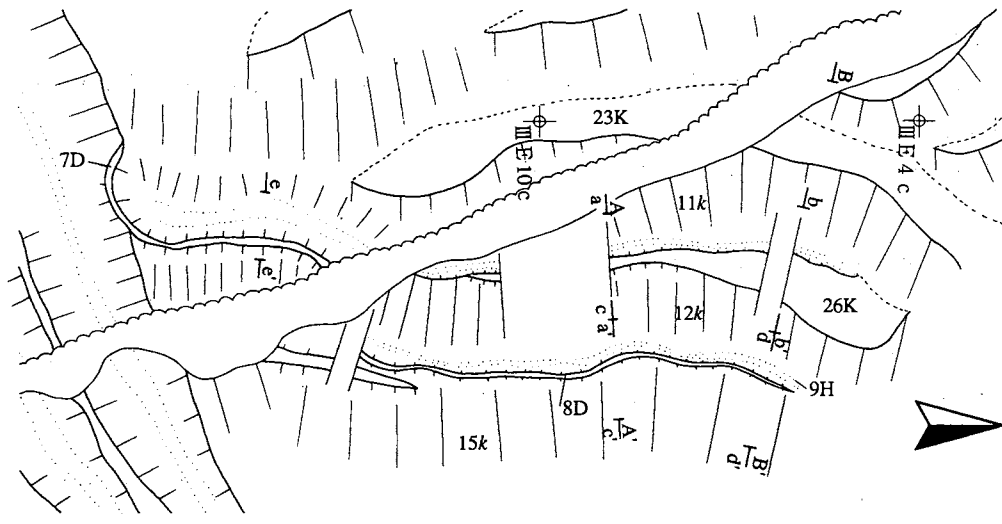
＜規模・形態・方向＞ 当初検出された8号堀は7号土塁と同様ⅣD 8 c～ⅣD 3 eグリッドの南側18.0mのみで、断面形はU字形を呈し堀幅4.0～4.5m、垂直塁壁高は0.2～1.2mを測る。23号曲輪の東側縁辺と8号堀を挟んだ8号土塁との実効堀幅は13.3～14.1mを測る。北側の26.7mはトレンチ調査により25号曲輪の整地層下から検出された。総延長は（59.5）mである。8号堀の起点は主郭を囲む9号切岸が尾根東側の5号堀に達する地点から始まり、ⅣD 6 dグリッドで方向を北東から北に向けて7号土塁とともに25号曲輪下で検出された26号曲輪に達する。断面形はV字型を呈し堀幅1.2～1.8m、深さは24～43cmを測る。また、ⅣE 2 d～ⅣE 5 dグリッドの9.1mは5号堀や6号堀と同様の改築跡が検出され、規模的に防御機能が低い8号堀を埋めて27号曲輪を普請した際にこの区域の8号堀を改築したものと考えられる。構築当初は7号土塁とともに東側からの敵の侵入に対する防御施設でと考えられるが、改築後は通路として機能したと考えられる。また、起点からは5号堀や谷筋を見下ろすことができる。

＜普請・埋土＞地山の褐色土を掘り込んで構築されている。黒褐色土が主体となって構成されている。

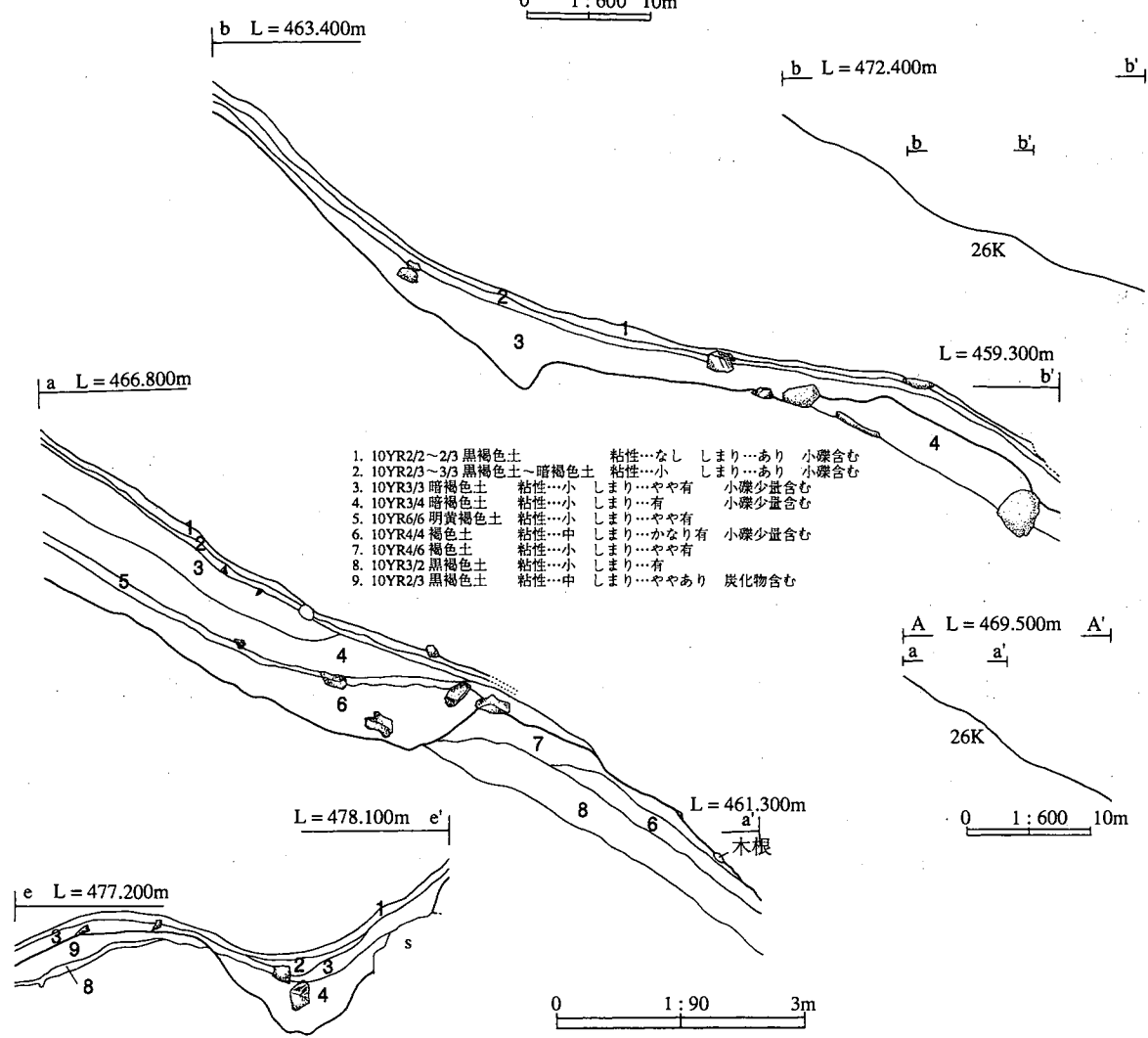
遺物（第97・109図 写真図版58・64）

＜出土状況＞、古銭（190）、砥石（303）が出土している。

＜時期＞15～17世紀初頭、改築の時期は16世紀後半と考えられる。



0 1:600 10m



第47図 8号・9号堀跡、7・8号土塁 (1)

## 7号土塁

遺構（第47・82・86図 写真図版31）

<位置>調査区ⅣE 6 c～ⅢE 7 eグリッド、標高485.0～462.7mに位置する。9号切岸が主郭東を巡り東斜面5号堀に達する地点に起点を持つ。

<規模・形態・方向>当初検出された長さは(22.5)mで、北側ⅣE 2 e～ⅢE 7 eグリッドの(11.4)mはトレンチ調査により25号曲輪整地層下から検出された。8号堀底からの垂直塁壁高は0.2～1.2m、8号土塁との実効堀幅は9.1～9.4mを測る。北側の塁壁高は極端に浅く8号堀も溝状を呈する。方向は起点からⅣE 6 dグリッドまでは西―東、ここで方向を北へ転じる。また、7号土塁は8号堀とともに埋め立てられており、8号土塁の構築当初の推定総延長は56.8mである。25号曲輪の整地層は下位の12号切岸の整地層と9号堀を埋めた27号曲輪の整地層と同一の土が用いられているため東斜面一帯が同時に改築された可能性が高いと考えられる。

起点部の南側塁壁は5号堀北側法面のをなす。転向するⅣE 4 eからⅣE 6 eグリッドの東側塁壁は傾斜が50°に達し、5号堀東端を眼下にする要所を防御する堅固な普請がなされている。7号堀の基部は東側の谷と5号堀から侵入する敵に対しては横矢掛けの位置にあり7号土塁に囲まれ堅固な防御陣地として大きな役割を持っていたと考えられる。また、7号土塁は薮の役割も果たしており5号堀の東下方からは見通せないように構築されている。8号堀の改築に合わせて改築されたと考えられる。

<普請・埋土>8号堀普請時の地山褐色土を旧表土に盛って構築された敵き土塁である。表土は薄く20cmをはかり、盛土は地山の礫混じりの褐色土が主体で構成されている。

<出土状況・時期> 出土遺物はない。15～17世紀初頭と考えられる。

## 9号堀

遺構（第47・48・86図 写真図版31）

<位置>調査区ⅣE 4 f～ⅢE 5 gグリッド、標高454.0～465.6mに位置する。

<規模・形態・方向>トレンチ調査により27号曲輪整地層下より8号土塁に平行して検出された。規模は、長さ35.4m、堀幅は0.8～1.8m、深さは26～55cmを測り、断面形はV字型を呈する。方向は南南西―北北東に延びる。ⅣE 4 f～ⅣE 5 fグリッド付近は8号土塁とともに重機による攪乱のため消失しているが、堀の基部は8号堀と同様に切岸と5号堀の接点にあり、形状も同一と考えられる。調査当初は南端の約5mが検出されるのみであった。12号切岸を挟んだ7号土塁との実効堀幅は9.2～9.4mを測る。

整地層下の9号堀は、8号堀や西側の2号堀と同様に規模が小さいことから防御機能の低いものであったと考えられる。改築は8号堀とほぼ同時期に行われたものと考えられる。構築当初は8号土塁とともに東側からの敵の侵入に対する防御施設と考えられるが、27号曲輪は通路としても機能したと考えられる。

<普請・埋土>地山の褐色土を掘り込んで構築されている。人為堆積を呈し堀の埋め立てには12号切岸や8号土塁盛り土の礫混じりの褐色土が主体となって構成されている。

<出土状況・時期>遺物は出土していない。時期は15～17世紀初頭で、改築の時期は16世紀後半と考えられる。

## 8号土塁

遺構（第48・86図 写真図版31）

<位置>調査区ⅣE4f～ⅢE5gグリッド、標高454.3～465.9mに位置する。9号堀の東側外縁に沿って検出された。

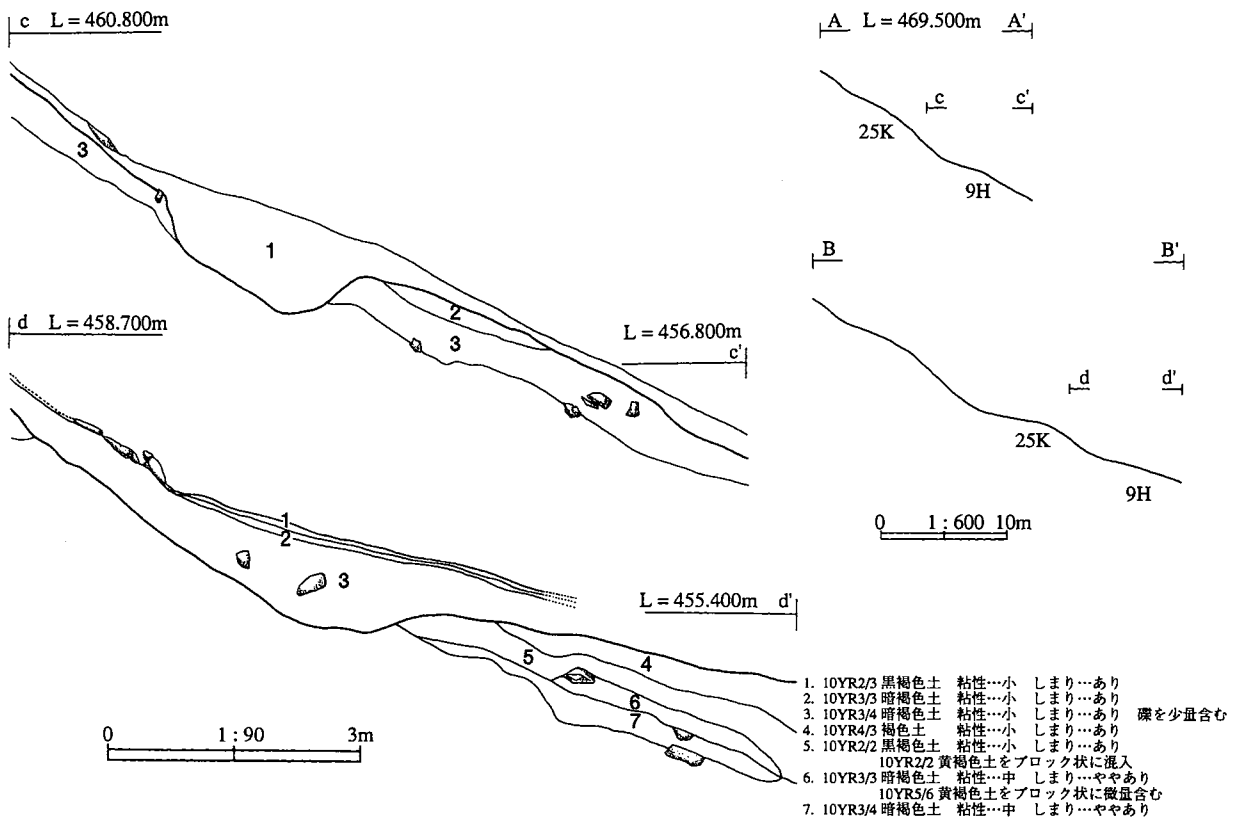
<規模・形態・方向>9号堀とともにトレンチ調査で27号曲輪整地層下から検出され、長さは34.6m、基底幅0.9～15m、上幅35～40cm、9号堀底からの垂直塁壁高は26～55cmを測る。方向は南南西—北北東である。東側最初の防塁である。12号切岸と9号堀を挟んだ7号土塁との実効堀幅は9.2～9.4mを測る。ⅣE4f～ⅣE5fグリッド付近は9号堀とともに重機による攪乱のため消失しているが、土塁の基部は7号土塁と同様に12号切岸と5号堀の接点にあり同一の形状を持つと推察される。調査当初は南側の約12mが検出されていたが土塁上部は攪乱により消失していた。

また、27号曲輪下から検出された8号土塁は当初検出された8号土塁よりも約1.5m内郭側にあり27号曲輪普請の際により外郭側に8号土塁も改築された可能性が高い。土塁の起点が7号土塁と同一の構造であれば、東側の谷と5号堀から侵入する敵に対しては横矢掛けの位置にあり8号土塁により囲まれ堅固な防御陣地として大きな役割を持っていたと考えられる。

8号土塁は7号土塁と同様に、葦の役割を果たしており5号堀の東下方からは見通せないように構築されている。

<普請・埋土>9号堀普請時の地山褐色土を旧表土に盛って構築された敲き土塁である。表土は薄く約25cmを測り、盛土は地山の礫混じりの褐色土が主体で構成されている。

<出土状況・時期> 出土遺物はない。時期は15～17世紀初頭で、改築の時期は16世紀後半と考えられる。



第48図 8・9号堀跡、7・8号土塁（2）

## 4. 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は主郭（11号曲輪）で検出され、1棟を登録した。

### 1号掘立柱建物跡

遺構（第49・82図 写真図版32）

<位置>調査区ⅢD 8 g～ⅢD 9 hグリッド、標高481.2～481.4 mに位置する。主郭である11号曲輪の上段北辺中央に位置する。

<規模・構造・方向> 規模は、北—4.46 m（2間）、西—4.96 m（2間）、南—4.72 m（2間）、東—5.68 m（2間）の不整形を呈する。東辺も2間と推定されるがP3—P4間から柱穴は検出されなかった。建物の軸方向はN—7°—Wである。プラン内から1号、2号、3号、4号土坑が検出され、大型の1号、2号土坑は廃棄用施設とも考えられるが、遺物は検出されていない。

<柱配置・柱間> P1—P2：1.68 m、P2—P3：2.8 m、P3—P4：5.68 m（2.84×2間）、P4—P5：2.62 m、P5—P6：2.14 m、P6—P7：3.06 m、P7—P1：1.96 mを測る。

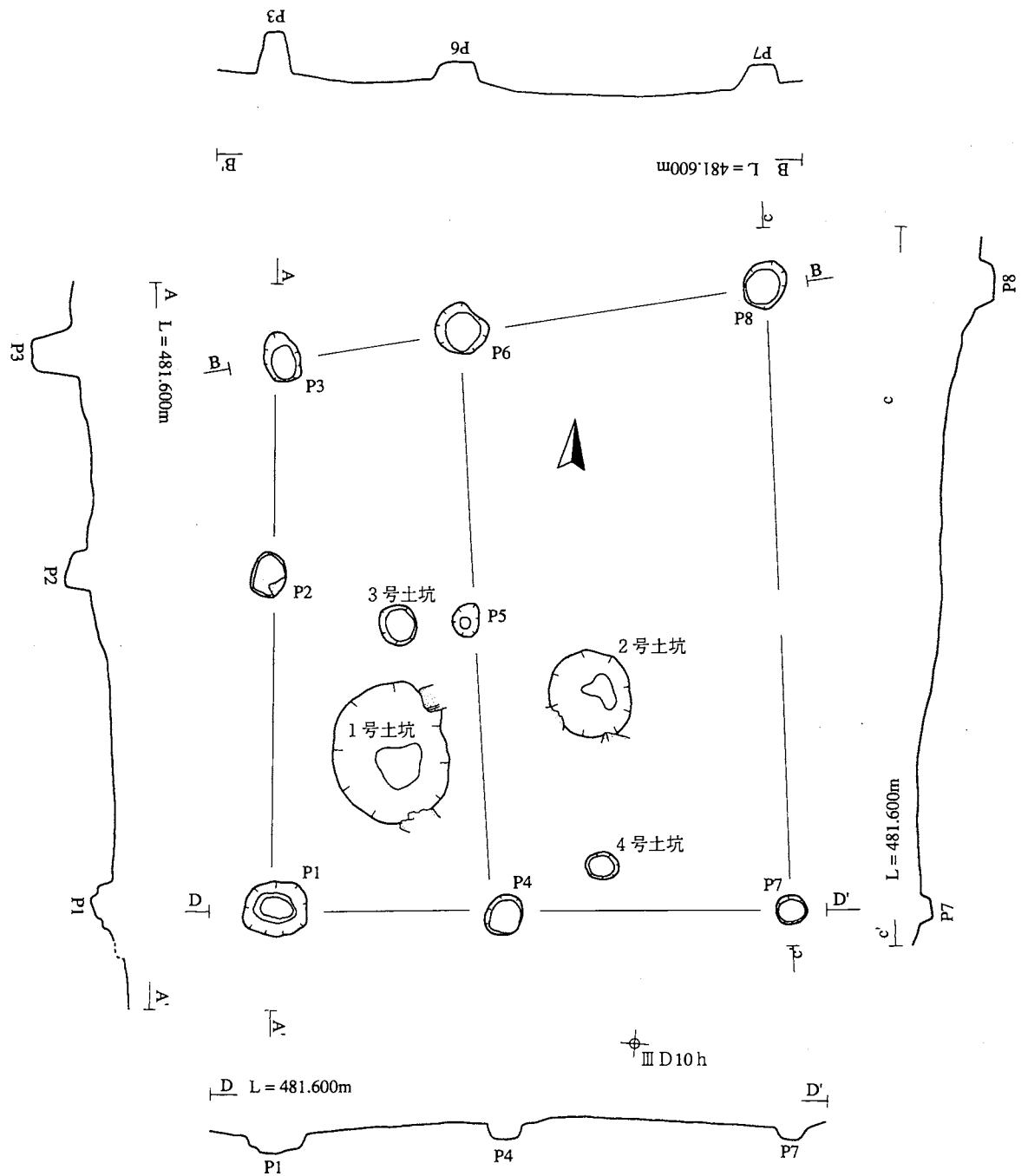
プラン内や周辺で検出された被熱した石臼片や鍛冶滓などの遺物から、鍛冶工場の可能と考えられる。また、東西の主郭拡幅域の埋土には炭化した部材（クリ）が検出されており、拡幅の普請の際に1号掘立柱建物跡が解体廃棄された可能性も考えられる。

<掘方・埋土>柱穴の掘方は円形から楕円形を呈し、深さは10～40 cmを測る。埋土は、褐色土が主体で、柱痕は検出されていない。P1とP2以外の柱穴は11号曲輪上段の整地層下で検出された。位置的には11号集石と重複するが、掘立柱建物跡を廃棄後、集石を構築した可能性が高いと考えられる。

### 遺物

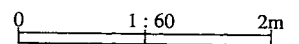
<出土状況> 被熱した石臼片（300・305・307）がプラン内（11号集石）から出土している。周辺から染付片や白磁片も出土している。石臼片は、11号曲輪一体に散乱した状態で検出されている。

<時期> 主郭の東西の拡幅域の整地層内からは部材（クリ）として使われたと推定される炭化材が検出されており、拡幅の普請以前の可能性が高い。15～16世紀前半と考えられる。



単位 (cm)

P No.	開口部径	深さ	柱痕	埋 土
P 1	60.0 × 50.0	15.0	なし	10Y3/2 黒褐色土。粘性…小。しまり…ややあり。小礫含む。
P 2	41.0 × 30.0	18.0	なし	10Y4/2 にぶい黄褐色土 粘性…小。しまり…ややあり。小礫含む。
P 3	46.0 × 32.0	30.0	なし	10Y4/3 灰黄褐色土。粘性…小。しまり…ややあり。小礫含む。
P 4	40.0 × 32.5	11.0	なし	10Y3/4 オリーブ暗褐色土。粘性…中。しまり…ややあり。小礫含む。
P 5	32.0 × 25.0	33.0	なし	10Y3/3 暗オリーブ褐色土。粘性…小。しまり…ややあり。中礫含む。
P 6	50.0 × 46.0	17.0	なし	10Y3/2 黒褐色土と 10YR4/4 褐色土の混合土。粘性…小。しまり…ややあり。小礫含む。
P 7	45.0 × 38.0	16.0	なし	2.5Y4/3 オリーブ褐色土、4/6 オリーブ褐色土。粘性…小。しまり…ややあり。
P 8	29.0 × 26.0	10.0	なし	2.5Y3/2 黒褐色土。粘性…小。しまり…ややあり。小礫含む。



第49図 1号掘立柱建物跡

## 5. 竪穴住居跡

竪穴住居跡は16号曲輪整地層下で検出され、1棟を登録した。

### 1号竪穴住居跡

遺構（第50・51図 写真図版33）

<位置>調査区IV D 1 i ~ IV E 2 a グリッド標高482.8~483.5 mに位置する。

<規模・形態・方向> 規模は、南北6.02 m×東西（4.12） m、面積（20.74） m<sup>2</sup>で、不整な隅丸方形を呈する。長軸の方向は、ほぼ北西-南東で、16号曲輪整地層下から検出された。北側、西側、南側の壁高はそれぞれ、13.8、32.6、32.7 cmを測るが、東側は壁は検出されなかった。東側は切岸へと床面が続き壁が構築されていない可能性も考えられる。住居跡は、同一の地形を持つ尾根を挟んだ西側には検出されていないため、尾根の東側に西風をさけるために構築されたと考えられる。その後、16号曲輪の普請時に南に位置する17号曲輪とともに整地層下に埋められたものと推察される。11号曲輪で検出された掘立柱建物跡との共伴関係は不明である。

埋土の状況からは、人為的に埋められたものと考えられる。焼土遺構2基と8基の柱穴状小土坑を伴う。

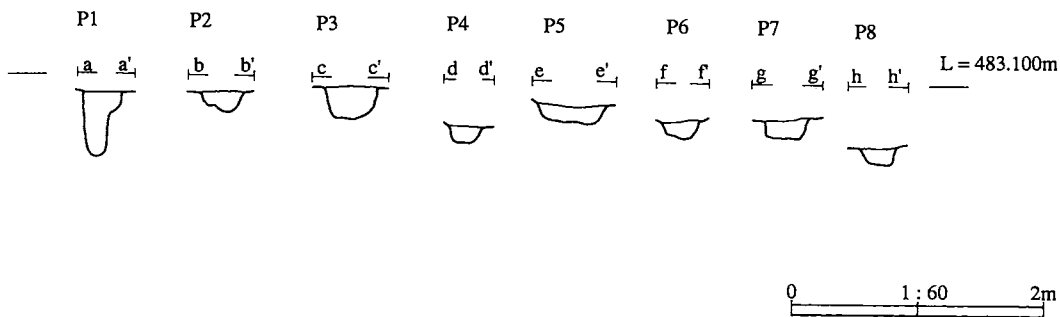
<埋土>自然堆積を呈さず黒色土を主体に焼土塊や褐色土がブロック状に混入する盛り土で構成され、16号曲輪の整地層をなす。

<出土状況> 床面直上からの出土遺物はない。埋土から砥石、釘、銅製品、染付片が検出され、周辺の整地層からは鉄鍋片や瀬戸・美濃系陶器が出土している。

<時期> 15~16世紀前半と考えられる。

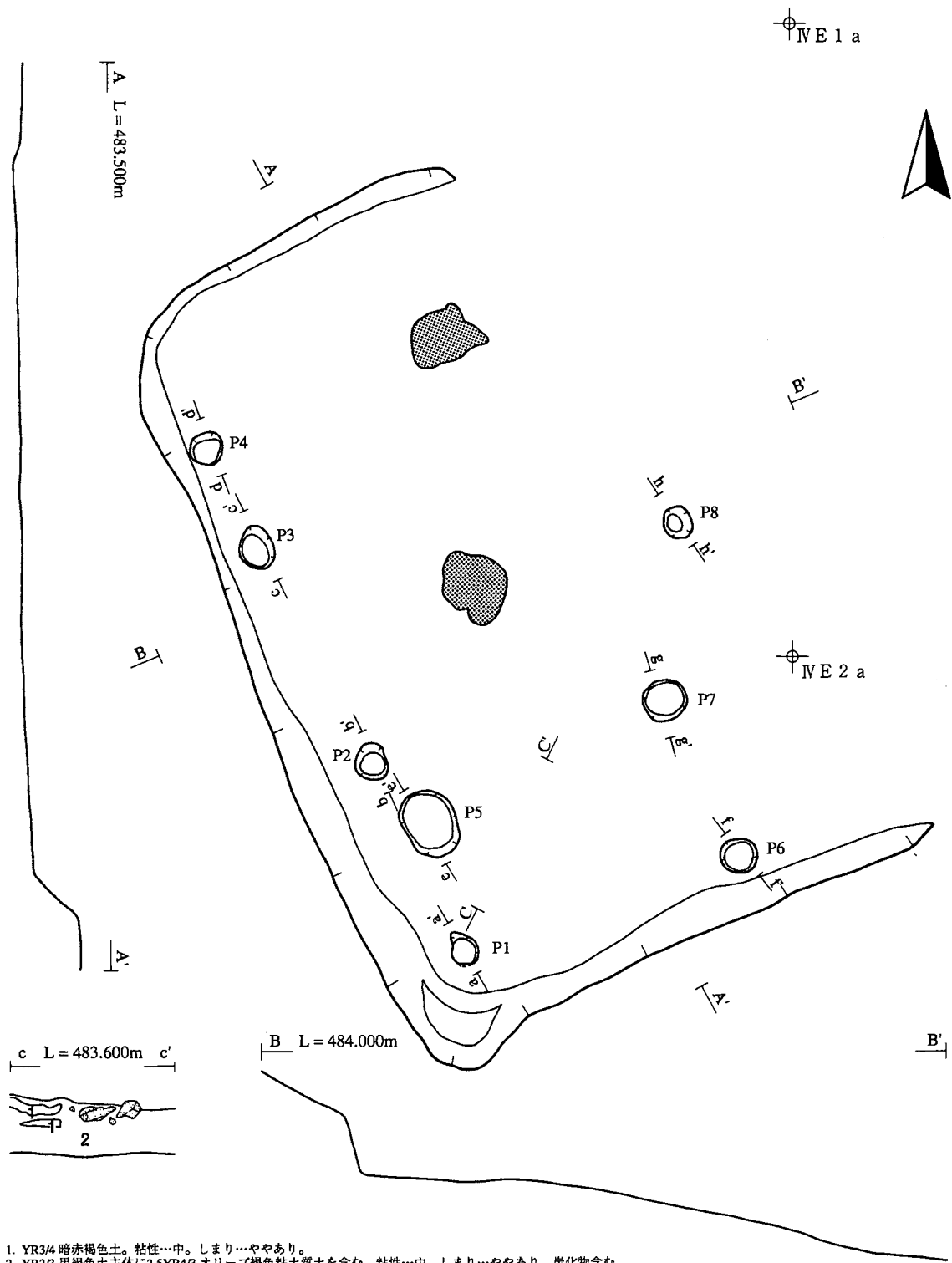
単位 (cm)

PNo.	開口部径	深さ	柱痕	埋土
P1	31.0 × 28.5	25.0	なし	10YR5/6 におい黄褐色土 粘性…小。しまり…ややあり。小礫含む。
P2	36.0 × 22.0	12.0	なし	10YR7/4 におい黄橙褐色 粘性…小。しまり…ややあり。
P3	34.0 × 26.0	16.0	なし	10YR4/4 褐色土、10YR6/4 におい黄橙褐色土 粘性…小。しまり…あり。
P4	24.0 × 21.0	28.0	なし	2.5YR4/3 オリーブ褐色粘土主体に10YR5/3 黄褐色土を含む。粘性…小。しまり…ややあり。
P5	55.0 × 42.0	15.0	なし	10YR4/4 褐色土 粘性…小。しまり…ややあり。
P6	27.0 × (28.0)	14.0	なし	10YR4/3 におい黄褐色土 粘性…小。しまり…あり。
P7	28.0 × 24.0	12.0	なし	10YR4/3 におい黄褐色土 粘性…なし。しまり…あり。鑑治碎検出。
P8	44.0 × 37.0	26.0	なし	10YR4/4 褐色土と10YR8/3 淡黄褐色土の混合土 粘性…小。しまり…あり。



第50図 1号竪穴住居跡 (1)





1. YR3/4 暗赤褐色土。粘性…中。しまり…ややあり。
2. YR2/3 黒褐色土主体に2.5YR4/3 オリーブ褐色粘土質土を含む。粘性…中。しまり…ややあり。炭化物含む。

第51図 1号竪穴住居跡(2)

## 6. 柱穴列

柱穴列として5基を登録した。柱穴列周辺から検出され数基の土坑は、位置や検出状況から土坑として分類、登録した。また、検出された柱穴状の小土坑の中には列状以外の方形の建物跡を推定されるものもあったが、完全に対応する柱穴を検出できずL字形を呈するものも柱穴列として登録した。

### 1号柱穴列

遺構（第52・53・82図 写真図版32・34）

＜位置＞調査区ⅣD 1 f～ⅢD 10 j グリッド、主郭の南側号10切岸の下場付近に位置する。1号柱穴列に沿って1.1～1.4m北側には2号柱穴列が並ぶ。

＜規模・構造・方向・埋土＞ P1～P8の8基の柱穴状小土坑がP6を境に転向し全長14.7mにわたりほぼ等間隔で検出された。各柱穴間の距離はP1—P2：1.74m、P2—P3：2.26m、P3—P4：2.24m、P4—P5：2.48m、P5—P6：1.60m、P6—P7：2.08m、P7—P8：2.14mを測る。方向は、P1—P6がN—74°—E、P6—P8がN—30°—Sである。防御すべき開かれた主郭正面西—北—東方向ではなく南側の切岸下場に柵列を配備することは防御面からは考えにくく、1号柱穴列は2号柱穴列とともに共伴しながら18号曲輪あるいは10号切岸に繋がる舞台状構築物の支柱の可能性があると考えられるが、10号切岸と18号曲輪からはそれらの痕跡は検出されていない。また、埋土は褐色土が主体となって構成されているものが多く、柱痕はいずれにも認められない。

遺物（第89図 写真図版55）

＜出土状況＞ P5の埋土から染付（109）や10号切岸下場から天目茶碗（132）が出土している。

＜時期＞ 1号柱穴列は2号柱穴列よりも地山を掘り込んだ位置にありP5埋土より検出された炭化物の年代測定の結果は1430年±50の結果を得ており15～17世紀初頭と考えられる。

### 2号柱穴列

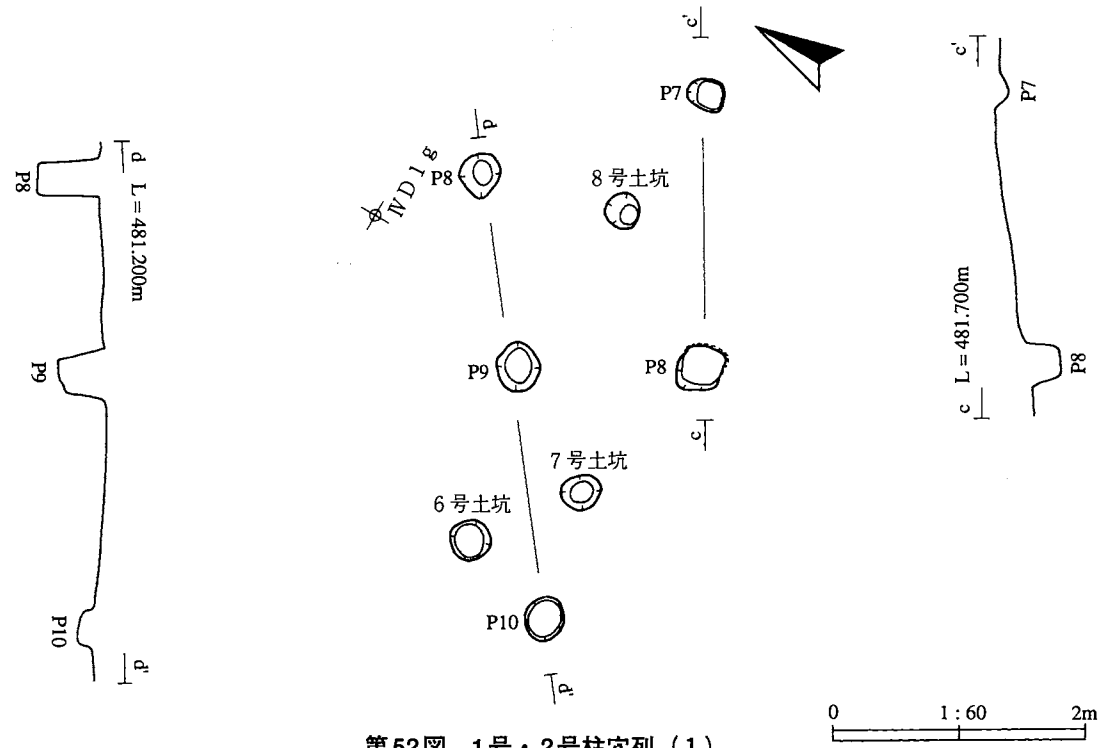
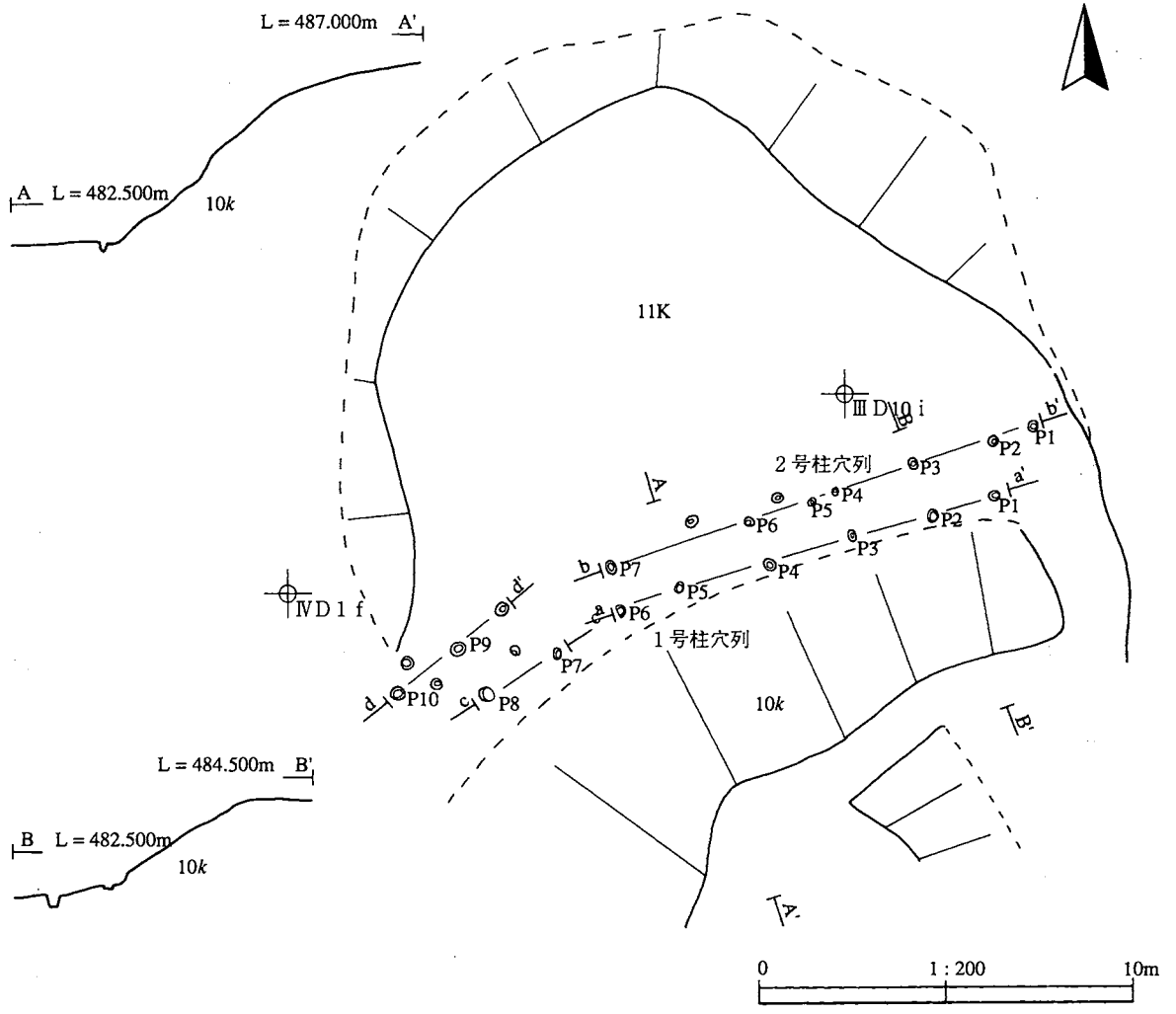
遺構（第52・53・82図 写真図版32・34・35）

＜位置＞調査区ⅣD 1 f～ⅢD 10 j グリッド、主郭の南側号10切岸の下場付近に位置する。2号柱穴列に沿って1.06～1.4m南側には1号柱穴列が並ぶ。

＜規模・構造・方向・埋土＞ P1～P10の10基の柱穴状小土坑がP7を境に転向し全長18.62mにわたり検出された。各柱穴間の距離はP1—P2：1.14m、P2—P3：2.26m、P3—P4：2.20m、P4—P5：0.66m、P5—P6：1.78m、P6—P7：3.84m、P7—P8：3.14m、P8—P9：1.60m、P9—P10：2.00mを測る。方向は、P1—P8がN—72°—E、P8—P10がN—38°—Sである。防御すべき開かれた主郭正面の西—北—東方向ではなく南側の切岸下場に柵列を配備することは防御面からは考えにくく、2号柱穴列は1号柱穴列とともに共伴しながら18号曲輪あるいは10号切岸に繋がる舞台状構築物の支柱の可能性があると考えられるが、10号切岸と18号曲輪からはそれらの痕跡は検出されていない。埋土は主に褐色土で構成されている。P7とP9は柱痕が認められた。

＜出土状況＞ 10号切岸下場から天目茶碗が出土している。

＜時期＞ 1号柱穴列と同様に15～17世紀初頭と考えられる。



第52图 1号·2号柱穴列 (1)



### 3号柱穴列

遺構（第54・82図 写真図版32・36）

<位置> 調査区ⅢD1aグリッド、8号曲輪上の標高472.1～472.4mに位置する。

<規模・構造・方向> P1～P4の4基の柱穴状小土坑がP3を境にL字状に全長3.1mにわたりほぼ等間隔にL字上に並ぶ。方形の小規模な掘立柱建物跡を想定しうるが対応する柱穴は検出されなかった。各柱穴間の距離はP1—P2：0.90m、P2—P3：1.26m、P3—P4：1.10mを測る。方向は、P1—P2がN—83°—E、P2—P4がN—15°—Eである。8号曲輪は、第三位の面積を有する曲輪であり、3号柱穴列は建物跡の可能性が高いと考えられる。

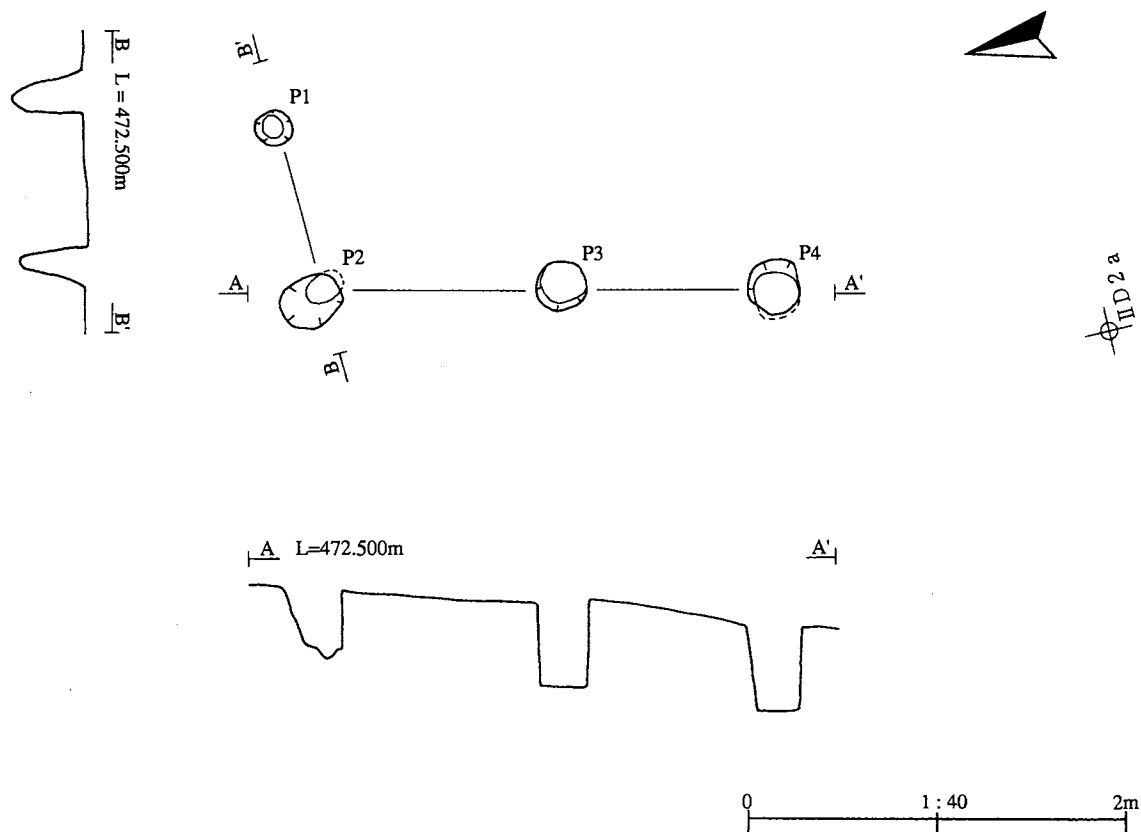
<埋土> 黒色土と褐色土が主体となって構成されている。柱痕は認められない。

<出土状況> 柱穴からの出土はないが、8号曲輪からは染付、播鉢、火鉢片、古銭等が出土している。

<時期> 15～17世紀初頭と考えられる。

単位 (cm)

PN	開口部径	深さ	柱 痕
P1	2.80 × 28.0	47.0	なし
P2	27.0 × 25.0	42.0	なし
P3	32.0 × 25.0	37.0	なし
P4	19.0 × 19.0	36.0	なし



第54図 3号柱穴列

#### 4号柱穴列

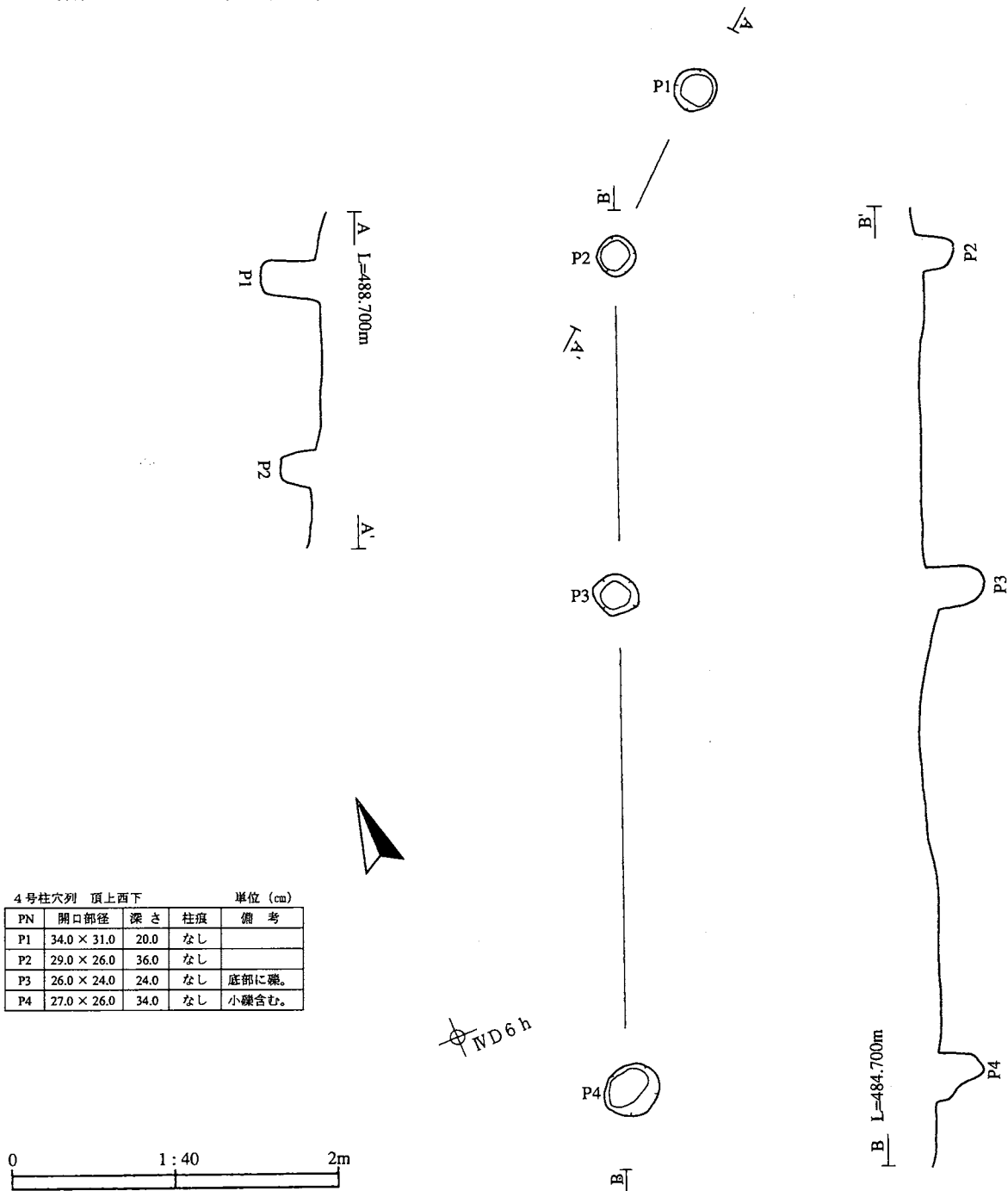
遺構 (第56・82図 写真図版32・37)

<位置> 調査区IVD 4 h～IVD 6 hグリッド、20号曲輪上、標高484.4m付近に位置する。

<規模・構造・方向> P1～P4の4基の柱穴状小土坑がP2を境に方向変え全長6.3mにわたり検出された。各柱穴間の間隔はP1—P2：1.16m、P2—P3：2.20m、P3—P4：3.00mを測る。方向はP1—P2がN—50°—E、P2—P4がN—38°—Eである。。

<出土状況> 17号曲輪からは炭化した漆塗りの碗片が出土している。

<時期> 15～17世紀初頭と考えられる。



第55図 4号柱穴列

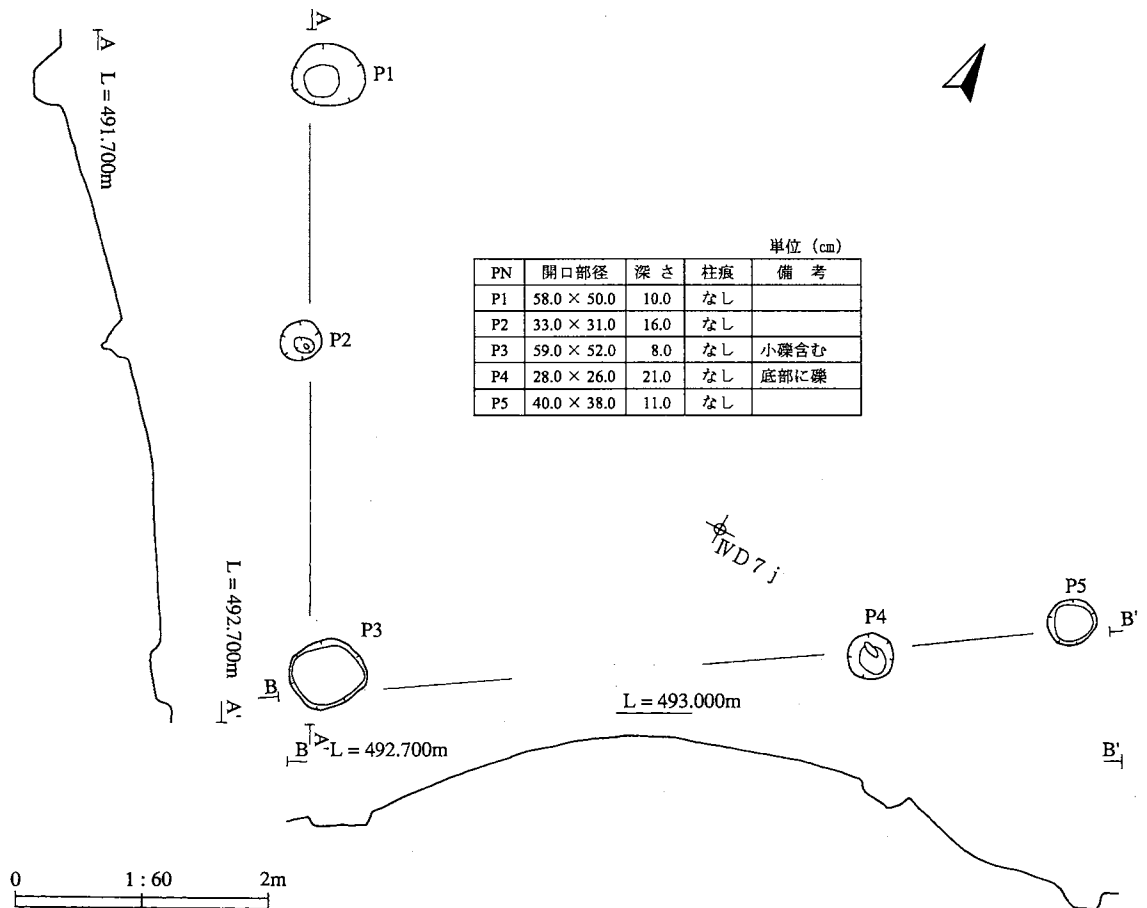
## 5号柱穴列

遺構 (第56・82図 写真図版32・38)

<位置> 調査区IV D 7 h～IV D 6 j グリッド、22号曲輪上の標高492.4～492.5 mに位置する。

<規模・構造・方向> P1～P5の5基の柱穴状小土坑がP3を境にL字状に並ぶ。全長10.7 mを測り、2 m前後の間隔で並ぶ。P3とP4の間には検出されなかったが柱穴があった可能性が高い。各柱穴間の距離はP1—P2：2.12 m、P2—P3：2.62 m、P3—P4：4.36 (2.18×2間) m、P4—P5：1.66 mである。方向は、ほ方向はP1—P3がN—28°—W、P3—P5がN—57°—Eである。22号曲輪は、堀で防御された曲輪の中で最も高所にあり5号柱穴列は槽台跡の可能性も考えられる。各柱穴には柱痕は認められなかったが、P5には棒状の自然石が埋設されていた。

<出土状況・時期> 出土遺物はない。15～17世紀初頭と考えられる。



第56図 5号柱穴列

## 7. 石積遺構

石積遺構は2基を登録した。いずれも主郭である11号曲輪の東西の縁辺配置されており、平場造成のために構築されたものと考えられる。いずれも石垣のような裏込め石や銅石はなく、地山のスレートを積み上げただけの単純な構造を持つ。

### 1号石積

遺構（第57・58・59・82図 写真図版32・39）

<位置>調査区ⅢD7f～ⅢD8fグリッドに位置する。標高479.5mの主郭西側縁辺付近で検出され、北端部は、13号集石に近接する。

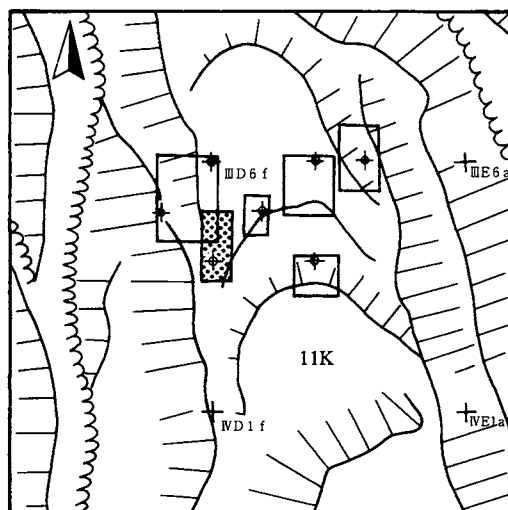
<規模・形態> 規模は、長さ7.6m、幅0.9m、高さ0.7mを測る。方向は、主郭の軸線にほぼ沿った南―北で、一直線上に配置されている。旧表土上に地山の石を積み、主郭内側に褐色土盛って整地が施されている。館の初期に東側の2号石積みとともに平場造成のために構築され、その後主郭の拡幅にともない整地層下に埋められたものと考えられる。

石材は地山のスレートが使用され、裏込め石等が存在しないことから、石垣の構築が当地方に普及する以前のものと考えられる。石積の北端部は主郭の拡幅に伴い破壊され、土留めのために12号集石に用いられ西斜面に他の石とともに集められたものと考えられる。

<埋土> 褐色土が主体となって構成されている。

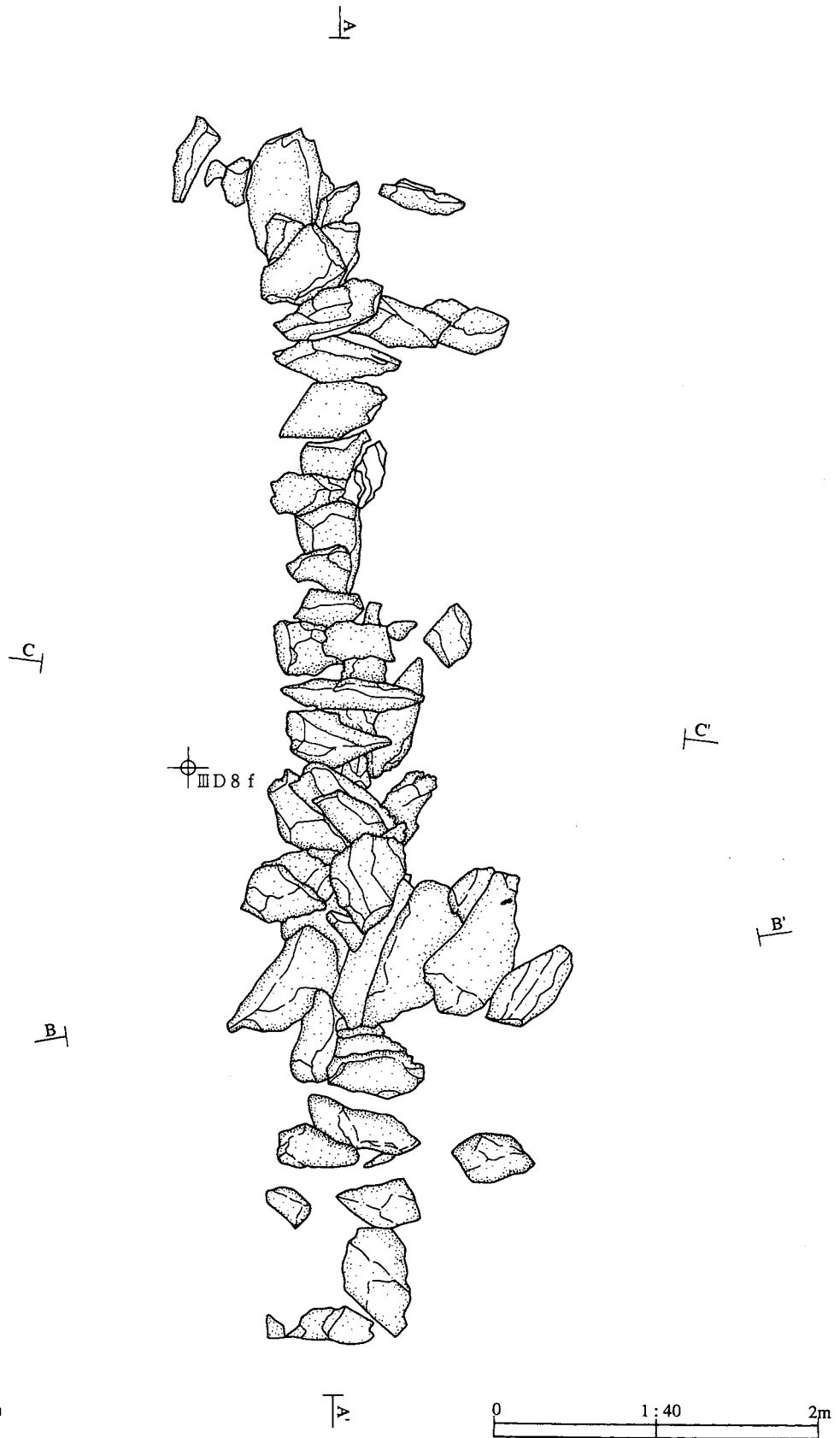
<出土状況> 周辺（11号曲輪）から白磁や石臼・炉壁等が検出面から出土している。

<時期> 15～16世紀前半と考えられる。



第57図 1号石積（1）

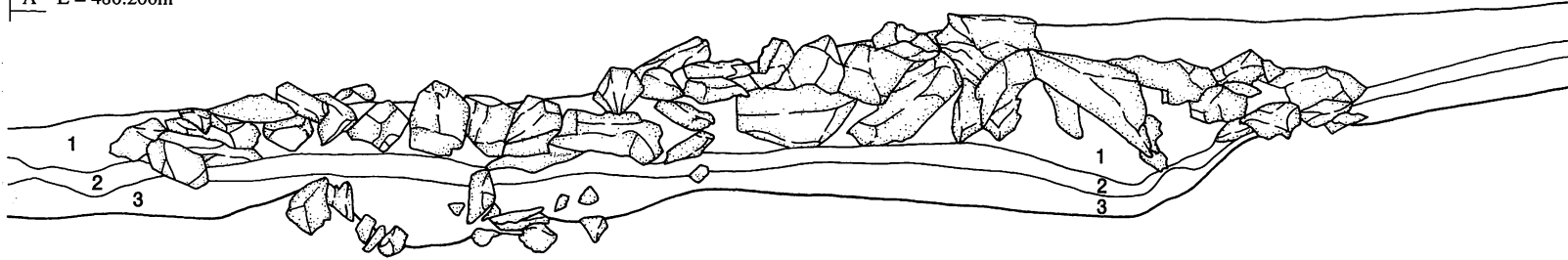




第58图 1号石積 (2)

L = 480.600m A'

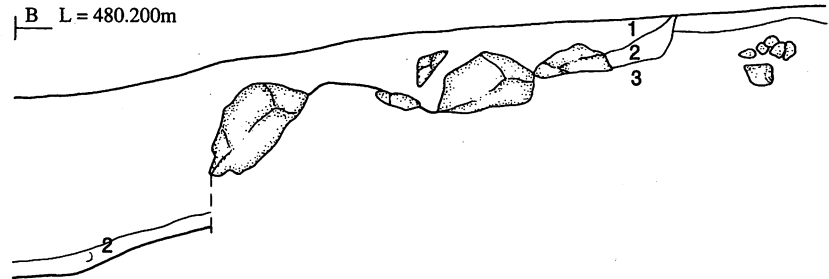
A L = 480.200m



1. 10YR4/2 にぶい黄褐色土 (粘土質) 粘性…小 しまり…ややあり 大礫含む
2. 10YR2/3 黒褐色土 粘性…小 しまり…あり。大礫含む。
3. 10YR5/3 にぶい黄褐色土と2.5YR5/3黄褐色粘土の混泥土 粘性…小 しまり…ややあり。大礫含む。

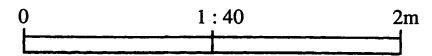
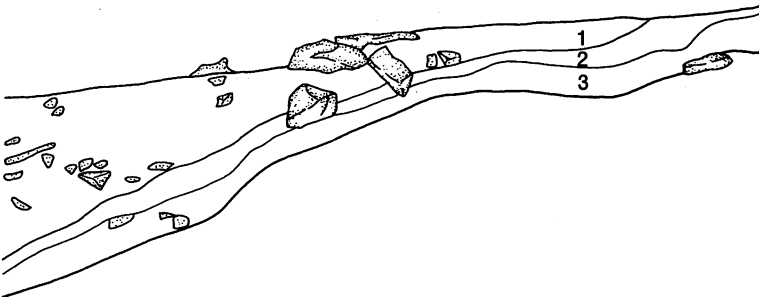
L = 486.00m B'

B L = 480.200m



C'

C L = 480.200m



第59図 1号石積(3)

## 2号石積

遺構 (第60・61・82図 写真図版32・40)

<位置>調査区ⅢD 5 h～ⅢD 6 hグリッドに位置する。標高478.7mの主郭東側縁辺付近で検出された。

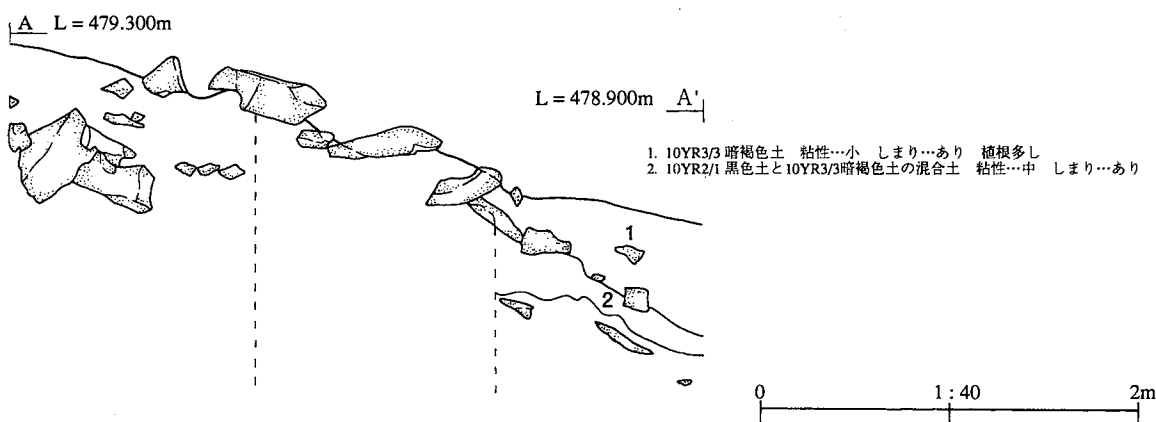
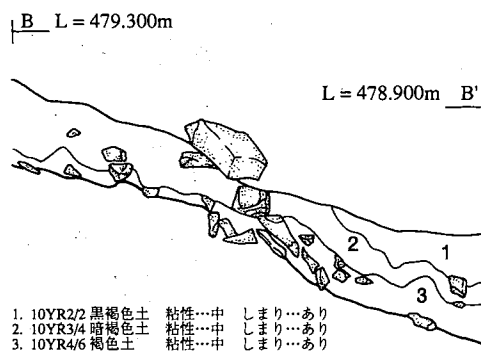
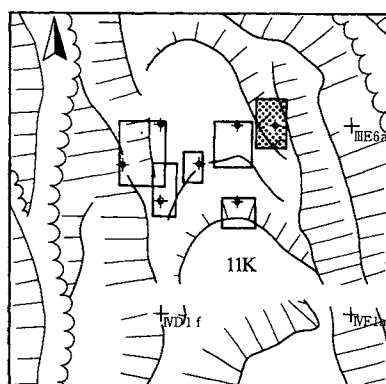
<規模・形態> 規模は、長さ5.9m、幅2.4m、高さ30～40cmを測る。方向は、主郭の軸線にほぼ沿ったN-10°-Eで、長軸35～110cmの大礫がほぼ直線上に配置されているが、地山の傾斜が22°ときついため1号石積みに比して崩落が激しい。旧表土上に地山の石を積み、主郭内側に褐色土を盛って整地が施されている。館の初期に西側の1号石積とともに平場造成のために構築され、その後主郭の拡幅にともない整地層下に埋められたものと考えられる。崩落は主郭拡幅の普請の際に生じた可能性も考えられる。

石材はスレートで、裏込め石等が存在せず石垣の構築が当地方に普及する以前のものと考えられる。

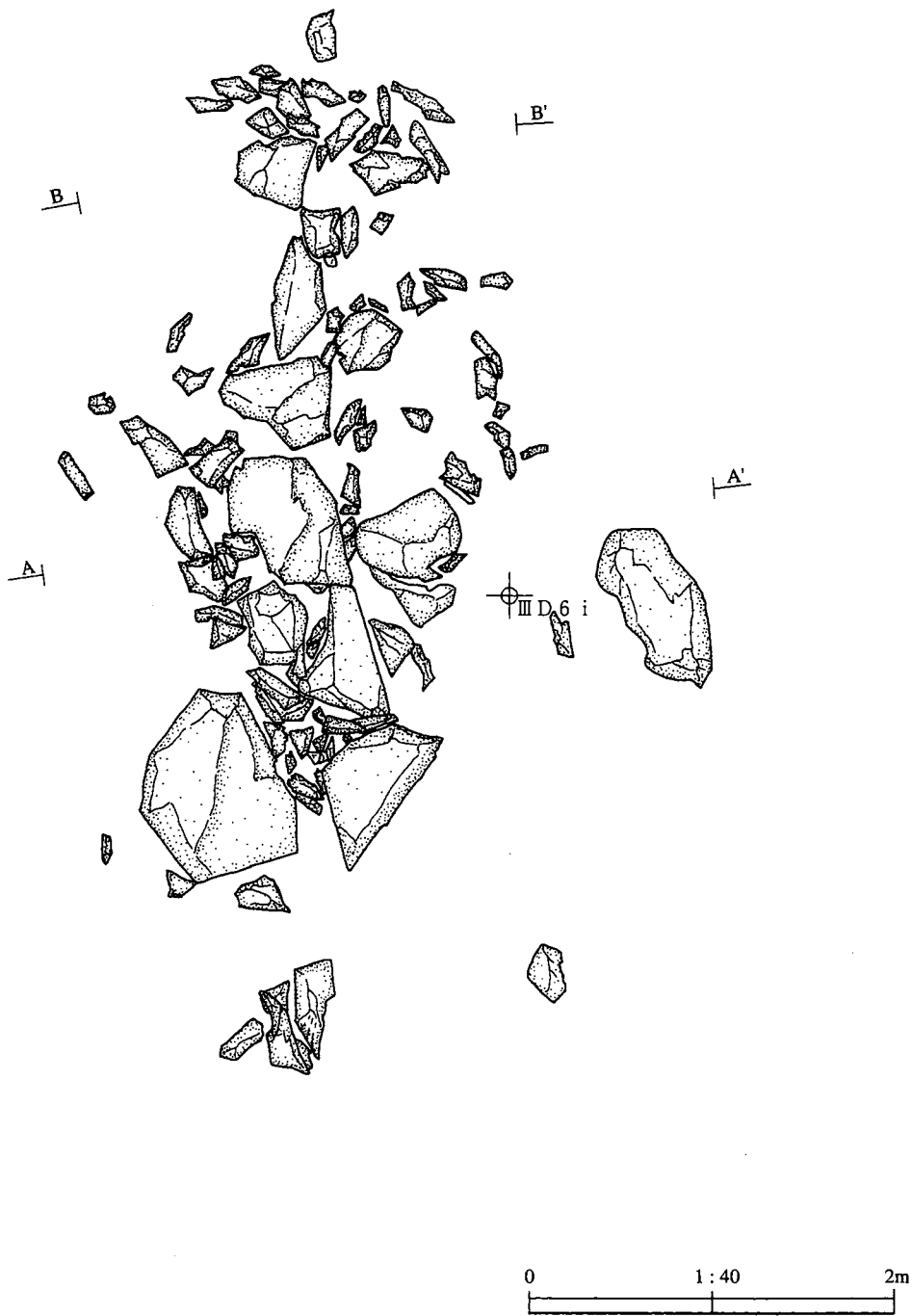
<埋土> 黒褐色土が主体となって構成されている。

<出土状況> 周辺から炉壁 (341) が検出面から出土している。

<時期> 15～16世紀前半と考えられる。



第60図 2号石積 (1)



第61图 2号石積(2)

## 8. 集石

集石は、13基を登録した。投石用の集石と土留め用の集石に分類される。

### 1号集石

遺構（第62・82図 写真図版40）

<位置>調査区標高437.3m、ⅡB2bグリッド、2号土塁上に位置する。

<規模・形態> 平面形は、不正方形を呈し、規模は1.4×1.1mを測る。石材は、地山のスレートが使われている。1号集石は2号堀・土塁からそれに続く1号曲輪に配置された8基の集石の北端に位置する。2号土塁下に続く切岸は、実効法高が20m、比高差も16mを測ることから、投石用に配置されたものと考えられる。また、1～8号集石は、検出状況から同時期に構築されたものと考えられる。

<出土状況・時期> 出土遺物はない。16世紀後半～17世紀初頭と考えられる。

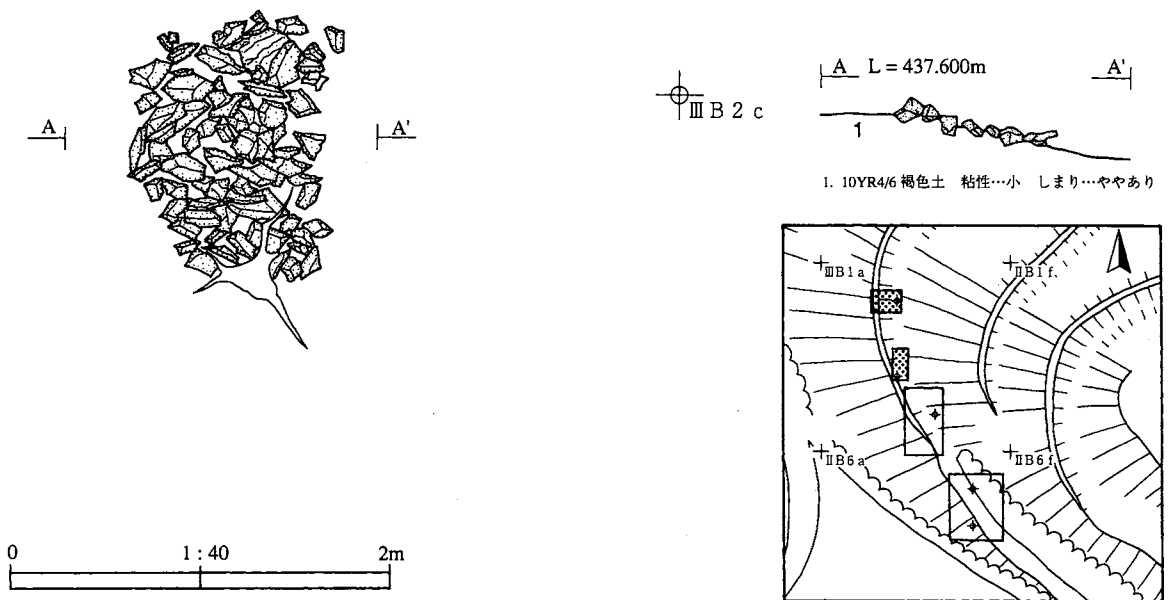
### 2号集石

遺構（第63・82図 写真図版40）

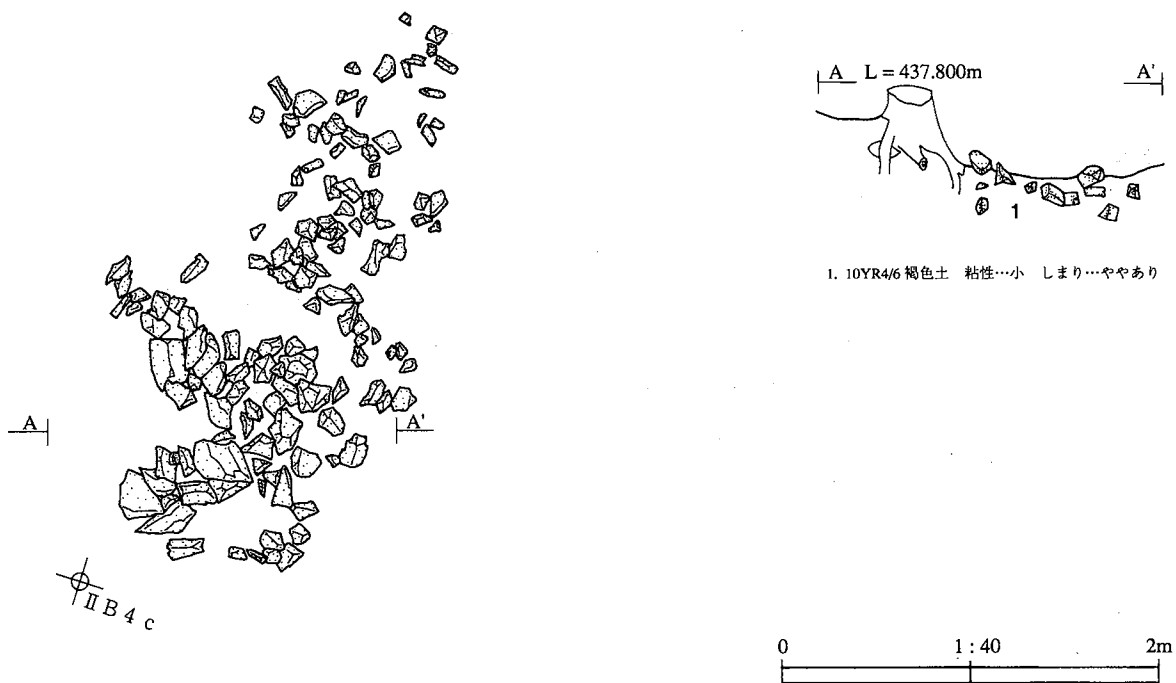
<位置>調査区標高437.3mのⅡB3b～ⅡB3cグリッド、5号堀底～5号土塁上に位置し、1号集石南南東側約8mに近接する。

<規模・形態> 平面形は、不正方形を呈し、規模は3.1×1.8mに散在する。石材は、地山のスレートが使われている。1号集石と同様に配置された集石で、投石用の集石と考えられる。

<出土状況・時期> 出土遺物はない。16世紀後半～17世紀初頭と考えられる。



第62図 1号集石



第63図 2号集石

### 3号集石

遺構 (第64・82図 写真図版41)

<位置> 調査区標高437.4mのII B 4 cグリッド、2号堀底に位置し、2号集石南南東側約4.5mに近接する。

<規模・形態> 平面形は、不正方形を呈し、規模は2.0×1.1mを測る。石材は、地山のスレートが使われている。1・2号集石と同様に配置されたもので、投石用の集石と考えられる。

<出土状況・時期> 出土遺物はない。16世紀後半～17世紀初頭と考えられる。

### 4号集石

遺構 (第64・82図 写真図版41)

<位置> 調査区標高437.5mのII B 5 cグリッド、2号堀と1号曲輪の境界に位置し、3号集石南東側約9mに近接する。

<規模・形態> 平面形は、不正方形を呈し、規模は1.4×1.1mを測る。石材は、地山のスレートが使われている。1・2・3号集石と同様に配置されたもので、投石用の集石と考えられる。

<出土状況・時期> 出土遺物はない。16世紀後半～17世紀初頭と考えられる。

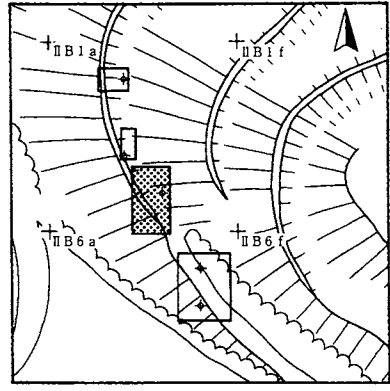


3号集石

| A L = 438.000m A' |



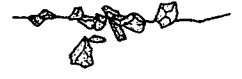
1. 10YR4/6 褐色土 粘性…小 しまり…ややあり



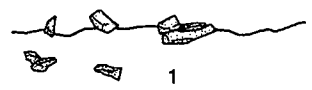
⊕ II B 5 c

⊕ II B 5 d

| A L = 438.000m A' |



| A L = 438.000m A' |

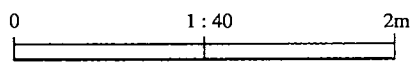
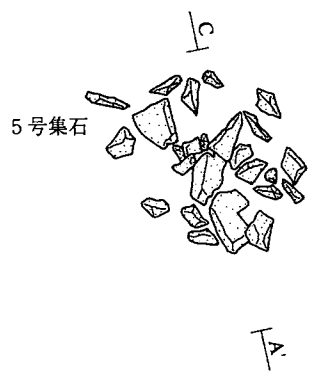


4号集石



⊕ II B 6 c

5号集石



第64図 3号・4号・5号集石

## 5号集石

遺構（第64・82図 写真図版41）

＜位置＞調査区標高437.5mのⅡB5d～ⅡB6dグリッド、1号曲輪上の2号堀との境界に位置し、4号集石南側2.0mに近接する。

＜規模・形態・出土状況・時期＞ 平面形は、不正方形を呈し、規模は1.1×0.9mを測る。石材は、地山のスレートが使われている。1・2・3・4号集石と同様に配置された集石で西～南方向から侵入する敵に備えた投石用の集石と考えられる。周辺から煙管が出土している。16世紀後半～17世紀初頭と考えられる。

## 6号集石

遺構（第65・82図 写真図版41）

＜位置＞調査区標高438.1mのⅡB5cグリッド、1号曲輪上に位置し、5号集石南東側6.5mに近接する。

＜規模・形態＞ 平面形は、不正方形を呈し、規模は1.8×1.2mを測る。石材は、地山のスレートが使われている。1～5号集石と同様に配置されたもので、南にある谷からの敵の侵入に備えた投石用の集石と考えられる。1・2号集石に比して集石数が少ない。

また、1号曲輪は2号堀・2号土塁を埋めて構築されており、5～8号集石はこの上に配置されたものである。

＜出土状況・時期＞ 出土遺物はない。16世紀後半～17世紀初頭と考えられる。

## 7号集石

遺構（第65・82図 写真図版42）

＜位置＞調査区標高438.3mのⅡB7eグリッド、1号曲輪上に位置し、6号集石の南南東側5.6mに近接する。

＜規模・形態＞ 平面形は、不正方形を呈し、規模は1.8×1.4cmを測る。石材は、地山のスレートが使われている。6号集石と同様に2号堀の埋め立て後に配置されている。谷筋からの敵の侵入に備えた投石用の集石と考えられる。1・2号集石に比して集石数が減少している。

＜出土状況・時期＞ 出土遺物はない。16世紀後半～17世紀初頭と考えられる。

## 8号集石

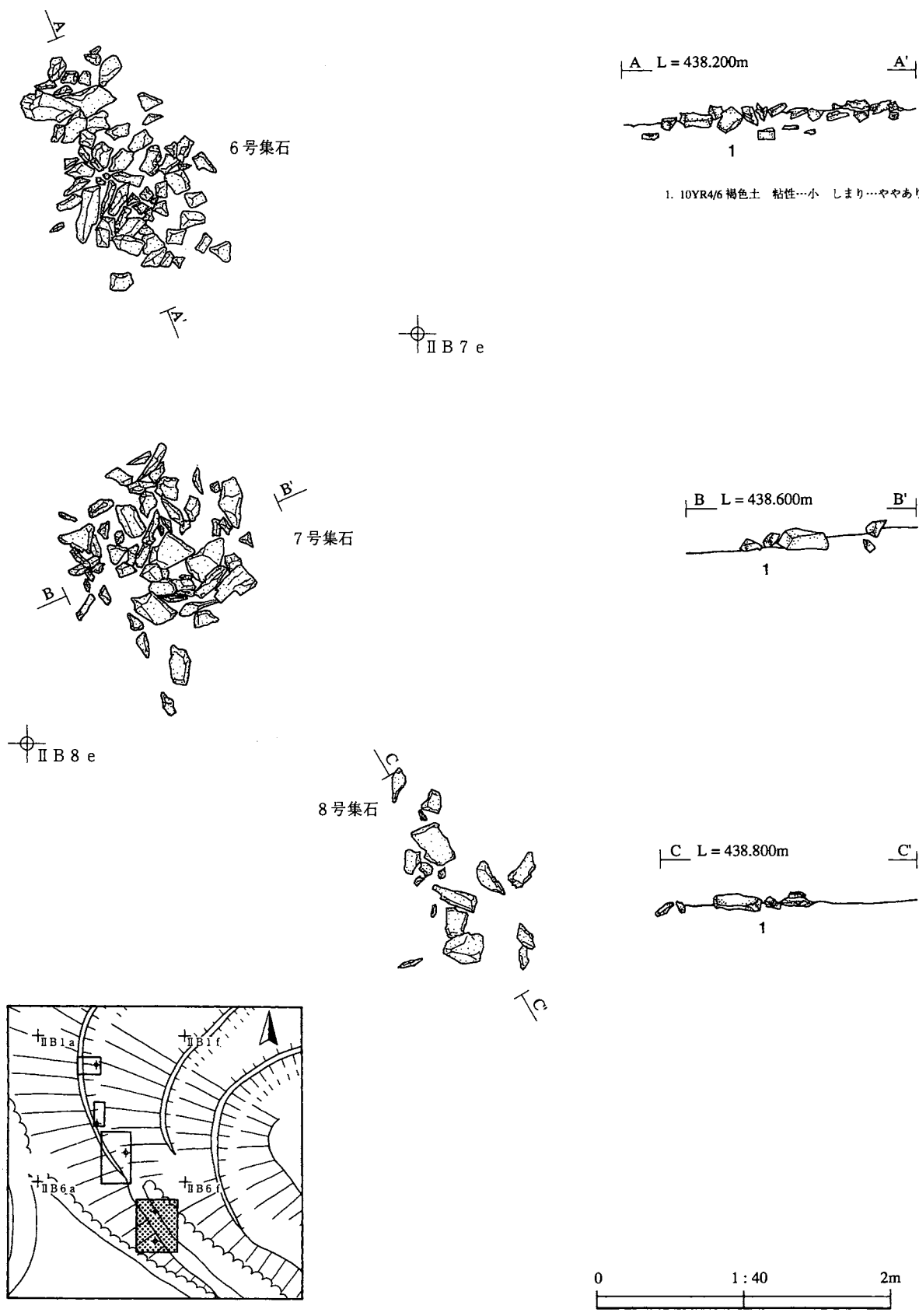
遺構（第65・82図 写真図版42）

＜位置＞調査区の標高438.5m、ⅡB8eグリッド、1号曲輪上に位置し、7号集石の南東側3.5mに近接する。

＜規模・形態＞ 平面形は、不正方形を呈し、規模は1.6×1.2mを測る。石材は、地山のスレートが使われている。1号集石から続く集石の最南端に配置された集石で、7号集石と同様に谷筋から敵の侵入に備えた投石用の集石と考えられる。6・7号集石に比しても集石数は少ない。

＜出土状況・時期＞ 出土遺物はない。16世紀後半～17世紀初頭と考えられる。





第65図 6号・7号・8号集石

## 9号集石

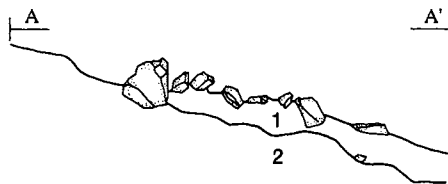
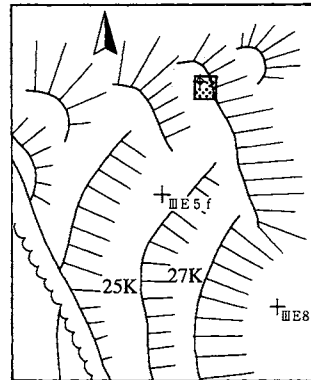
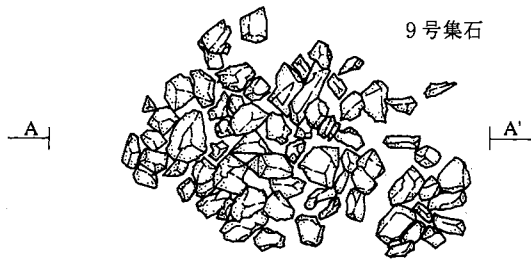
遺構（第66・82図 写真図版42）

＜位置＞調査区の標高457.0m、ⅢE 2 g グリッド、29号曲輪上に位置する。

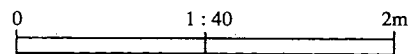
＜規模・形態＞ 平面形は、不正方形を呈し、規模は1.8×1.2mを測る。石材は、地山のスレートが使われている。調査区の東斜面で検出された唯一の集石である。西側の2号堀付近から検出された1号集石と配置された状況、規模形態が類似することから、東側の谷から侵入する敵に備えた投石用の集石と考えられる。

＜出土状況・時期＞ 出土遺物はない。16世紀後半～17世紀初頭と考えられる。

ⅢE 2 g



1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性…なし しまり…あり 小礫含む
2. 10YR3/4 暗褐色土 粘性…小 しまり…あり 礫含む (100mm)



第66図 9号集石

## 10号集石

遺構（第67・68・82図 写真図版42）

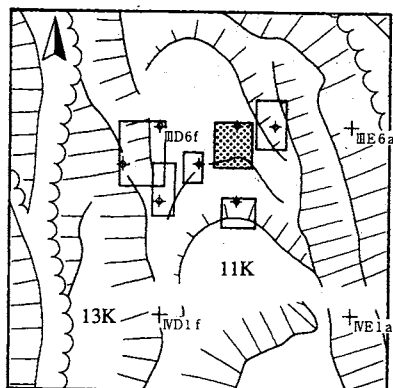
<位置>調査区ⅢD 6 g～ⅢD 6 hグリッドに位置する。標高479.7m付近の主郭下段と中段の境界に位置する。

<規模・形態> 規模は、5.2×3.8mで楕円状に石が広がる。主郭（11号曲輪）の上段と中段の境界に配置された2基の集石の東側に構築されている。西側に造られた11号集石とともに土留めのために同時期（改築時）に造られたものと考えられる。石材の主体は地山のスレートであるが、川から採取された花崗岩も混じる。

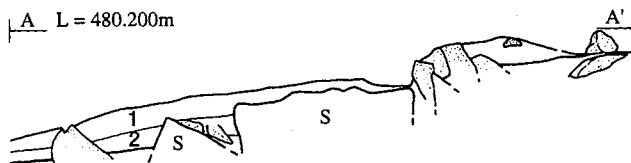
<埋土> 黒褐色土が主体となって構成されている。

<出土状況> 周辺から被熱した石臼片が出土している。

<時期> 15～17世紀初頭



A L = 480.200m



1. 10YR3/3～4/4 暗褐色 褐色土の混合 大礫含む
2. 2.5YR4/4 オリーブ褐色土（粘土質）粘性…中 しまり…かなりあり 岩盤を含む

第67図 10号集石（1）

III D 6 a



0 1:40 2m

第68图 10号集石(2)

## 11号集石

遺構 (第69・82図 写真図版43)

<位置> 調査区ⅢD 8 g～ⅢD 8 h グリッドに位置する。標高480.6m付近の主郭上段と中段の境界に配置されている。

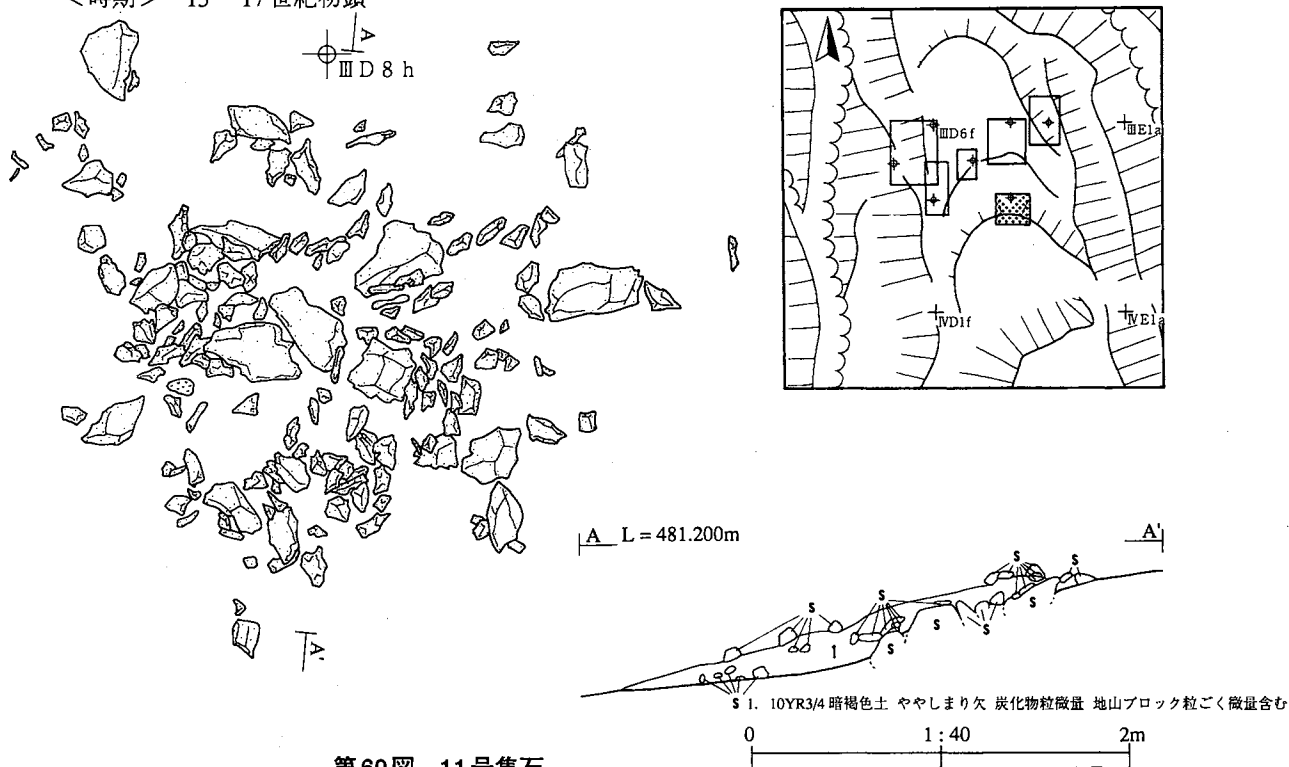
<規模・形態> 規模は、2.5×2.5mで不正な円形状に石が広がる。主郭上段の整地層を支える土留めのために、12号集石と同時代に造られたものと考えられる。石材の主体は地山のスレートである

<埋土> 褐色土が主体となって構成されている。

### 遺物

<出土状況> 集石上部から被熱した石臼片 (300・305・307) が出土している。

<時期> 15～17世紀初頭



## 12号集石

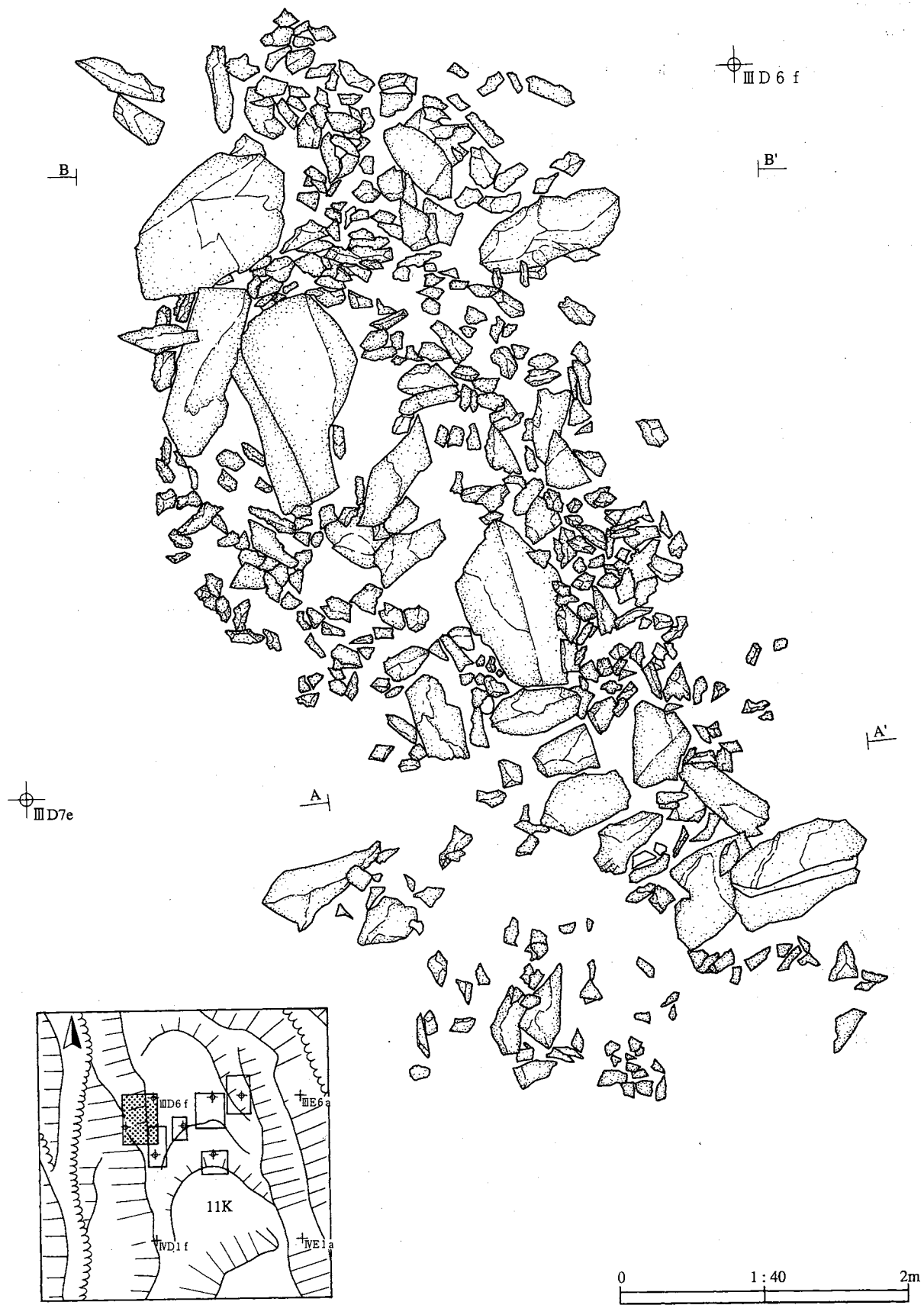
遺構 (第70・71・82図 写真図版43)

<位置> 調査区ⅢD 6 e～ⅢD 7 f グリッドに位置する。標高478.6m付近の主郭の西縁辺で検出された。

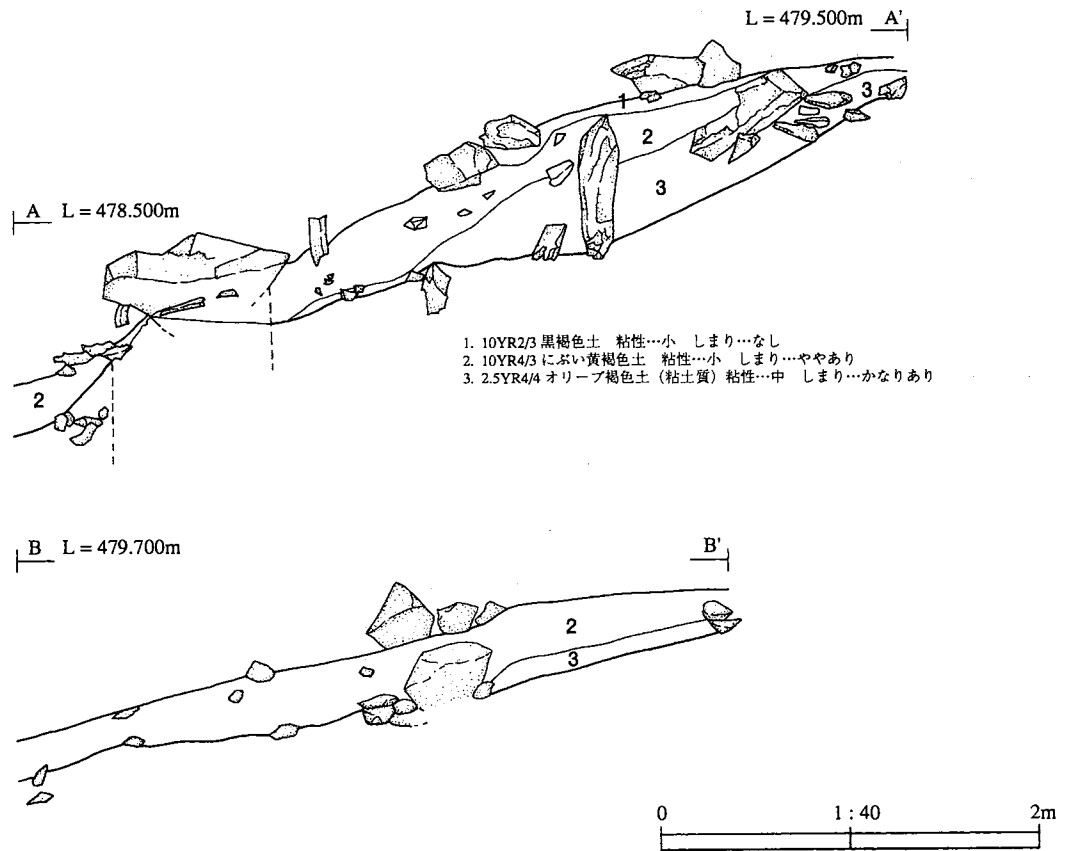
<規模・形態・埋土・時期> 規模は、8.0×4.0mで不正な楕円形を呈する。方向はほぼ北西-南東で、整地層の敷石に続くと考えられるが、集石は巨石を含んでいるため完全な断面調査はできず詳細は不明である。

南端は1号石積に隣接するが、石は繋がっておらず別の遺構と確認された。集石の西側には主郭から9号切岸を通り9号曲輪に抜ける武者走り状の遺構が普請されているため、12号集石は1号石積西側の拡幅と同時代に土留めのために構築されたものと考えられる。また、集石は1号石積と同じ軸線にも点在するため、普請当初は石積であった可能性も想定される。黒褐色土が主体となって構成されている。15～17世紀初頭の遺構と考えられる。

<出土状況> 集石上部から被熱した石臼 (301・302)、羽口 (333・334)、炉壁 (336～338)、鉾滓 (346・347・350・367) が出土している。



第70图 12号集石 (1)



第71図 12号集石 (2)

### 13号集石

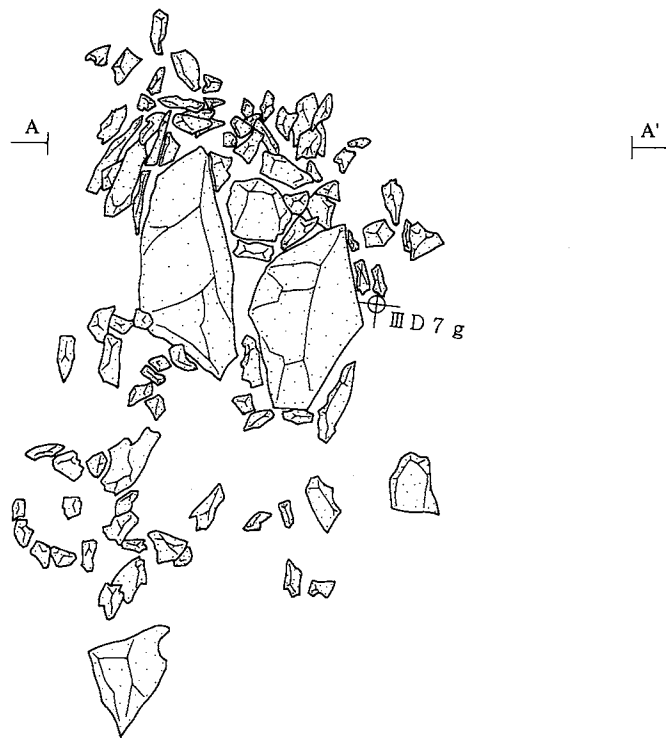
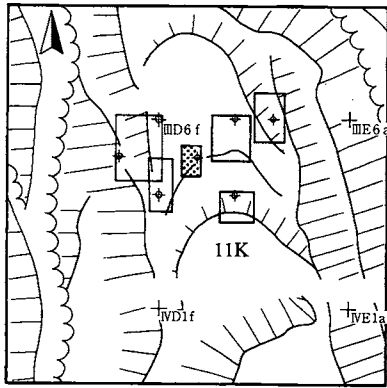
遺構 (第72・82図 写真図版43)

<位置> 調査区ⅢD 6 f～ⅢD 7 gグリッド、標高479.7mの主郭の下段と中段の境界に位置する。10号集石の西4mに近接する。

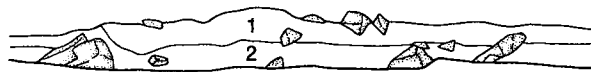
<規模・形態> 規模は、3.6×1.9mで不正楕円形状に石が広がる。主郭中段の整地層を支える土留めのための集石と考えられる。石は地山のスレートが用いられており、10号集石と同時期に構築されたものと考えられる。

<埋土・出土状況> 黒褐色土が主体となって構成されている。遺物は検出されていない。

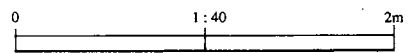
<時期> 15～17世紀初頭と考えられる。



A L = 480.100m A'



1. 10YR3/3~4/4暗褐色・褐色土の混合土 大礫含む
2. 2.5YR4/4 オリーブ褐色土 粘性…中 しまり…かなりあり



第72図 13号集石



## 9. 土坑

土坑は28基を登録した。24基は柱穴状の小土坑である。

### 1号土坑

遺構（第73・82図 写真図版32・44）

＜位置＞調査区ⅢD 9 g グリッド、標高481.0mに位置する。1号掘立柱建物跡のプラン内から検出された。2号土坑に近接する。

＜規模・形態＞ 規模は、開口部121×103cm、底部44×41cm、深さ56cmを測る。不整な楕円形を呈する。主郭の11号曲輪整地層下から検出された。地山の岩盤まで掘り込まれて構築されている。2号、4号、5号土坑に近接する。1号掘立柱建物跡が鍛冶工房の可能性を有するため、2号土坑とともにこれに伴う廃棄用施設とも考えられるが、遺物は検出されず、使用の痕跡も確認されなかった。

＜埋土・時期＞ 人為堆積を呈し、上部はにぶい黄褐色土に明黄褐色土がブロック状に混入する褐色土が、下部は灰黄褐色土が主体となって構成されている。遺物は出土していない。15～16世紀前半と考えられる。

### 2号土坑

遺構（第73・82図 写真図版32・44）

＜位置＞調査区ⅢD 9 g グリッド、標高481.2mに位置する。1号掘立柱建物跡のプラン内から検出された。1号土坑に近接する。

する。＜規模・形態＞ 規模は、開口部83×64cm、底部34×26cm、深さ42cmを測り、不整な円形を呈する。主郭の整地層下から検出された。1号、4号、5号土坑に近接する。掘立柱建物跡が鍛冶工房の可能性を有するため、1号土坑と同じくこれに伴う廃棄用施設とも考えられるが、遺物は検出されず、使用の痕跡も確認されなかった。

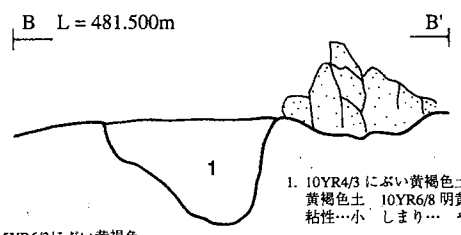
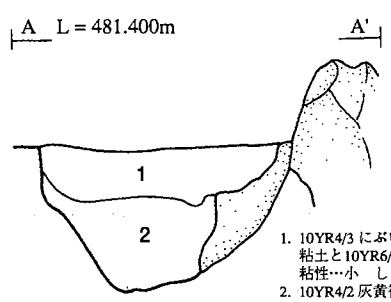
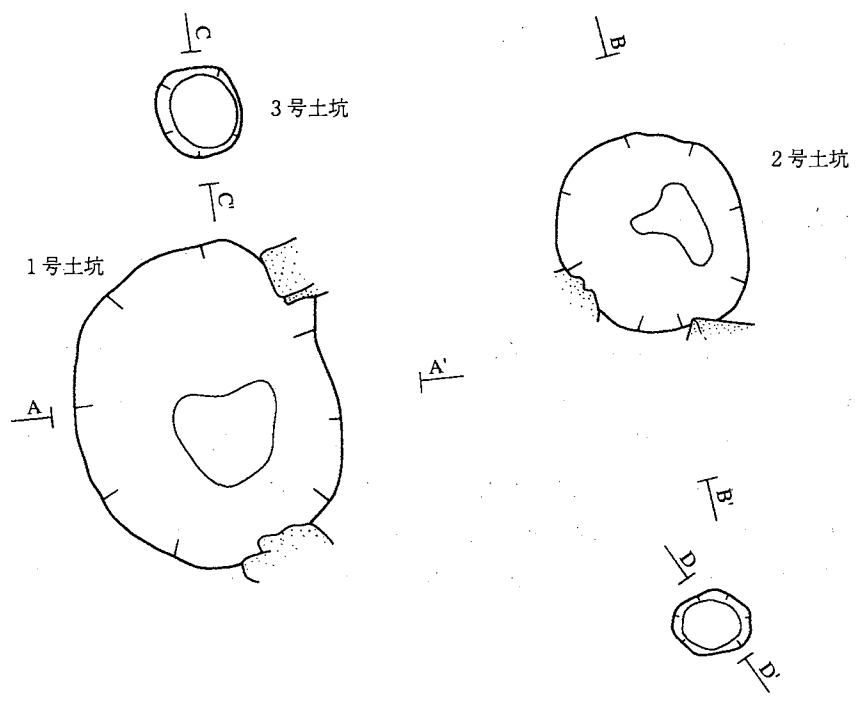
＜埋土・時期＞1号土坑と同様に人為堆積を呈する。埋土は、にぶい黄褐色土に明黄褐色土がブロック状に入る混合土により構成されている。遺物は出土していない。15～16世紀前半と考えられる。

### 3号土坑

遺構（第73・82図 写真図版32・44）

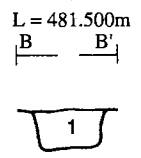
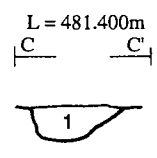
＜位置＞調査区ⅢD 9 g グリッド、標高481.0m、11号曲輪の1号掘立柱建物跡のプラン内に位置する。

＜規模・形態・埋土・時期＞11号曲輪の整地層下から検出された柱穴状の小土坑である。規模は、開口部38×32cm、深さ14cmを測り、不整な楕円形を呈する。1号掘立柱建物跡に付随する遺構と考えられる。埋土は褐色土が主体となっている。出土遺物はない。15～16世紀前半と考えられる。



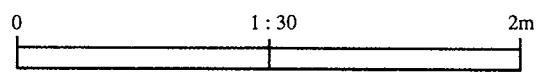
1. 10YR4/3 にぶい黄褐色土主体に 2.5YR6/3 にぶい黄褐色粘土と 10YR6/8 明黄褐色土を不とつくじょうに混入  
粘性…小 しまり…ややあり
2. 10YR4/2 灰黄褐色土、粘性…小 しまり…あり

1. 10YR4/3 にぶい黄褐色土主体に 2.5YR6/3 にぶい黄褐色土、10YR6/8 明黄褐色粘土をブロック状に混入  
粘性…小 しまり… ややあり 大礫含む



1. 10YR4/6 褐色土  
粘性…小 しまり…あり

1. 2.5YR4/3 オリーブ褐色土 (粘土質)  
粘性…小 しまり…あり



第73図 1号・2号・3号・4号土坑

#### 4号土坑

遺構（第73・82図 写真図版32・44）

＜位置＞調査区ⅢD 9 g グリッド、標高481.3 m、11号曲輪の1号掘立柱建物跡のプラン内に位置する。

＜規模・形態・埋土＞11号曲輪の整地層下から検出された柱穴状の小土坑である。規模は、開口部31×26 cm、深さ16 cmを測り、不整な楕円形を呈する。1号掘立柱建物跡に付随する遺構と考えられる。埋土は褐色土が主体となっている。出土遺物はない。

＜時期＞15～16世紀前半と考えられる。

#### 5号土坑

遺構（第74・82図 写真図版32・45）

＜位置＞調査区ⅢD 3 e グリッド、標高477.4 mの10号曲輪に位置する。

＜規模・形態＞10号曲輪北西端の整地層下から検出された。規模は、開口部60.6×(54.5) cmを測る。平面形の全容はトレンチにより失われたため不明であるが、残存部からほぼ円形を呈すると思われる。

焼土状の赤色土（酸化ホルンフェルス）を確認するためのトレンチ調査から検出された。

＜埋土・出土状況＞自然堆積を呈さず、埋土は小礫じりの褐色土が主体となって単層を成していることから、人為的に埋められたものと考えられる。遺物は出土していない。

遺物（第87図 写真図版8）

＜出土状況・時期＞埋土中から青磁（13）が出土した。15～16世紀前半と考えられる。

#### 6号土坑

遺構（第74・82図 写真図版32・45）

＜位置＞調査区ⅣD 1 h グリッド、標高409.0 m、11号曲輪南部の2号柱穴列の南西部北側に位置する。

＜規模・形態・埋土＞整地層下から検出された柱穴状の小土坑である。規模は、開口部33×32 cm、深さ28 cmを測り、円形を呈する。位置や検出状況から1、2号柱穴列に付随する遺構と考えられる。埋土は黄褐色土が主体となっている。粘性小しまりややあり。出土遺物はない。

＜時期＞15～17世紀初頭と考えられる。

#### 7号土坑

遺構（第74・82図 写真図版32・45）

＜位置＞調査区ⅣD 1 h グリッド、標高481.0 m 11号曲輪南部の1号、2号柱穴列南西部の中間に位置する。

＜規模・形態・埋土＞整地層下から検出された柱穴状の小土坑である。規模は、開口部32×28 cm、深さ28 cmを測り、不整な円形を呈する。位置と検出状況から1、2号柱穴列に付随する遺構と考えられる。埋土は炭化物が微量に混入する小礫じりの褐色土が主体となっている。

＜時期＞15～17世紀初頭と考えられる。

IVD 3 e



5号土坑



A L = 477.500m A'



1. 10YR4/6 褐色土 粘性…小 しまり…あり

IVD 1 g



L = 481.200m  
B B'



1. 10YR5/6 黄褐色土 粘性…小  
しまり…ややあり 礫混入

L = 481.200m  
C C'



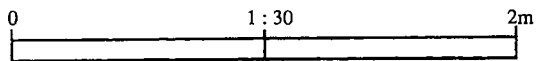
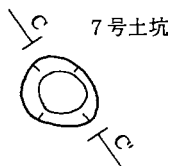
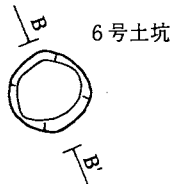
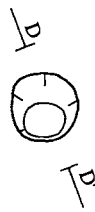
1. 10YR4/6 褐色土 粘性…小  
しまり…あり 炭化物微量 礫混入

L = 481.200m  
D D'



1. 10YR5/4 にぶい黄褐色土 粘性…小  
しまり…あり 礫混入

8号土坑



第74図 5号・6号・7号・8号土坑

## 8号土坑

遺構（第74・82図 写真図版32・45）

＜位置＞調査区ⅣD1gグリッド、標高481.2m、1号、2号柱穴列南西部の中間に位置する。

＜規模・形態・埋土＞11号曲輪の整地層下から検出された柱穴状の小土坑である。規模は、開口部28×27cm、深さ31cmを測り、不整な円形を呈する。位置や検出状況から1、2号柱穴列に付随する遺構と考えられる。埋土は礫を含むにぶい黄褐色土が主体となっている。出土遺物はない。

＜時期＞15～17世紀初頭と考えられる。

## 9号土坑

遺構（第75・82図 写真図版32・46）

＜位置＞調査区ⅢD10iグリッド、標高481.4m11号曲輪南部の2号柱穴列の北側に位置する。

＜規模・形態・埋土・時期＞11号曲輪の整地層下から検出された柱穴状の小土坑である。規模は、開口部34×32cm、深さ39cmを測り、不整な円形を呈する。位置や検出状況から1、2号柱穴列に付随する遺構と考えられる。埋土は小礫を含む褐色土が主体となっている。出土遺物はない。15～17世紀初頭と考えられる。

## 10号土坑

遺構（第75・82図 写真図版32・46）

＜位置＞調査区ⅢD10iグリッド、標高481.3m11号曲輪南部の2号柱穴列の北側に位置する。

＜規模・形態・埋土＞11号曲輪の整地層下から検出された柱穴状の小土坑である。規模は、開口部28×26cm、深さ21cmを測り、不整な円形を呈する。位置や検出状況から1、2号柱穴列に付随する遺構と考えられる。埋土は褐色土が主体となっている。出土遺物はない。

＜時期＞15～17世紀初頭と考えられる。

## 11号土坑

遺構（第75・82図 写真図版32・46）

＜位置＞調査区ⅡC1jグリッド、標高471.8m、8号曲輪西側に位置する。

＜規模・形態・埋土・時期＞8号曲輪の整地層下から検出された柱穴状の小土坑で12号土坑の60cm西側に並列する。規模は、開口部36×33cm、深さ17cmを測り、楕円形を呈する。埋土は炭化物を含む黄褐色土が主体となっている。出土遺物はない。15～17世紀初頭と考えられる。

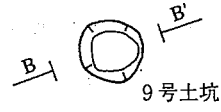
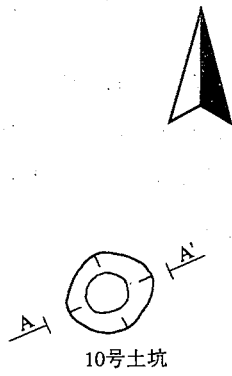
## 12号土坑

遺構（第72・82図・写真図版32・46）

＜位置＞調査区ⅡC1jグリッド、標高472.0m、8号曲輪西側に位置する。

＜規模・形態・埋土・時期＞8号曲輪の整地層下から検出された柱穴状の小土坑で11号土坑の60cm東に並列する。規模は、開口部45×30cm、深さ30cmを測り、不整な円形を呈する。埋土は小礫を含む黄褐色土が主体となっている。出土遺物はない。

＜時期＞15～17世紀初頭と考えられる

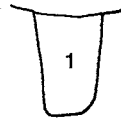
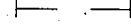


A L = 481.500m A'

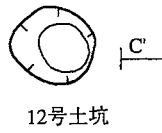
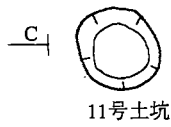


1. 10YR4/6 褐色土 粘性…小  
しまり…ややあり

B L = 481.700m B'



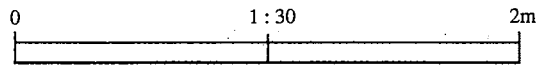
1. 10YR4/6 褐色土 粘性…小  
しまり…ややあり 小礫多く



C L = 472.200m



1. 10YR5/6 黄褐色土 粘性…小 しまりあり  
炭化物を微量混入  
2. 10YR5/6 黄褐色土 粘性…小 しまりあり  
小礫を含む



第75図 9号・10号・11号・12号土坑

### 13号土坑

遺構（第76・82図 写真図版32・47）

＜位置＞調査区ⅢD1aグリッド、標高472.1m、8号曲輪西側に位置する。

＜規模・形態・埋土＞8号曲輪のトレンチ調査で整地層下から検出された柱穴状の小土坑である。規模は、開口部(30)×(28)cm、深さ27cmを測り、トレンチにより南西側が失われ全容は不明であるが楕円形を呈すると考えられる。埋土は褐色土が主体となっている。出土遺物はない。

＜時期＞15～17世紀初頭と考えられる。

### 14号土坑

遺構（第76・82図 写真図版32・47）

＜位置＞調査区ⅢC2jグリッド、標高471.13m、8号曲輪西側の8号切岸上部に位置する。

＜規模・形態・埋土＞8号曲輪から8号切岸のトレンチ調査で整地層下から検出された。規模は、開口部(83)×(46)cm、深さ36cmを測り、トレンチにより北西側は失われているが楕円形を呈する。埋土は砂を含む暗褐色土が主体となっている。土坑上部の整地層には炭化物が含まれていた。出土遺物はない。

＜時期＞15～16世紀前半と考えられる。

### 15号土坑

遺構（第76・82図 写真図版32・47）

＜位置＞調査区ⅢD2aグリッド、標高471.9m、8号曲輪西側に位置する。

＜規模・形態・埋土＞整地層下から検出された柱穴状の小土坑である。規模は、開口部46×44cm、深さ13cmを測り、不整な円形を呈する。16号土坑の北西約1mに近接する。埋土は黄褐色土が主体となっている。

＜時期＞14号土坑と同じ15～16世紀前半と考えられる。

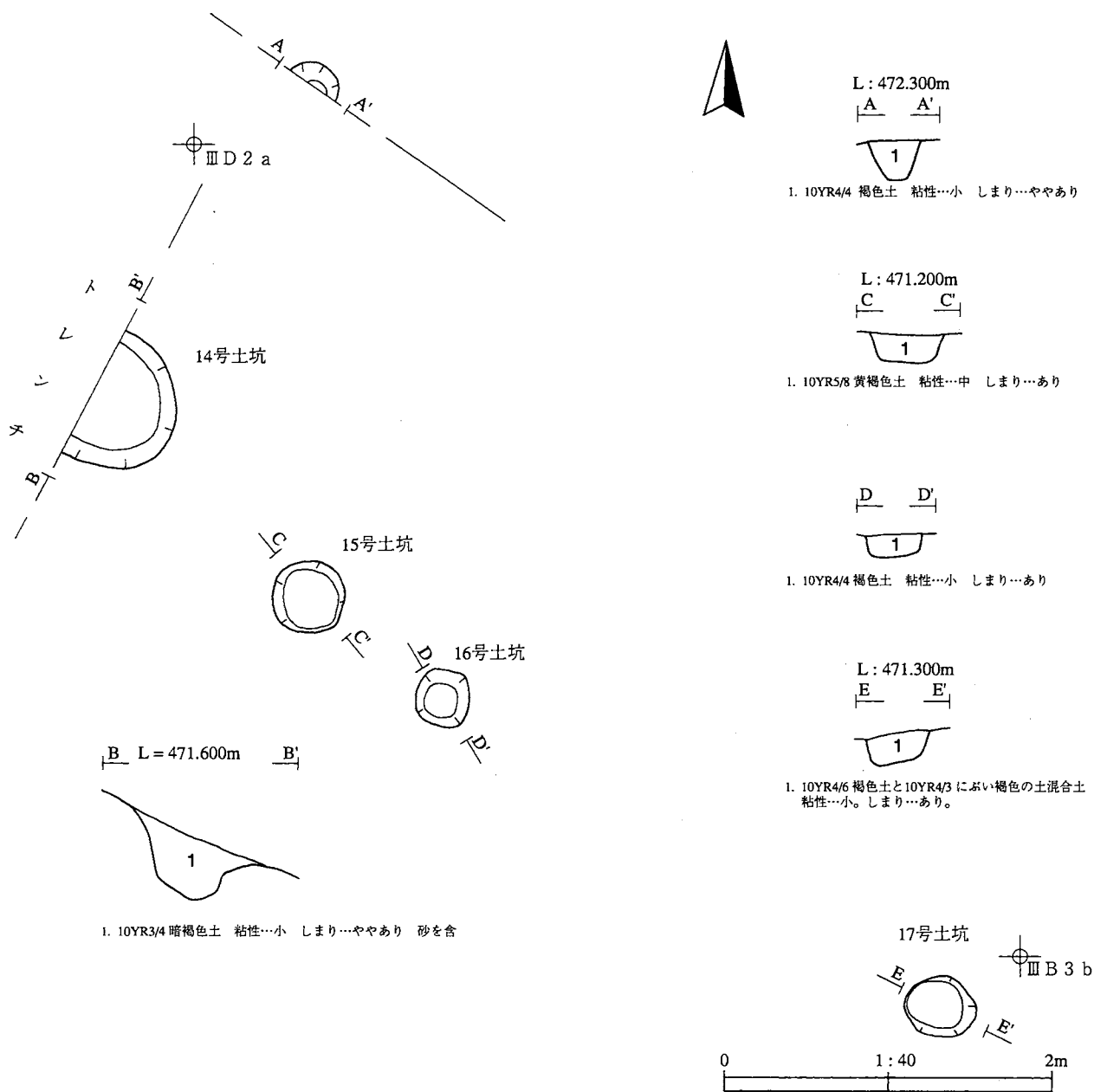
### 16号土坑

遺構（第76・82図 写真図版32・47）

＜位置＞調査区ⅢD2aグリッド、標高471.9m、8号曲輪西側に位置する。

＜規模・形態・埋土＞整地層下から検出された柱穴状の小土坑である。規模は、開口部33×33cm、深さ13cmを測り、隅丸方形を呈する。15号土坑の南東1mに並ぶ。埋土は褐色土が主体となっている。出土遺物はない。

＜時期＞14、15号土坑と同じ15～16世紀前半と考えられる。



第76図 13号・14号・15号・16号・17号土坑

### 17号土坑

遺構 (第76・82図 写真図版32・48)

<位置>調査区ⅢD 3 aグリッド、標高471.6m、8号曲輪西側に位置する。

<規模・形態・埋土>整地層下から検出された柱穴状の小土坑である。13～17号土坑に近接する。規模は、長軸42cm、短軸36cm、深さ18cmを測り、隅丸方形を呈する。15号土坑の南東1mに並ぶ。埋土は褐色土と黄褐色土の混合土が主体となっている。出土遺物はない。

<時期>15～16世紀前半と考えられる。



## 18号土坑

遺構（第77・85図 写真図版32・48）

＜位置＞調査区ⅣE4 aグリッド、標高484.6 m、16号曲輪整地層下の17号曲輪南東側に位置する。

＜規模・形態・埋土＞柱穴状の小土坑で18号、19号、20号土坑に近接する。規模は、開口部18×17 cm、深さ10 cmを測り、不整な円形を呈する。埋土は暗褐色土が主体となっている。出土遺物はない。

＜時期＞15～16世紀前半と考えられる。

## 19号土坑

遺構（第77・85図 写真図版32・48）

＜位置＞調査区ⅣE4 aグリッド、標高484.6 m、16号曲輪整地層下の17号曲輪南東側に位置する。

＜規模・形態・埋土＞柱穴状の小土坑で17号、19号、20号土坑に近接する。規模は、開口部18×16 cm、深さ20 cmを測り、不整な円形を呈する。埋土は褐色土が主体となっている。出土遺物はない。

＜時期＞15～16世紀前半と考えられる。

## 20号土坑

遺構（第77・85図 写真図版32・48）

＜位置＞調査区ⅣE4 aグリッド、標高484.6 m、16号曲輪整地層下の17号曲輪南東側に位置する。

＜規模・形態・埋土＞17号、18号、20号土坑に近接する柱穴状の小土坑である。規模は、開口部26×22 cm、深さ16 cmを測り、不整な隅丸方形を呈する。埋土は褐色土が主体となっている。出土遺物はない。

＜時期＞15～16世紀前半と考えられる。

## 21号土坑

遺構（第77・85図 写真図版32・48）

＜位置＞調査区ⅣE3 a～ⅣE4 aグリッド、標高484.3 m、17号曲輪の東側2号切岸上部に位置する。

＜規模・形態・埋土＞17号、18号、19号土坑に近接する柱穴状の小土坑である。規模は、開口部25×22 cm、深さ16 cmを測り、不整な円形を呈する。埋土は暗褐色土とにぶい黄褐色土が主体となっている。出土遺物はない。

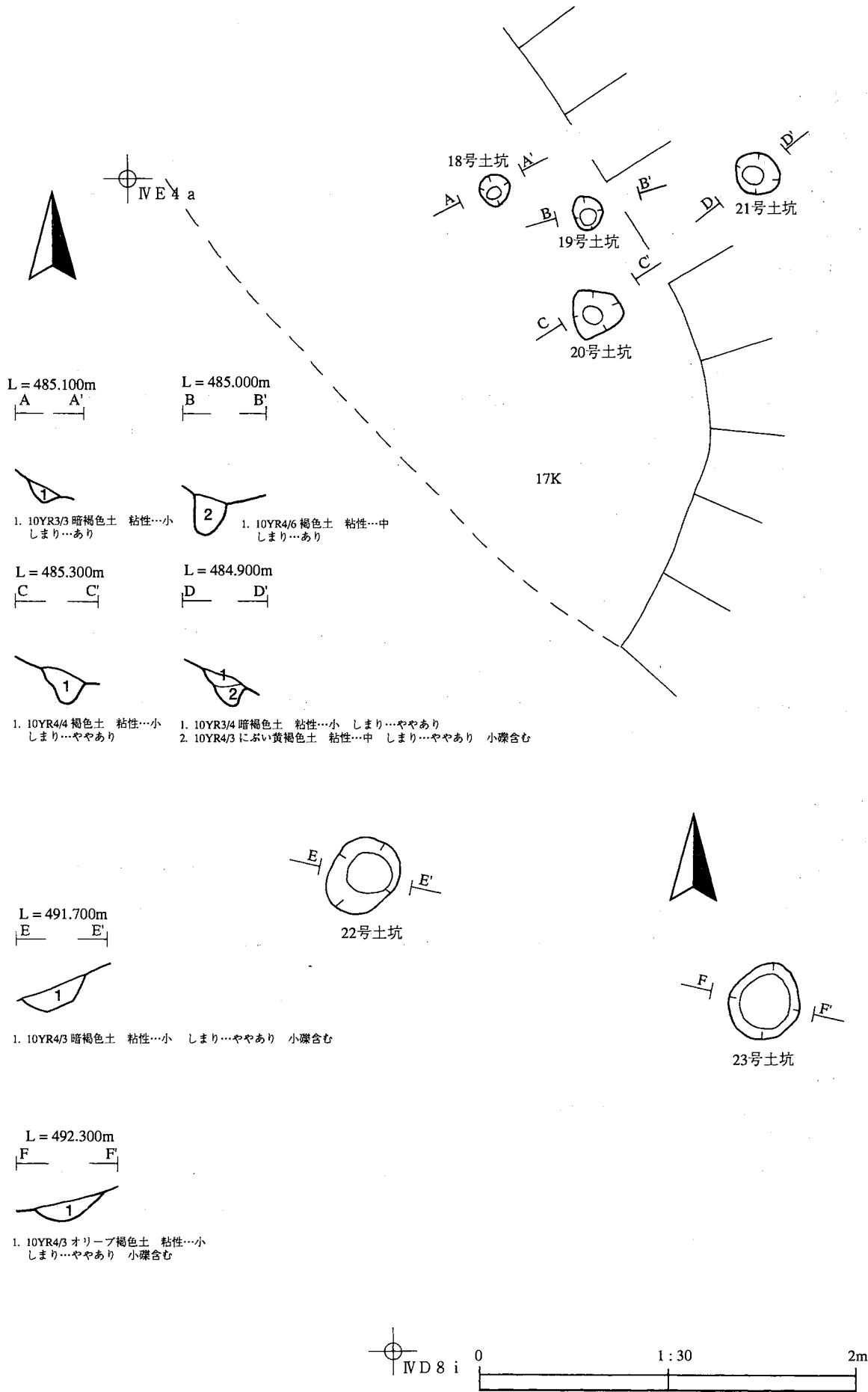
＜時期＞15～16世紀前半と考えられる。

## 22号土坑

遺構（第77・85図 写真図版32・49）

＜位置＞調査区ⅣD7 iグリッド、標高491.5 m、22号曲輪の南西側に位置する。

＜規模・形態・埋土・時期＞整地層下から検出された柱穴状の小土坑である。規模は、開口部42×32 cm、深さ11 cmを測り、不整な楕円形を呈する。5号柱穴列に付随する遺構と考えられる。埋土はにぶい小礫を含む黄褐色土が主体となっている。出土遺物はない。15～17世紀初頭と考えられる。



第77図 18号・19号・20号・21号・22号・23号土坑

## 23号土坑

遺構（第77・82図 写真図版32・49）

<位置>調査区ⅣD7iグリッド、標高492.2m、22号曲輪の南側に位置する。

<規模・形態・時期>整地層下から検出された柱穴状の小土坑である。規模は、開口部42×37cm、深さ10cmを測り、不整な円形を呈する。5号柱穴列に付随する遺構と考えられる。出土遺物はない。15～17世紀初頭と考えられる。

## 24号土坑

遺構（第78・82図 写真図版32・49）

<位置>調査区ⅣD7iグリッド、標高492.8m、22号曲輪南側に位置する。

<規模・形態・時期>整地層下から検出された柱穴状の小土坑である。規模は、開口部47×41cm、深さ14cmを測り、不整な楕円形を呈する。5号柱穴列に付随する遺構と考えられる。出土遺物はない。15～17世紀初頭と考えられる。

## 25号土坑

遺構（第78・82図 写真図版32・49）

<位置>調査区ⅣD7グリッド、標高492.6m、22号曲輪南東側に位置する。

<規模・形態・埋土・時期>整地層下から検出された柱穴状の小土坑で5号柱穴列に付随する遺構と考えられる。規模は、開口部47×35cm、深さ10cmを測り、不整な楕円形を呈する。出土遺物はない。

<時期>15～17世紀初頭と考えられる。

## 26号土坑

遺構（第78・82図 写真図版50）

<位置>調査区ⅢE3dグリッド、標高462.5m、23号曲輪北東端に位置する。

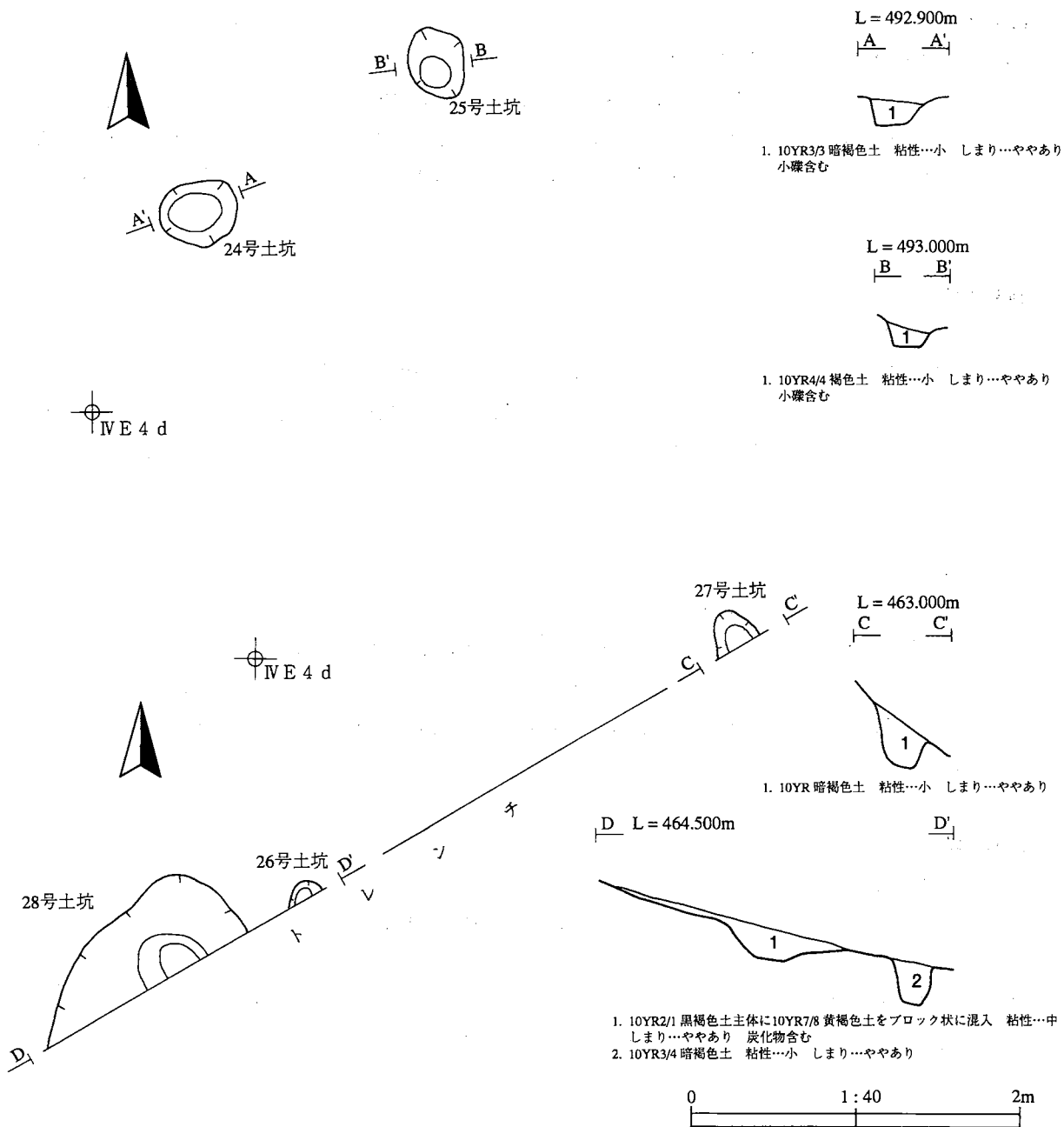
<規模・形態・時期>26号曲輪のトレンチ調査から検出された柱穴状の小土坑である。規模は、開口部(42)×(28)cm、深さ27cmを測る。平面形の全容はトレンチにより失われたため不明であるが、残存部からほぼ楕円形を呈すると思われる。出土遺物はない。15～17世紀初頭と考えられる。

## 27号土坑

遺構（第78・82図 写真図版50）

<位置>調査区ⅢE4dグリッド、標高463.7m、23号曲輪北東端に位置する。

<規模・形態・時期>26号曲輪のトレンチ調査から検出された柱穴状の小土坑である。26号、28号土坑の中間に位置する。規模は、開口部(24)×(18)cm、深さ26cmを測る。平面形の全容はトレンチにより失われたため不明であるが、残存部から不整な円形を呈すると思われる。出土遺物はない。15～17世紀初頭と考えられる。



第78図 24号・25号・26号・27号・28号土坑

### 28号土坑

遺構 (第78・82図 写真図版50)

<位置>調査区Ⅲ E 4 c グリッド、標高464.0m、26号曲輪北東端に位置する。

<規模・形態・埋土>26号曲輪のトレンチ調査から検出された土坑で26号、27号土坑の西側に並列する。規模は、開口部 (158) × 100cm、深さ30cmを測る。平面形の全容はトレンチにより失われているため不明であるが、残存部から不整な円形を呈すると思われる。埋土は褐色土が主体となっている。出土遺物はない。  
<時期>15～17世紀初頭と考えられる。

## 10. 焼土遺構

焼土遺構は、12基を登録した。また、現地性のない焼土ブロックは標高460～470m、ⅢD 3 h～ⅢD 10 j グリッドと標高482～489mのⅣD 2 f～ⅣDⅤE 5 a グリッドで多数検出された。登録した焼土遺構は、検出状況から全てすべて館と同時期の15～17世紀初頭のものと考えられる。

### 1号焼土

遺構（第79・83図 写真図51版）

＜位置＞調査区側の標高450.2m付近、ⅢC 1 a グリッドに位置する。2号曲輪下に埋められた4号堀底面から検出された。

＜規模・形態＞ 平面形は楕円形を呈し、規模は、54×43cmを測る。焼土の厚さは9cmを測る。

＜出土状況＞ 遺物は出土していない。＜時期＞時期は2号曲輪普請以前の15～16世紀前半と考える。

### 2号焼土

遺構（第79・82図 写真図版51）

＜位置＞調査区側の標高460.4m付近、ⅢC 5 h グリッドに位置する。尾根西側7号切岸整地層上部から検出された。

＜規模・形態＞ 平面形は不正な楕円形を呈し、規模は、41×37cmを測る。焼土の厚さは16cmを測り、上部は炭化物を含有する。

＜出土状況＞ 遺物は出土していない。

### 3号焼土

遺構（第79・82・85図 写真図版51）

＜位置＞調査区側の標高485.5m付近、ⅣD 3 f グリッドに位置する。主郭南側の19号曲輪整地層から検出された。

＜規模・形態＞ 平面形は不正な楕円形を呈し、規模は、29×28cmを測る。焼土の厚さは5cmを測り、上部は炭化物を含有する。

＜出土状況＞ 遺物は出土していない。

### 4号焼土

遺構（第79・84図 写真図版51）

＜位置＞調査区側の標高463.0m付近、ⅢC 9 i～ⅢC 10 j グリッドに位置する。切岸の整地層下に埋没していた15号曲輪の西端から検出された。

＜規模・形態＞ 平面形は不正形を呈し、1.8×0.7mの範囲に散在する。焼土の厚さは10cmを測り、上部は炭化物を含有する。

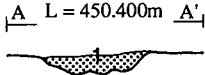
＜出土状況＞ 遺物は出土していない。

III C 1 b

III C 6 i



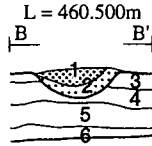
1号焼土



- 1. 5YR3/4 赤褐色土 粘性…中 しまり…ややあり

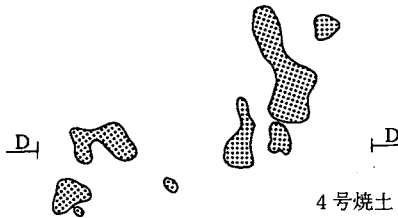


2号焼土

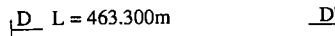


- 1. 5YR4/4 赤褐色土 粘性…中 しまり…ややあり
- 2. 7.5YR3/4 赤褐色土 粘性…中 しまり…ややあり
- 3. 10YR4/4 褐色土 粘性…中 しまり…ややあり
- 4. 10YR2/3 黒褐色土 粘性…中 しまり…ややあり
- 5. 10YR1.7/1 黒色土 粘性…中 しまり…ややあり 炭化物含む
- 6. 10YR3/4 暗褐色土 粘性…中 しまり…ややあり

IV D 3 g



4号焼土



- 1. 5YR4/6 赤褐色土 粘性…小 しまり…ややあり
- 2. 10YR4/3 赤褐色土と5YR4/6 赤褐色土の混合土 粘性…小 しまり…かなりあり
- 3. 10YR4/3 赤褐色土 粘性…小 しまり…かなりあり

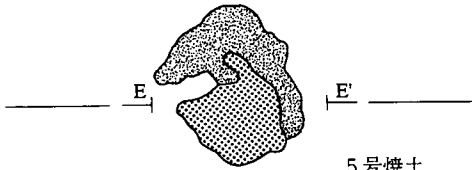
III C 9-10 i



3号焼

- 1. 5YR4/6 赤褐色土 粘性…小 しまり…ややあり

L = 485.800m



5号焼土

L = 473.700m

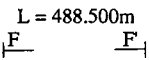


- 1. 2.5YR4/8 赤褐色土 粘性…小 しまり…ややあり
- 2. 10YR2/3 黒褐色土 粘性…小 しまり…ややあり 炭化物含む

III D 10 d

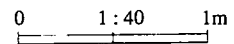


6号焼土



- 1. 5YR4/6 赤褐色土 粘性…小 しまり…ややあり

IV F 6 a



第79図 1号・2号・3号・4号・5号・6号焼土遺構

## 5号焼土

遺構（第79・82図 写真図版52）

＜位置＞調査区の標高473.5m付近、ⅢD9dグリッドに位置する。土層を確認するためのトレンチ調査で13号曲輪整地層上部から検出された。

＜規模・形態＞ 平面形の全容は、トレンチ調査により南側が削平されたため不明であるが、検出された規模は、59×54cm、不整坊形を呈する。焼土の厚さは14cmを測り、周辺部及び上部は炭化物を含有する。

＜出土状況＞ 遺物は出土していない。

## 6号焼土

遺構（第79・82・85図 写真図版52）

＜位置＞調査区の標高488.3m付近、ⅣE5aグリッドに位置する。21号曲輪整地層下から検出された。

＜規模・形態＞ 平面形はほぼ円形を、規模は、31×22cmを測る。焼土の厚さは6cmを測り、上部は炭化物を含有する。地山の旧表土上にあったものが、曲輪の普清により整地層下に埋もれたと考えられる。

＜出土状況＞ 遺物は出土していない。

## 7号焼土

遺構（第80・85図 写真図版52）

＜位置＞調査区側の標高483.4m付近、ⅣD2gグリッドに位置する。主郭南西側10号切岸の整地層下に構築された2号テラス状遺構北端から検出された。主郭一帯の改築以前のものと考えられる。

＜規模・形態＞ 平面形は楕円形を呈し、規模は、56×25cmを測る。焼土の厚さは11cmを測り、上部は炭化物を含有する。礫を伴う。遺物は出土していない。

＜時期＞15～16世紀前半と考えられる。

## 8号焼土

遺構（第80・85図 写真図版52）

＜位置＞調査区側の標高483.0m付近、ⅣD1jグリッドに位置する。主郭南側の16号曲輪整地層、1号竪穴住居跡埋土上部から検出された。

＜規模・形態＞ 平面形は不正な楕円形を呈し、規模は、60×52cmを測る。焼土の厚さは13cmを測り、上部は炭化物を含有する。遺物は出土していない。

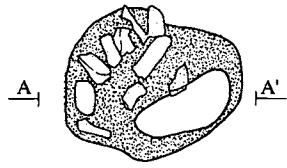
## 9号焼土

遺構（第80・85図 写真図版53）

＜位置＞調査区側の標高482.6m付近、ⅣD1jグリッドに位置する。主郭南東側の16号曲輪整地層下の1号竪穴住居跡床面直上から検出された。

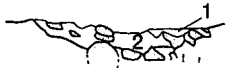
＜規模・形態＞ 平面形は楕円形を呈し、規模は、61×42cmを測る。焼土の厚さは8cmを測り、上部は炭化物を含有する。遺物は出土していない。

IV E 2 a



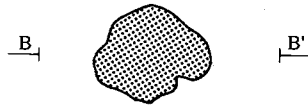
7号焼土

A L = 483.700m A'

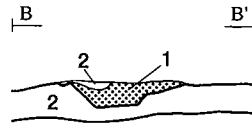


- 1. 10YR3/3 暗褐色土 粘性…小 しまり…ややあり 上部炭化物含む
- 2. 2.5YR4/8 赤褐色土 粘性…小 しまり…ややあり

IV D 2 h



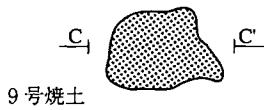
8号焼土



- 1. 5YR3/4 暗赤褐色土 粘性…小 しまり…ややあり
- 2. 10YR2/3 黒褐色土 粘性…小 しまり…ややあり 炭化物含む

IV D 1 j

IV D 2 i

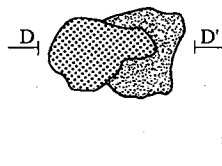


9号焼土

L = 482.800m



- 1. 5YR3/3 暗赤褐色土 粘性…中 しまり…ややあり 炭化物含む

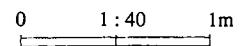


10号焼土

L = 486.200m



- 1. 5YR3/3 暗赤褐色土 粘性…中 しまり…ややあり



第80図 7号・8号・9号・10号焼土遺構



### 10号焼土

遺構（第80・82・85図 写真図版53）

＜位置＞調査区側の標高486.0m付近、ⅣD 2 hグリッドに位置する。主郭南側の18号曲輪整地層から検出された。

＜規模・形態＞ 平面形は不正な楕円形を呈し、規模は、56×39cmを測る。焼土の厚さは9cmを測り、上部は炭化物を含有する。

＜出土状況＞ 遺物は出土していない。

### 11号焼土

遺構（第81・82・85図 写真図版53）

＜位置＞調査区側の標高483.8m付近、ⅣD 2 jグリッドに位置する。主郭南側の16号曲輪整地層から検出された。

＜規模・形態＞ 平面形は不正な楕円形を呈し、規模は、43×33cmを測る。焼土の厚さは9cmを測り、上部は炭化物を含有する。

＜出土状況＞ 遺物は出土していない。

### 12号焼土

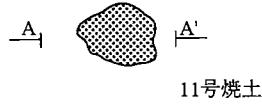
遺構（第81・82図 写真図版53）

＜位置＞調査区側の標高483.4m付近、ⅣD 2 jグリッドに位置する。主郭南側の16号曲輪整地層から検出された。

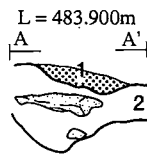
＜規模・形態＞ 平面形は不正な楕円形を呈し、約1.7×0.8mの範囲に散在する。焼土の厚さは14cmを測り、上部は炭化物を含有する。

＜出土状況＞ 遺物は出土していない。

WD3 j



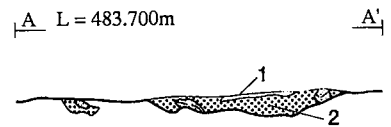
11号焼土



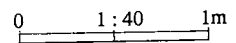
- 1. 5YR3/4 赤褐色土 粘性…中 しまり…ややあり
- 2. 10YR2/3 黒褐色土 粘性…中 しまり…ややあり 炭化物含む



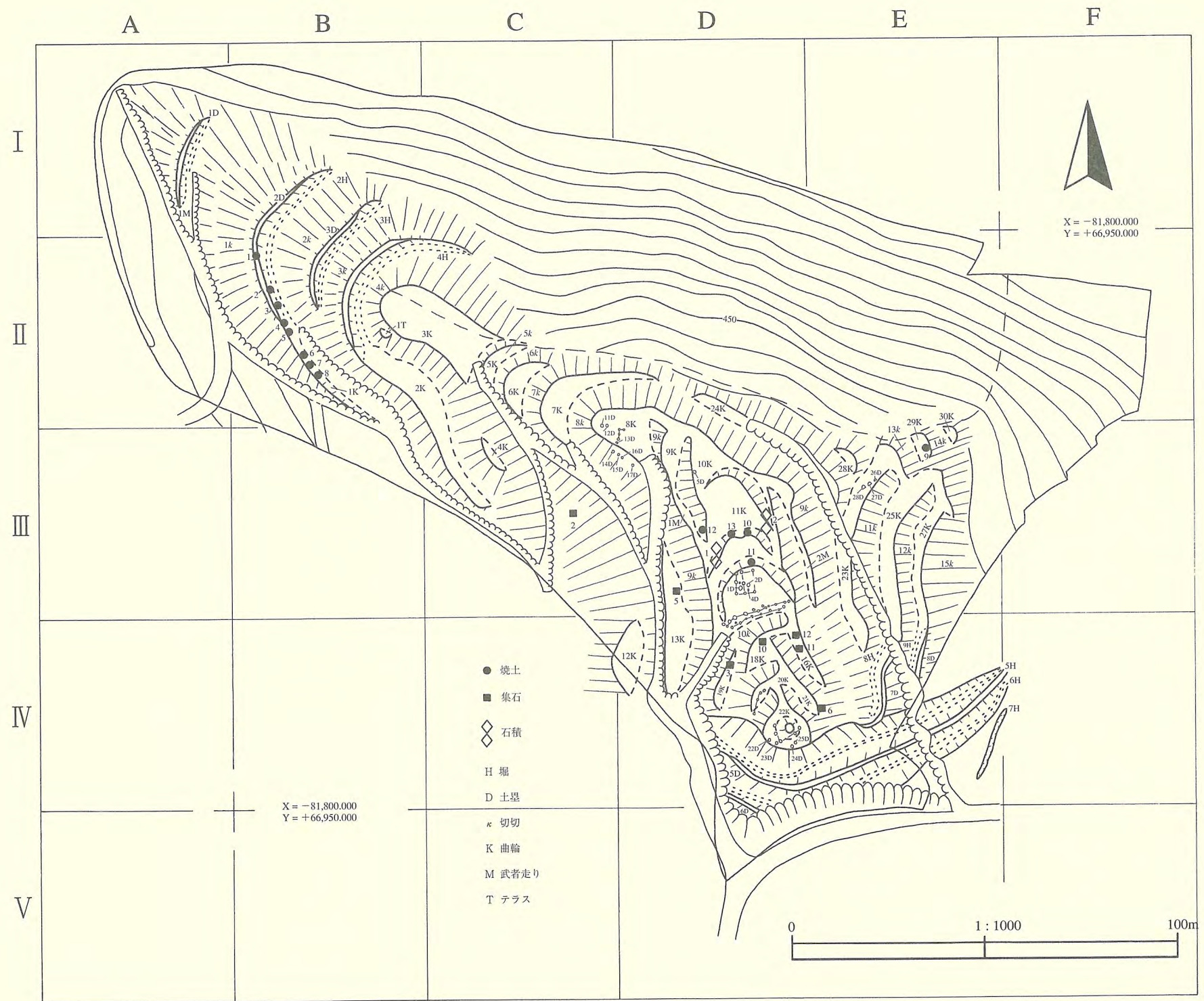
12号焼土



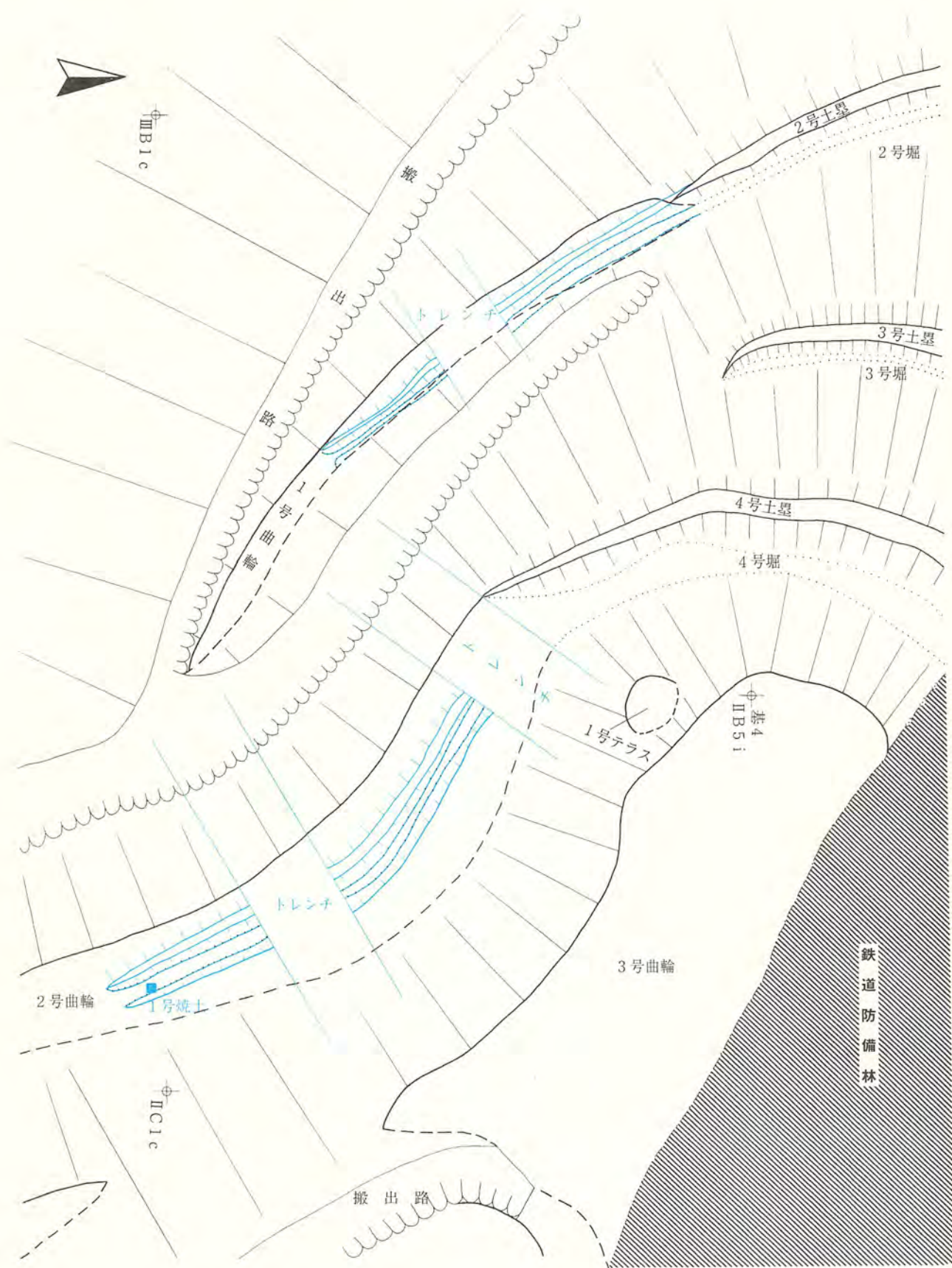
- 1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性…小 しまり…ややあり 炭化物含む
- 2. 5YR4/8 赤褐色土 粘性…小 しまり…ややあり



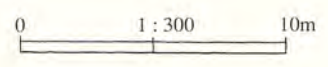
第81図 11号・12号焼土遺構

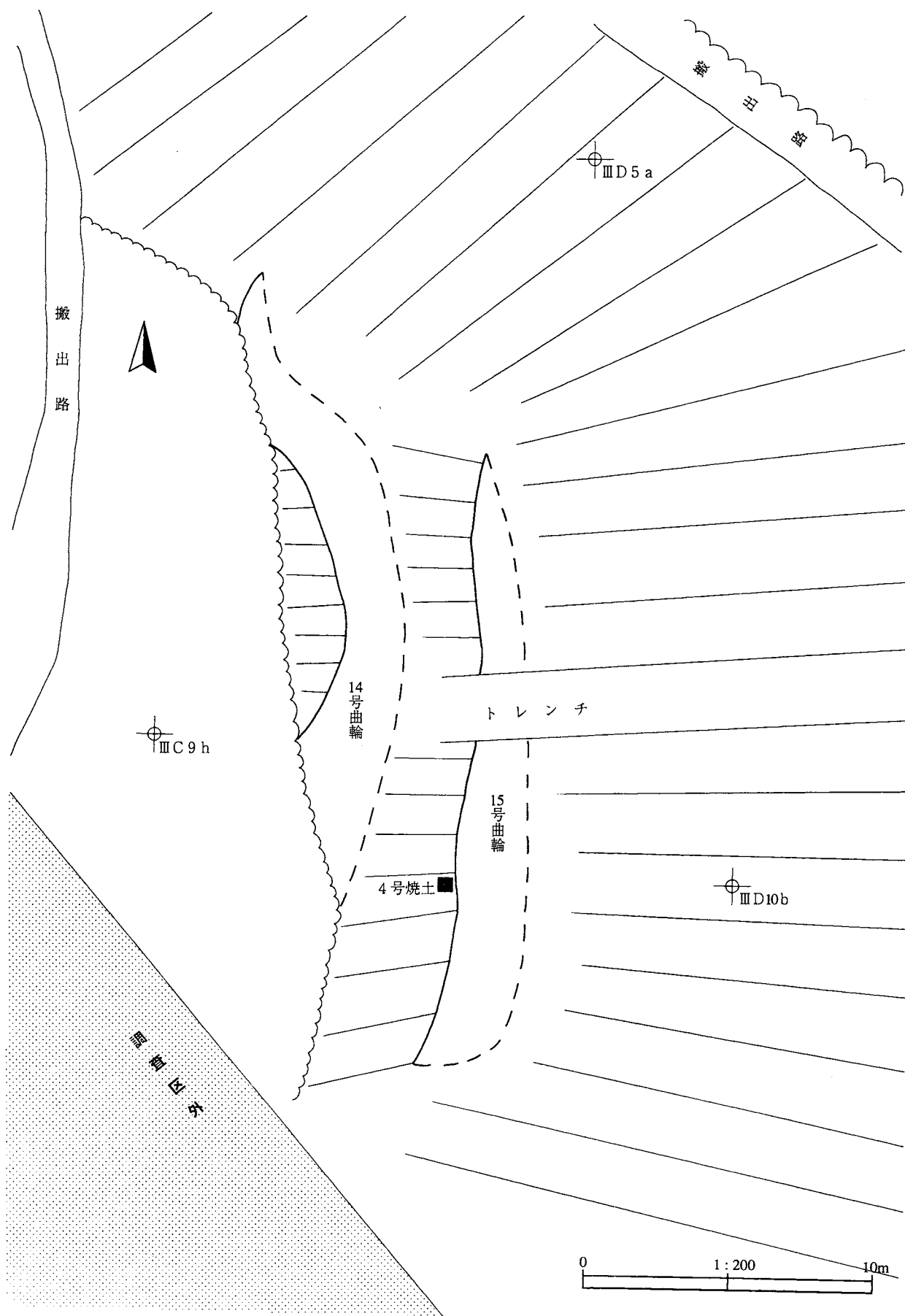


第82図 遺構配置図(1)

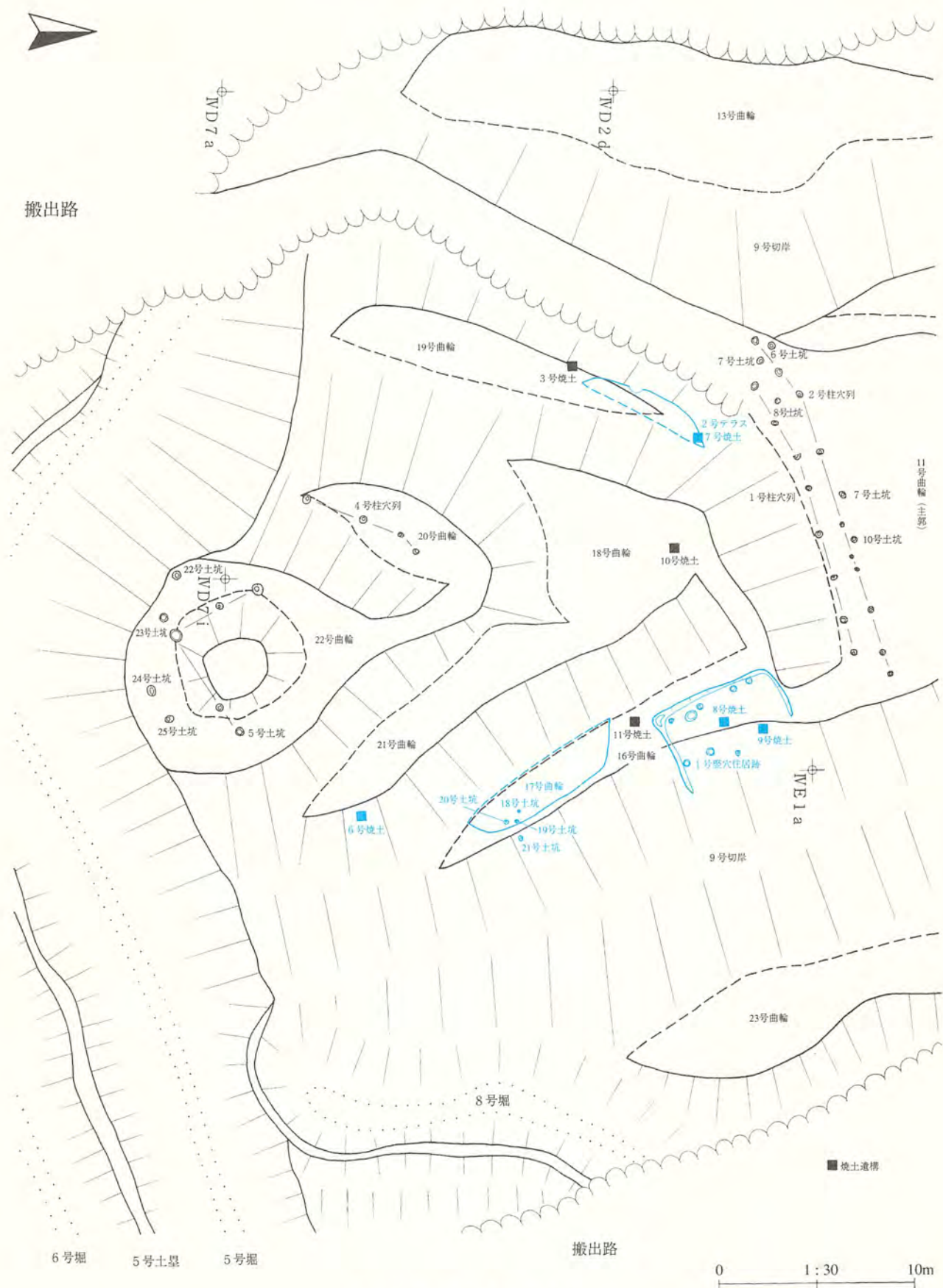


第83図 遺構配置図(2)

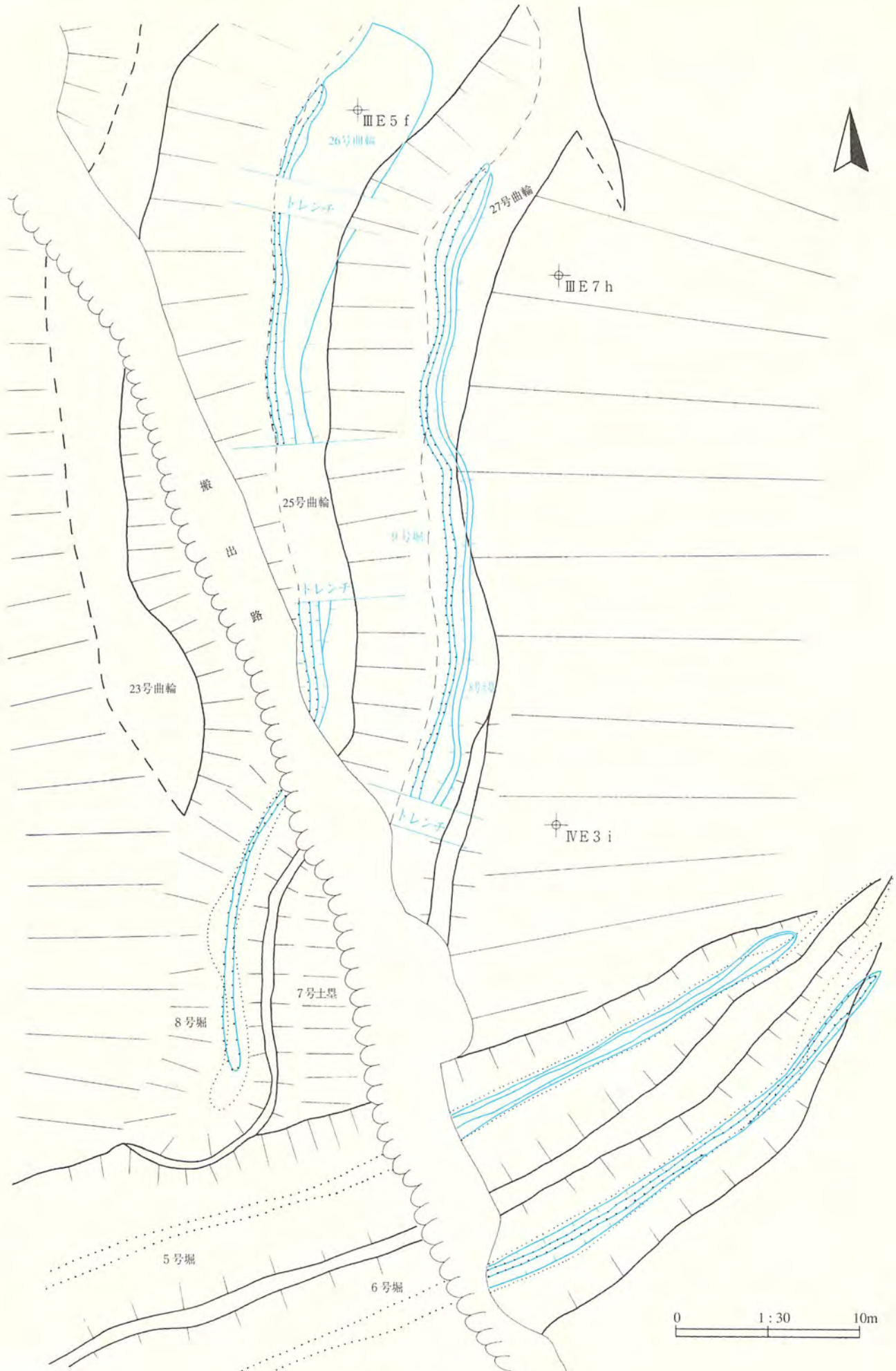




第84図 遺構配置図(3)



第85図 遺構配置図(4)



第86図 遺構配置図 (5)

## 11. 出土遺物

篠館跡から出土した遺物は、陶磁器類175点、石製品・石器53点、銭貨32点、その他の金属製品172点、木製品2点、骨角器1点、土器40点、鉱滓類25点である。陶磁器類や土器のほとんどは破片で、正確な個体数の把握は困難である。

### 1. 陶磁器

#### (1) 中国産磁器

##### 1) 青磁 (第87図 写真図版8)

18点が出土した。全て破片である。龍泉窯産と考えられる。

###### a 碗

碗は8点が出土し、内2点は同一個体(11・14)で被熱している。これらは、外面口縁部付近に篋描きの雷文帯を持つ。雷文帯の特徴から15世紀初頭頃の碗と考えられる。2は口縁部片で被熱しており器形等から11・14と同一固体と推定される。また、4は被熱した体部下部片で外面に連弁文が篋描きされているが、連弁文の全容は不明である。釉調はいずれも灰白色で厚く施され胎土は緻密な灰色を呈する。

口縁部片13と体部片8・17は、内外面に細かな貫入が入るが線描き篋削りの文様はない。

###### b 皿

皿は10点出土している。口縁部～腰部片は6点で全て外面無文、腰折れの稜花皿である。10・15の2点は同一個体で、口縁内面に2～3本の波状の沈線文が巡り、体部内面には篋描きの花文様が施され、内外面には粗い貫入がはいる。18も同様であるが2本の沈線文の幅が異なり平行に巡り、粗い貫入が内外面に入る。底部は残存しない。1は沈線文が4～5本と数を増す。3は不連続の2～3本の沈線文を持ち、内外面に細かな貫入が入る。16は沈線文を持たず体部内面に篋描き花文様が入る。

6・11・7は腰～底部片であるが、高台は剥落しており施釉方法や釉剥ぎの方法は不明である。内外面に貫入が入る。高台部を有するものは9の1点のみで高台部の小破片である。高台外面から畳付にも施釉されているが高台内面には施されていない。これらの皿の時期は15世紀初めから16世紀中頃である。

##### 2) 白磁 (第88図 写真図版9)

34点が出土した。ほとんどが小破片で、総個体数は不明である。

口縁部片は16点片が出土し、口縁が緩やかに内湾するもの(21・39・40・41・31・49)が6点、他は全て端反り皿である。21・23・39・40・41・26・29・28・27・44の10点は、乳濁釉と内外面の細かな貫入が入っていることが他の白磁に比して顕著な特徴で同一個体である。景德鎮系と思われる。畳付けは釉剥ぎれている。

また、380は漆による補修が施され、50は削り込み高台、24・46も畳付けの釉が剥がれている。37は38と釉調や胎土から同一個体と考えられる。

49・32・31は15世紀前半の小皿で腰部外面から高台部には施釉が施されず胎土が露呈し削り込みが入る。内面には細かな貫入が入る。33は接合不能であったがこれと同一個体と考えられる。また、壺と思われる胴部片が1点出土している。右4片以外の時期は、15世紀後半から16世紀のものである。



3) 染付 (第89・90・91図 写真図版10・11・54・55)

染付は、75片を検出した。全て破片で、個体総数は把握できない。器種は皿が36点、碗が30点で不明のものは8点が出土している。

a 皿

口縁部片は15点出土している。端反りが11点で、内1点(10)は角皿である。7は碁笥底皿の口縁である。また、底部片が13点、胴部片が9点出土している。高台付きの底部片は111・102・125・117・123・59・53・63・81・97・82の11点が出土し、81・89・63を除く7片は全て畳付が釉剥ぎされている。碁笥底の皿は103・54の2点で、同様に畳付に釉剥ぎが施されている。

胴部片は9点が出土している。77は外面に福の銘を持つ。

b 碗

口縁部は11点が出土している。底部片は7点、胴部片は12点が出土している。115・52・109・124・89の5点は高台部で、全て畳付は釉剥ぎがほどかされている。109は高台内側も釉剥ぎされている。また、115と52は同一個体で漳州窯産と考えられる。内外面に粗い貫入が入り畳付から高台内側には施釉されておらず、見込には「福」文を有す。

97・98・101の3点は、16世紀末から17世紀初頭、検出された赤絵と同時期のものと考えられる。また、

4) 赤絵 (第91図 写真図版7)

25号曲輪検出面から2片が出土した。口縁部と体部の破片である。一片は金箔が貼られている。時期は16世紀末から17世紀初頭と考えられる。

(2) 国産陶器

国産陶器は48点出土している。その内訳は瀬戸・美濃系灰釉陶器27点、同鉄釉陶器15点、唐津産陶器1点、産地不明の陶器1点、播鉢1点。瓦質土器2点、かわらけ1点である。

1) 瀬戸・美濃系灰釉陶器 (第92・93図 写真図版5・6)

27点が出土した。口縁部片は10点で、内8点(135・133・151・155・140・147・152)は端反り皿、2点(130・141)が直口の皿である。全て大窯Ⅰ期のものである。149・132・134は口径(11)cmのⅠa期の端反りの皿、138は口径12cmのⅠb期の端反りの皿である。底部片の3片(129・131・150)には目積がみられる。

2) 瀬戸美濃系鉄釉陶器 (第93図 写真図版4・7・55)

15点が主郭の1・2号柱穴列付近を中心に出土している。164・169以外は尾根筋5号～8号曲輪より東側で検出されている。完形に近いものは163の1点で天目茶碗である。他は全て破片であるが天目茶碗片と考えられる。体部下部から高台にサビ釉が施された大窯Ⅱ期(16世紀後半)のものである。

3) その他の陶器

瀬戸・美濃系以外の陶器類は5点が検出された。内訳は、唐津産陶器1点、播鉢1点、甕1点、火鉢2点である。

a 唐津産陶器 (第94図 写真図版55)

主郭の西側縁辺から1点が出土した。器形は18世紀に多く見られる碗である。

b 播鉢 (第91図 写真図版54)

8号曲輪で2点が出土した。体部の小破片で在地産と考えられる。

c 甕 (鉢)

8号曲輪で1点が出土した。体部の小破片で在地産と考えられる。

d 瓦質土器 (第94図 写真図版55)

8号曲輪の検出面から2点が出土した。火鉢の口縁部小破片で外面には雷文が入る。  
在地産と考えられる。

4) かわらけ (第94図 写真図版55)

2号武者走り付近から1点が出土した。ロクロ成形、口径は(11.5)cmである。

2. 銭貨 (第95～98図 写真図版56～58)

主郭周辺を中心に銭貨は、32点が出土した。調査区の北西側、尾根の先端部からは検出されていない。

初鑄年代が最も古いものは開元通貨(621)であり、最も新しいものは寛永通宝(1627年)である。最も多く出土したのは永楽通宝(1408年)で、私鑄銭と思われる無文銭は4点出土している。

3. 金属製品 (第99～105図 写真図版59～62)

尾根の先端調査区北西側をのぞくほぼ全面から小札、鉄鏃、鏹、鉞、釘、刀子、鑿、火打ち鎌、鍋片、火箸、筭など72点が出土した。

234は銅製で柄の飾り金具と思われるが詳細は不明である。

4. 石製品・石器 (第106～111図 写真図版63・64)

石製品は65点が出土した。中世のものは砥石、石鉢、石臼、硯である。また碁石と思われるものも11点出土している。

5. 羽口・炉壁・鉢滓 (第112・113図 写真図版65)

主郭周辺と4号堀までの尾根西側を中心に25点が出土した。

6. 縄文土器 (第114・115・116図・写真図版66・67)

標高455.0～455.0mの3号堀2号曲輪と4号切岸の標高465.0m周辺から集中して出土している。362・382の2点は、天王山式の退化交互刺突文を持つ。また、361は変形工字文を有する。

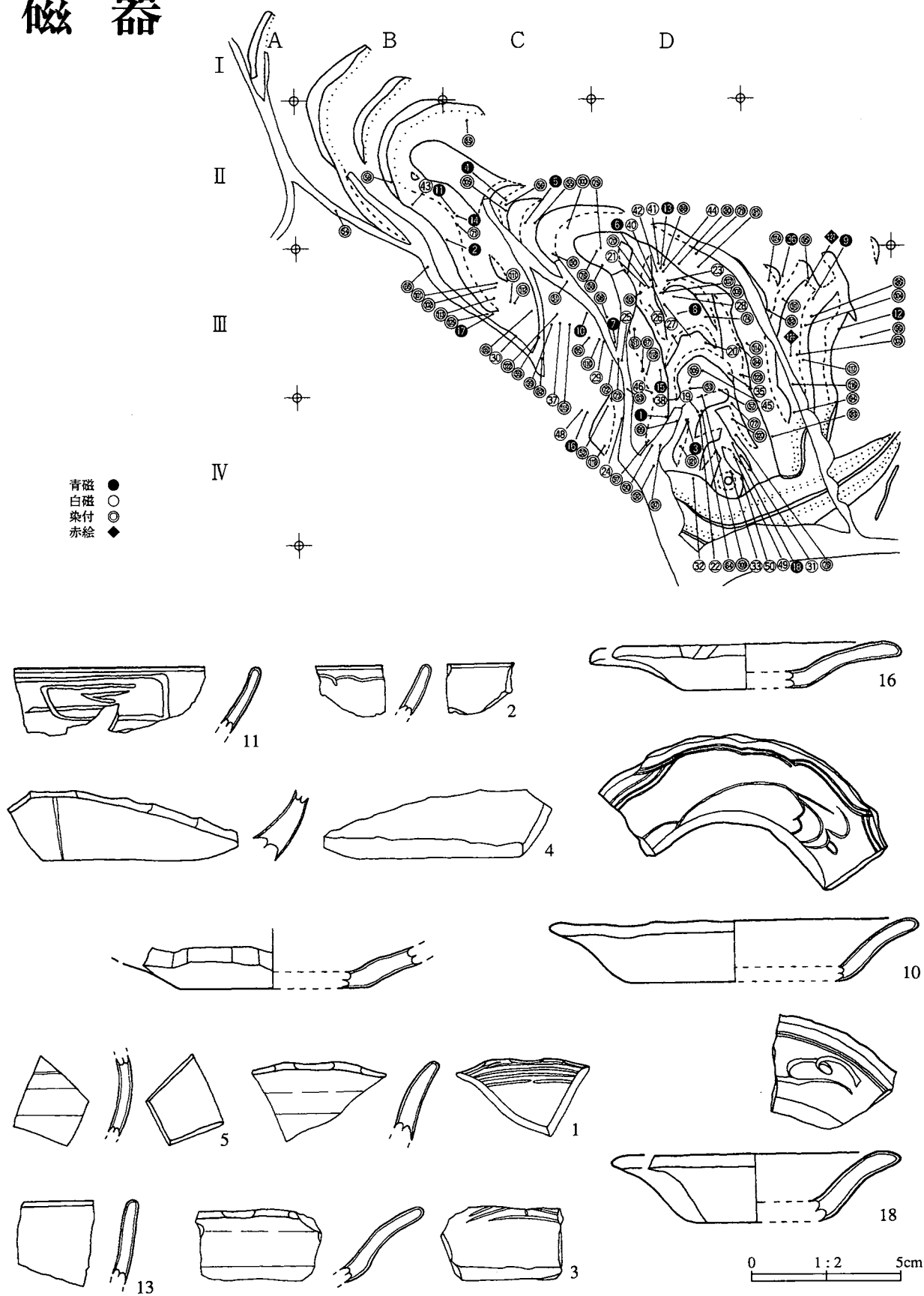
7. 木製品 (第116図 写真図版67)

20号曲輪と10号切岸から炭化した漆塗り碗の口縁部と底部の2片が出土した。

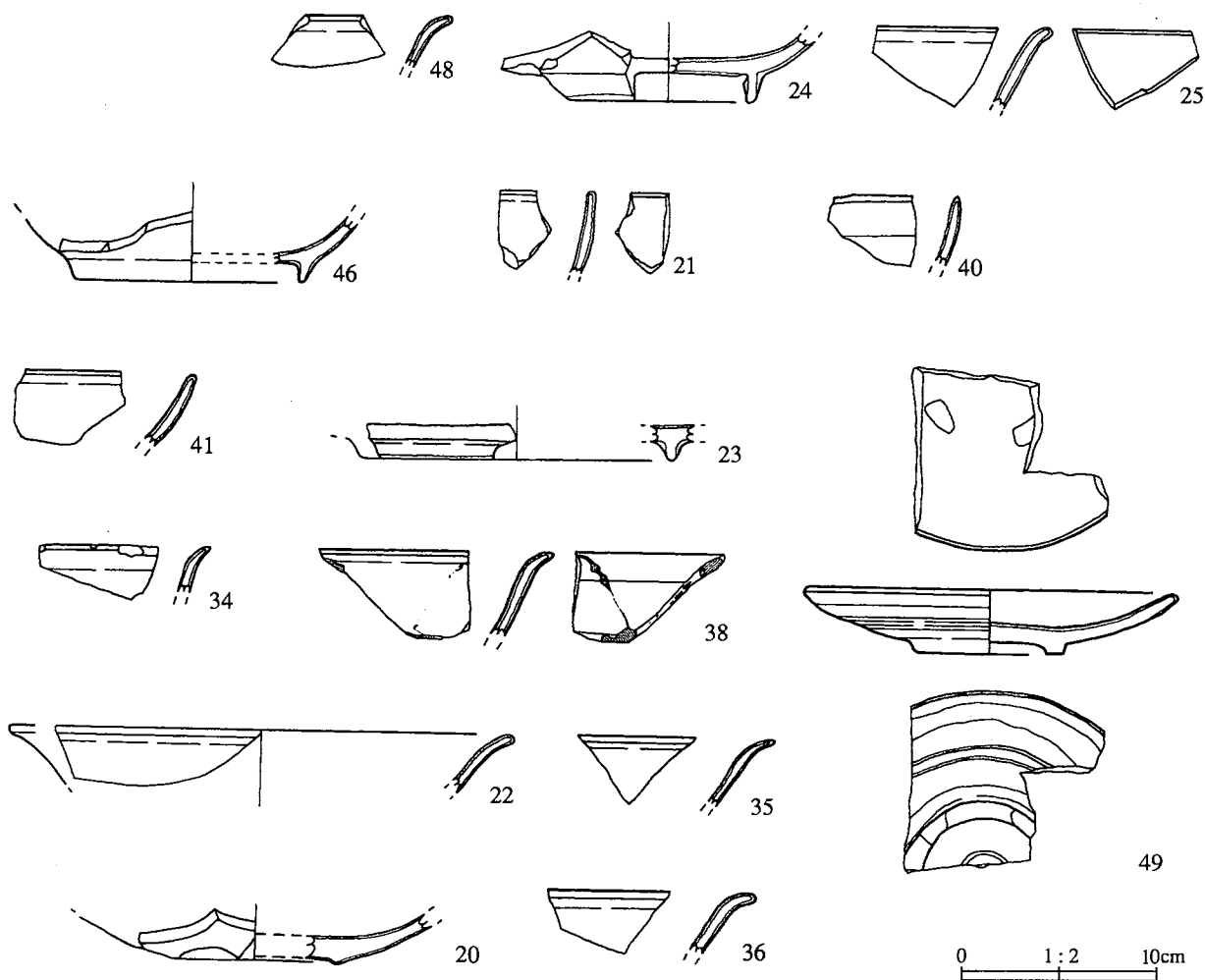
8. 骨角器 (第116図 写真図版67)

骨格器は21号曲輪から1点が出土した。器種、用途は不明である。

# 磁器



第87図 出土遺物（青磁）

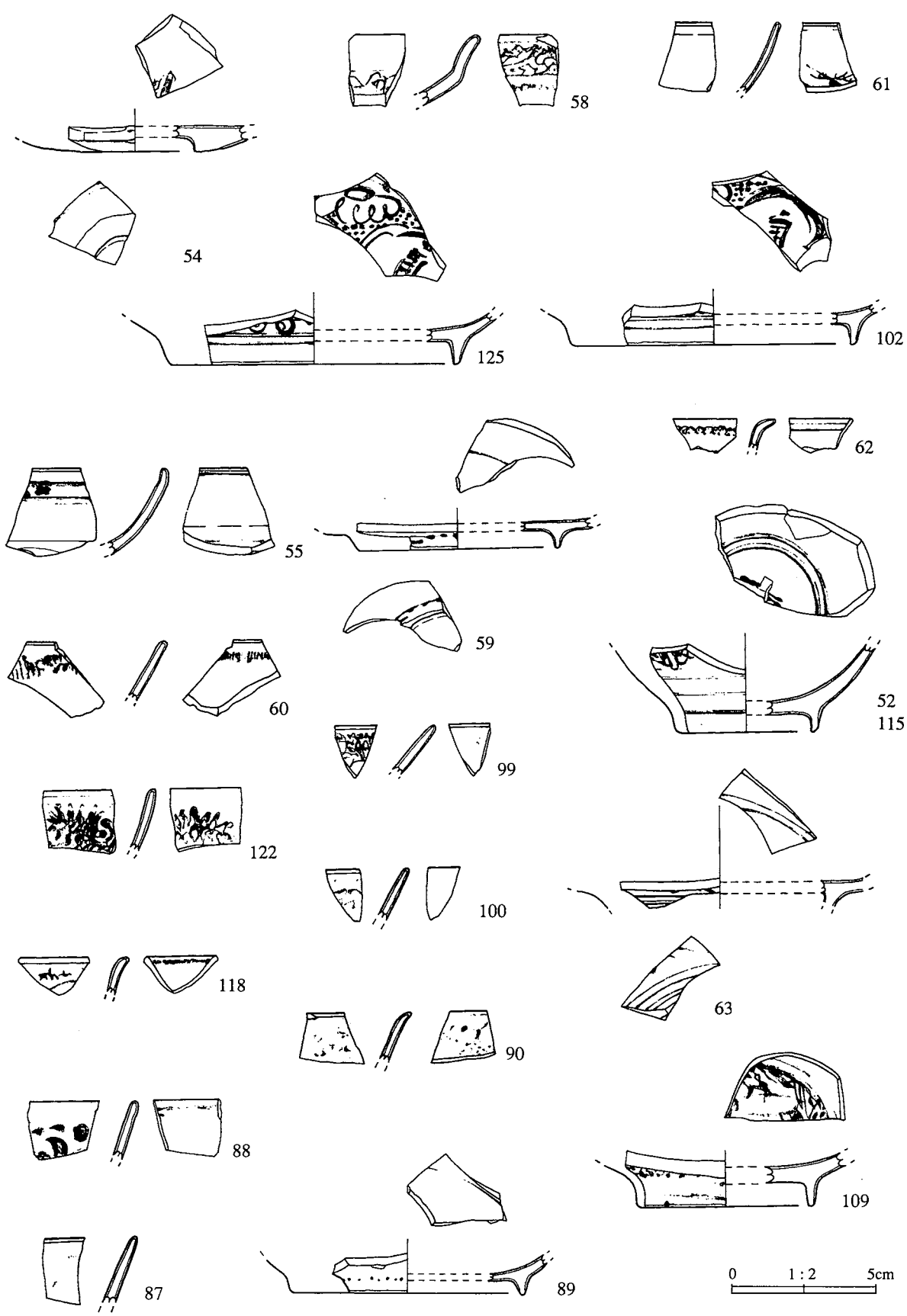


第3表 磁器(青磁) 観察表(1)

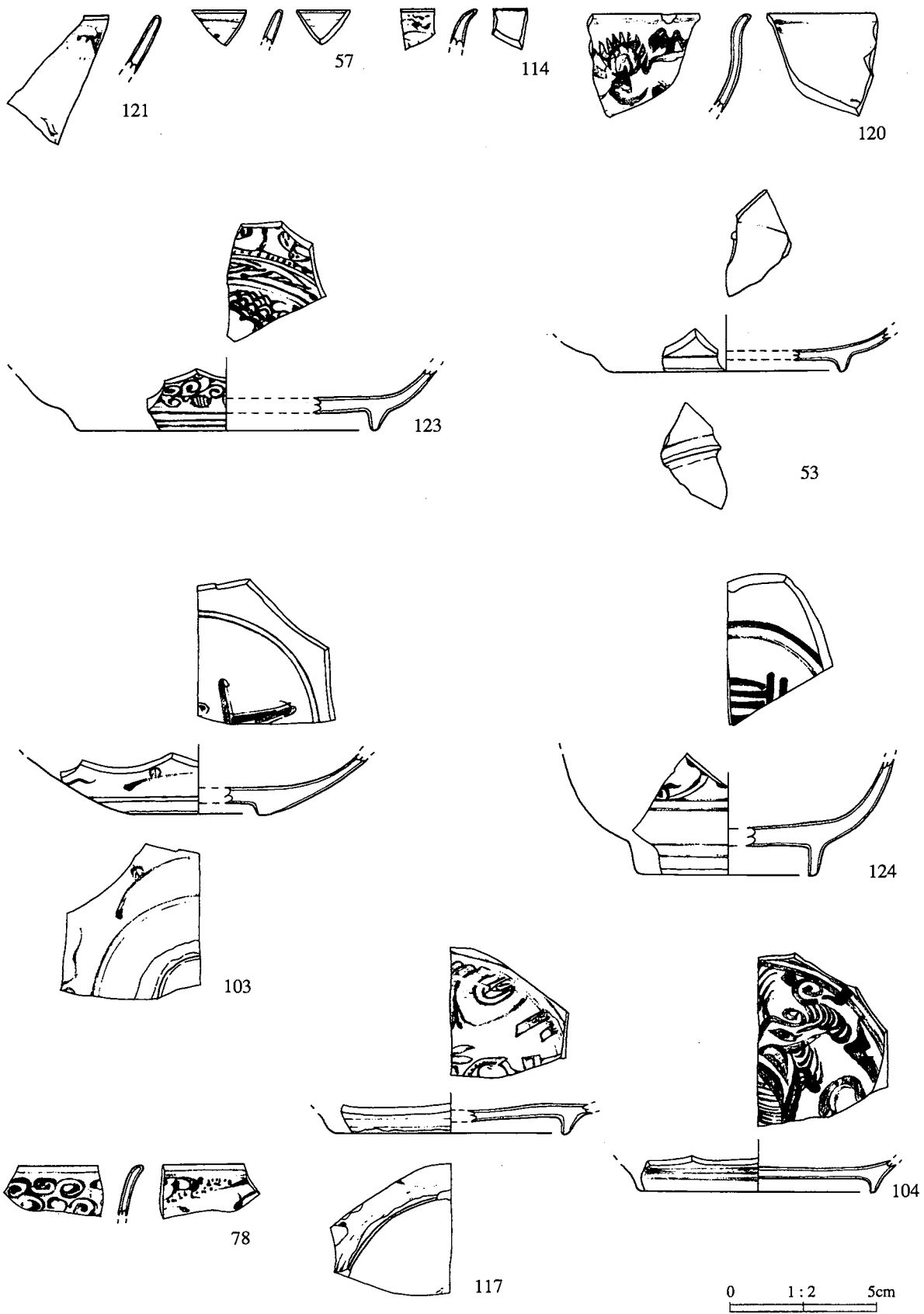
※時期・分類は、上田秀夫編年に準ずる。

遺物 NO.	器種	出土地点		胎土	釉調	製作地	時期 製作年代	備	考	分類
		グリッド	遺構名 層位							
1	稜花皿	ⅣD2e	9号切岸 検出面	灰黄色	灰オリブ色	龍泉窯系	15C	口縁部片。外面に僅かに貫入。端反り。		—
2	碗	ⅡD10a	2号曲輪 検出面	淡黄色	灰オリブ色	龍泉窯系	14C中葉~15C	口縁部片。外面雷文帯?二次的焼成被熱。内外面貫入。11・14と同一個体。		C類?
3	稜花皿	ⅣD2g	10号切岸 検出面	淡黄色	灰オリブ色	龍泉窯系	15C	口縁~底部片。稜花皿。内外面に細かな貫入。端反り。腰折れ形。		—
4	碗	ⅡC7e	6号切岸 検出面	淡黄色	灰オリブ色	龍泉窯系	14C中葉~15C	腰部片。外面蓮弁文。内外面細かな貫入。外面に二次的焼成による被熱痕。		C類
5	碗	ⅡC9f	7号切岸 検出面	灰黄色	オリブ灰色	龍泉窯系	14C中葉~15C	体部片。内面に僅かに貫入。		D類
6	皿(稜花?)	ⅢD3d	9号切岸 検出面	灰白色	緑灰色	龍泉窯系	15C	底部片。内外面に貫入。腰折れ形。		—
7	稜花皿	ⅢD7b	8号切岸 表 探	淡黄色	灰オリブ色	龍泉窯系	15C	底部片。内外面細かな貫入。		—
8	碗?	ⅢD5f	11号曲輪 検出面	灰白色	灰色	龍泉窯系	14C中葉~15C	体部小破片。内外面に細かな貫入。		D類
9	碗	ⅢE4e	25号曲輪 検出面	灰白色	オリブ灰色	龍泉窯系	14C中葉~15C	高台部小破片。高台底部施釉。		D類
10	稜花皿	ⅢC5j	8号切岸 表 探	灰白色	オリブ灰色	龍泉窯系	15C	端反り。稜花皿。内外面に僅かに貫入。腰折れ形。15と接合。		—
11	碗	ⅡC8a	4号切岸 検出面	淡黄色	灰オリブ色	龍泉窯系	14C中葉~15C	口縁部片。外面に二次的焼成による被熱痕。14と接合。2と同一個体。		C類
12	皿(稜花?)	ⅢE6g	27号曲輪 検出面	灰白色	オリブ灰色	龍泉窯系	15C	底部片。内外面貫入。		—
13	碗	ⅢD2e	5号土坑 検出面	灰白色	オリブ灰色	龍泉窯系	14C中葉~15C	口縁部片。内外面細かな貫入。14と接合。		D類
14	碗	ⅡC8a	4号切岸 検出面	淡黄色	灰オリブ色	龍泉窯系	14C中葉~15C	口縁部片。外面に雷文帯。二次的焼成による被熱痕。11と接合。2と同一個体。		C類
15	稜花皿	ⅢD9e	9号切岸 検出面	灰白色	オリブ灰色	龍泉窯系	15C	端反り。稜花皿。内外面に僅かに貫入。腰折れ形。10と接合。		—
16	稜花皿	ⅣC2j	8号切岸 検出面	灰黄色	オリブ灰色	龍泉窯系	15C	端反り。内外面に貫入。腰折れ形。		—
17	皿(稜花?)	ⅢC5d	3号切岸 検出面	灰白色	灰オリブ色	龍泉窯系	15C	体部小破片。内外面に細かな貫入。		—
18	稜花皿	ⅣD4j	21号曲輪 検出面	灰白色	オリブ灰色	龍泉窯系	15C	端反り。稜花皿。内外面に貫入。腰折れ形。		—

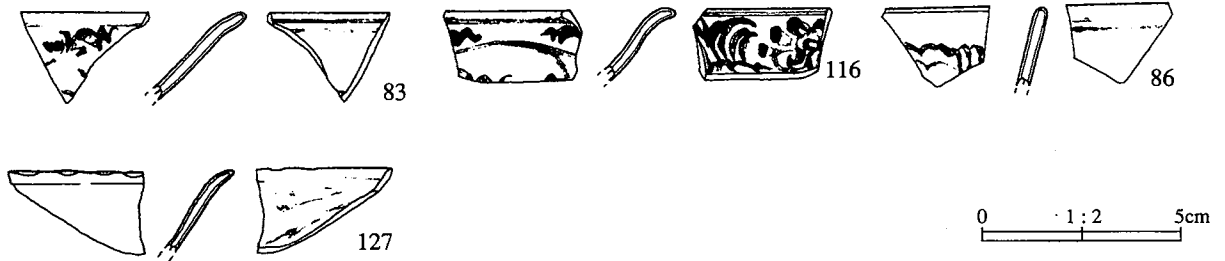
第88図出土遺物2(白磁)



第89图 出土遺物3 (染付1)



第90图 出土遗物4 (染付2)



第4表 磁器（白磁）観察表（2）

※時期・分類は、上田秀夫編年に準ずる。

遺物 NO.	器種	出土地点			胎土	釉調	製作地	時期 製作年代	備考	分類
		グリッド	遺物名	層位						
19	皿	ⅣD2h	10号切岸	検出面	灰白色	灰白色	中国産	16c前半	体部片。端反り。	—
20	皿	ⅢD7h	11号曲輪	検出面	白色	乳白色	中国産	15C	底部小破片。高台削り込み。見込み目跡。	D群
21	皿	ⅢD3d	9号切岸	検出面	灰白色	灰白色	景德鎮系	16C	高台部破片。内外面に細かな貫入が入る。	E群
22	皿	ⅣD2h	10号切岸	検出面	白色	乳白色	中国産	16C	口縁部破片。	E群
23	皿	ⅢD3e	10号曲輪	検出面	灰白色	灰白色	景德鎮系	16C	高台部破片。内外面に細かな貫入が入る。	E群
24	皿	ⅣD2b	8号切岸	表採	白色	乳白色	中国産	16C	底部破片。	E群
25	皿	ⅢD8b	搬出路	表採	白色	乳白色	中国産	16C	口縁部破片。	E群
26	皿	ⅢD4d	9号切岸	検出面	灰白色	灰白	景德鎮系	16C	小破片。内外面に細かな貫入が入る。	E群
27	皿	ⅢD3d	9号切岸	検出面	灰白色	灰白	景德鎮系	16C	小破片。内外面に細かな貫入が入る。	E群
28	皿	ⅢD4f	10号曲輪	検出面	灰白色	灰白	景德鎮系	16C	小破片。内外面に細かな貫入が入る。	E群
29	皿	ⅢD7a	8号切岸	検出面	灰白色	灰白	景德鎮系	16C	小破片。内外面に細かな貫入が入る。	E群
30	壺	ⅢC7e	搬出路	表採	灰白色	灰黄色	中国産	16C	体部片。	E群
31	皿	ⅣD5j	21号曲輪	検出面	灰白色	乳白色	中国	15C	口縁片。内外面に貫入。32・49と同一個体。	D群
32	皿	ⅣD6g	5号堀	検出面	淡黄色	灰白色	中国	15C	底部片。内面貫入。49・31と接合。畳付軸後調整。高台削り込み。	D群
33	皿	ⅣD6j	22号曲輪	検出面	白色	乳白色	中国	15C	口縁部小破片。外面僅かに貫入。31・32・49と同一個体？	D群
34	皿	ⅢD7f	11号曲輪	検出面	白色	灰白色	中国	16C	口縁部小破片。端反り。	E群
35	皿	ⅢD9j	11号曲輪	検出面	灰白色	灰白色	中国	16C	口縁部破片。外面にわずかに貫入。	E群
36	皿	ⅢE2c	8号切岸	検出面	灰白色	灰白色	中国	16C	口縁部小破片。端反り。	E群
37	皿	ⅢC6h	7号切岸	検出面	灰白色	乳白色	中国	16C	口縁部極小破片。端反り。38と同一個体？	E群
38	皿	ⅣD1f	11号曲輪	検出面	淡黄色	灰白色	中国	16C	漆による修復痕。端反り。	E群
39	皿	ⅢD3e	10号曲輪	検出面	灰白色	灰白色	中国	16C	口縁部小破片。内外面に細かな貫入が入る。	E群
40	皿	ⅢD2e	10号曲輪	検出面	灰白色	灰白色	中国	16C	口縁部小破片。内外面に細かな貫入が入る。	E群
41	皿	ⅢD2e	10号曲輪	検出面	灰白色	灰白色	中国	16C	口縁部小破片。内外面に細かな貫入が入る。	E群
42	皿？	ⅢD2e	10号曲輪	検出面	白色	乳白色	中国	16C	口縁部極小破片。	E群
43	皿	ⅡB8h	2号曲輪	検出面	白色	乳白色	中国	16C	体部片。	E群
44	皿	ⅡD2e	10号曲輪	検出面	灰白色	灰白色	景德鎮系	16C	体部小破片。内外面に細かな貫入。	E群
45	皿	ⅢD9h	11号曲輪	検出面	白色	灰白色	中国	16C	体部破片。	E群
46	皿	ⅢD10d	搬出路	表採	白色	灰白色	中国	16C	底部破片。	E群
47	皿	ⅢD4e	11号曲輪	検出面	白色	乳白色	中国	16C	口縁部小破片。端反り。	E群
48	皿	ⅣC1j	8号切岸	検出面	白色	乳白色	中国	16C	口縁部破片。端反り。	E群
49	皿	ⅣD6j	22号曲輪	検出面	灰白色	灰白色	中国	15C	口縁～体部片。体部から底部外面に施釉なし。内外面に貫入。	E群
50	皿	ⅣD5j	22号曲輪	検出面	白色	乳白色	中国	15C	底部小破片。高台削り込み。見込み目跡。	D群

第5表 磁器（染付）観察表（3）

※時期・分類は、上田秀夫編年に準ずる。

遺物 NO.	器種	出土地点			胎土	釉調	生産地	時期 製作年代	備考	分類
		グリッド	出土地点	層位						
51	碗	ⅢC3i	搬出路	表採	灰白色	明青灰色	中国	15C末～16C前半	口縁部小破片。外面波瀾文。	C群I
52	碗	ⅣD1a	12号曲輪	検出面	灰白色	明緑灰色	漳州窯？	16C末～17初頭	底～胴部片。内外面貫入。腰部界線。見込「福」文。畳付～高台内軸剥ぎ。	—
53	皿	ⅢD10g	11号曲輪	検出面	灰白色	明緑灰色	中国	16C	底部～腰部片。腰部内面界線。畳付軸剥ぎ。砂敷き焼成。	—
54	皿	ⅡB8c	搬出路	表採	灰白色	灰白色	中国	15C末～16C前半	底部小破片。ゴケ底皿。腰部外面界線。見込「福」？文。畳付軸剥ぎ。	C群III
55	皿	ⅡC9g	7号切岸	検出面	淡黄色	淡黄色	中国	15C末～16C前半	口縁～体部小破片。内外面細かな貫入が入る。ゴケ底。	C群III
56	碗	ⅡC8e	6号切岸	検出面	淡黄色	明緑灰色	中国	15～16C	底部部片。見込み「福」文。	B群
57	碗？	ⅢD10i	11号曲輪	検出面	灰白色	明青灰色	中国	16C後半	口縁部小破片。内外面界線。	E群？
58	角皿	ⅡB5g	4号土壘	検出面	灰白色	明青灰色	中国	16C後半	口縁～胴部片。内面唐草文。外面波瀾文。	E群？
59	皿	ⅢC7g	搬出路	表採	灰白色	明緑灰色	中国	15～16C	底部片。畳付軸剥ぎ。砂敷き焼成。	—
60	碗	ⅢC1h	7号曲輪	検出面	灰白色	明青灰色	中国	16C	口縁部小破片。内面界線。外面波瀾文帯？	C群I

第91図 出土遺物5（染付3）



第6表 磁器(染付) 観察表(4)

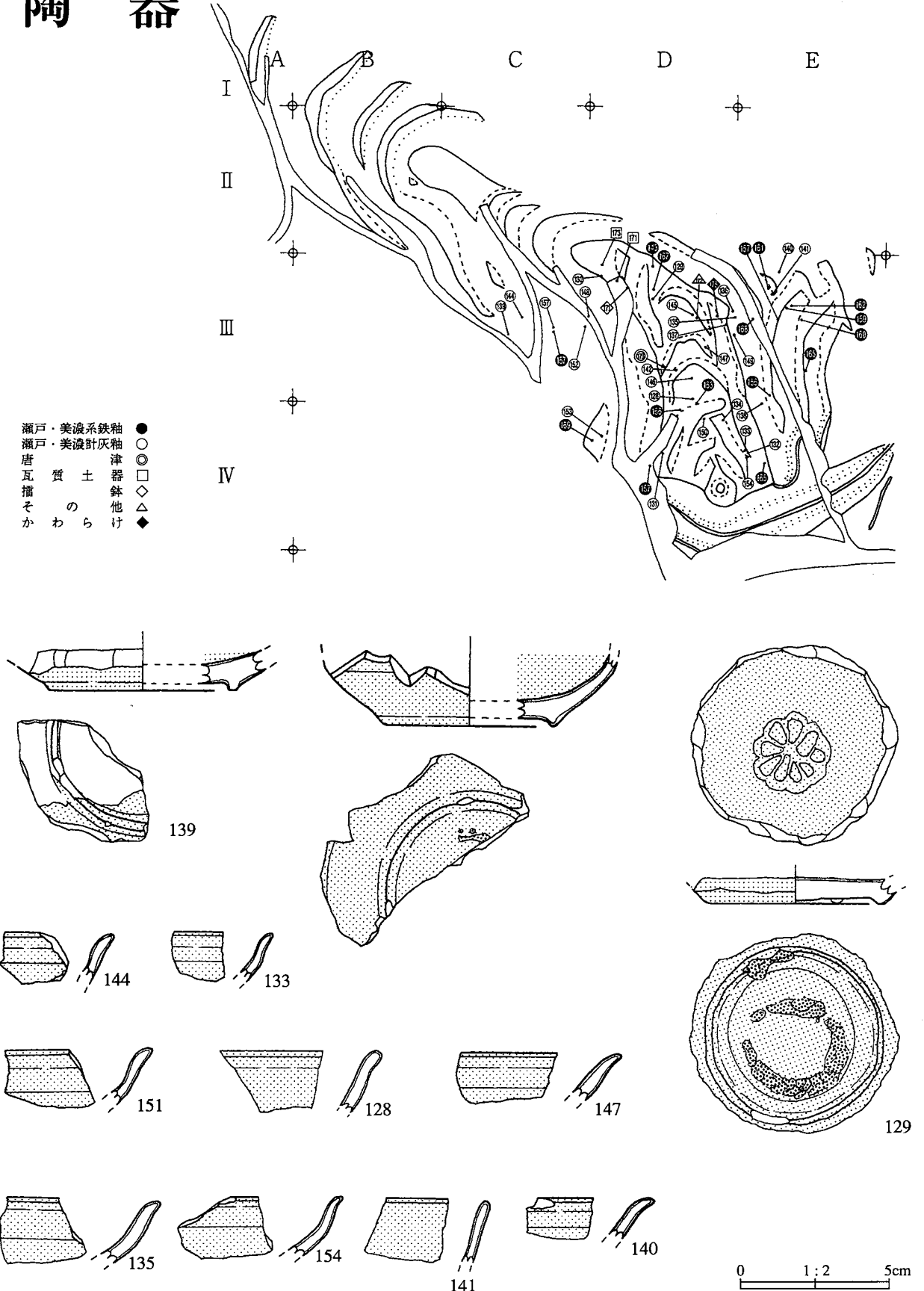
※時期・分類は、上田秀夫編年に準ずる。

遺物NO.	器種	出土地点		胎土	釉調	製作地	時期 製作年代	備考	分類	
		グリッド	遺構名							層位
61	皿	ⅢD6c	9号切岸	検出面	灰白色	明緑灰色	中国	16C末	口縁部片。内面界線。胴部内面折れ?	E群XI?
62	皿	ⅢC8g	撤出路	表採	灰白色	灰白	中国	15C後半~16C	口縁部片。端反り。内外面界線。	B群
63	皿	ⅢD10c	撤出路	表採	灰白色	明青灰色	中国	15~16C	底部小破片。腰部外面界線と?唐草文。見込み界線。	B群
64	碗	ⅣD2h	10号切岸	検出面	灰白色	明青灰色	中国	15C末~16C前半	胴部小破片。外面色蕉文。102・86と同一個体?	C群I
65	碗?	ⅡC2b	4号切岸	検出面	灰白色	明青灰色	中国	15C	胴部小破片。外面唐草文。	B群I?
66	不明	ⅢB2i	撤出路	表採	灰白色	明緑灰色	中国	15~16C	小破片。	B群
67	碗?	ⅢD9d	13号曲輪	検出面	灰白色	灰白色	中国	16C	胴部片。外面に「福」?	—
68	不明	ⅢD2a	8号曲輪	検出面	灰白色	明緑灰色	中国	15~16C	胴部小破片。内外面唐草文。	B群?
69	皿	ⅢC5f	6号切岸	検出面	灰白色	明緑灰色	中国	16C末	胴部片。内面界線?外面界線?・竹?	E群XI
70	皿	ⅢD3e	9号切岸	検出面	灰白色	乳白色	中国	16C末~17C初頭	胴部片。内面唐草文。	—
71	皿	ⅢC9a	4号切岸	検出面	灰白色	明緑灰色	中国	15~16C	胴部片。外面唐草文。	B群
72	皿	ⅢD8b	8号切岸	検出面	灰白色	明緑灰色	中国	15C前半	胴部片。外面唐草文。	B群I?
73	不明	ⅢD8b	撤出路	表採	灰白色	明緑灰色	中国	15~16C	胴部片。外面唐草文。	B群?
74	碗	ⅢD5h	11号曲輪	検出面	灰白色	明青灰色	中国	15~16C	胴部片。胴外面唐草文。	B群?
75	不明	ⅢD1a	8号曲輪	検出面	灰白色	明青灰色	中国	15~16C	胴部片。	—
76	碗?	ⅢD1a	8号曲輪	検出面	灰白色	灰白色	中国	16C後半	胴部片。内面折菊文?	E群?
77	皿	ⅣD1j	16号曲輪	検出面	灰白色	明緑灰色	中国	16C末	胴部片。外面に「福」文。	E群
78	皿	ⅣD3j	10号切岸	検出面	灰白色	明緑灰	中国	15C後半~16C前半	口縁部破片。端反り。内外面界線。胴部外面唐草文。内面アラバスク。90と同一個体?	B1群Ⅳ
79	不明	ⅢD1g	8号切岸	検出面	白色	明緑灰色	中国	15~16C	口縁部小破片。	—
80	碗	ⅢD2f	8号切岸	検出面	灰白色	明緑灰色	中国	14C末~15C前半	胴部片。外面唐草文。胎土から112・107・92・113・119と同一個体?	B群
81	皿	ⅢD2h	8号切岸	検出面	灰白色	灰白色	中国	15C後半~16C前半	胴部片。内外面に細かな貫入。見込花押?	B1群Ⅳ?
82	皿	ⅢE5b	7号切岸	検出面	白色	乳白色	中国	15C後半~16C前半	底部片。外面にわずかに貫入。見込玉取割子。	B1群Ⅳ
83	皿	ⅣE3b	9号切岸	検出面	灰白色	明緑灰色	中国	15C後半~16C前半	口縁部片。端反り。内面界線。外面界線・唐草文。	B1群Ⅳ
84	碗	ⅢD7j	2号武者走	検出面	灰白色	明緑灰色	中国	15~16C	底部片。見込「福」文?	B群
85	碗	ⅢC7j	8号切岸	検出面	灰白色	明青灰色	中国	15C末~16C前半	口縁部片。外面波瀾文。	C群I
86	碗	ⅢE5e	25号曲輪	検出面	灰白色	明緑灰色	中国	15C末~16C前半	口縁部片。内面界線。外面波瀾文。	C群I
87	皿	ⅣD4e	撤出路	表採	灰白色	明緑灰色	中国	15C末~16C前半	口縁部小破片。内面に貫入あり。口縁部外面波瀾文。	C群I
88	碗	ⅢD10f	24号曲輪	検出面	灰白色	明緑灰色	中国	15~16C	口縁~胴部片。内面界線。外面界線・唐草文。	—
89	碗	ⅣD2f	撤出路	表採	灰白色	灰白色	中国	15~16C	底部破片。見込み界線。高台界線。	B群
90	皿	ⅣD7d	撤出路	表採	灰白色	明緑灰色	中国	15C後半~16C前半	口縁部片。端反り。内外面界線。胴部外面唐草文。内面アラバスク。78と同一個体?	B1群Ⅳ
91	皿	ⅢE4c	23号曲輪	検出面	灰白色	明青灰色	中国	15~16C	胴部片。外面唐草文。	B群?
92	碗?	ⅣD5d	撤出路	表採	灰白色とにぶい橙色の層	明緑灰色	中国	15~16C	胴部小破片。外面に唐草文。胎土から92・107・112・113・119と同一個体?	B群
93	皿	ⅢD4d	9号切岸	検出面	灰白色	灰白色	中国	15C後半~16C前半	口縁~胴部片。端反り。口縁内面界線。外面唐草文?	B1群Ⅳ?
94	皿	ⅣE2d	11号切岸	検出面	灰白色	明青灰色	中国	15C後半~16C前半	胴部片。外面唐草文。内面界線・唐草文。	B1群Ⅳ
95	碗	ⅢE3e	23号曲輪	検出面	灰白色	明緑灰色	中国	15~16C	胴部片。外面唐草文。56と同一個体。	B群
96	不明	ⅢE7i	15号切岸	検出面	灰白色	明青灰色	中国	15~16C	口縁部極小破片。	—
97	皿	ⅣD4d	9号切岸	検出面	灰白色とにぶい橙色の層	明緑灰	中国	16C末~17C初	口縁部片。内外面界線。	—
98	皿	ⅢD5a	8号切岸	検出面	灰白色	明緑灰色	中国	16C末	底部片。外面腰部界線。見込端果?	E群XI
99	碗?	ⅢC6i	7号切岸	検出面	灰白色	灰白色	中国	15C	胴部小破片。内面唐草文。	B群
100	碗	ⅢC9i	8号切岸	検出面	灰白色	明緑灰色	中国	15C末~16C前半	口縁部片。外面界線・波瀾文。内面界線。	C群I
101	皿	ⅢC3d	4号切岸	検出面	灰白色	明緑灰	中国	16C末~17C初	胴部片。内面唐草文?	—
102	皿	ⅢC3d	4号切岸	検出面	灰白色	明緑灰	中国	15C後半~16C前半	底~胴部片。見込梵字。腰部外面界線。畳付軸刺。砂敷。111・125と同一個体?	B1群Ⅳ
103	皿	ⅢE8d	11号切岸	検出面	灰白色	明緑灰色	中国	15C末~16C前半	底部~胴部片。葎筋底。畳付軸刺。胴部外面唐草文。腰部界線。見込「寿」文?	C群Ⅱ
104	皿	ⅢE6e	25号曲輪	検出面	白色	明緑灰色	中国	15C後半~16C前半	底部片。畳付軸刺。砂敷き焼成。腰部外面界線。見込玉取割子。	B1群Ⅳ
105	不明	ⅢC8e	6号切岸	検出面	灰白色	明青灰色	中国	16C	底部小破片。胴外面唐草文。	B群?
106	碗	ⅢD10g	11号曲輪	検出面	灰白色	明緑灰色	中国	15C末~16C前半	胴部小破片。内外面に僅かに貫入。外面色蕉文。64・110と同一個体?	C群I
107	碗	ⅢD4e	10号切岸	検出面	灰白色	明緑灰色	中国	14C末~15C前半	胴部小破片。外面唐草文。92・112・80・113・119と同一個体?	B群
108	皿	ⅢD4g	11号曲輪	検出面	灰白色	明緑灰色	中国	15C後半~16C	口縁部片。端反り。内面界線。	B群?
109	碗	ⅣD1h	1号柱穴列P5	埋土中	灰白色	明緑灰色	中国	15C末~16C前半	底~胴部破片。見込界線・蓮花? 胴外面色蕉文? 畳付~高台内輪刺き。	C群I
110	碗	ⅢD7a	8号切岸	検出面	灰白色	明青灰色	中国	15C末~16C前半	胴部破片。外面色蕉文。64・111と同一個体?	B1群Ⅳ
111	皿	ⅢC4e	4号切岸	検出面	灰白色	明緑灰色	中国	15C後半~16C前半	底部小破片。見込唐草文(アラバスク?)。102・125と同一個体?	B1群Ⅳ
112	碗	ⅢC4e	4号切岸	検出面	灰白色	明青灰色	中国	14C~15C前半	口縁部小破片。内外面界線・唐草文。60・92・107・113・119と同一個体。	B群
113	碗	ⅢC4d	4号切岸	整地層	灰白色	明緑灰色	中国	14C末~15C前半	口縁~胴部片。内外面界線。胴外面唐草文。80・92・107・112・119と同一個体?	B群
114	皿	ⅢE7a	9号切岸	検出面	灰白色	明緑灰色	中国	14C末~15C前半	口縁部片。内面界線。外面波瀾文?	C群I?
115	碗	ⅢC6i	7号切岸	整地層	灰白色	明緑灰	漳州窯?	16C末~17C初頭	底部~体部片。内外面に僅かに貫入。「福」文? S2と接合。	—
116	皿	ⅢE10d	撤出路	表採	灰白色	明青灰色	中国	15C後半~16C前半	口縁部~胴部片。端反り。口縁内外面界線。胴部内外面唐草文。	B1群Ⅳ
117	皿	ⅢE8e	25号曲輪	整地層	灰白色	明緑灰色	中国	16C末~17C初頭	底部片。見込幾半文? 高台内路? 畳付軸刺き。	F群
118	皿	ⅢD9d	9号切岸	整地層	灰白色	明オリブ灰色	中国	15C後半~16C前半	口縁~体部片。端反り。口縁内外面界線。胴部外面唐草文。	B1群Ⅳ
119	碗	ⅣD4a	12号曲輪	検出面	灰白色	明緑灰色	中国	14C末~15C前半	胴部破片。内面に僅かに貫入。外面唐草文。92・112・107・80・113と同一個体?	B群
120	皿	ⅣD4j	10号切岸	整地層	灰白色	明青灰色	中国	15C後半~16C前半	口縁部~胴部片。端反り。口縁内外面界線。胴部外面唐草文。	B1群 XI
121	碗	ⅣD4f	19号曲輪	検出面	灰白色	オリブ灰色	中国	15C末~16C前半	口縁~胴部破片。外面波瀾文。	C群I
122	碗	ⅢC5h	7号切岸	整地層	灰白色	明緑灰色	中国	15~16C	口縁から胴部片。口縁部内外面界線。胴部内外面唐草文。	B群
123	皿	ⅢD9j	9号切岸	整地層	灰白色	明緑灰色	中国	15C後半~16C前半	底部~胴部破片。高台外面界線。腰部外面唐草文。胴部内面アラバスクと梵字?	B1群Ⅳ
124	碗	ⅢE3b	7号切岸	整地層	灰白色	明緑灰色	中国	16C	底部~胴部片。見込「福」文。高台・腰部外面界線。胴外面唐草文。畳付軸刺き。	B群XI
125	皿	ⅢC5c	3号切岸	整地層	灰白色	明緑灰色	中国	15C後半~16C前半	底部片。見込梵字文。腰部外面界線・唐草文。畳付軸刺き。砂敷き焼成。	B1群Ⅳ

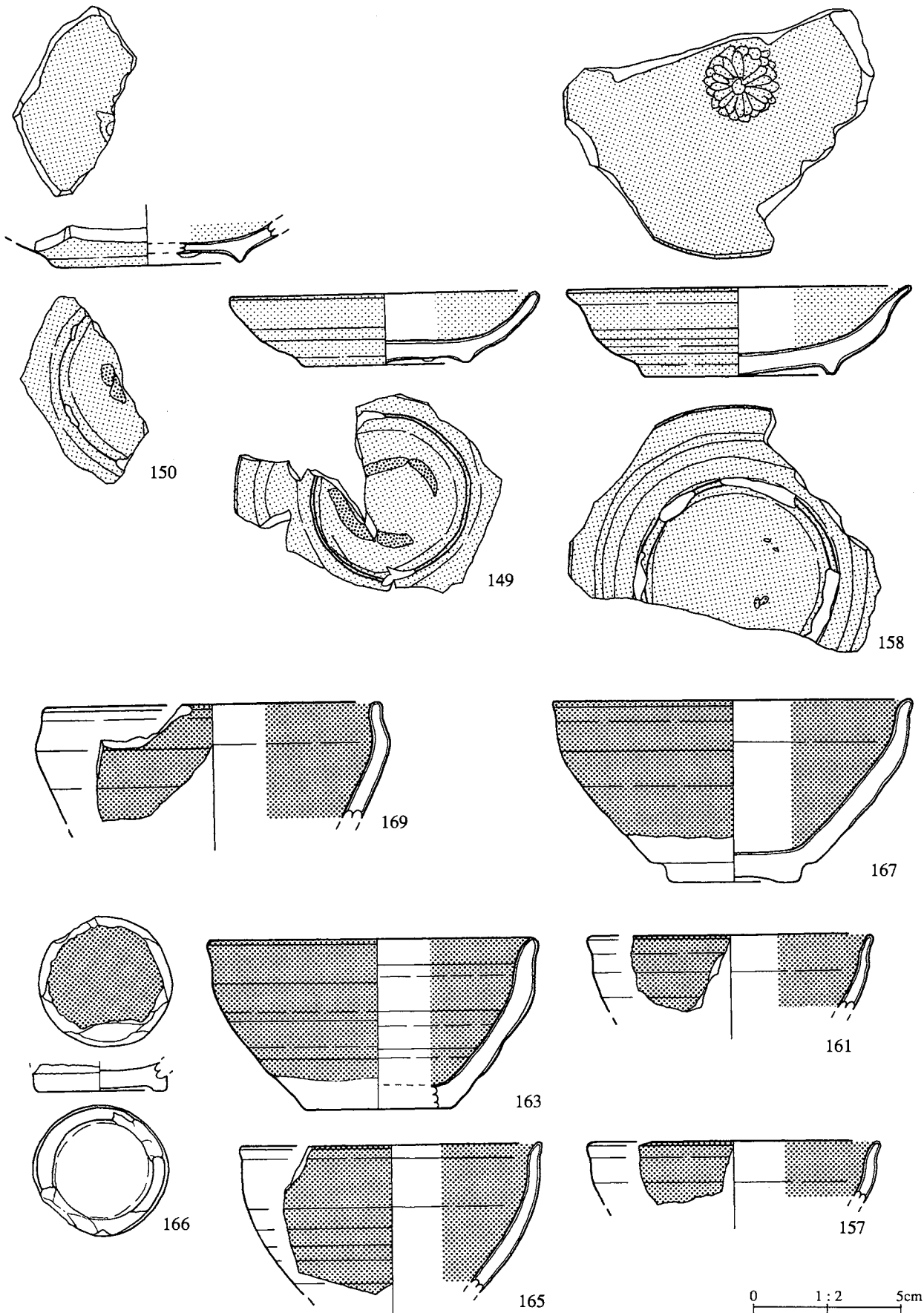
第7表 磁器(赤絵) 観察表(5)

No.	器種	グリッド	出土遺構	層位	胎土	釉調	製作地	時期	備考
126	皿	ⅢE8d	11号切岸	検出面	灰白色	明緑灰色	中国	16C末~17C初頭	体部破片。金箔による絵付け。
127	皿	ⅢE3e	11号切岸	検出面	灰白色	明緑灰色	中国	16C末~17C初頭	口縁部片。端反り波型口縁。

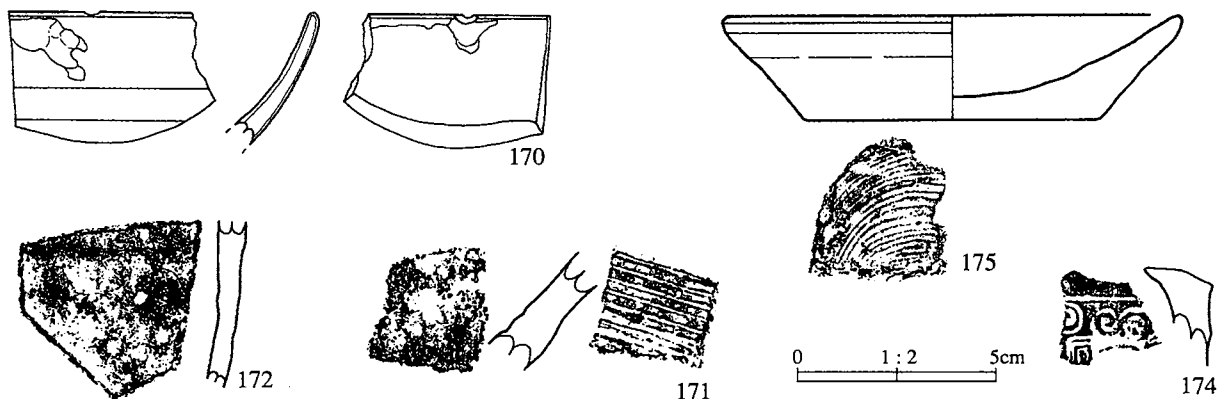
# 陶器



第92図 出土遺物6 (国産陶器1)



第93図 出土遺物7 (国産陶器2)

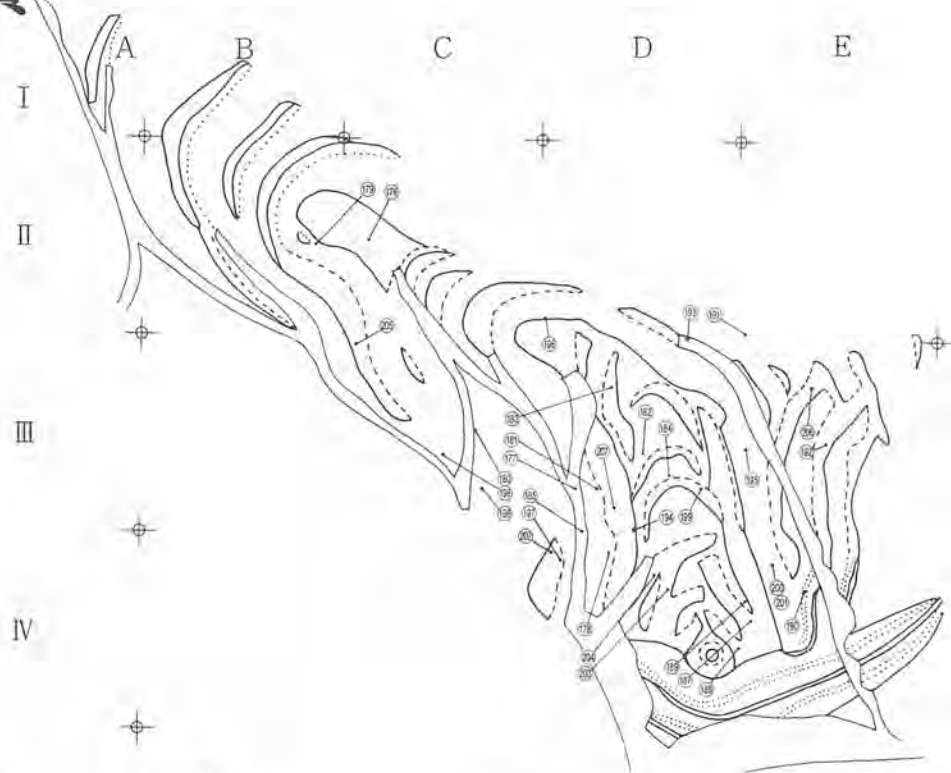


第8表 国産陶器観察表

遺物No. No.	器種	出土地点			胎土	釉調	産地	時期・時代	備考
		グリッド	検出遺構	層位					
128	皿	ⅢD10g	11号曲輪	検出面	淡黄色	灰白色	瀬戸・美濃	大窯I	口縁部小破片。内外面貫入がはいる。灰釉。
129	皿	ⅢD3e	10号曲輪	検出面	淡黄色	灰オリーブ色	瀬戸・美濃	大窯I	底部。内外面貫入が入る。高台底部釉剥ぎ。印花文。灰釉。
130	皿	ⅢD2a	8号曲輪	検出面	淡黄色	灰白色	瀬戸・美濃	大窯I	口縁部小破片。内外面鉄釉。
131	皿	ⅣD4a	10号切岸	検出面	淡黄色	灰白色	瀬戸・美濃	大窯I	底部小破片。内外面細かな貫入が入る。砂目積み。灰釉。
132	皿	ⅣE4a	16号曲輪	埋土中	淡黄色	灰白色	瀬戸・美濃	大窯I	底部～体部片。内外面に細かな貫入。端反り。52・145と接合。灰釉。
133	皿	ⅣE4a	16号曲輪	検出面	淡黄色	灰白色	瀬戸・美濃	大窯I	口縁部小破片。内外面に細かな貫入。灰釉。端反り。
134	皿	ⅣD2j	10号切岸	検出面	淡黄色	灰白色	瀬戸・美濃	大窯I	体部から底部片。50・145と接合。端反り。内外面鉄釉。
135	皿	ⅢD5j	9号切岸	埋土中	淡黄色	灰白色	瀬戸・美濃	大窯I	口縁部片。内外面に細かな貫入。灰釉。端反り。
136	皿	ⅢD4j	9号切岸	埋土中	淡黄色	灰白色	瀬戸・美濃	大窯I	底部片。内外面細かな貫入。灰釉。
137	皿	ⅢD5j	2号武者走	検出面	淡黄色	灰白色	瀬戸・美濃	大窯I	底部小破片。内外面に細かな貫入。灰釉。
138	皿	ⅣE1b	9号切岸	検出面	淡黄色	淡黄色	瀬戸・美濃	大窯I	端反り。印花文。内外面鉄釉。
139	皿	ⅢC6e	4号切岸	検出面	淡黄色	灰白色	瀬戸・美濃	大窯I	底部片。内外面細かな貫入。灰釉。
140	皿	ⅢE2c	6号切岸	検出面	淡黄色	灰白色	瀬戸・美濃	大窯I	口縁部小破片。内面に貫入あり。灰釉。端反り。
141	皿	ⅢE3c	8号切岸	検出面	淡黄色	灰白色	瀬戸・美濃	大窯I	口縁部小破片。内外面に細かな貫入。灰釉。端反り。
142	皿	ⅢD8f	11号曲輪	検出面	淡黄色	オリーブ灰色	瀬戸・美濃	大窯I	高台部小破片。外面に細かな貫入。灰釉。
143	皿	ⅢD1e	10号曲輪	検出面	淡黄色	オリーブ灰色	瀬戸・美濃	大窯I	体部極小破片。内外面に細かな貫入。灰釉。
144	皿	ⅢC5f	5号切岸	検出面	淡黄色	灰白色	瀬戸・美濃	大窯I	口縁部片。内外面細かな貫入。灰釉。端反り。
145	皿	ⅢD5g	11号曲輪	検出面	淡黄色	灰白色	瀬戸・美濃	大窯I	底部片。内外面細かな貫入。灰釉。
146	皿	ⅢD9g	11号曲輪	検出面	淡黄色	灰白色	瀬戸・美濃	大窯I	底部片。内外面細かな貫入。灰釉。
147	皿	ⅢC7h	11号曲輪	検出面	淡黄色	浅黄色	瀬戸・美濃	大窯I	口縁部片。内外面細かな貫入。灰釉。端反り。
148	皿	ⅢC5j	搬出路	表 採	浅黄色	灰白色	瀬戸・美濃	大窯I	体部小破片。内外面に細かな貫入。灰釉。
149	皿	ⅢD6j	9号切岸	検出面	浅黄色	浅黄色	瀬戸・美濃	大窯I	皿。内外面に貫入。灰釉。砂目積み。
150	皿	ⅣD2h	18号曲輪	検出面	淡黄色	灰白色	瀬戸・美濃	大窯I	内外面細かな貫入。灰釉。印花文。砂目積み。
151	皿	ⅢC6h	7号切岸	検出面	淡黄色	灰白色	瀬戸・美濃	大窯I	口縁部小破片。端反り。内外面に細かな貫入。灰釉。
152	皿	ⅢC5j	8号切岸	検出面	淡黄色	灰白色	瀬戸・美濃	大窯I	口縁部小破片。内外面細かな貫入。灰釉。端反り。
153	皿	ⅣD3a	12号曲輪	検出面	淡黄色	灰白色	瀬戸・美濃	大窯I	底部片。内外面細かな貫入。灰釉。砂目積み。
154	皿	ⅣE4a	10号切岸	検出面	淡黄色	灰白色	瀬戸・美濃	大窯I	口縁部破片。端反り。内外面細かな貫入。灰釉。
155	天目茶碗	ⅣE5b	9号切岸	検出面	淡黄色	赤黒色	瀬戸・美濃	大窯II	体部小破片。内外面鉄釉。
156	天目茶碗	ⅢE10c	23号曲輪	検出面	淡黄色	赤黒色	瀬戸・美濃	大窯II	体部小破片。内外面鉄釉。
157	天目茶碗	ⅢE5c	23号曲輪	検出面	淡黄色	赤黒色	瀬戸・美濃	大窯II	口縁部小破片。内外面鉄釉。
158	天目茶碗	ⅣD5e	搬出路	表 採	淡黄色	赤黒色	瀬戸・美濃	大窯II	体部小破片。内外面鉄釉。
159	天目茶碗	ⅢE4d	11号切岸	検出面	淡黄色	赤黒色	瀬戸・美濃	大窯II	口縁部小破片。内外面鉄釉。
160	天目茶碗	ⅣE5e	25号曲輪	検出面	淡黄色	赤黒色	瀬戸・美濃	大窯II	体部小破片。内外面鉄釉。
161	天目茶碗	ⅢE3c	8号切岸	検出面	淡黄色	赤黒色	瀬戸・美濃	大窯II	口縁部小破片。内外面鉄釉。
162	天目茶碗	ⅢE4d	11号切岸	検出面	淡黄色	赤黒色	瀬戸・美濃	大窯II	体部小破片。内外面鉄釉。
163	天目茶碗	ⅣD1g	11号曲輪	検出面	淡黄色	赤黒色	瀬戸・美濃	大窯II	ほぼ完形。胎土淡黄色。鉄釉。高台部サビ釉。
164	天目茶碗	ⅢC6h	7号切岸	検出面	淡黄色	赤黒色	瀬戸・美濃	大窯II	体部極小片。内外面鉄釉。
165	天目茶碗	ⅢE8e	12号切岸	検出面	淡黄色	赤黒色	瀬戸・美濃	大窯II	口縁～体部片。内外面鉄釉。
166	天目茶碗	ⅣD1g	11号曲輪	検出面	淡黄色	赤黒色	瀬戸・美濃	大窯II	底部片。内外面鉄釉。高台部サビ釉。
167	天目茶碗	ⅢD3e	10号曲輪	検出面	淡黄色	赤黒色	瀬戸・美濃	大窯II	口縁～底部。胎土淡黄色。内外面鉄釉。高台部サビ釉。
168	天目茶碗	ⅢE5b	搬出路	表 採	淡黄色	赤黒色	瀬戸・美濃	大窯II	口縁部極小破片。内外面鉄釉。
169	天目茶碗	ⅣD3a	12号曲輪	検出面	淡黄色	赤黒色	瀬戸・美濃	大窯II	口縁～体部片。内外面鉄釉。
170	皿	ⅢD8e	11号曲輪	検出面	淡黄色	にぶい黄橙色	唐津	16C末	口縁～体部小破片。内外面鉄釉。
171	鐏鉢	ⅢD3c	9号切岸	検出面	にぶい橙色	にぶい褐色	在地	—	内面のみ施釉。
172	鉢	ⅢD5h	11号曲輪	検出面	にぶい橙色	—	在地	—	外面のみ施釉。
173	火鉢	ⅢD2b	8号曲輪	検出面	にぶい橙色	—	在地	—	瓦質土器 口縁内面：スス付着
174	火鉢	ⅢC4c	8号曲輪	検出面	にぶい橙色	—	在地	—	瓦質土器 口縁：雷文
175	かわらけ	ⅢD5i	2号武者走	検出面	にぶい褐色	—	—	—	内外面口クロ成形。底部回転糸切り。口径(11.7)cm。器高2.7cm。

第94図 出土遺物8 (国産陶器3)

# 錢貨



179



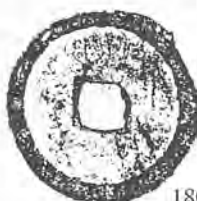
205



176



198



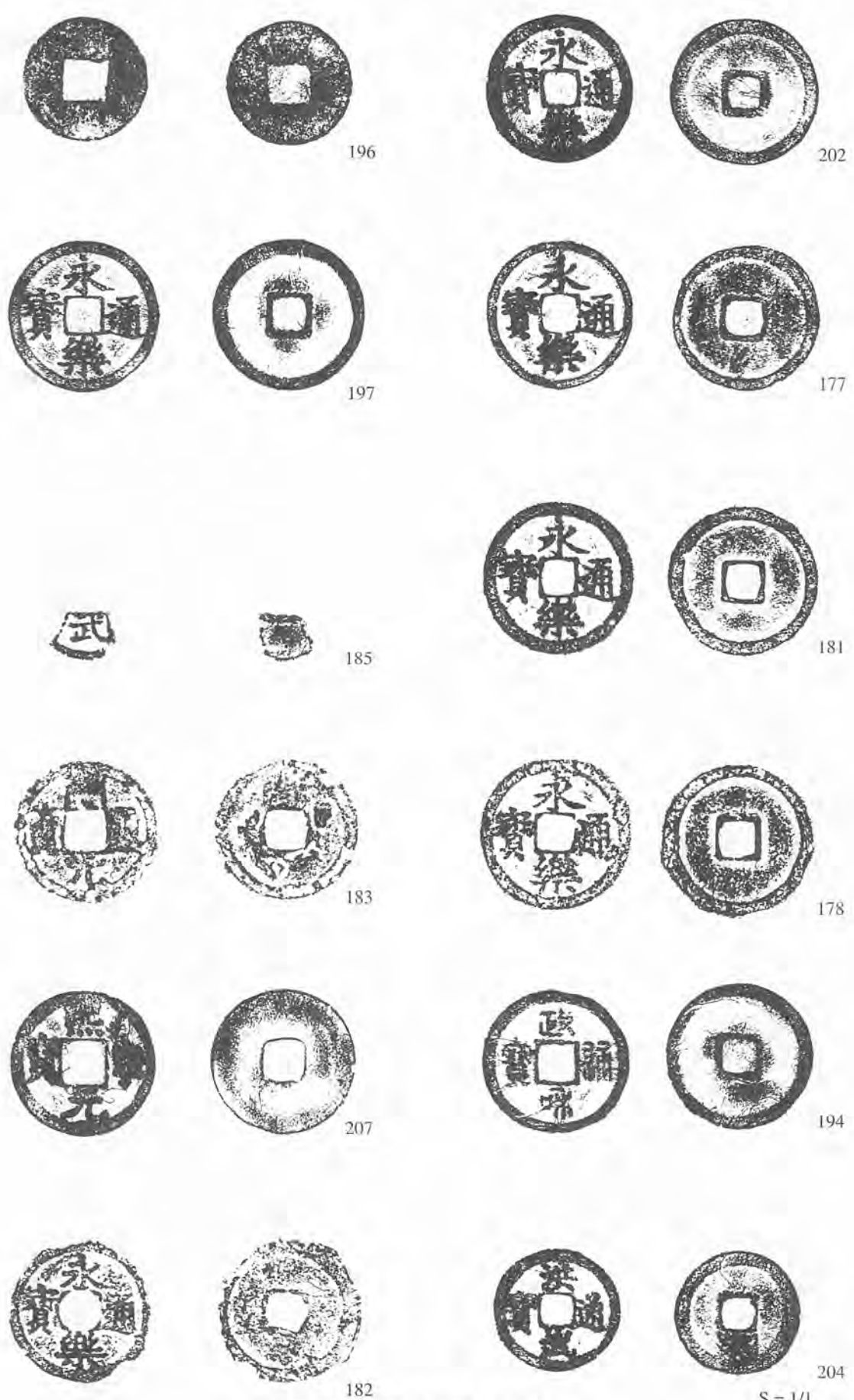
180



186

S=1/1

第95圖 出土遺物9 (錢貨1)



第96圖 出土遺物10 (錢貨2)



184



203



193



199



191



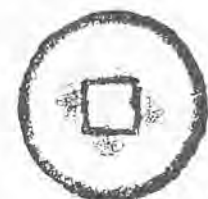
188



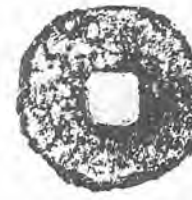
195



189



187



201



206



190

第97圖 出土遺物11 (錢貨3)

S = 1/1



192

S = 1/1

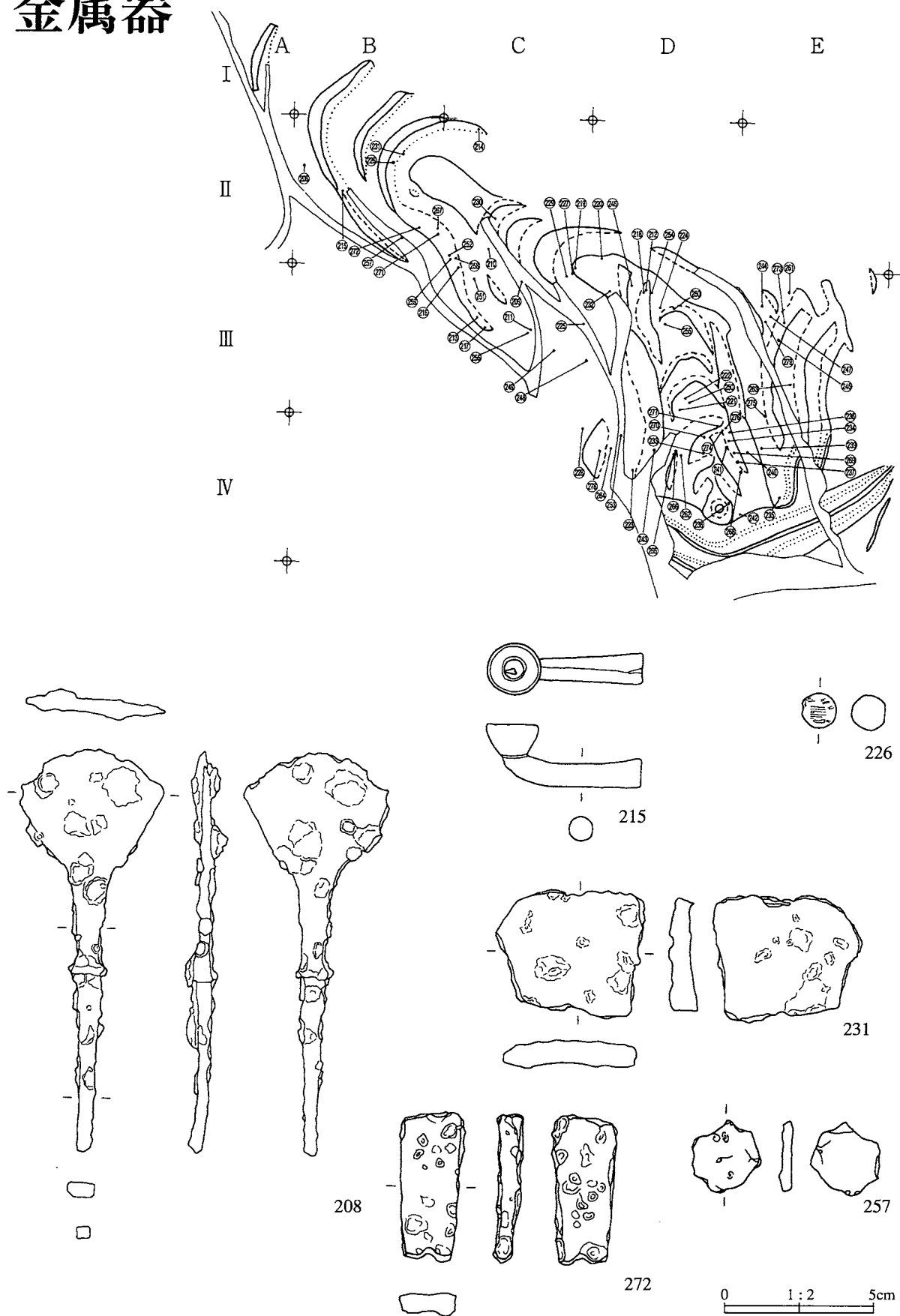
第9表 銭貨観察表

遺物No.	種類	グリッド	検出遺構	出土層位	厚さ	重さ	初鑄造年	備考
176	永楽通寶	II C 6 b	3号曲輪	検出	0.15	2.30	1408	中国(明)
177	永楽通寶	III D 8 b	搬出路	表探	0.10	1.90	1408	中国(明)
178	永楽通寶	IV D 1 d	13号曲輪	検出	0.15	3.30	1408	中国(明)
179	永楽通寶	II B 6 i	4号切岸	表探	0.10	1.60	1408	中国(明)
180	永楽通寶	III C 5 g	8号切岸	検出	0.10	2.30	1408	中国(明)
181	永楽通寶	III D 8 c	13号曲輪	検出	0.10	2.50	1408	中国(明)
182	永楽通寶	III D 6 f	11号曲輪	検出	0.10	2.00	1408	中国(明)
183	開元通寶	III D 3 d	9号切岸	検出	0.15	2.40	621	中国(唐)
184	祥符通寶	III D 7 g	11号曲輪	検出	0.15	2.90	1008	中国(北宋)
185	洪武通寶	III D 10 c	搬出路	表探	0.10	0.10	1368	中国(明)
186	大定通寶?	III C 8 h	8号切岸	検出	0.10	0.80	1178	中国(金)
187	永楽通寶	IV E 5 a	10号切岸	検出	0.10	2.10	1408	中国(明)
188	寛永通寶	IV E 6 a	10号切岸	検出	0.15	2.70	1668	
189	無文	IV E 4 a	16号曲輪	検出	0.10	1.40	—	
190	永楽通寶	IV E 3 d	7号堀	検出	0.15	2.30	1408	中国(明)
191	永楽通寶	II E 10 a	7号切岸	検出	0.10	2.10	1408	中国(明)
192	宣徳通寶?	III E 6 e	25号曲輪	検出	0.15	(1.40)	1433	中国(明)
193	永楽通寶	II D 10 h	搬出路	表探	0.15	2.90	1408	中国(明)
194	政和通寶	III D 10 e	9号切岸	整地層	0.15	3.40	1111	中国(北宋)
195	元豊通寶	III E 6 a	9号切岸	整地層	0.10	1.90	1078	中国(北宋)
196	無文	II D 9 a	8号曲輪	整地層	0.10	1.10	—	
197	永楽通寶	IV D 2 b	12号曲輪	整地層	0.15	3.00	1408	中国(明)
198	大?	III C 6 f	4号切岸	整地層	0.15	(2.50)	—	
199	大?	III D 8 i	11号曲輪	整地層	0.10	1.80	—	
200	無文	IV E 2 b	9号切岸	整地層	(0.1)	(1.25)	—	201と接合
201	無文	IV E 2 b	9号切岸	整地層	(0.1)	(1.25)	—	200と接合
202	永楽通寶	IV D 1 a	12号曲輪	整地層	0.10	2.00	1408	中国(明)
203	熙寧元寶	IV D 3 g	10号切岸	整地層	0.15	3.10	1068	中国(北宋)
204	洪武通寶	IV D 2 f	10号切岸	整地層	0.10	2.10	1368	中国(明)
205	無文	III C 1 a	2号曲輪	整地層	0.10	1.60	—	
206	永楽通寶	III E 3 d	23号曲輪	整地層	0.10	2.60	1408	中国(明)
207	熙寧元寶	III D 9 d	9号切岸	整地層	0.10	2.50	1068	中国(北宋)

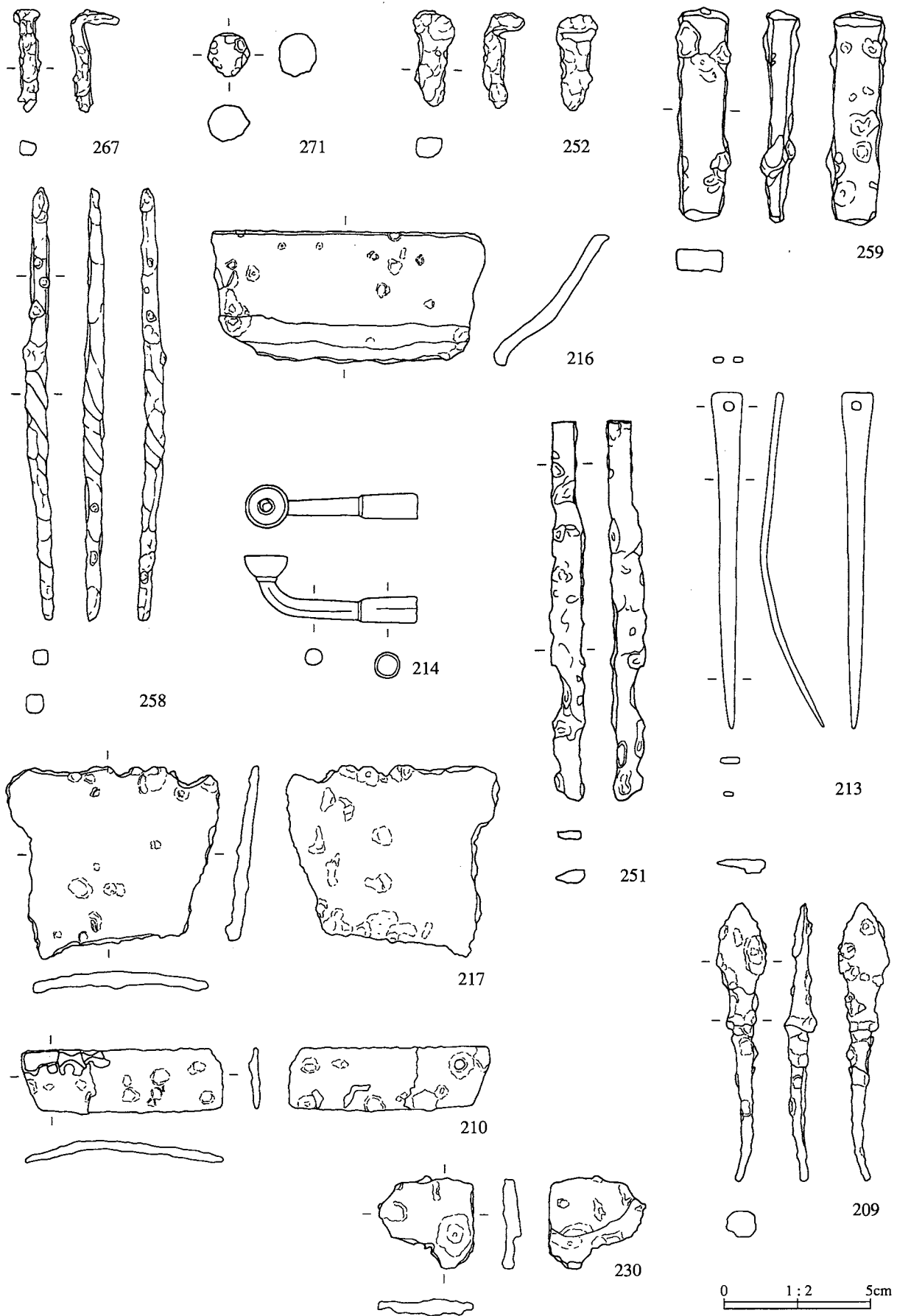
第98図 出土遺物12(銭貨4)



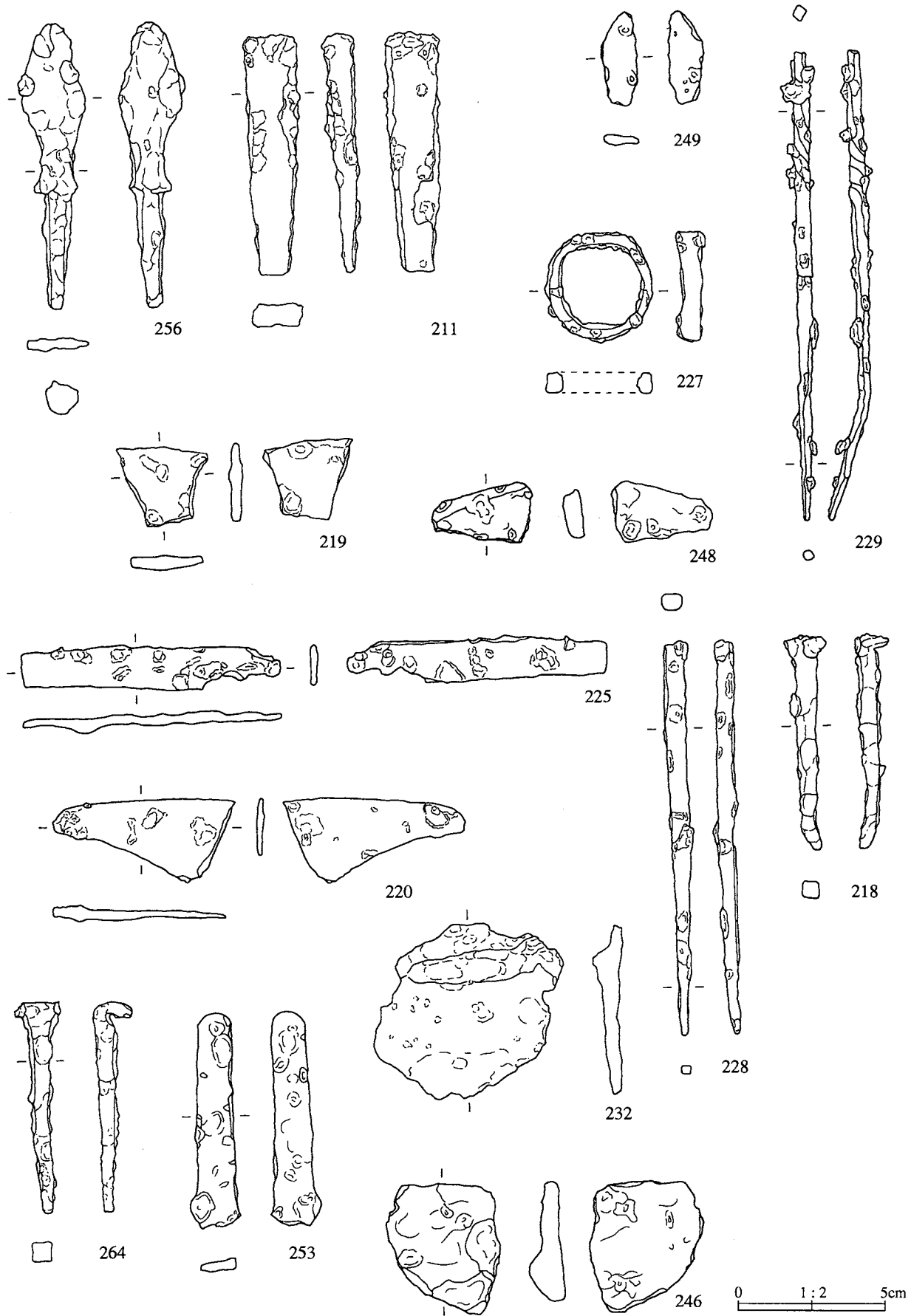
# 金属器



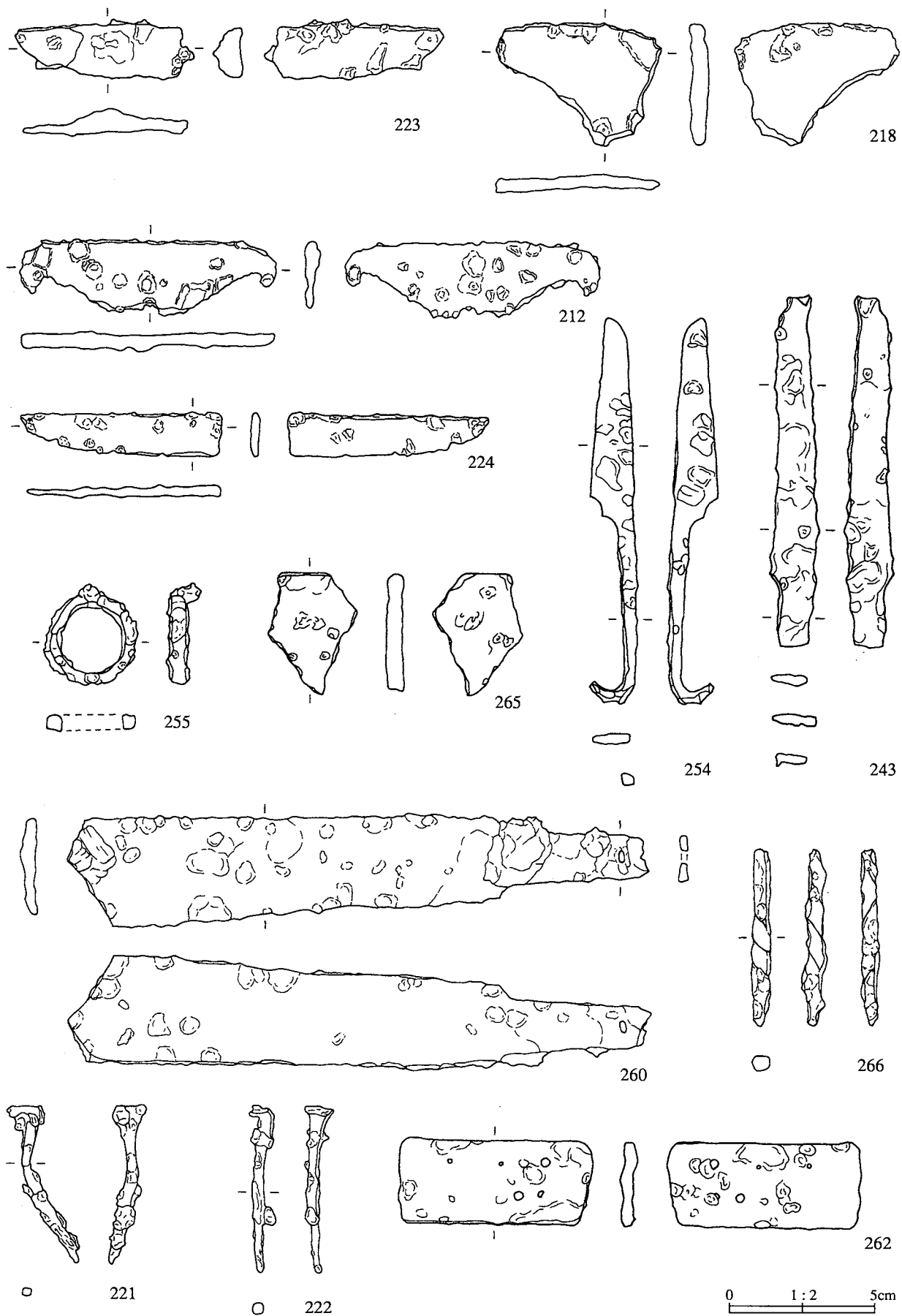
第99图 出土遗物13 (金属器1)



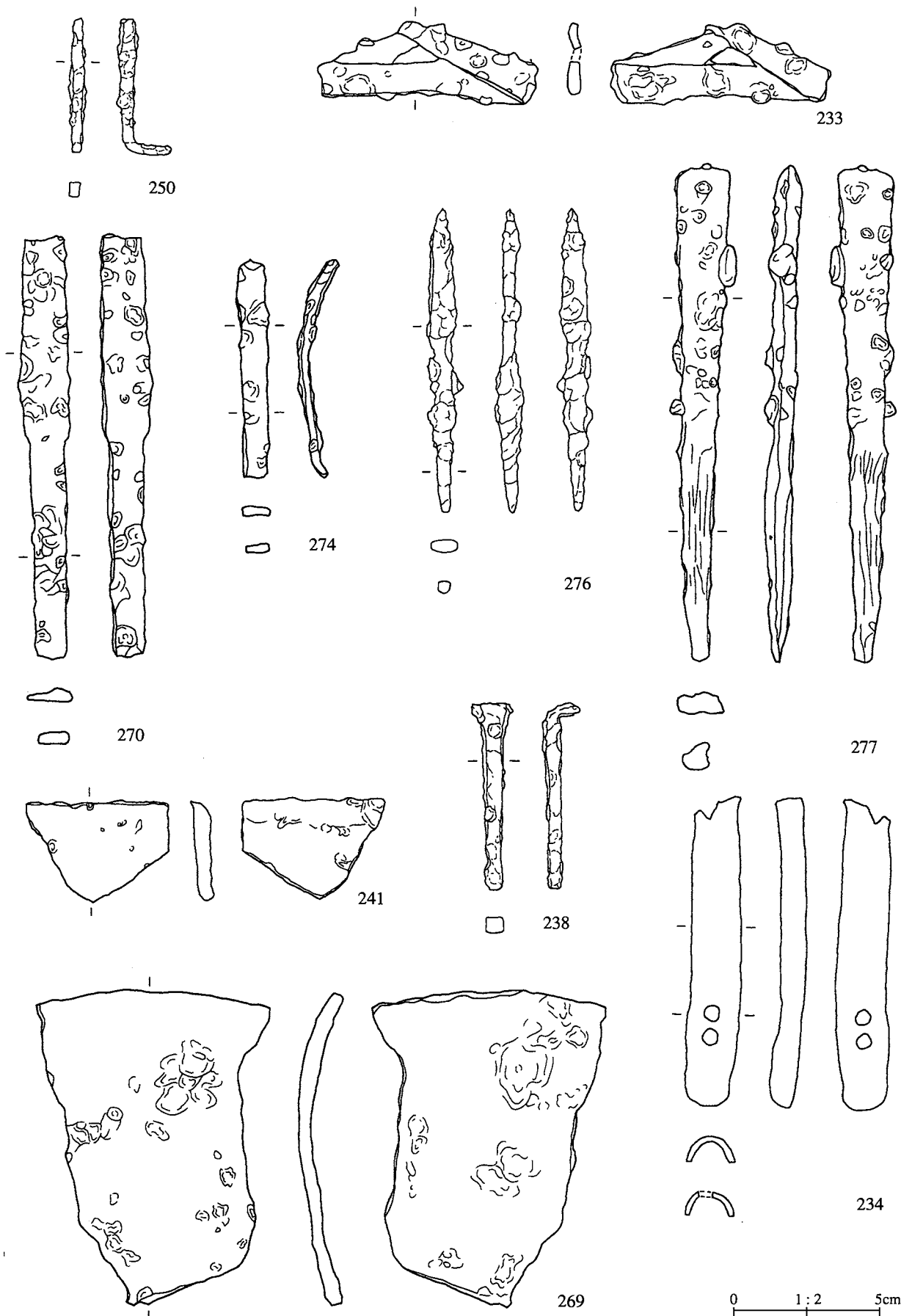
第100图 出土遗物14 (金属器 2)



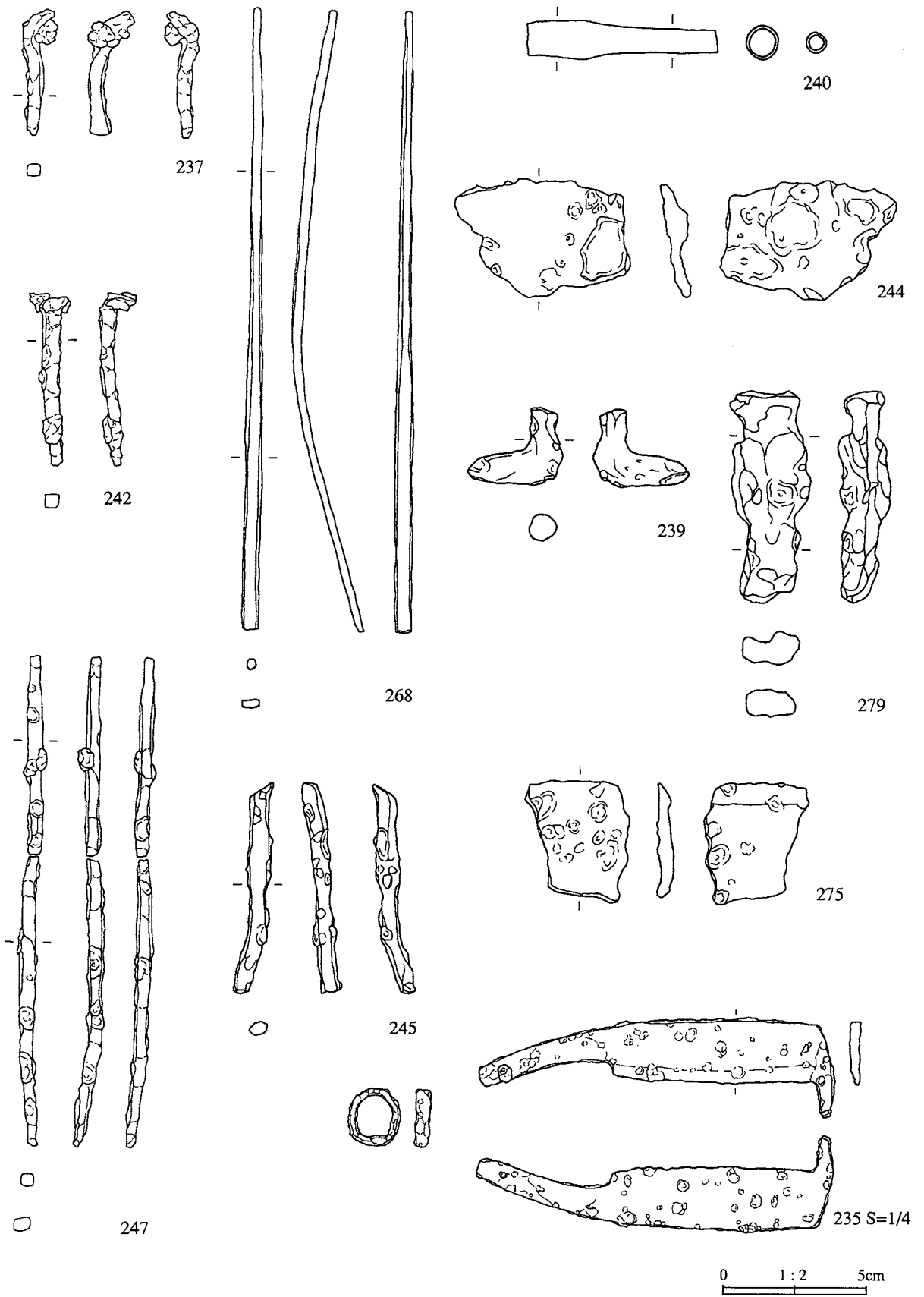
第101图 出土遗物15 (金属器3)



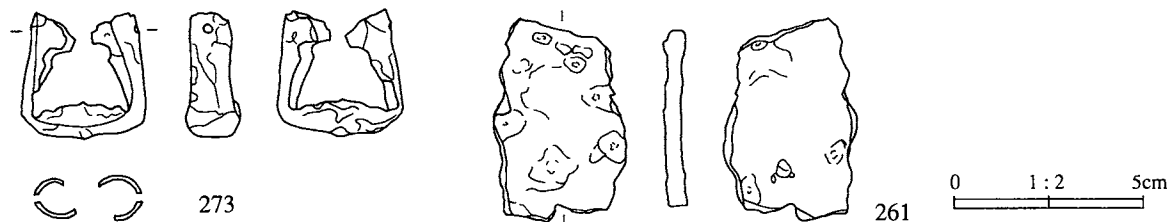
第102图 出土遺物16 (金属器4)



第103图 出土遺物17 (金屬器5)



第104图 出土遺物18 (金属器6)



第10表 金属器観察表(1)

遺物 NO.	器種	出土地点		出土 層位	部位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質	備考
		グリッド	遺構名								
208	鉄鏃	ⅡB4a	1号切岸	検出面	完形	13.5	4.4	1.4	40.1	鉄製	
209	鉄鏃	ⅢC2f	搬出路	表採	完形	9.5	1.7	1.1	13.1	鉄製	
210	小札	ⅡC9d	4号切岸	検出面	完形	2.3	6.9	0.4	12.8	鉄製	黒漆塗り
211	楔	ⅢC5g	4号切岸	検出面	完形	8.2	1.9	1.1	37.9	鉄製	
212	火打鏃	ⅢD1d	9号切岸	検出面	完形	2.7	8.8	0.6	28.9	鉄製	
213	斧	ⅢC4c	2号曲輪	検出面	完形	11.5	1.1	0.3	10.3	銅製	
214	煙管	ⅡC1c	4号堀	検出面	雁首	5.9	1.5	0.1	6.0	銅製	Ⅱ期(小泉弘編年)
215	煙管	ⅡB6d	2号曲輪	検出面	雁首	5.2	1.7	0.1	4.5	銅製	Ⅲ期(小泉弘編年)
216	鍋	ⅢC1b	2号曲輪	検出面	口縁~体部	4.6	9.4	0.5	91.9	鉄製	
217	鍋	ⅢC5c	2号曲輪	検出面	口縁部	6.6	7.3	0.6	56.9	鉄製	
218	鍋	ⅢD2c	9号切岸	検出面	口縁部	4.2	5.7	0.7	21.9	鉄製	
219	鍋	ⅢC1i	8号曲輪	検出面	体部	2.8	3.2	0.5	5.7	鉄製	
220	鎌	ⅡD10a	8号曲輪	検出面	刃身部	2.9	6.2	0.3	9.0	鉄製	
221	釘	ⅢD10g	11号曲輪	検出面	完形	5.5	1.3	1.2	5.7	鉄製	
222	釘	ⅢD9g	11号曲輪	検出面	完形	5.8	0.9	1.0	4.0	鉄製	
223	刀子	ⅣD4d	13号曲輪	検出面	刀身部	2.1	6.2	1.0	11.4	鉄製	
224	刀子	ⅢD3e	10号曲輪	検出面	刀身部	6.9	1.6	0.5	6.5	鉄製	
225	刀子	ⅢC4j	搬出路	表採	刀身部	8.9	1.6	0.5	10.8	鉄製	
226	弾丸	ⅡB4g	4号堀	検出面	完形	1.2	1.2	1.1	9.3	鉛製	
227	リング状	ⅢC1i	8号曲輪	検出面	完形	3.8	3.7	0.5	14.0	鉄製	
228	釘	ⅣC1j	8号切岸	検出面	完形	13.5	0.9	0.8	18.9	鉄製	
229	火箸	ⅢC1i	8号切岸	検出面		16.0	1.2	0.7	13.1	鉄製	
230	鍋	ⅡC7d	5号曲輪	検出面	体部	3.2	3.2	0.5	14.5	鉄製	
231	鍋	ⅡB3h	4号切岸	検出面	体部	4.3	5.0	0.9	58.2	鉄製	
232	鍋	ⅢD2b	8号曲輪	検出面	底部	6.0	6.5	1.0	75.3	鉄製	
233	不明	ⅣD3h	18号曲輪	検出面	完形	6.1	2.5	0.5	22.7	鉄製	松本館跡からも出土。
234	柄飾り	ⅣD2j	16号曲輪	検出面		(10.7)	1.7	0.2	29.6	銅製	
235	鉞	ⅣE6c	9号切岸	検出面	完形	24.8	4.6	0.7	280.9	鉄製	
236	釘	ⅣD1j	16号曲輪	検出面	上部?	(3.7)	(1.1)	(0.5)	3.1	鉄製	
237	釘	ⅣD3j	16号曲輪	検出面		(4.7)	(0.5)	(0.5)	6.3	鉄製	
238	釘	ⅣD6j	22号曲輪	検出面	完形	(6.5)	(6.0)	(0.5)	9.0	鉄製	
239	釘?	ⅣE2b	9号切岸	検出面		(3.4)	(2.7)	(1.1)	17.4	鉄製	
240	煙管	ⅣE3a	9号切岸	検出面	吸口部	6.7	1.3	0.1	12.6	銅製	第Ⅲ期(小泉弘編年)
241	鉄鍋	ⅣD2j	10号切岸	検出面	口縁部片	(3.4)	(4.0)	(0.5)	24.5	鉄製	
242	釘	ⅣE7a	10号切岸	検出面	完形	(6.1)	(0.5)	0.5	7.9	鉄製	
243	刀子	ⅣD3e	9号切岸	検出面		(12.0)	(1.3)	(0.3)	16.6	鉄製	
244	鍋?	ⅢE3b	7号切岸	検出面		(6.0)	(4.2)	(0.4)	16.9	鉄製	
245	火箸	ⅢE5c	23号曲輪	検出面		(5.9)	(0.7)	(0.45)	9.9	鉄製	
246	鉄鍋	ⅢD1c	9号曲輪	整地層		(4.0)	(3.65)	(0.6)	37.6	鉄製	
247	火箸	ⅢE3c	7号切岸	整地層		(17.2)	0.6	0.6	16.5	鉄製	
248	鎌?	ⅢC7j	8号切岸	整地層		(1.75)	(3.25)	(0.6)	12.0	鉄製	
249	刀子	ⅢC6h	8号切岸	整地層		(2.9)	(1.2)	(0.3)	3.2	鉄製	
250	鏃?	ⅢD9g	11号曲輪	整地層		(4.6)	(0.4)	(0.5)	3.8	鉄製	

第105図 出土遺物19(金属器7)

第11表 金属器観察表(2)

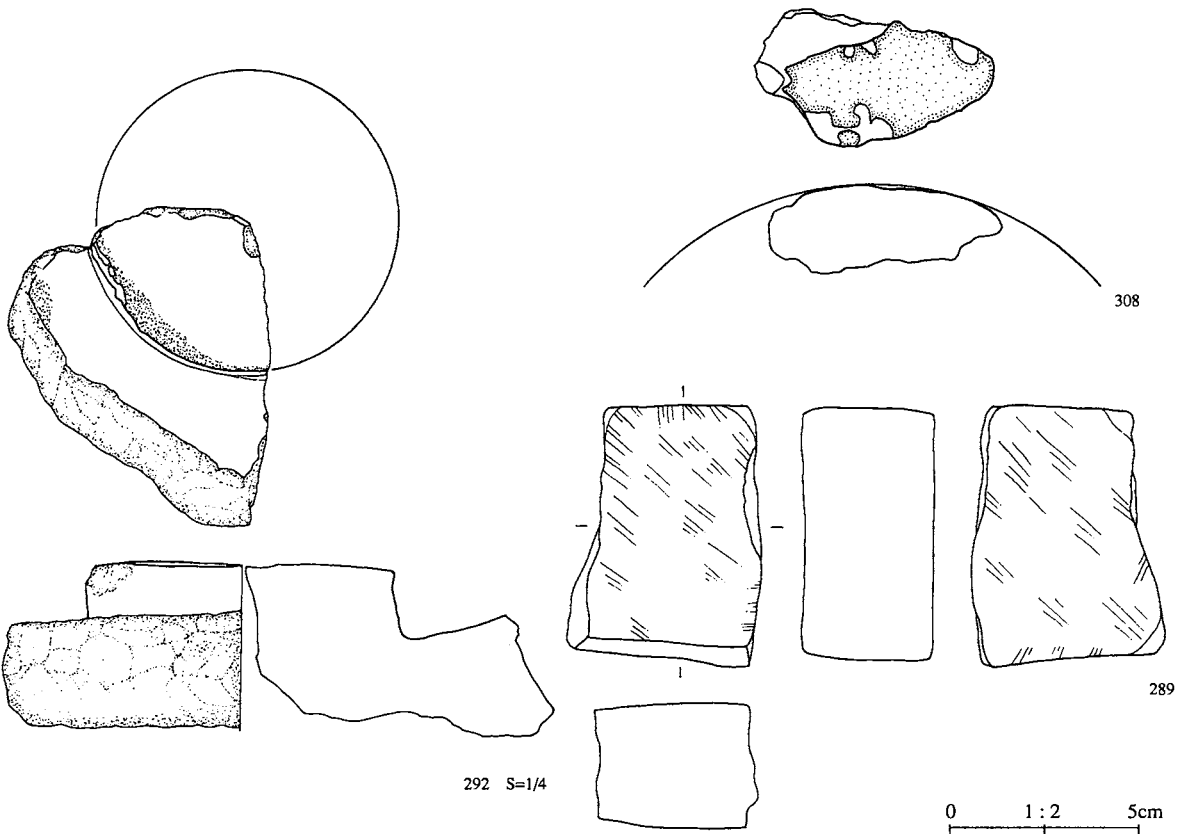
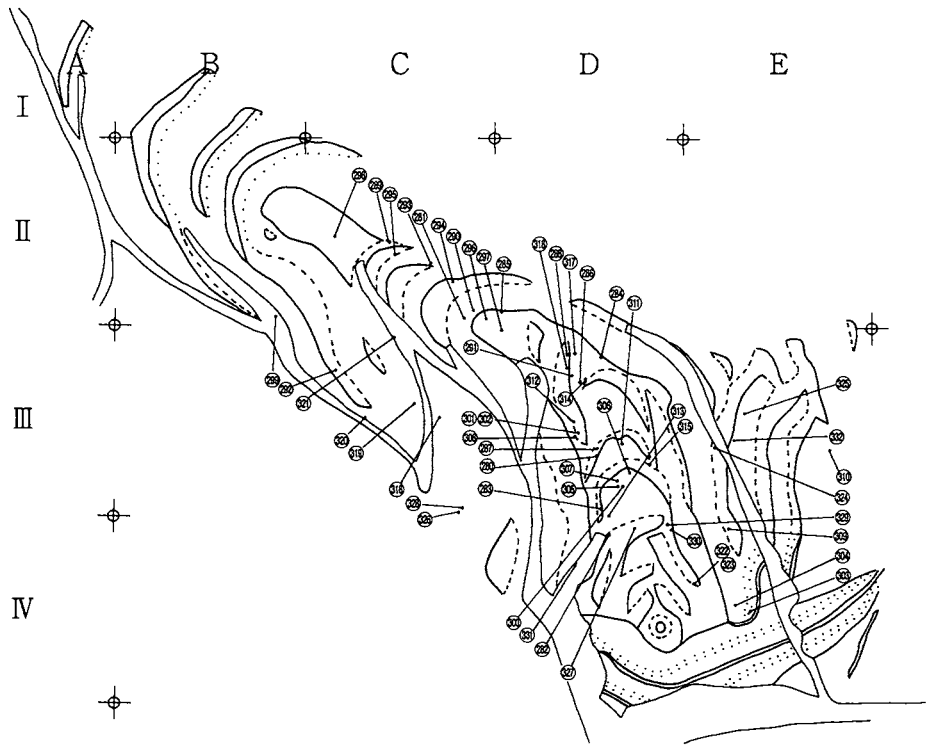
遺物 NO.	器種	出土地点		出土 層位	部位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質	備考
		グリッド	遺構名								
251	刀子	ⅢC1c	4号切岸	整地層	刀身	(12.8)	1.0	0.4	9.5	鉄製	
252	釘	ⅡC10a	2号曲輪	整地層	完形	(3.2)	0.9	0.8	5.7	鉄製	
253	刀子	ⅣD2c	撤出路	表採	頭部	(7.3)	1.2	0.3	10.2	鉄製	
254	鋏	ⅢD2e	10号曲輪	整地層		13.3	(1.55)	0.3	14.4	鉄製	
255	リング状	ⅢD4f	11号曲輪	整地層	完形	3.5	3.0	0.5	6.0	鉄製	
256	鉄鉢	ⅢC5f	2号曲輪	整地層	完形	9.7	2.1	1.0	25.7	鉄製	
257	鉄片	ⅡB9h	3号切岸	整地層		(2.4)	(2.3)	0.3	4.6	鉄製	
258	火箸?	ⅡC10a	2号曲輪	整地層		(14.8)	0.5	0.6	18.5	鉄製	
259	楔	ⅡC10a	2号曲輪	整地層	完形	(7.3)	1.6	0.8	42.3	鉄製	
260	刀?	ⅢD3f	11号曲輪	整地層	柄~刃	(20.0)	3.3	0.5	86.1	鉄製	
261	銅片?	ⅢE2d	6号切岸	整地層	体部	(4.65)	(3.4)	(0.45)	30.8	鉄製	
262	小札	ⅣD3g	10号切岸	整地層	完形	6.5	2.9	0.5	17.6	鉄製	
263	鍋?	ⅢE8d	11号切岸	整地層	体部	(2.7)	(1.6)	0.4	4.7	鉄製	
264	釘	ⅣD3b	8号切岸	整地層	完形	(7.3)	(0.6)	(0.6)	13.9	鉄製	
265	鍋?	ⅣD3f	10号切岸	整地層	体部	(4.3)	(2.85)	(0.5)	20.0	鉄製	
266	火箸?	ⅣD3f	10号切岸	整地層	体部	(6.1)	(0.6)	(0.5)	6.9	鉄製	
267	釘	ⅡB8j	4号堀	整地層	完形	(3.5)	0.6	0.5	4.9	鉄製	
268	火箸?	ⅣE4a	10号切岸	整地層	完形	21.8	0.5	0.4	17.2	鉄製	
269	鍋	ⅣD3j	16号曲輪	整地層	体部	(10.8)	(6.0)	0.4	112.0	鉄製	
270	刀子	ⅣD2h	18号曲輪	整地層	刀身	(14.5)	1.6	0.3	21.8	鉄製	
271	鉄玉	ⅡB8j	4号堀	整地層	完形	1.5	1.4	1.2	6.9	鉄製	
272	楔	ⅡB8i	4号堀	整地層	完形	(5.0)	2.1	0.7	25.8	鉄製	
273	鎚	ⅢE4d	23号曲輪	検出面	完形	3.2	3.3	0.2	8.5	銅製	
274	釘?	ⅣD1j	16号曲輪	整地層		(7.4)	(1.0)	(0.25)	7.5	鉄製	
275	鍋	ⅢE10b	23号曲輪	整地層	口縁部片	(4.0)	(3.1)	(0.4)	21.3	鉄製	
276	鉄族	ⅣD1j	16号曲輪	整地層	完形	10.4	1.0	0.4	12.4	鉄製	
277	鑿	ⅣD1i	16号曲輪	整地層	刀身~柄	(17.1)	(1.6)	(0.5)	49.5	鉄製	
278	釘	ⅣD3a	12号曲輪	整地層		(7.4)	0.8	0.6	13.4	鉄製	
279	楔	ⅢE4b	7号切岸	整地層	完形	(7.3)	2.7	0.9	49.7	鉄製	

第12表 石製品・石器観察表(1)

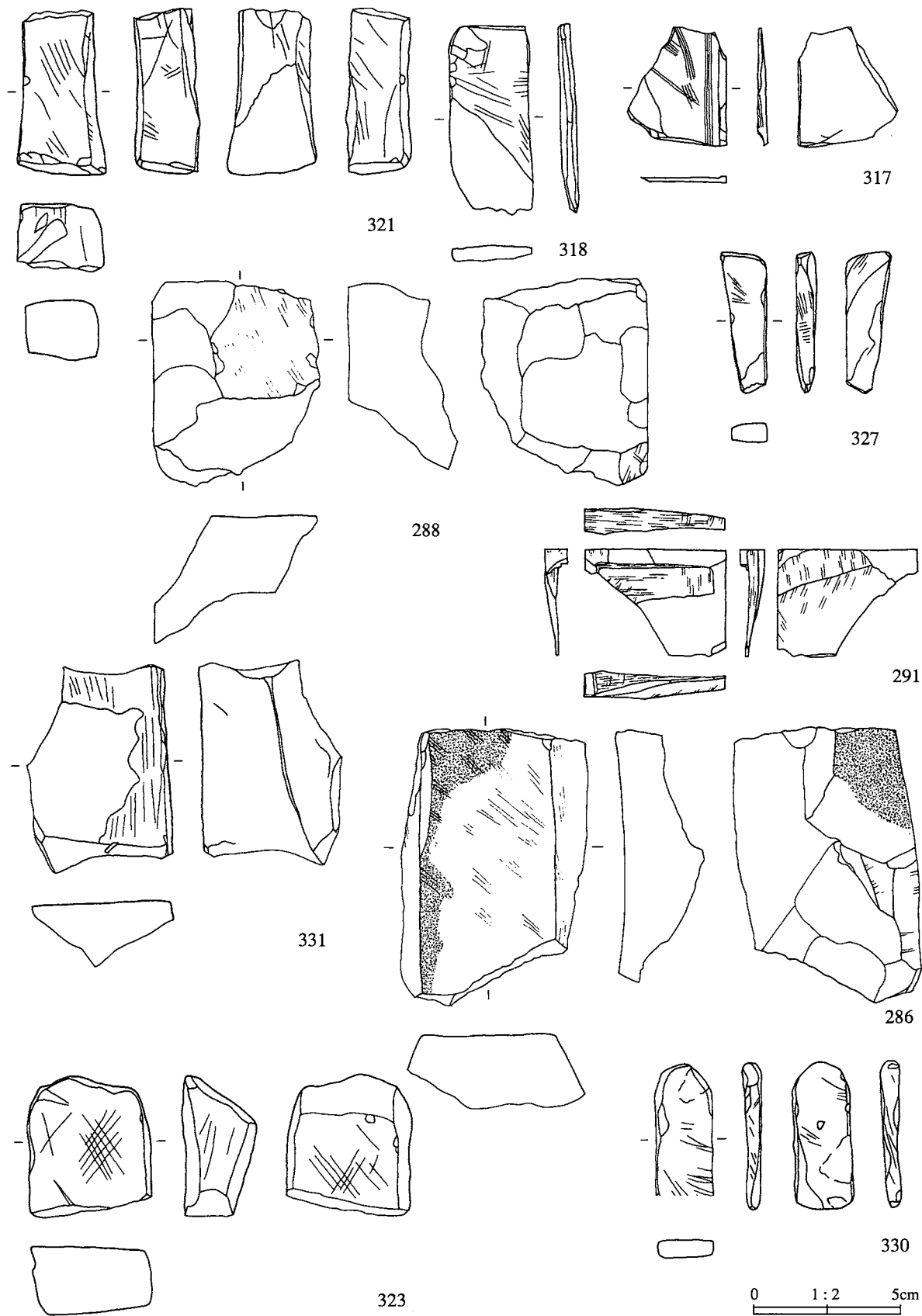
遺物 No.	種類	出土地点		出土 層位	重さ (g)	石質	産地
		グリッド	遺構名				
280	碁石?	ⅢD7f	11号曲輪	検出面	2.5	頁岩	北上産地
281	碁石?	ⅡC10i	8号切岸	検出面	2.1	頁岩	北上産地
282	碁石?	ⅣD2g	11号曲輪	検出面	1.4	頁岩	北上産地
283	碁石?	ⅢD10f	11号曲輪	検出面	2.4	頁岩	北上産地
284	碁石?	ⅢD2f	10号曲輪	検出面	3.3	頁岩	北上産地
285	碁石?	ⅡD10a	8号曲輪	検出面	1.4	頁岩	北上産地
286	砥石	ⅢD3e	10号曲輪	検出面	219.3	凝灰岩	
287	砥石	ⅢD7f	11号曲輪	検出面	176.1	凝灰岩	北上産地
288	砥石	ⅢD2d	11号曲輪	検出面	152.9	凝灰岩	北上産地
289	砥石	ⅡC6e	5号切岸	表採	220.3	砂岩	北上産地
290	砥石	ⅡC10i	8号切岸	検出面	402.5	砂岩	北上産地
291	硯	ⅢD2e	10号曲輪	検出面	10.4	頁岩	北上産地
292	茶臼	ⅢC3b	2号曲輪	検出面	1658.3	安山岩	北上産地
293	台石	ⅡC7g	6号曲輪	表採	6157.0	安山岩	北上産地
294	敲石	ⅡC8h	7号曲輪	検出面	3127.0	塩基性凝灰岩	北上産地
295	磨石	ⅡC7e	5号曲輪	検出面	849.2	砂岩	北上産地
296	磨石	ⅡC10j	8号曲輪	検出面	887.0	ヒン岩	北上産地
297	敲石	ⅢD1a	8号曲輪	検出面	54.9	砂岩	北上産地
298	磨石	ⅡC6b	3号曲輪	検出面	214.7	凝灰岩	北上産地
299	不定形石器	ⅡB10i	撤出路	表採	1.3	頁岩	北上産地
300	石臼	ⅢD9g	11号集石	検出面	154.1	角礫凝灰岩	奥羽山脈
301	石臼	ⅢD6e	12号集石	検出面	95.1	角礫凝灰岩	奥羽山脈
302	石臼	ⅢD6e	12号集石	検出面	31.0	角礫凝灰岩	奥羽山脈
303	砥石	ⅣE6d	7号堀	検出面	165.1	凝灰岩	奥羽山脈
304	石鉢	ⅣE5c	9号切岸	表採	1734.6	安山岩	奥羽山脈
305	石臼	ⅢD9g	11号集石	検出面	78.1	角礫凝灰岩	奥羽山脈
306	石臼	ⅢD8h	1号掘立	検出面	644.4	角礫凝灰岩	奥羽山脈
307	石臼	ⅢD9g	11号集石	検出面	638.5	角礫凝灰岩	奥羽山脈



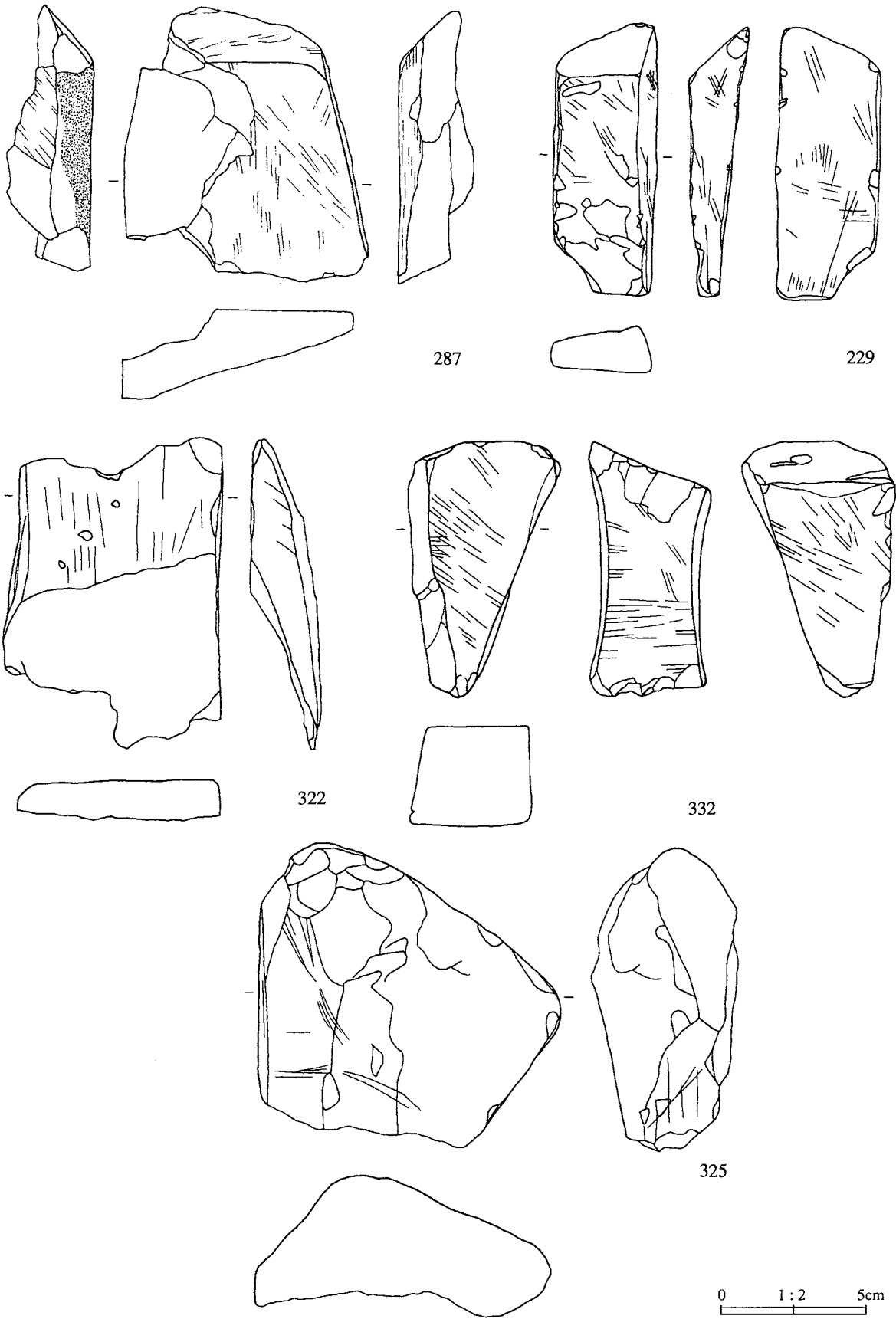
# 石製品 石器



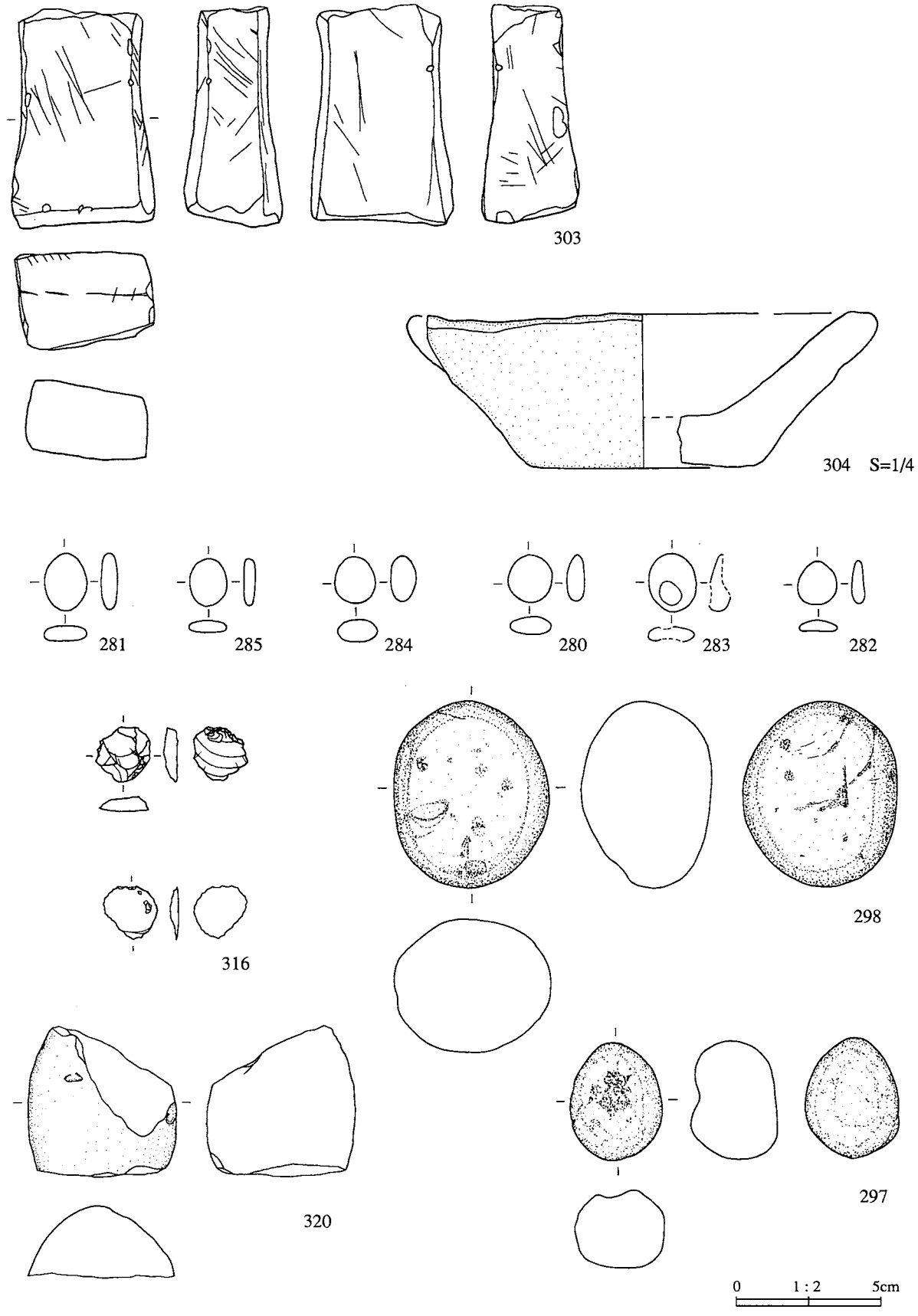
第106図 出土遺物20 (石製品・石器1)



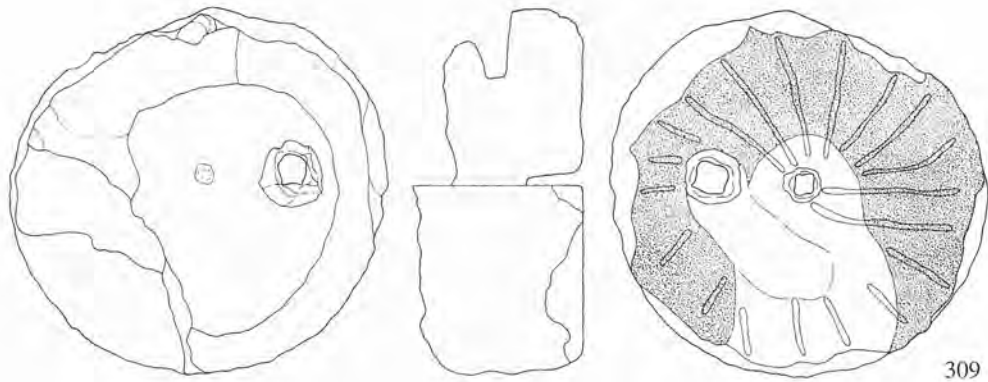
第107図 出土遺物21 (石製品・石器2)



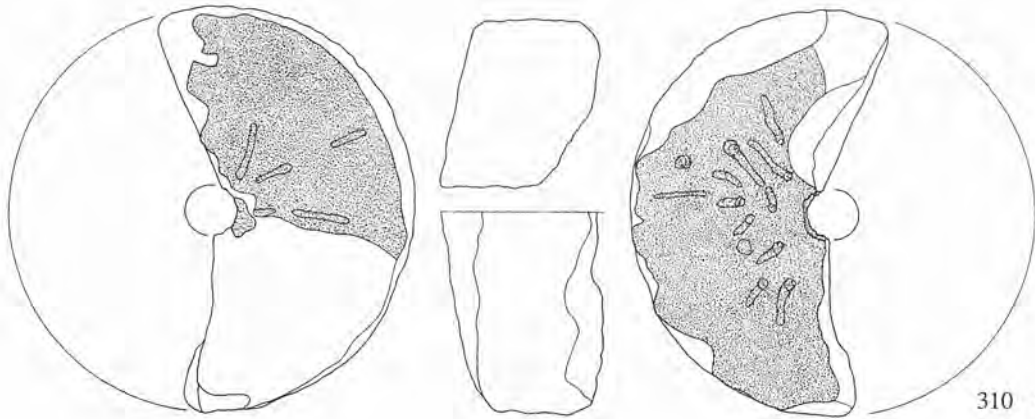
第108図 出土遺物22 (石製品・石器3)



第109図 出土遺物23 (石製品・石器4)

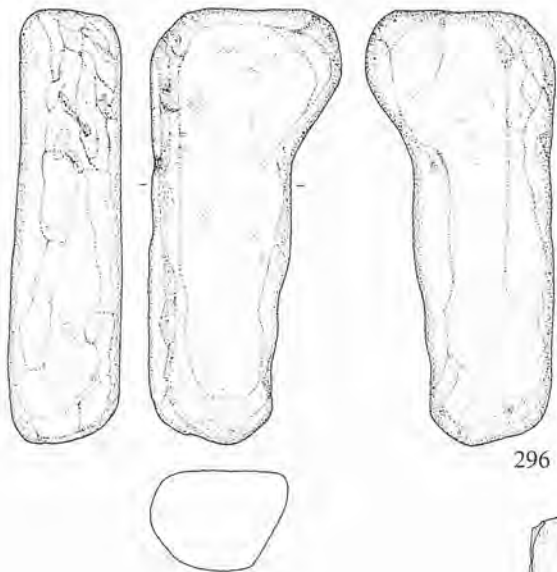


309

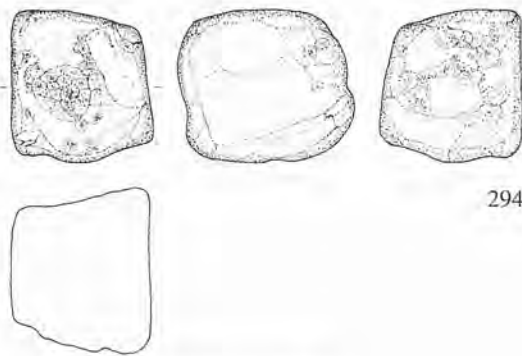


310 S=1/6

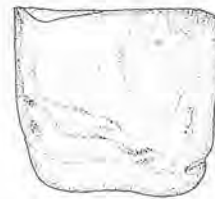
0 1:3 20cm



296



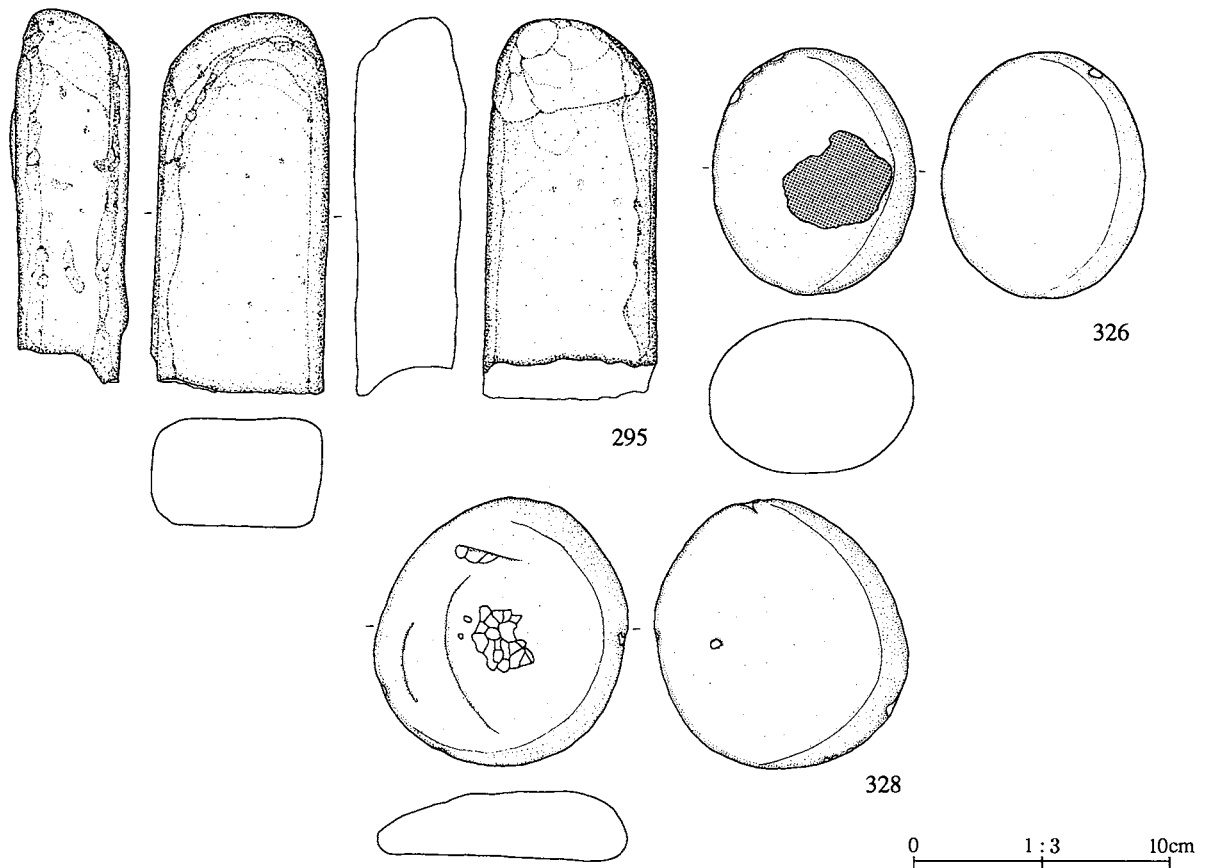
294



293

0 1:3 10cm

第110図 出土遺物24 (石製品・石器5)

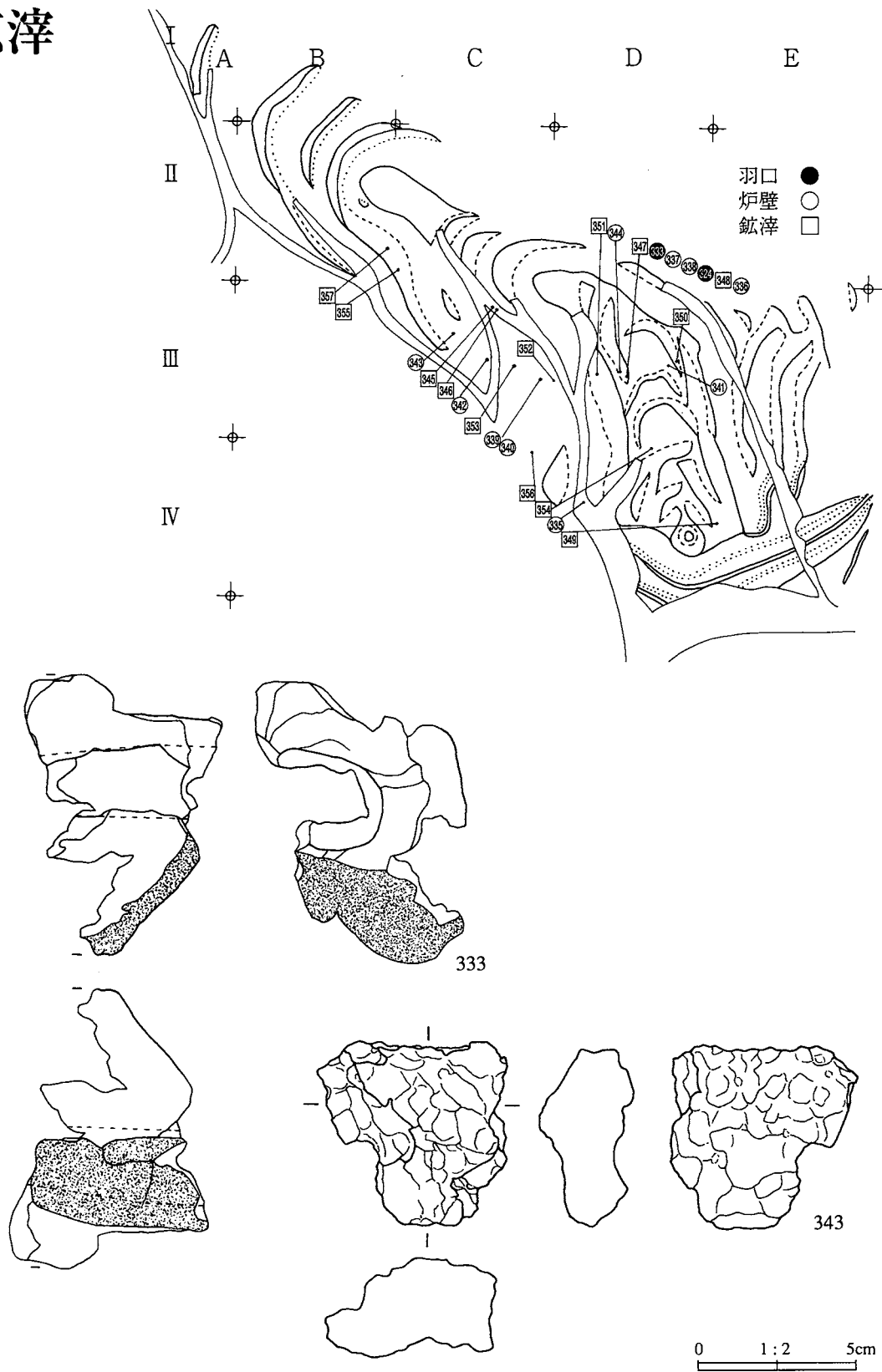


第13表 石製品・石器観察表（2）

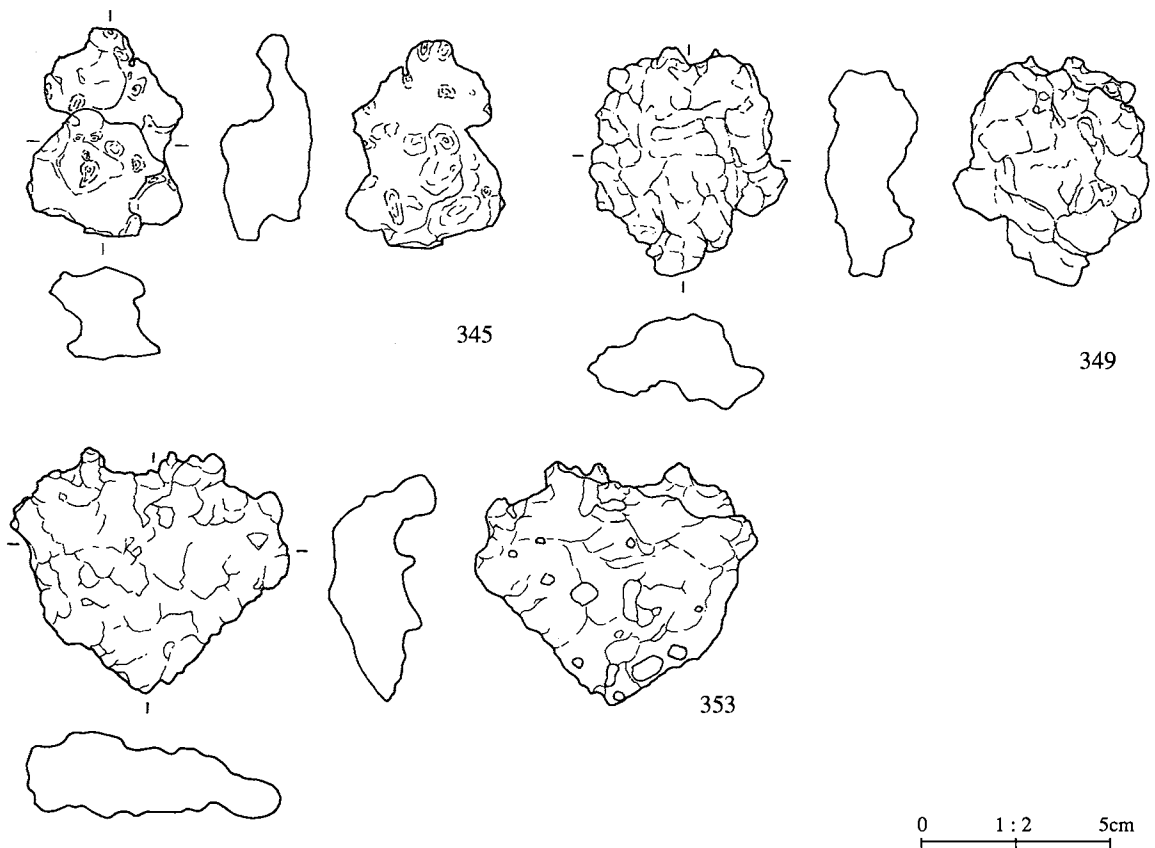
遺物 No.	種類	出土地点		出土 層位	重さ (g)	石質	産地
		グリッド	遺構名				
308	石臼	ⅢD 6 e	12号集石	検出面	302	角礫凝灰岩	奥羽山脈
309	石臼	ⅣE 1 c	23号曲輪	検出面	12517	角礫凝灰岩	奥羽山脈
310	石臼	ⅢE 7 h	15号切岸	検出面	7350	角礫凝灰岩	奥羽山脈
311	碁石?	ⅢD 7 g	11号曲輪	検出面	1.5	頁岩	北上山地
312	碁石?	ⅢD 6 e	9号切岸	検出面	1.9	頁岩	北上山地
313	碁石?	ⅢD 10 g	11号曲輪	検出面	1.5	頁岩	北上山地
314	碁石?	ⅢD 3 e	10号曲輪	検出面	1.3	頁岩	北上山地
315	碁石?	ⅢD 8 i	11号曲輪	検出面	2.1	頁岩	北上山地
316	不定形石器	ⅢC 5 h	7号切岸	検出面	0.9	チャート	北上山地
317	硯	ⅢD 2 e	10号曲輪	検出面	3.9	頁岩	北上産地
318	硯	ⅢD 3 d	9号切岸	検出面	11.8	頁岩	北上産地
319	石臼	ⅢC 5 f	4号曲輪	検出面	1169.4	角礫凝灰岩	奥羽山脈
320	磨石	ⅢC 5 d	4号切岸	検出面	83.9	花崗岩	北上山地
321	砥石	ⅢC 1 e	搬出路	検出面	53.6	凝灰岩	奥羽山脈
322	砥石	ⅣE 4 a	16号曲輪	検出面	169.2	砂岩	奥羽山脈
323	砥石	ⅣE 4 a	16号曲輪	検出面	62.1	凝灰岩	奥羽山脈
324	碁石?	ⅢE 7 b	23号曲輪	検出面	2.1	はぐれい岩	北上山地
325	砥石	ⅢE 5 d	11号切岸	検出面	681.5	砂岩	奥羽山脈
326	磨石	ⅢC 10 i	7号切岸	検出面	735.7	閃緑岩	北上山地
327	砥石	ⅣD 1 h	10号切岸	検出面	6.8	頁岩	北上山地
328	碁石	ⅢC 10 i	7号切岸	検出面	412.9	砂岩	北上山地
329	砥石	ⅣD 1 j	16号曲輪	検出面	60	凝灰岩	奥羽山脈
330	砥石	ⅣD 1 j	16号曲輪	検出面	8.6	凝灰岩	奥羽山脈
331	砥石	ⅣD 3 e	9号切岸	検出面	63.3	砂岩	奥羽山脈
332	砥石	ⅢE 6 c	11号切岸	検出面	196.8	砂岩	奥羽山脈

第111図 出土遺物25（石製品・石器6）

# 羽口・炉壁 鉞滓



第112図 出土遺物26 (羽口・炉壁・鉄滓1)



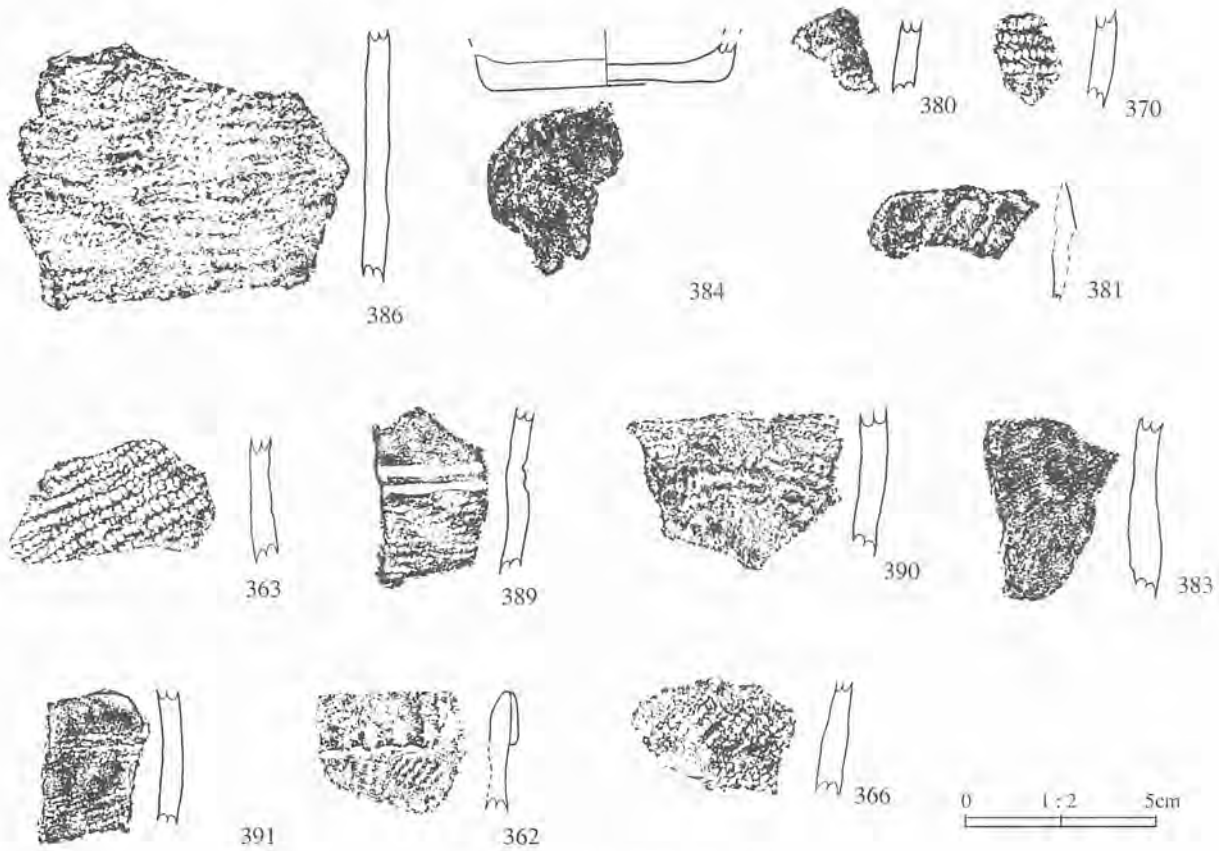
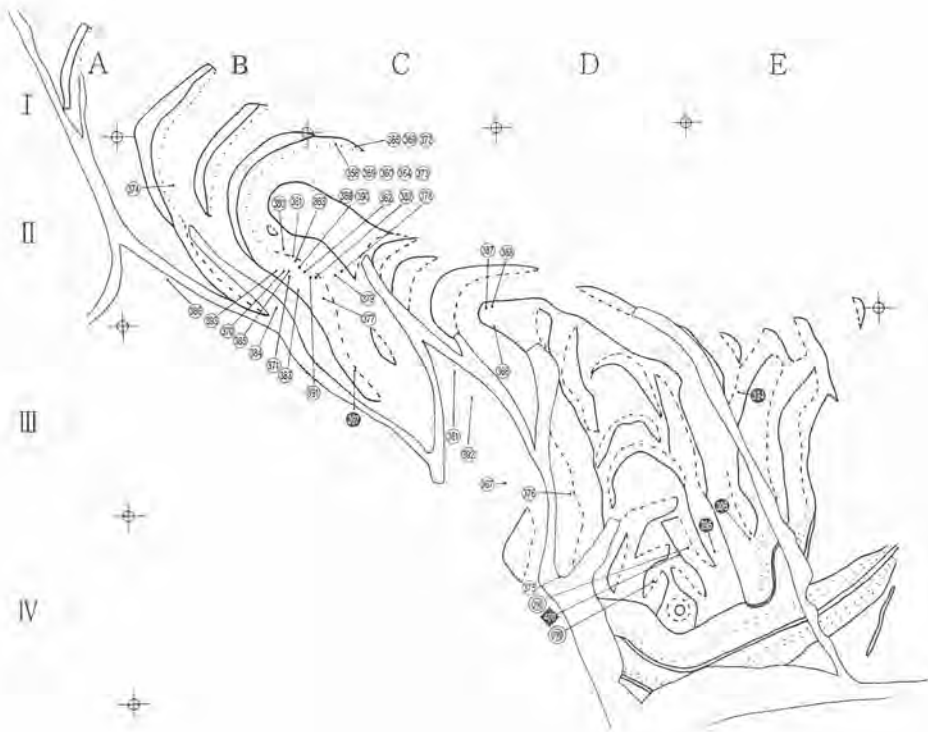
第14表 羽口・炉壁・鉢滓観察表

遺物 No.	種類	出土地点			重さ (g)	備考
		グリッド	遺構	層位		
333	羽口	Ⅲ D 6 e	12号集石	検出面	104.5	334と同一個体
334	羽口	Ⅲ D 6 e	12号集石	検出面	104.5	333と同一個体
335	炉壁	Ⅳ D 4 c	搬出路	表採	4.9	
336	炉壁	Ⅲ D 6 e	12号集石	検出面	31.3	
337	炉壁	Ⅲ D 6 e	12号集石	検出面	22.3	
338	炉壁	Ⅲ D 6 e	12号集石	検出面	2.8	
339	炉壁	Ⅲ C 6 j	8号切岸	検出面	15.3	
340	炉壁	Ⅲ C 6 j	8号切岸	検出面	16.7	
341	炉壁	Ⅲ D 6 h	8号切岸	検出面	2.0	
342	炉壁	Ⅲ C 5 f	4号切岸	検出面	19.7	
343	炉壁	Ⅲ C 4 d	4号切岸	検出面	80.7	
344	鉢滓	Ⅲ C 2 g	搬出路	表採	49.5	
345	鉢滓	Ⅲ C 2 g	搬出路	表採	49.4	
346	鉢滓	Ⅲ D 6 e	12号集石	整地層	2.4	
347	鉢滓	Ⅲ D 6 e	12号集石	整地層	9.1	
348	鉢滓	Ⅳ E 6 a	10号切岸	整地層	88.2	
349	鉢滓	Ⅲ D 5 h	11号曲輪	整地層	0.9	
350	鉢滓	Ⅲ D 6 c	12号集石	整地層	3.5	
351	鉢滓	Ⅲ D 7 a	8号切岸	整地層	1.0	
352	鉢滓	Ⅲ C 6 h	7号切岸	整地層	96.2	
353	鉢滓	Ⅳ D 1 g	11号曲輪	整地層	64.9	
354	鉢滓	Ⅱ C 10 a	4号堀	整地層	32.8	
355	鉢滓	Ⅳ C 1 i	7号切岸	整地層	4.2	
356	鉢滓	Ⅱ B 8 j	4号堀	整地層	14.6	
357	鉢滓	Ⅲ D 6 e	12号集石	整地層	3.5	

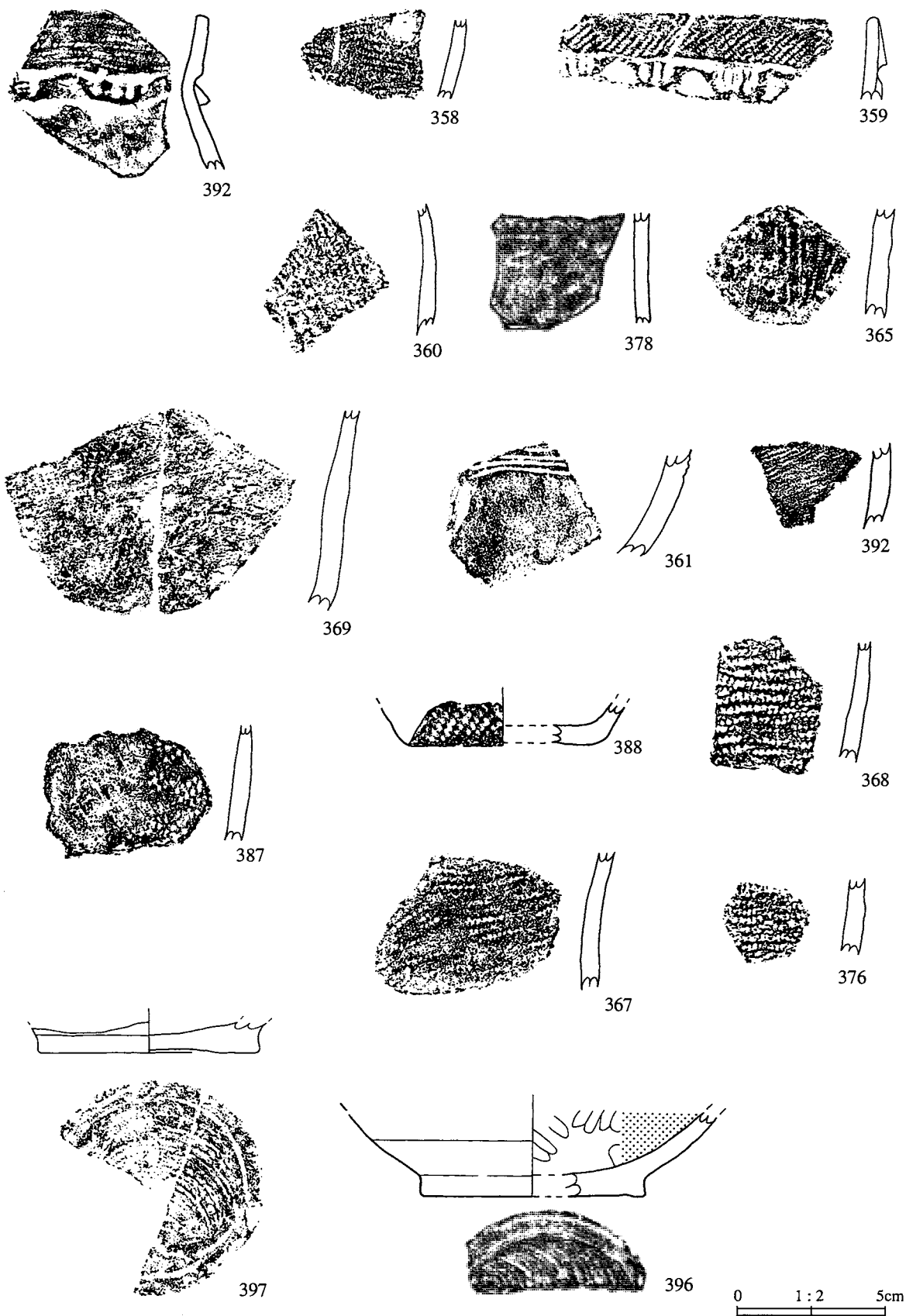
第113図 出土遺物27 (羽口・炉壁・鉄滓2)



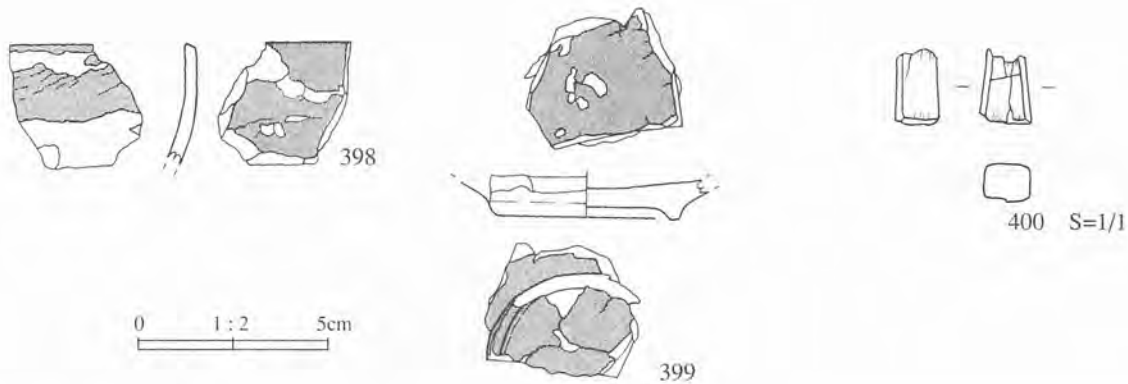
土器  
木製品  
骨角器



第114図 出土遺物28 (土器1)



第115图 出土遺物29 (土器2)



第15表 土器観察表

遺物 NO.	出土地点			機種	備	考
	グリッド	出土遺構名	層位			
358	II C 1 b	4号堀	埋土中	深鉢	胴：縄文 (LR)	
359	II C 1 b	4号堀	検出面	深鉢	口縁：退化交互刺突文、縄文 (LR)、外面スス付着364と同一個体	
360	II C 1 b	4号堀	検出面	深鉢	胴：縄文 (LR?)、磨滅強	
361	III C 3 h	7号切岸	検出面	壺	胴上：沈線	
362	II B 8 j	2号曲輪	検出面	深鉢	口縁：退化交互刺突文、縄文 (LR)、	
363	II B 7 j	2号曲輪	検出面	深鉢	胴：縄文 (LR)	
364	II C 1 b	4号堀	検出面	深鉢	外面スス付着 3と同一個体	
365	II C 1 c	4号堀	検出面	深鉢	胴：不整撚り糸文 (原体RL)	
366	II B 8 j	2号曲輪	検出面	深鉢	胴：縄文 (LR)	
367	III C 9 j	8号切岸	検出面	深鉢	胴上：縄文 (LR) 磨滅強	
368	III C 1 j	8号曲輪	検出面	深鉢	胴：縄文 (LR)	
369	II C 1 c	4号堀	検出面	深鉢	胴部：縄文 (LR?) 磨滅強	
370	II B 8 i	4号堀	検出面	鉢?	胴：縄文 (LR)	
371	II B 8 i	4号堀	検出面	鉢?	胴上：無文?	
372	II C 1 c	4号堀	検出面	鉢?	胴：縄文磨滅?内面ナデ	
373	II C 1 b	4号堀	検出面	深鉢	胴上：無文?	
374	II B 3 c	2号切岸	検出面	鉢?	胴：縄文磨滅?	
375	IV D 4 c	搬出路	表採	壺	底部：外面スス付着	
376	III D 10 d	13号曲輪	検出面	深鉢	胴：縄文 (RL)、内面スス付着	
377	II C 9 a	2号曲輪	検出面	深鉢	胴：無文?	
378	II C 8 b	4号切岸	検出面	深鉢	胴：外面 内面ナデ	
379	II C 8 b	4号切岸	検出面	深鉢	胴：外面 内面ナデ	
380	II B 7 i	4号切岸	検出面	深鉢?	胴：縄文 (RL) 磨滅強、内面ナデ	
381	II B 7 j	4号切岸	検出面	深鉢?	胴：縄文 (LR)、内面ナデ	
382	II C 8 a	4号堀	検出面	深鉢	口縁～胴上：退化交互刺突文 縄文 (LR)	
383	II B 9 j	4号堀	検出面	深鉢	胴上：縄文 (LR) 磨滅強、内面ナデ	
384	II B 9 i	4号堀	検出面	深鉢?	底部：	
385	II B 8 i	4号堀	検出面	鉢?	胴：条痕磨滅	
386	II B 8 c	2号切岸	検出面	深鉢	胴：縄文 (LR)、外面スス付着、内面ナデ	
387	II C 10 j	8号曲輪	検出面	深鉢	胴：縄文 (LR)、内面ナデ	
388	II C 10 j	8号曲輪	検出面	鉢?	底部～胴下：縄文 (LR)	
389	II B 8 j	4号堀	検出面	深鉢	口縁：波状、胴上：沈線、縄文 (LR)	
390	II B 8 j	4号堀	検出面	深鉢	胴：縄文 (L)、外面スス付着	
391	II C 9 a	4号堀	検出面	深鉢	胴：縄文 (LR)	
392	III C 5 h	7号切岸	検出面	深鉢	胴：縄文 (RL)、外面スス付着、内面ナデ	
393	II B 8 i	4号土塁	検出面	鉢?	胴：縄文磨滅強 内面ナデ	
394	III E 5 c	23号曲輪	検出面	坏	胴部片：内面黒色処理 ミガキ、外面ロクロナデ	
395	IV E 3 a	9号切岸	検出面	坏	口縁部片：内面黒色処理 ミガキ、外面ロクロナデ	
396	IV E 3 c	9号切岸	検出面	坏	底部～胴部片：内面黒色処理 ミガキ、外面ロクロナデ回転糸切り	
397	III C 3 c	2号曲輪	検出面	坏	底部片：内面黒色処理、回転糸切り	

第16表 木製品観察表

遺物No.	出土地点	出土遺構	器種	部位	備	考
398	IV D 3 j	10号切岸	椀	口縁	漆塗り。ケヤキ	
399	IV D 5 h	20号曲輪	椀	底部	漆塗り。ケヤキ	

第17表 骨角器観察表

遺物No.	出土地点	出土遺構	器種	備	考
400	IV D 3 j	21号曲輪	不明	鹿角?	

第116図 出土遺物30 (土器3・木製品・骨角器)

## V. まとめ

『宇夫方家譜』によれば阿曾沼氏入部以前に、遠野地方には安倍氏・藤原氏時代より続く土豪族の宮森氏、達首部氏、鵜崎氏があり、それらと婚姻やその他の平和的方法で遠野を円滑に統治したとされる。宇夫方氏は土地を開発すれば、それを中心に城館を築き一族を館主として管理警護にあてたのでその開拓開発は前代に見ないほど進捗したと伝えられている。

宇夫方氏は、こうして旧勢力の豪族を婚姻政策によって盟約鎮撫するとともにその開発が進むと各用地に城館を築いて一族の支配の中心にしたとされ早瀬川左岸に位置する青笹の白(丑)館(第9・10図6)などがそれである。白館は上郷および青笹の平野を眼下に見下し遙かに松崎の横田城と相呼応し、さらに気仙海岸への浜峠を監視する要地で本拠地の横田城、綾織の谷地館とともに重要な城館である。館主は菊池氏と称され菊池成景の時代が最も勢威があったと伝えられる。

また、白館の上流にある上郷の平倉館・板沢館は同様の早瀬川左岸に位置し、この他にも刃金館や林崎館等が存在する。これらはいずれもその地の開拓の基城となったとされている城館である。刃金館(同23)、板沢館(同12)は南北朝期に築城され、その後戦国時代に篠館(同38)・太田館(同32)、駒込館(同42)が造られたと推定されている。

篠館は、白館や板沢館と同様に早瀬川左岸に張り出す尾根に築城され、「上閉伊郡志」には前述のように阿曾沼氏を追放した鱒沢左馬之助広勝の一族の関口某が館主と伝えられている。また、早瀬川を挟み篠館から北東方向に対峙する駒込館はこの政変を鱒沢広勝とともに起こした平清水駿河の一族の館跡と伝えられるが詳細は不明である。館主が明らかな白館・刃金館・板沢館に比して規模の大きな篠館・駒込館の館主が記録や伝承において判然としないことは、三百年間にわたる阿曾沼氏統治の影響力を窺わせるものである。

平成10年度から平成11年度の2ヶ年にわたる篠館跡の発掘調査で得られた資料は、遺構については中世の普請事業である曲輪(平坦地)32ヶ所(テラス状遺構を含む)、武者走り状遺構2ヶ所、切岸状遺構15ヶ所、堀跡9条、土塁8基、土坑28基、作事の痕跡として竪穴住居跡1棟、掘立柱建物跡1棟、柱穴列5基、である。また、焼土遺構を12基検出した。

遺物については、縄文～弥生時代では、土器・剥片石器・礫石器、古代では内黒土師器の坏、中世では国産陶器として瀬戸・美濃産灰釉、鉄釉陶器、唐津産陶器、瓦質土器、かわらけ。中国産磁器として青磁、白磁、染付、赤絵、石製品として砥石、石鉢、石臼、茶臼、木製品として漆器碗、金属製品として古銭、古札、釘、鉦、鍋片などが出土している。

### 1. 縄張について(第117・118図)

篠館は仙人峠や五葉山からほぼ東西に連なる山体から北西方向に舌状に張り出す尾根に立地している。南方の山体を背後に西―北―東方向の街道筋や平野部を一望する要衝であるとともに、平地から主郭までの比高差は82mを測り、東西を谷に挟まれ北側は傾斜角約60°の断崖が西流する早瀬川に臨む天然の要害の地でもある。

山体から北北西に延びる尾根は主郭北端で北西方向に転じ、この地点から約200mで平野部に達する。尾根の先端部は傾斜角が22～25°と調査区内では最も緩慢な傾斜を示すが、その西側にある谷は沢により解析された比高差約10m、傾斜角度約50°の完全なV字峡谷が早瀬川合流点から約70mにわたって存在し、早瀬川とともに天然の水堀の役目を果たしている。この西側の谷は標高420m付近からは谷筋が拡大し、堀の機能を失うが尾根筋から谷への西斜面は平均傾斜角度が30～40°の切岸が構築され周到な普請がなされ

ている。

遺跡南側の尾根の基部には4条の堀切続きの堅堀が構築され、背後からの敵の侵入を防御している。

東側は、平均傾斜角40°の切岸と3ヶ所の帯曲輪が谷からの敵の侵入に備えている。これらの帯曲輪と北側断崖の角には小規模の曲輪が連続して3ヶ所構築され東斜面の横矢掛けの役目を果たしている。30号曲輪には西側と同様に投石用の集石が配備されている。

東斜面下段の2ヶ所の帯曲輪は西側と同様に堀・土塁が埋められ平場に改築されたものである。

尾根先端の最初の防御施設は1号土塁、1号堀であり、平地からの比高差は25mを測る。北西側の備えは、この1号堀・1号土塁から4号堀・4号土塁までの4重の防塁・堀が果たしている。尾根の西斜面に廻る2〜4号堀・土塁は南側が埋められ帯曲輪に改築されており、2号堀はこの改築後に投石用の集石が8基配備され西斜面の防御が強化されている。

これら堀や土塁・切岸による四方の防御の中心に主郭（11号曲輪）が位置するが、3号曲輪と8号曲輪は主郭に次ぐ面積を有する。尾根筋上の主郭を含めた主要な3ヶ所の曲輪の間に尾根を削平した小規模な曲輪を配置しながら、それらの周囲に帯曲輪を巡らす縄張になっている。

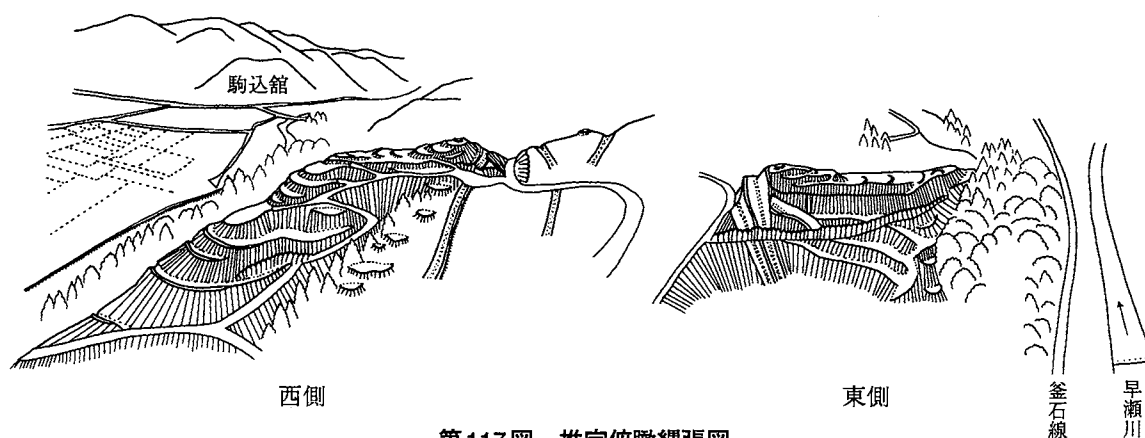
削平による曲輪が14ヶ所、尾根の両側に削平による土砂を盛って普請された曲輪は7ヶ所である。

また、西斜面（調査区外）に延びる6号堀の北側には堀に沿って6ヶ所の曲輪が普請されている。西側の虎口はこの堅堀の末端と考えられるが林道建設により攪乱をうけており詳細は確認できなかった。この6ヶ所の曲輪は堅堀の防御とその北側にある尾根西斜面に対する横矢掛けの機能を有すると考えられる。

篠館跡は、以下に示すように平城のような大規模な曲輪を持たず、尾根の削平と盛土による典型的な山城である。遺物の量からも居館ではなく、赤羽根峠や街道筋を一望する要衝の地であることから「境目の城」、あるいは「詰めの城」、「番城」として機能していたものと考えられる。

曲輪名	属性	面積(m <sup>2</sup> )	普請方法	曲輪名	属性	面積(m <sup>2</sup> )	普請方法	曲輪名	属性	面積(m <sup>2</sup> )	普請方法
曲輪1	帯曲輪	57.6	盛土	曲輪12	腰曲輪	42.5	盛土	曲輪23	帯曲輪	176.1	削平・盛土
曲輪2	帯曲輪	243.6	盛土	曲輪13	帯曲輪	155.7	盛土	曲輪24	帯曲輪	186.9	削平・盛土
曲輪3	副郭	322.7	削平	曲輪14	帯曲輪	(42.8)	削平	曲輪25	帯曲輪	169.7	盛土
曲輪4	腰曲輪	20.5	削平	曲輪15	帯曲輪	(41.3)	削平	曲輪26	腰曲輪	43.5	削平
曲輪5	副郭	43.9	削平・盛土	曲輪16	帯曲輪	50.0	盛土	曲輪27	帯曲輪	130.4	盛土
曲輪6	腰曲輪	73.0	削平	曲輪17	腰曲輪	10.9	削平	曲輪28	腰曲輪	18.9	盛土
曲輪7	腰曲輪	161.8	削平	曲輪18	腰曲輪	57.9	削平	曲輪29	腰曲輪	27.7	削平
曲輪8	副郭	177.0	削平	曲輪19	帯曲輪	35.5	盛土	曲輪30	腰曲輪	13.7	削平
曲輪9	連絡曲輪	55.2	削平	曲輪20	連絡曲輪	26.0	削平	テラス状1		6.3	削平
曲輪10	連絡曲輪	90.4	削平	曲輪21	連絡曲輪	29.2	盛土	テラス状2		6.4	削平
曲輪11	主郭	638.6	削平・盛土	曲輪22	物見曲輪	33.8	削平				

第18表 曲輪一覧表



第117図 推定俯瞰縄張図

## 2. 遺物

遺物は、陶磁器を初め、土器・金属製品・銭貨・石製品・木製品・骨角器が出土しているがここでは出土した全遺物数の44.3%を占める程度時期を特定できる陶磁器と縄文土器について考察を加えながら、篠館の時期や役割についてのまとめをしたい。

### (1) 陶磁器 (第87～97図 写真図版4～11、54～67)

二ヶ年の調査で出土した陶磁器は合計177点を数える。近世と不明の2点を除く175点は、中世陶磁器であり98.3% (175点) を占める。その内訳は、中国産磁器が127点 (71.8% = 染付42.3% + 青磁10.2% + 白磁18.1% + 赤絵1.1%)、国産陶器が49点 (27.7%) である。ほとんどが破片での出土で個体数を表すものではないが、中国産磁器について中世の指標となっている一乗谷朝倉氏遺跡や根来寺防院跡や紀淡海峡、太宰府史跡、青森県尻八館・根城・浪岡城跡等の遺跡との比較検討をするために青磁碗については上田秀夫氏の編年思案、白磁については森田勉氏の編年、また染付については小野正敏氏の編年に準じて分類を試みた。これにより、資料が残されていない篠館をはじめとする多くの中世城館の時期・性格を当時の全国的な物流を通して位置づけが可能になると考えられる。

また、国産陶器については、瀬戸・美濃系の灰釉、鉄釉陶器を中心に若干の考察を加えた。

#### a) 中国産磁器

##### ・青磁碗

青磁の皿は11点が出土し、全て15世紀以降の稜花皿と考えられる。また、碗は、7点が出土しC類が4点 (2、4、11、14) 出土しているが、3点は小破片で分類は不明である。出土したC類の4点は、15世紀前後を中心に見られる碗である。口縁部外面に雷文帯、胴部に蓮弁文を持つ。D類と思われる3点 (5、8、13) は内面に貫入が入る。

A類・・・小さい高台を持ち、全面に施釉後畳付部が釉剥ぎされているもの。

B類・・・蓮弁文を持つ。片切掘り縞蓮弁文からヘラ先による細線蓮弁文をもつもの。

C類・・・外面口縁部に雷文帯をつもの。

D類・・・口縁部が外反するもの。

E類・・・口縁部の内彎するもの。見込みに印花文、「顧氏」の銘、吉祥文を持ち15世紀後半を遡らない。注1

注1 中亀井明德「日本出土の明代青磁碗の変遷」 鏡山先生古希記念古文化論叢(1980)

##### ・白磁

白磁は32点が出土している。D群に分類されるものは5点、E群に分類されるもの26点である。D群の白磁は、15世紀～後半16世紀代の山城・居館跡から多く出土しており、隣県では青森県の尻八館遺跡などに出土例がみられる。また、E群は、一乗谷朝倉氏遺跡や根来寺からの多く出土しているもので16世紀代に出土が集中する白磁である。

A群・・・所謂「口禿げの白磁」。伏せ焼きするものが多い。13世紀中頃～14世紀前半。

B群・・・「枢府窯」・「枢府磁」・「枢府軸」といわれる一群。高台内側斜行部に砂粒が焦げ付く。皿は、胴部を緩く内彎し立ち上がり、口縁部を丸くする。坏は体部が途中で大きく屈曲し、屈曲点より上位は外上方へ直線的かやや外彎しながら立ち上がる。体部外面に沈線を数条巡らしその間を隆帯状にする例が多い。14世紀。

C群・・・形態はB群に似る。胎土は白灰色、釉は灰色味をおびる。内底面に印花文を持つ。高台内側斜行部に砂が付かない。縁部が外反するものが基本。15世紀前後。

D類 小型の高台付皿、坏、多角皿。皿と多角皿は高台を4～5ヶ所削り込みを入れるものがある。釉に細かな貫入を多く伴う。14世紀後半～16世紀。

E類・・・ 皿はB群を踏襲するものと、端反り・碁笥底・菊皿がある。坏は、碁笥底と腰折れの坏が基本的である。釉は白色に近く胎土は精良緻密な例が多いが、胎土が粗く釉も灰色・黄色味をおび多くの貫入を伴うものもある。畳付きには砂が付着する。16世紀。

・染付

染付は75点が出土している。内訳は碗が30点、皿が37点、器種不明のもの8点である。分類の結果碗は、C群10点、B群13点、E群2点出土し、皿はB群22点、C群5点、E群5点、F群1点である。小破片のため器種の不明なものや分類ができないもの17点もあった。

	碗				皿										
	B	B1	BxII	B1	B	B1	B1VII	B1VII	B1XI	C1	CIII	E	ExI	ExII	F
出土点数	12	1	1	10	5	3	7	5	1	2	3	2	2	1	1
分類合計	14			10	21					5		5			1

※器種不明なもの、分類不能のものを除く。

染付碗のB群は、右の白磁D群や青磁のC類と共伴するもので、青森県尻八館や広島県加井妻城、座喜味城、御物城の出土例でも同様の共伴関係がみられる。また、染付碗C群は染付皿B1群や白磁の右E群を共伴して出土し、16世紀中頃からは染付碗E群、16世紀の後半から染付の皿E群が加わり、更に16世紀末にはF群が加わって出土している。

従って、篠館も15世紀の前半から16世紀末までの全国の染付・青磁・白磁の出土例とほぼ同じ結果をえられたことになる。

染付碗の分類

	C				D				E				F	B					A	
	I	II	III	IV	VI	VIIA	VII B	VII	IX	IX	X	XI	XII	XIII	XIV	XV	XVI	XXII		
レンツウ碗 中間型 マントーシン型	◎	◎	◎	△	◎	△	◎	◎	◎	◎	△	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎		
外	口縁部	・ 液溜り文 ・ 界線	・ 界線	・ 界線	・ 碁笥底文 ・ 界線	・ 界線	・ 界線	・ 界線	・ 界線	・ 界線	・ 界線	・ 界線	・ 界線	・ 界線	・ 界線	・ 界線	・ 界線	・ 界線		
面	胴部	・ 世帯文 ・ 梵字文 ・ 結合した文	・ 梵字文	・ 丸を三つ ・ 唐文	・ アラベスク ・ 風流唐草文	・ 暗花文	・ なし	・ 山水人物	・ 如雲文 ・ 鶴・飛鳥等	・ 鶴と蚊龍 ・ 如雲文(?)	・ 唐文	・ 唐文	・ 唐文	・ 唐文	・ 唐文	・ 唐文	・ 唐文	・ 唐文		
内	口縁部	・ 界線	・ 界線	・ 界線	・ 界線	・ 四方模文	・ 界線	・ 界線	・ 界線	・ 界線	・ 界線	・ 界線	・ 界線	・ 界線	・ 界線	・ 界線	・ 界線	・ 唐文		
面	胴部	・ なし	・ なし	・ なし	・ なし	・ 補に群花	・ なし	・ なし	・ なし	・ なし	・ なし	・ なし	・ なし	・ なし	・ なし	・ なし	・ なし	・ 唐文		
見	込	・ 法螺貝 ・ 蓮花文	・ 梵字文 ・ 結合した文	・ 梵文と丸を三つ ・ 花弁文	・ 蓮花 ・ 法螺貝 ・ 十字花文	・ 牡丹唐草 ・ 山水	・ 折菊 ・ 山水	・ 人物	・ 如雲文 ・ 如意雲	・ 鶴と如意雲 ・ 動物	・ 唐草の花箱	・ 唐文	・ 唐文	・ 唐文	・ 唐文	・ 唐文	・ 唐文	・ 唐文		
高	台内	・ なし	・ なし	・ なし	・ なし	・ 大明造 ・ 永徳長春 ・ 長命高貴	・ 大明造 ・ 天下太平	・ 大明造 ・ 萬福依回 ・ 長命高貴	・ 福 ・ 萬福依回	・ 福 ・ 萬福依回	・ 天下太平	・ なし	・ なし	・ なし	・ なし	・ なし	・ なし	・ 唐文		

※小野正敏「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその時代」より（『貿易陶磁研究NO.1—No.5』六一書房1990）

#### b) 国産陶器（第92～94図 写真図版4～7）

国産陶器は48点が出土しているが、この内87.5%を占める瀬戸・美濃系陶器についてのまとめることとする。出土した瀬戸・美濃系陶器は灰釉陶器と鉄釉陶器に大別される。灰釉陶器は、端反りの皿12点、印花を確認できるものは3点である。鉄釉陶器は全て天目茶碗と考えられる。灰釉陶器は大窯のⅠ期、鉄釉の天目茶碗はⅡb期のものである。

遺物の多くは主郭を中心とする一体で検出されており、残存状況の良い163・167・139は主郭南側の1号柱穴列付近の10号切岸で検出されたことから、柱穴列から18号曲輪で何らかの生活行為が営まれた可能性がある。

#### (3) 縄文土器（第114～116図 写真図版66・67）

検出された縄文土器は36点である。この内の3点は、弥生末期の天王山式の口縁部に段を持ち退化交互刺突文が施されている。また、これらの出土地点をみると3号曲輪下の4号堀と8号曲輪西下の8号切岸付近に集中している。標高はそれぞれ455mと470mで、平野部を流れる早瀬川からの比高差は55mと70mである。

これらの土器は館の普請時に尾根を削平したために土砂とともに崩落したもので、調査ではこの時代の遺構は検出されていないが館の普請以前にはこれら3号、8号曲輪付近には遺構が存在した可能性が高いと考えられる。天王山式（弥生末期）の土器の出土例はこれまで県内では、二戸周辺の親久保Ⅱ遺跡や上野遺跡、盛岡周辺の湯舟沢遺跡やオミ坂遺跡、水沢周辺の常磐遺跡や沿岸南部の湧清水洞窟、関谷洞窟、中沢浜遺跡、山崎遺跡などがある。今年度住田町の中和田遺跡の発掘調査でも同様の遺物が出土している。篠館跡からは南に7.5kmに位置している。

### 3. 篠館跡の時期

白磁や青磁・染付そのものの編年は14世紀後半まで遡ることができるものの、これらの全国的な出土例は15世紀代の城館が多いことから篠館についても14世紀まで明確に存続年代を遡ることはできないと考えられる。また、主郭石積の内郭側整地層と1号柱穴列P6から検出された炭化物の年代測定結果はそれぞれ1440年（±60）と1430年（±50）でいずれも15世紀前半を示している。遺物やこれらの科学分析の結果から築城年代は15世紀前半まで遡ると考えられる。

また、館の終末期については、唐津産陶器、染付や赤絵、特に障州窯産の染付は堺環濠都市遺跡では1596年の大地震面～1617年の火災面が出土し時期がある程度特定されているため、篠館も17世紀初頭までは何らかの形で機能していた可能性が高いと考えられる。

実効堀幅は、調査区東側はほぼ9m。西側の2～4号堀・土塁間では約11～13mを測り、16世紀後半の合戦に主流となった二間半から3間の長柄槍（約5～6m）を用いる理想的な間合いに造られている。4号堀は実効堀幅を7mから9mにする改築の痕跡（写真図版15）も検出されたことから、篠館の最終的な形態は16世紀後半のものと考えられ、遺構の規模と遺物から得られる結果が対応する。

この最終的な改築の時期である16世紀の後半から17世紀初頭は、阿曾沼広郷の小田原参陣の拒否、横田城の移転などの大きな出来事があり、さらには1601年には阿曾沼広長による遠野奪回の平田坂の合戦・赤羽根の合戦・樺坂峠の合戦がある。赤羽根の合戦の古戦場は篠館の南西約1.5kmにあり当時篠館をはじめとする駒込館なども重要な役割を担っていたと考えられ。



調査で検出された数カ所の改築（曲輪の拡幅・堀・土塁の埋め立て）の時期は、西側の2号堀埋め立てによる帯曲輪の普請と集石が配備された時期即ち、館の最終的な形態となった16世紀の後半と同期と考えられる。また、8号・9号堀の埋め立ても最終的な実効堀幅（9m）の規模から西側と同時期と推定される。5号土塁や5号堀北側の15号切岸の埋土が堀を埋め立てた埋土と同じであることから堅堀の改築もほぼ同時期と推定される。

「天正の初め」と伝えられる新横田城の普請には「阿曾沼興廃記」にも当時かなりの軋轢があったと伝えられ、広郷の死（1592～1595年）後の鱗沢左馬之助広勝と広郷を継いだ広長との内紛があることから、16世紀後半の改築については新横田城の普請以前即ち弘治～元龜（1555～1573）年間頃と比定される。

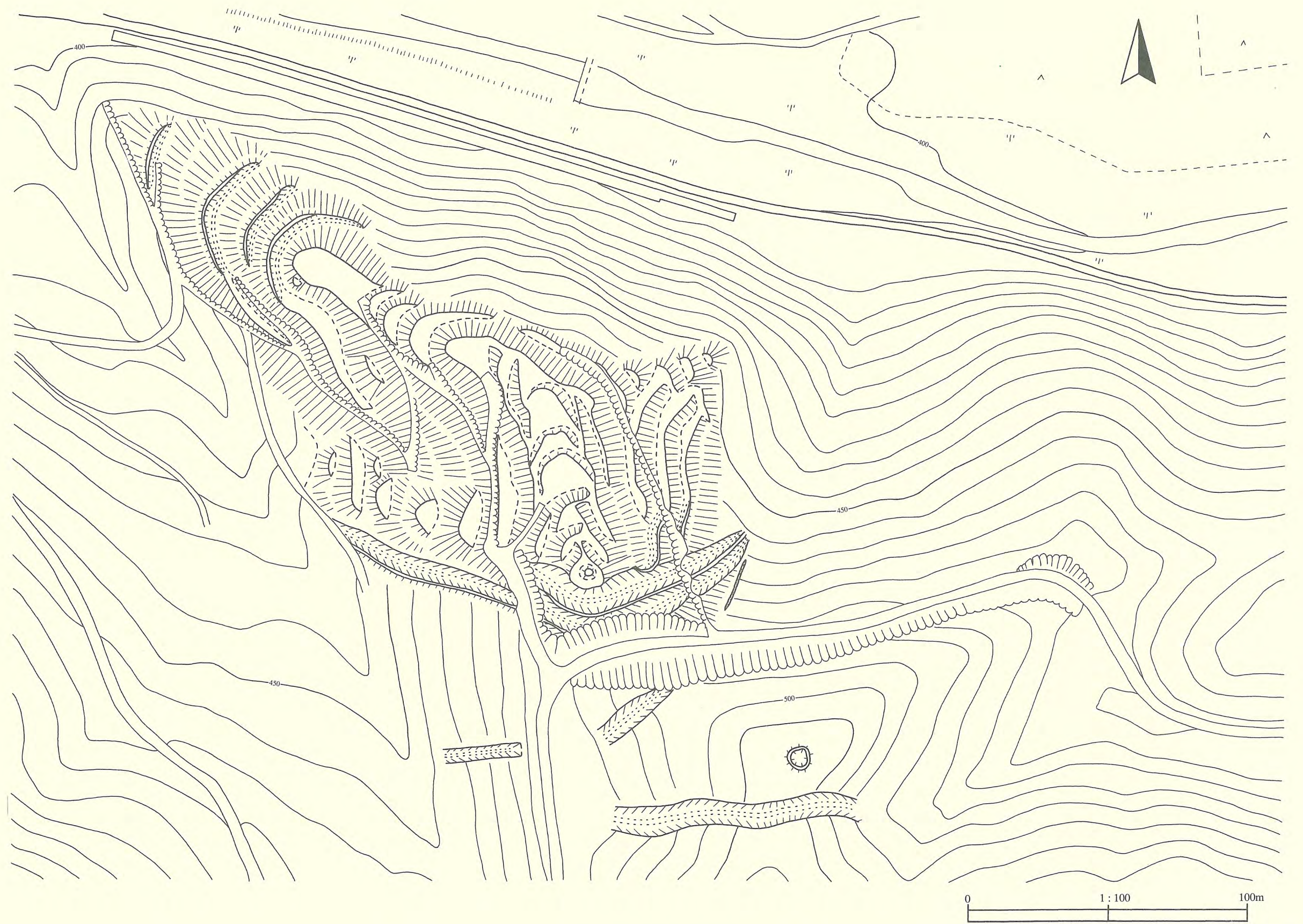
また、堀切続きの堅堀は一般に15世紀以降に普及したものとされるが、5号・6号の堅堀の改築が単純な堀切と堅堀をつなぎ堅土塁を普請するものであったのかは、調査からこれを断定するだけの直接的な資料は得られなかった。

主郭の石積から東西両方向への拡幅普請の時期については、埋土や普請の規模から埋め立てに用いられた土砂や石は主郭南側の尾根を削平したものであり、削平地に造られた柱穴列が炭化物の年代測定により1430年頃と比定されることから主郭の改築については15世紀の前半まで遡ることは可能であると思われる。

しかし、石積の構築、即ち主郭の普請については、その時期が14世紀にまで遡るだけの十分な資料が検出されなかったため、推定される篠館の存続時期は15世紀初めから17世紀初頭であり、その中心時期は染付、瀬戸・美濃系陶器の出土比率からも16世紀と考えられる。

#### <参考・引用文献>

- (1) 遠野市史（1975）：遠野市史編集委員会
- (2) 岩手県文化財調査報告書第82集 「岩手県中世城館跡」分布調査報告書（1986）
- (3) 岩手県中世書中巻 国書刊行会（1976）
- (4) 相原康二・小田野哲憲・熊谷常正（1982）：「岩手の土器」岩手県立博物館
- (5) 千田嘉博・小島道裕・前川要「城館調査ハンドブック」新人物往来社（1993）
- (6) 村田修三 「図説中世城郭辞典一」 —北海道・東北・関東— 新人物往来社（1987）
- (7) 村田修三 「図説中世城郭辞典二」 —中部・近畿— 新人物往来社（1987）
- (8) 本堂寿一 「日本城郭大系2」 —青森・岩手・秋田— 新人物往来社（1980）
- (9) 中世の城と考古学 新人物往来社（1991）
- (10) 西ヶ谷恭弘 「戦国の城」一目で見る築城と戦略の全貌—<上>関東編 学習研究社（1994）
- (11) 西ヶ谷恭弘 「戦国の城」一目で見る築城と戦略の全貌—<下>中部・東北編 学習研究社（1994）
- (12) 西ヶ谷恭弘 「戦国の城」一目で見る築城と戦略の全貌—総説編 学習研究社（1994）
- (13) 貿易陶磁研究 No.1—No.5 貿易陶磁研究会 六一書房（1998）
- (14) 岩手県文化財調査報告書第53集（1980）：東北縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅳ（柳田館遺跡）（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- (15) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第124集（1988）：笹間館跡発掘調査報告書（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- (16) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第203集（1996）：猪川館跡発掘調査報告書（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- (17) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第248集（1996）：白井坂Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- (18) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第256集（1997）：松本館跡発掘調査報告書（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- (19) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1996）：発掘調査報告書（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- (20) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1998）：次発掘調査報告書（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- (21) 「岩手考古学」第5号 岩手考古学会（1993）
- (22) 「天王山式期をめぐって」の検討会 弥生時代研究会（1990）



第118図 篠館跡 縄張図

## VI. 自然科学分析

### 1. 篠館跡から出土した炭化材の放射性炭素年代測定と樹種同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

篠館跡では、中世（15～16世紀）の建物跡や土塁などの遺構が検出されている。これらの遺構からは、構築材の一部などと考えられる炭化材が出土している。

本報告では、各遺稿から出土した炭化材の放射性炭素年代測定を行い、遺構の構築時期に関する資料を得る。同時に、各炭化材の樹種同定についても実施し、用材選択に関する資料を得る。

#### (1) 資料

資料は、3号土塁下旧表土から出土した炭化材1点、13号曲輪下旧表土より出土した炭化材1点、1号柱穴列P6から出土した炭化材1点と、1号石積盛土内郭側と外郭側から出土した炭化材各1点の合計5点である。

#### (2) 方法

##### a) 放射性炭素年代測定

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定室が行った。

##### b) 樹種同定

資料の後者3点を、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡及び走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特定を観察し、種類を同定する。

#### (3) 結果

放射性炭素年代測定結果及び樹種同定結果を第 表に示す。資料の年代測定値は、13号曲輪下の旧表土が $510 \pm 50$ yBP、3号土塁下旧表土が $660 \pm 70$ yBP、1号柱穴列P6が $520 \pm 50$ yBP、1号石積内外郭盛土が、 $510 \pm 60$ と $950 \pm 90$ yBPであった。一方、炭化材の同樹種定は、いずれも広葉樹で、2種類（クリ・ケヤキ）に同定された。

表 炭化材の放射精炭素年代測定及び同樹種定結果

遺構名・出土地点	同樹種定結果	年代	Code No.
13号曲輪下旧表土	—	$510 \pm 50$	Gak-20038
ⅢD8f3号土塁下旧表土	—	$660 \pm 70$	Gak-20039
1号柱穴列P6	クリ	$520 \pm 50$	Gak-20382
ⅢD8f1号石積外郭盛土	クリ	$950 \pm 90$	Gak-20383
ⅢD8f1号石積内郭盛土	ケヤキ	$510 \pm 60$	Gak-20384

1) 年代は、1950年を基点とした年数で、同位体効果の補正を行った値

2) 放射性炭素の半減期は、LIBBYの5570年を使用した

各種類の解剖学的特徴などをいかに記す。

・クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で孔圏部は1～4列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射性組織は同性、単列、1～15細胞高。

・ケヤキ (*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino) ニレ科ケヤキ属

環孔材で孔圏部はほぼ1列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接戦・斜方向の文様をなす。道管は、単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁には螺旋の肥厚が認められる。放射性組織は異性Ⅲ型、1～8細胞幅、1～60細胞高で、上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

#### (4) 考察

##### a)遺構の構築年代

各遺構は、発掘調査の所見から15～16世紀の構築と考えられている。資料のうち、13号曲輪下の旧表土と1号柱穴列P6と1号石積内が区側盛土の3点は、15世紀前半に相当する年代測定値が得られており、発掘調査所見と一致する。この結果から、各遺構は15世紀前半に構築された可能性がある。

一方、3号土塁下の旧表土と1号石積外郭側盛土の年代測定値は、平安時代後期から鎌倉時代に相当しており、発掘調査所見よりも200～500年ほど古い時期を示している。このような場合は、古材の再利用などの可能性が考えられる(東村, 1990)。

今回の結果についても、古い時代の埋もれ木などが土塁構築の際に利用された可能性がある。今後、出土状況などとも合わせて検討したい。

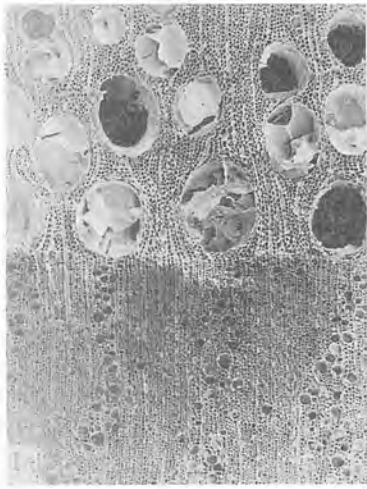
##### b)構築材の用材選択

1号柱穴列P6の炭化材は、平地式建物の柱穴内より出土した資料であり、柱材の一部が炭化・残存した可能性がある。樹種は、強度が高く、耐久性にも優れたクリであり、材質を考慮した用材の選択が推定される。一方、1号石積盛土は中世の土塁であり、炭化材は土塁の構築材の一部と考えられている。樹種はクリとケヤキであるが、クリについては年代測定結果から孤児の再利用の可能性が考えられる。この結果から、周辺で入手できる木材を構築材として利用した可能性がある。

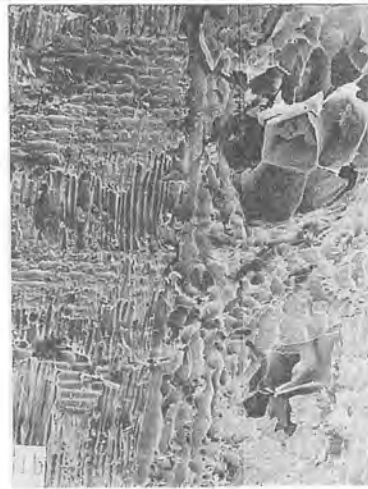
#### 引用文献

東村武信(1990)改訂 考古学と物理化、212P1.,学生社.

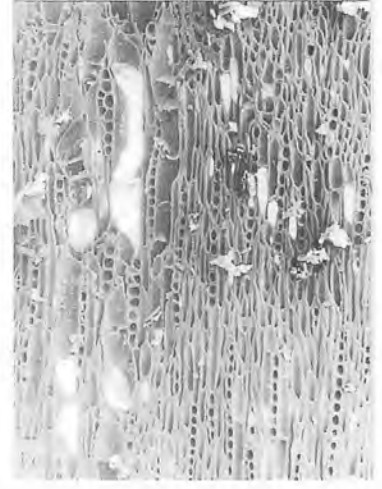
第119図 炭化材



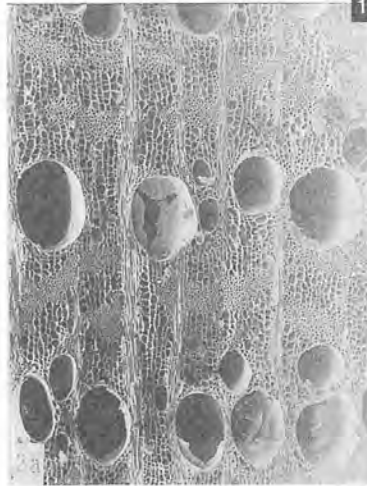
1a



1b



1c



2a



2b



2c

200  $\mu\text{m}$  : a  
200  $\mu\text{m}$  : b, c

## 2. 遠野市篠館跡出土炭化材の樹種

高橋利彦 (木工舎「ゆい」)

### (1) 資料

資料は、2点(本稿ではNo.1—2の仮試験番号で呼ぶ)である。No.1は主郭(11号曲輪)東側肩から検出された用途不明の炭化材、No.2はIV D3iグリッドから検出された漆塗碗(炭化材)である。

遺跡は16世紀後半を中心とした時代の館跡(山城)とされ、早瀬川左岸に張り出した尾根上(標高400—493 m)に立地している。

### (2) 方法

同定作業には、発掘調査担当者によって採取されていた炭化材の中から任意に選んだ1片を用いた。資料を室内で自然乾燥させたのち、実体顕微鏡下で資料の木口(横断面)・正目(放射断面)・板目(接線断面)3断面を作製し、走査型電子顕微鏡(SEM, 加速電圧10kV)で観察・同定した。併せて電子顕微鏡写真図版を作製した(図版2)。SEM観察にあたっては(株)ニッテツ・ファイン・プロダクツ釜石試験分析センターのご協力をいただいた。記して感謝いたします。なお、ネガ・フィルムと残った炭化材は木工舎「ゆい」に保管されている。

### (3) 結果

No.1はクりに、No.2はケヤキに同定された。資料の主な解剖学的特徴や一般的な性質は次のようなものである。なお、科名・学名・和名およびその配列は「日本の野生植物木本I」(佐竹ほか1989)にしたがい、一般性質については「木の事典 第4巻」(平井 1980)も参考にした。

・クリ (*Castanea crenata*) ブナ科 No.1

環孔材で孔圏部は多列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は、単独、横断面では楕円形、小道管は単独および2—3個が斜(放射)方向に複合、横断面では角張った楕円形—多角形。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単(—2)列、1—15細胞高。柔組織は周囲状、単接線状。年輪界は明瞭。

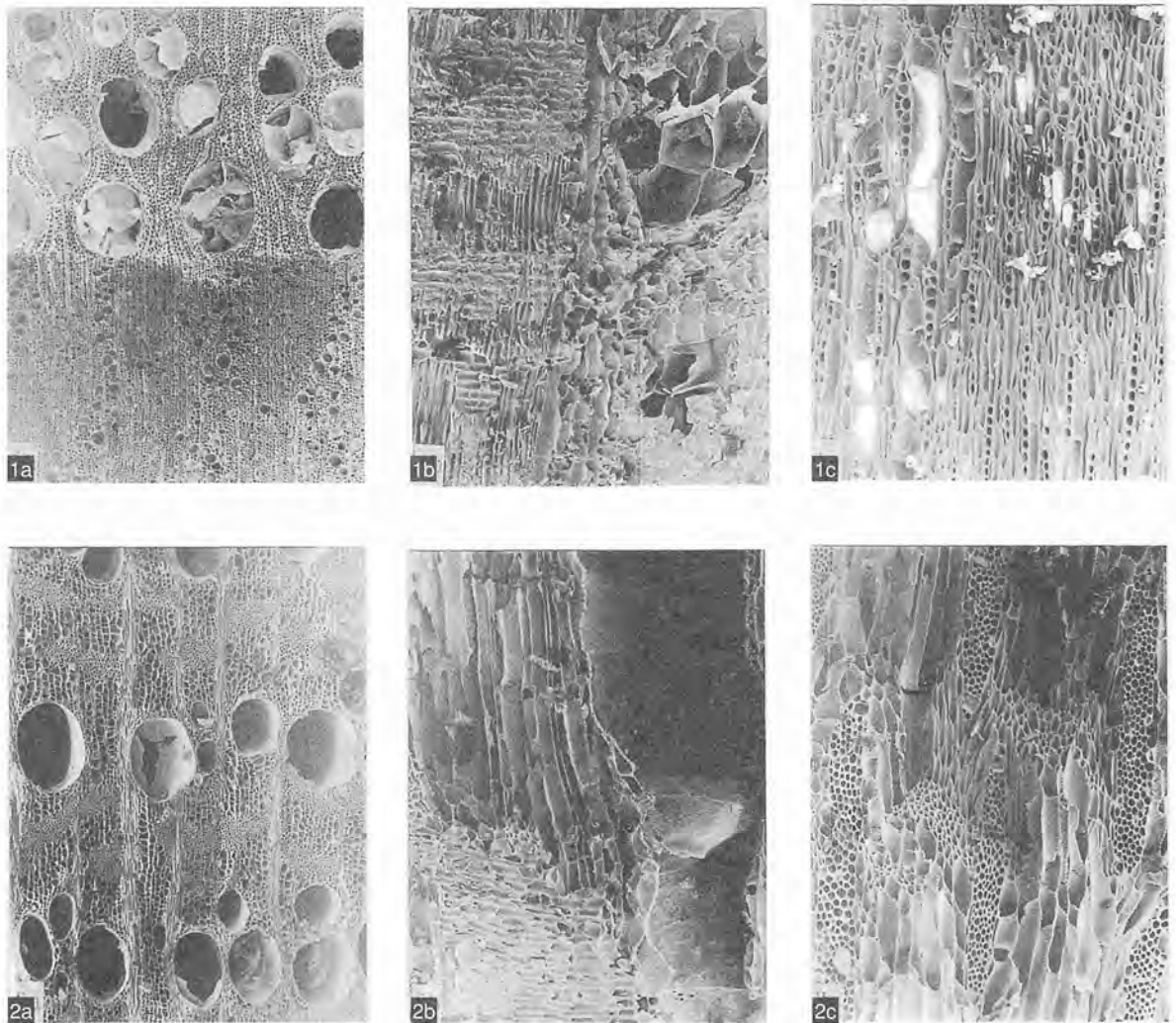
ク리는北海道南西部から九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、耐久性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材・楳木などに用いられる。

・ケヤキ (*Zelkova serrata*) ニレ科 No.2

環孔材で孔圏部は1—2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減し、塊状に複合し接線・斜方向の文様をなす。大道管は横断面では楕円形、単独。小道管は横断面では多角形で複合管孔をなす。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1—10細胞幅、1—60細胞高で、しばしば結晶を含む。柔組織は周囲状。年輪界は明瞭。

ケヤキは本州・四国・九州の谷沿いの肥沃地などに自生し、また屋敷林や並木として植栽される落葉高木で、時に樹高50mにもなる。材はやや重硬で、強度は大きい、加工は困難でなく、耐久性が高く、木理が美しい。建築・造作・器具・家具・機械・彫刻・薪炭材など各種の用途に用いられ、国産広葉樹材の中で最良のものの一つにあげられる。

第120図



1. クリ No.1      2. ケヤキ No.2      a: 木口×40      b: 柁目×1000      c: 板目×100

樹木の肥大生長方向は木口では画面下から上へ、柁目では左から右。

#### (4) 考察

漆塗碗はケヤキ製であった。資料よりは、やや古い時代のものとなるようであるが、金ヶ崎町の松本館跡でも中世頃のものとする漆塗碗（4点）のうち、井戸から検出された3点はブナ属に、土坑から検出された1点はケヤキに同定されている（高橋1997）。ケヤキは現在でも漆器木地としてもちいられている樹種である。

#### 引用文献

平井信二 1980 「木の事典 第4巻」,かなえ書房

佐竹義輔・原 寛・亘理俊次・富成忠夫（編）1989 「日本の野生植物 木本Ⅰ」,平凡社,321pp.

高橋利彦1997 金ヶ崎町松本館跡出土材の樹種同定結果報告—94・95年度—,「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第256集 松本館跡発掘調査報告書 —一般県道永沢水沢線改良事業に係る発掘調査—」,(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター,172—178



# 写 真 图 版



写真図版1 空中写真(1)



現況（東から）



完掘（東から）

写真図版2 空中写真(2)



現況（西から）



完掘（西から）

写真図版3 空中写真(3)



167



163



写真図版4 瀬戸・美濃系鉄釉陶器 (1)



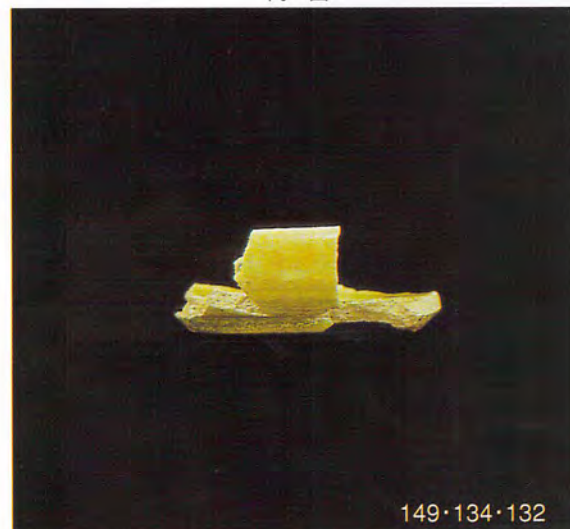
内面



内面



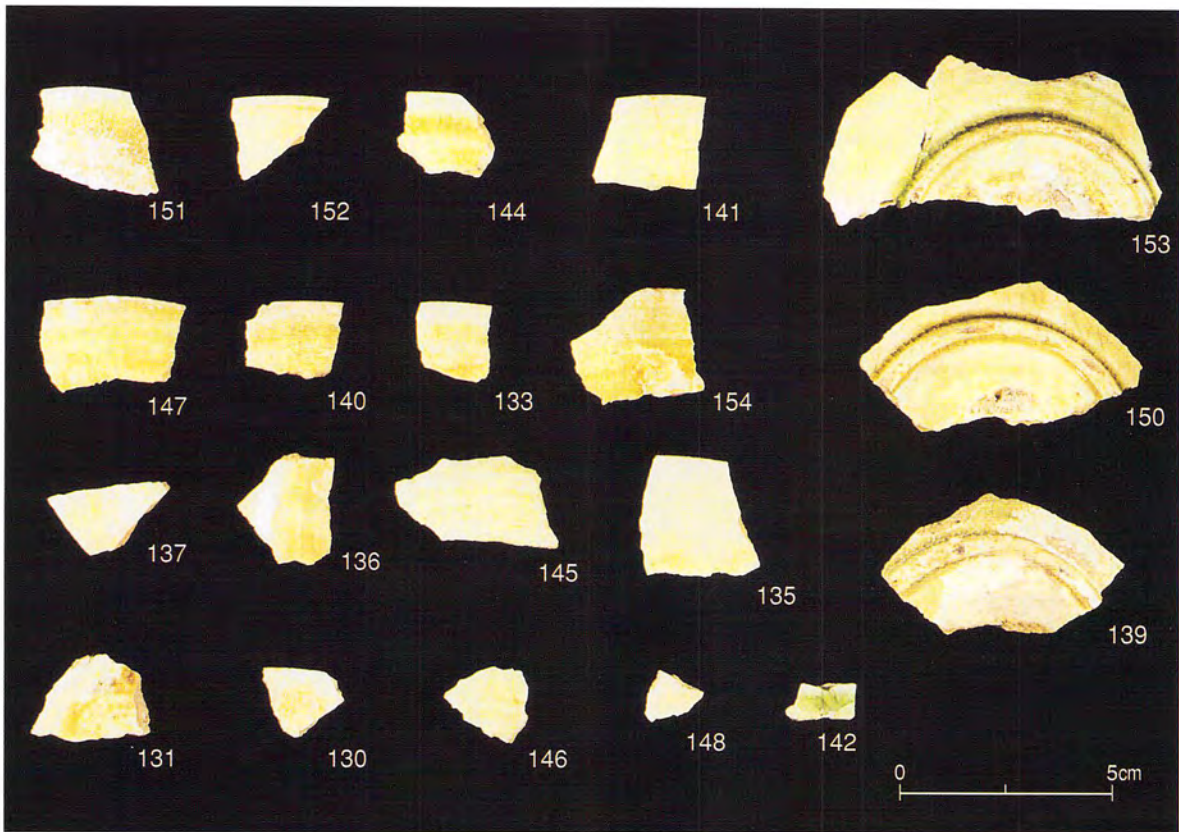
138



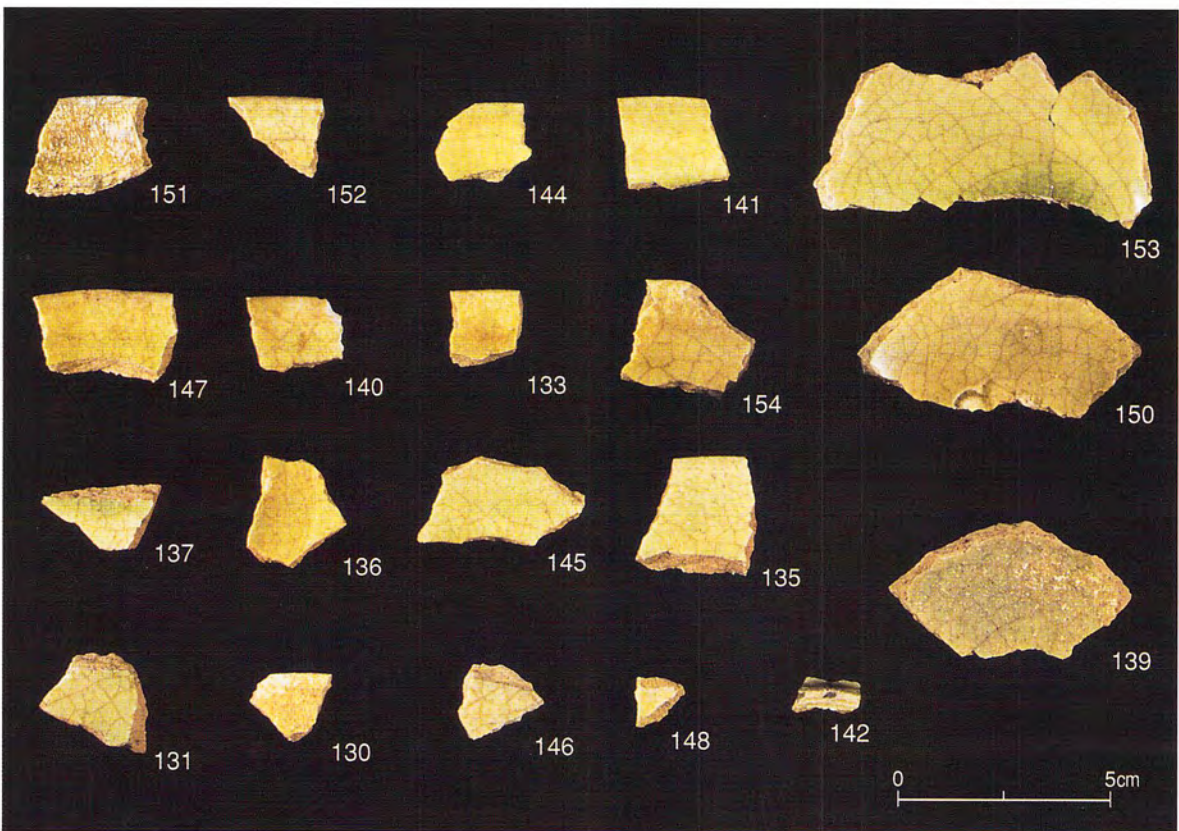
149・134・132



写真図版5 瀬戸・美濃系灰釉陶器 (1)

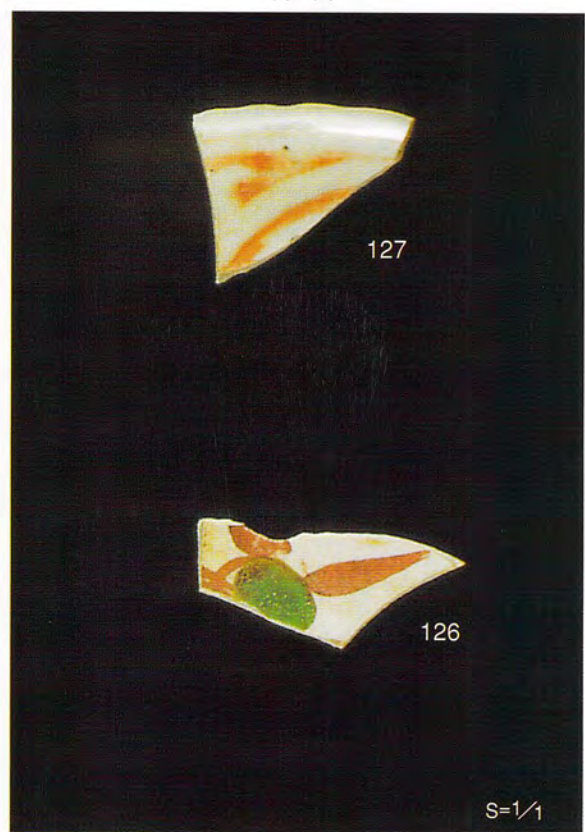
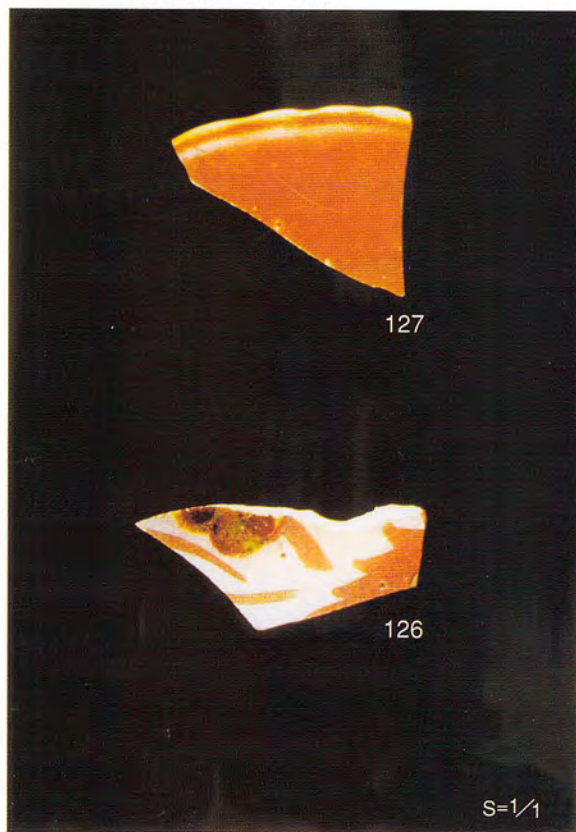
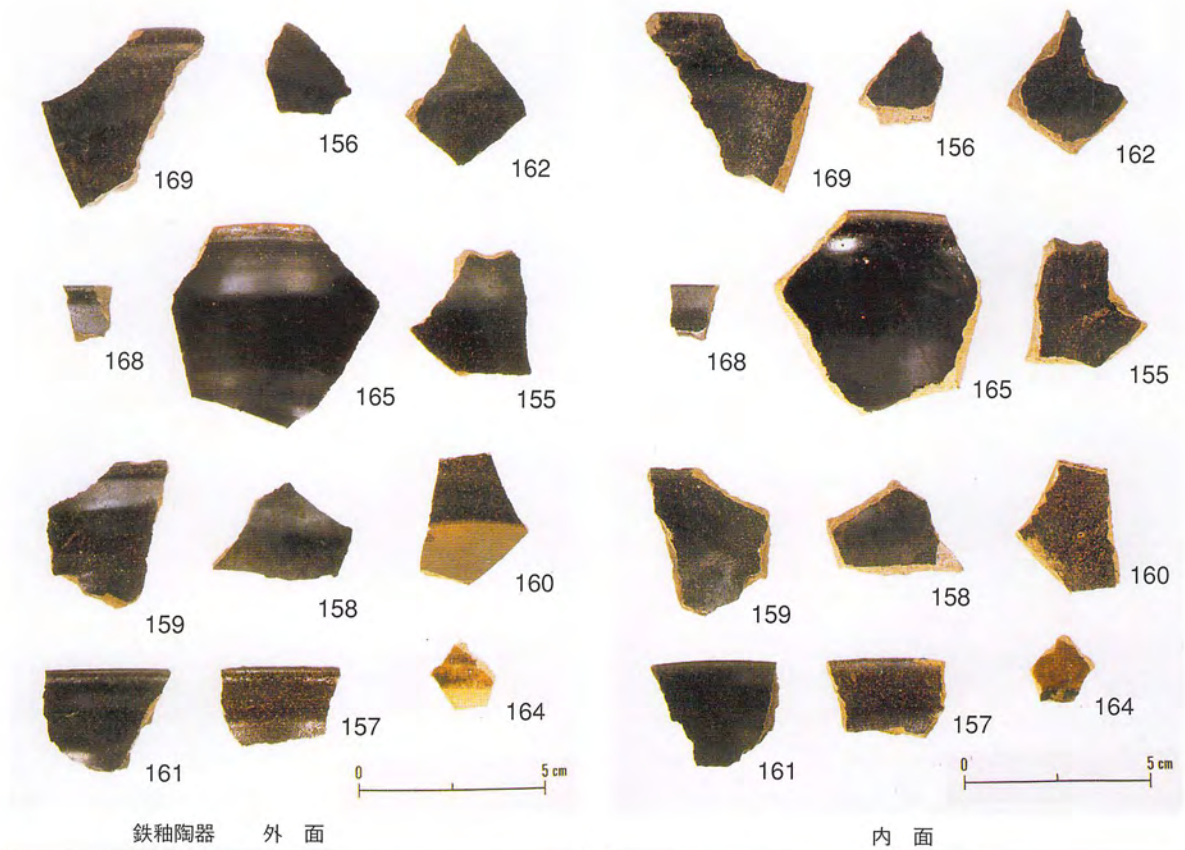


外面



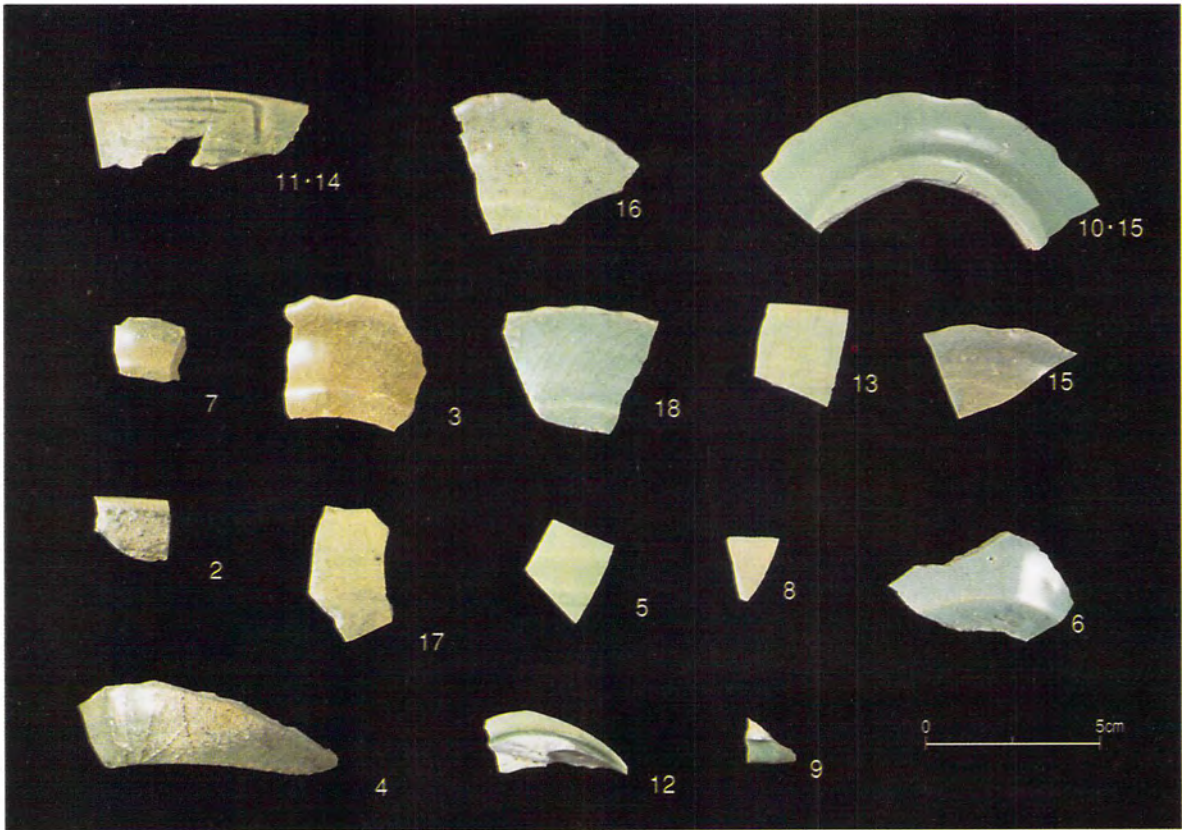
内面

写真図版6 瀬戸・美濃系灰釉陶器(2)

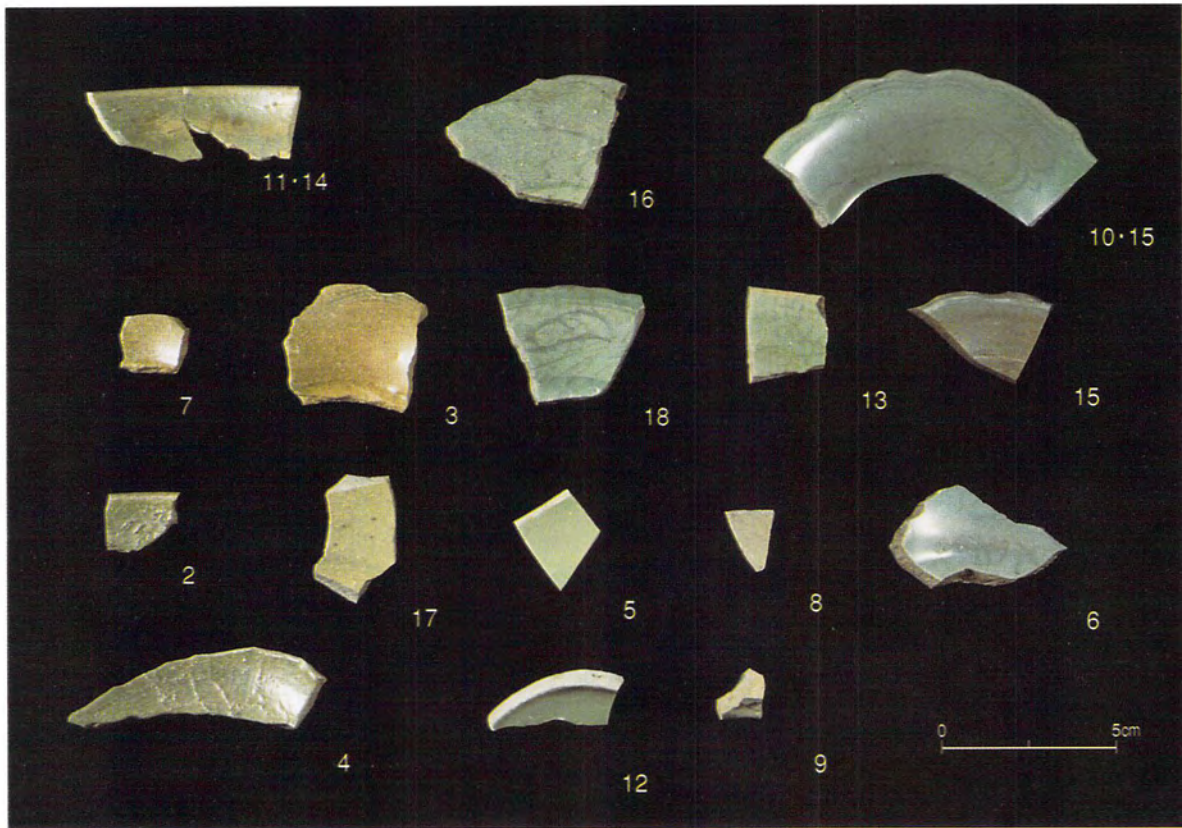


写真図版7 瀬戸・美濃系鉄釉陶器(2)、中国産赤絵



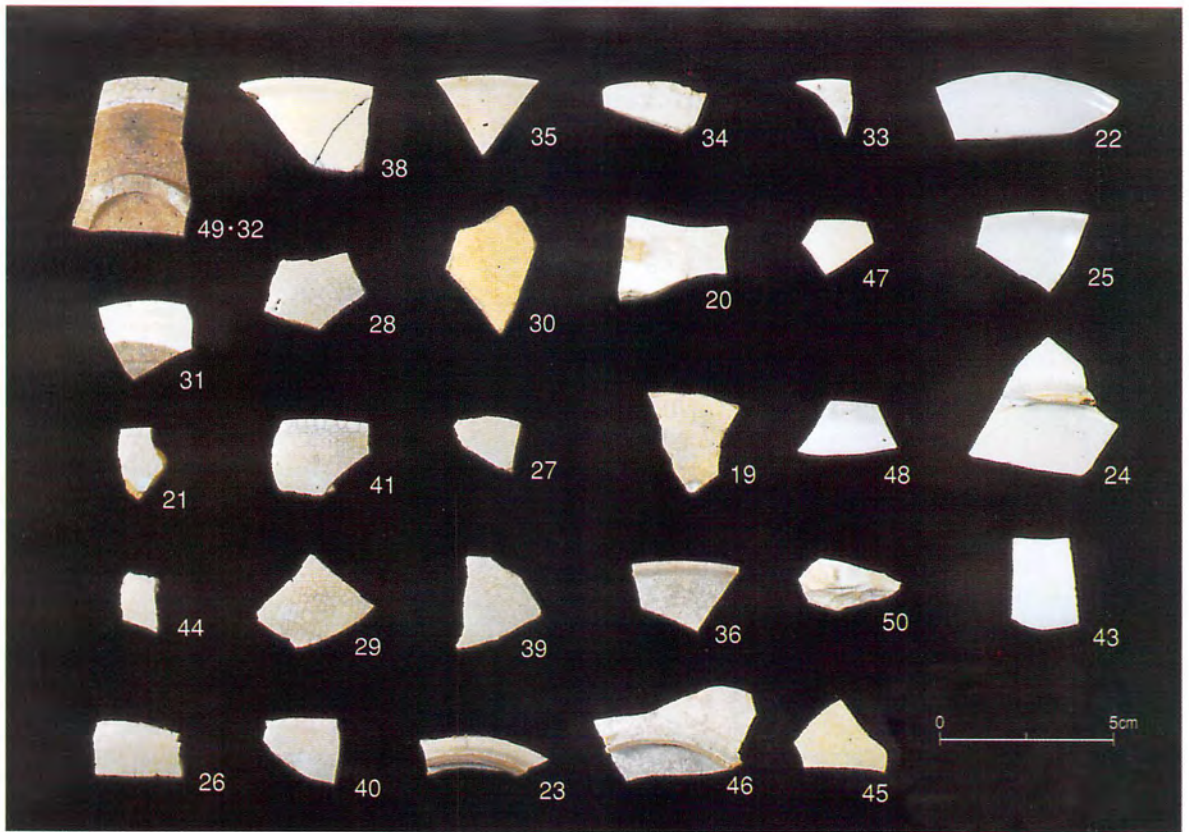


外面

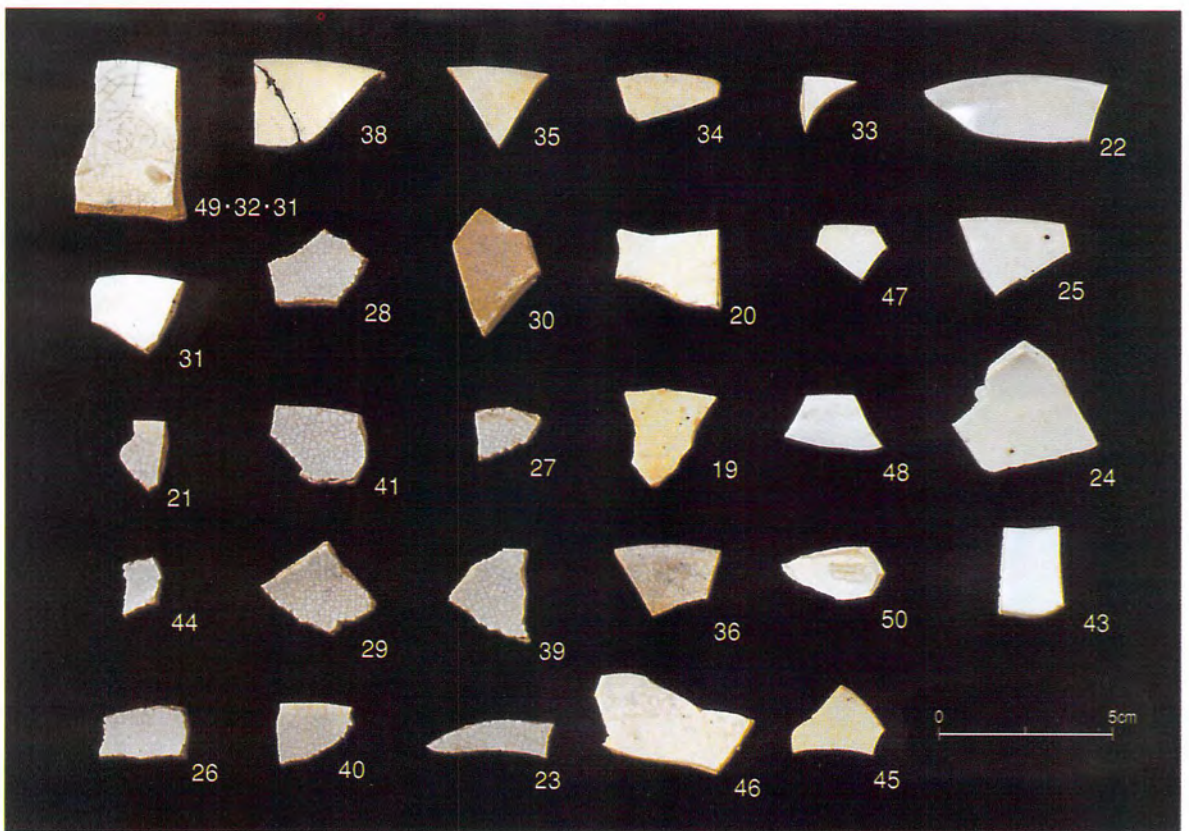


内面

写真図版 8 青磁

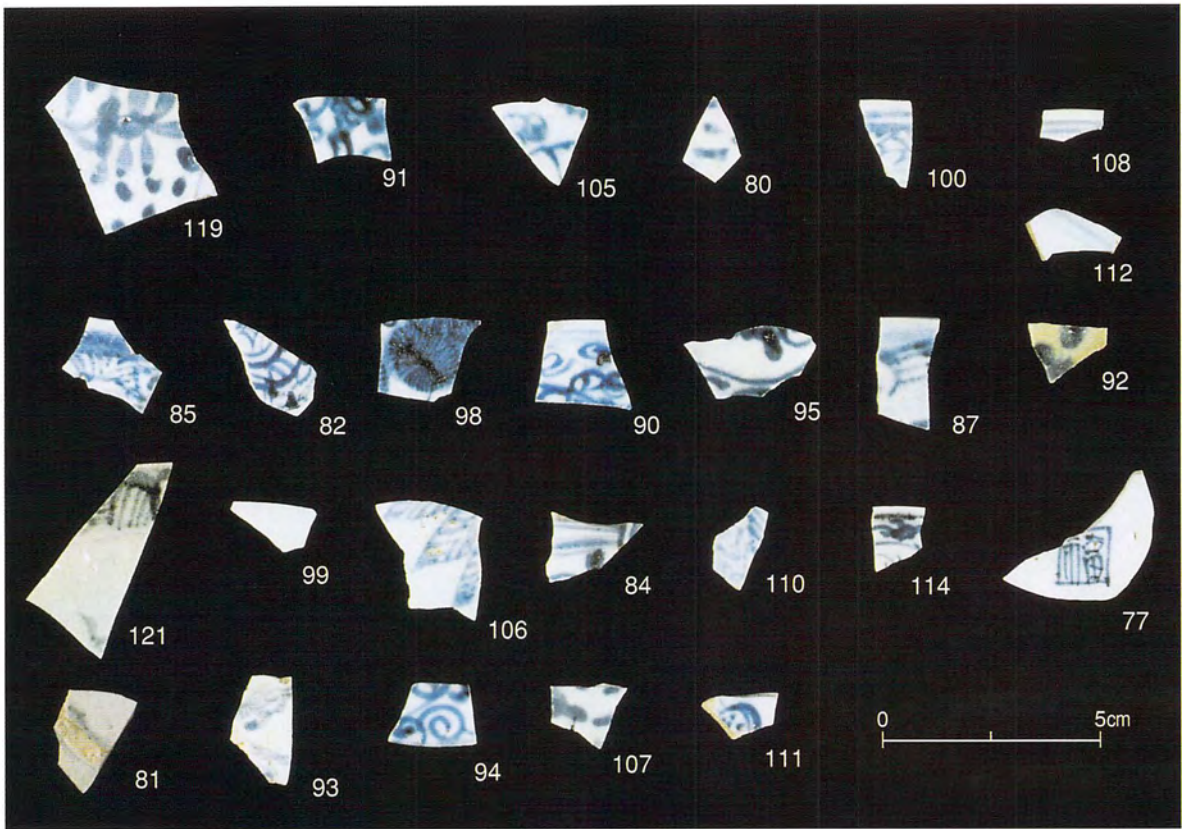


外面

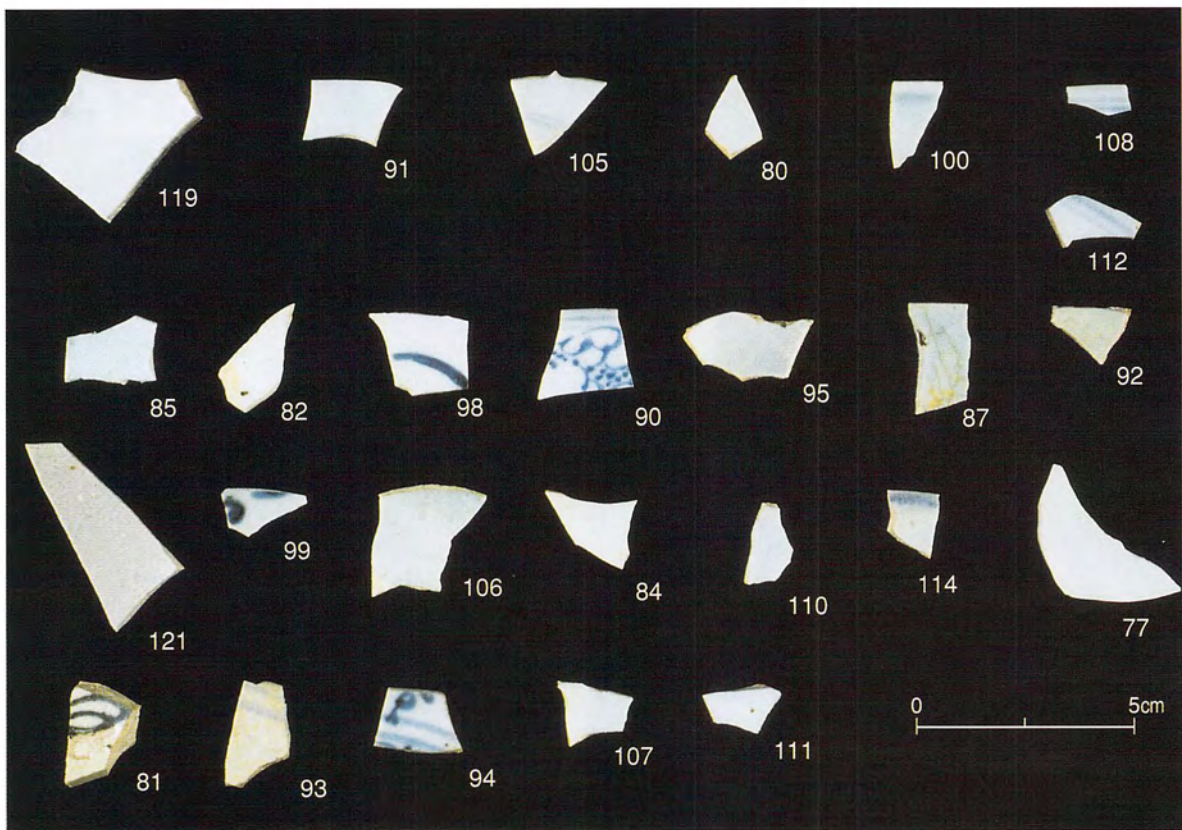


内面

写真图版 9 白磁

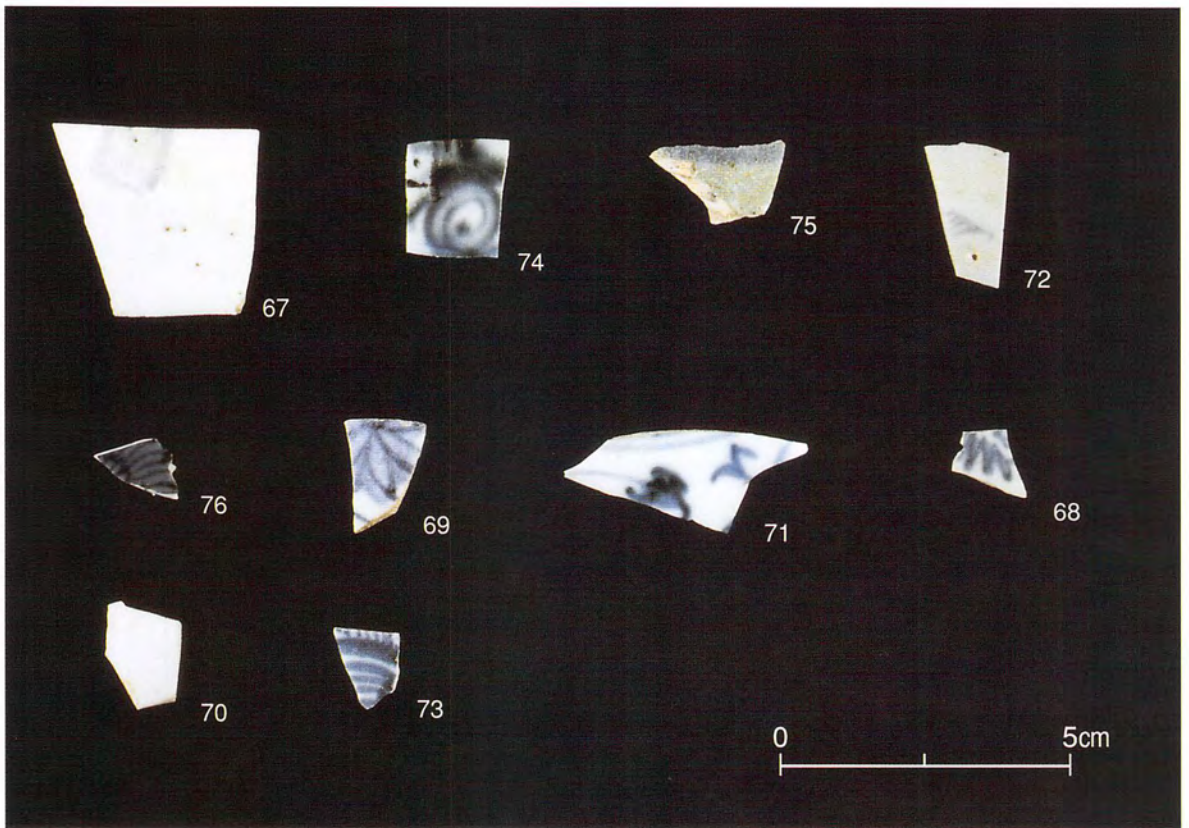


外面

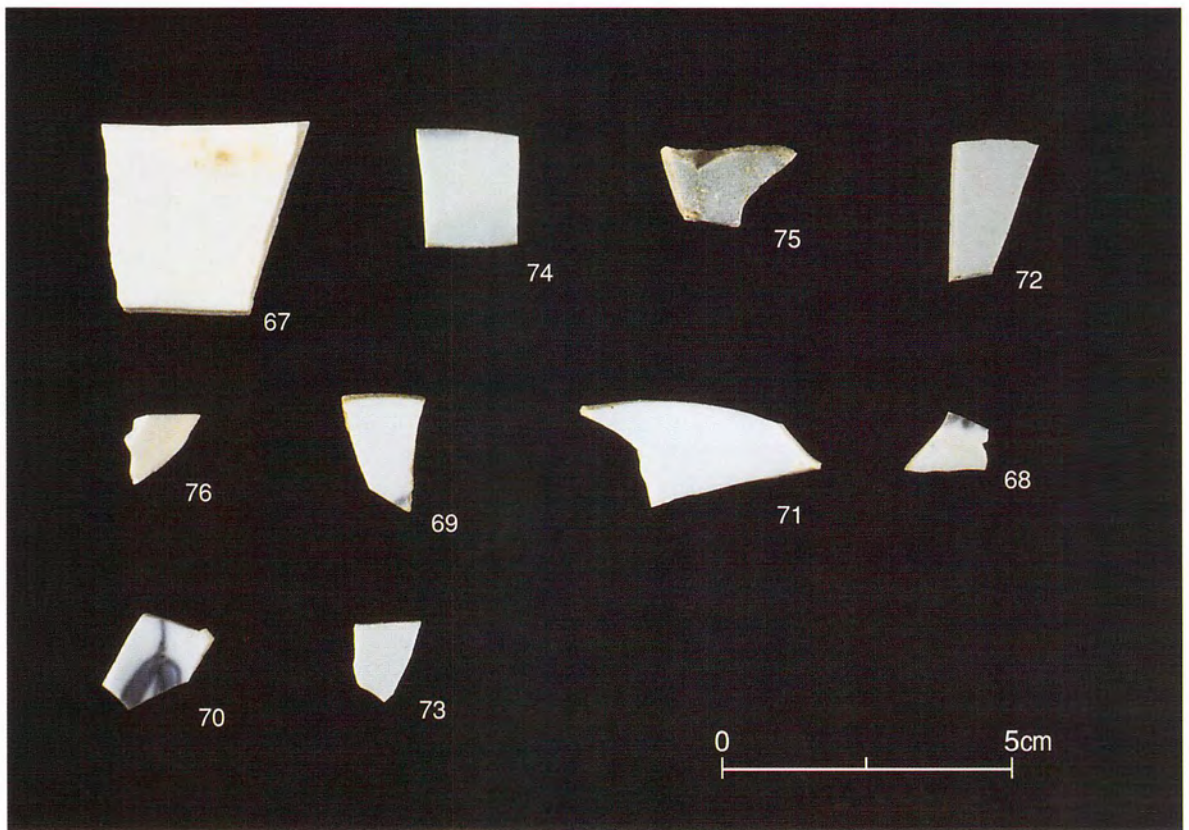


内面

写真図版10 染付(1)



外面



内面

写真図版11 染付(2)



調査区近景（西から）



遺跡近景（東から）



遺跡近景（西から）



基本土属（1）



基本土属（3）

写真図版 12 遺跡近景・基本土層



昭和41年頃の遺跡周辺

写真図版13 空中写真(4)



完掘（西から）



遺物（215）出土状況



作業風景



完掘（北から）

写真図版 14 1号曲輪



完掘（西から）



断面



断面



断面



遺物（213）出土状況

写真図版 15 2号曲輪





3号曲輪完掘



3号曲輪断面南側



4号曲輪断面



5号曲輪断面



6号曲輪断面



7号曲輪断面(南側)



7号曲輪断面(西側)



遺物(176)出土状況

写真図版 16 3・4・5・6・7号曲輪



6号切岸断面



8号切岸断面



遺物(4)出土状況



8号切岸・8号・9号・10号・11号曲輪・1号武者走



8号曲輪断面(北側)



8号曲輪断面(東側)



10号曲輪断面



遺物(129)出土状況

写真図版 17 8・9・10・11号曲輪、6・8号切岸、1号武者走



12号曲輪断面



12号曲輪断面



13号曲輪完掘



13号曲輪断面



14号・15号曲輪完掘



7号切岸断面（南側）



15号曲輪断面



14号曲輪断面

写真図版 18 12・13・14・15曲輪、7号切岸



11号曲輪断面（東側）



11号曲輪断面（西側）



11号曲輪断面（西側）



遺物（38）出土状況



11号曲輪断面（東側）



11号曲輪・9号切岸断面（西側）



16号曲輪断面（東側）



17号曲輪断面



18号曲輪断面



遺物(233)出土状況



19号曲輪断面



20号曲輪断面



21号曲輪断面



21号曲輪断面



22号曲輪断面



2号テラス完掘

写真図版 20 18・19・20・21・22号曲輪、2号テラス



遺物 (163) 出土状況



2号武者走断面



9号切岸作業風景



25・27号曲輪、11・12切岸



23号曲輪完掘



23号曲輪断面



遺物 (309) 出土状況



23号曲輪断面

写真図版 21 9・11・12号切岸、23・25・27号曲輪、2号武者走



24号曲輪作業風景



25号曲輪断面



27号曲輪断面



27号曲輪完掘



28号曲輪断面



29号曲輪断面



30号曲輪断面



遺物(310)出土状況

写真図版 22 24・25・27・28・29・30号曲輪



1号掘完掘（北側）



断面（中央）



1号掘完掘（南側）



断面（北側）



1号切岸完掘



1号土塁断面



1号切岸断面

写真図版 23 1号堀跡・1号土塁・1号切岸





2号堀完掘（北側）



断面（北側）



2号堀・2号土塁・2号切岸完掘（中央）



断面（中央）



2号堀・2号土塁・2号切岸完掘（南側）



断面（南側）



2号土塁断面（南側）



2号土塁断面（北側）

写真図版 24 2号堀跡・2号土塁・2号切岸



2号土塁断面（中央）



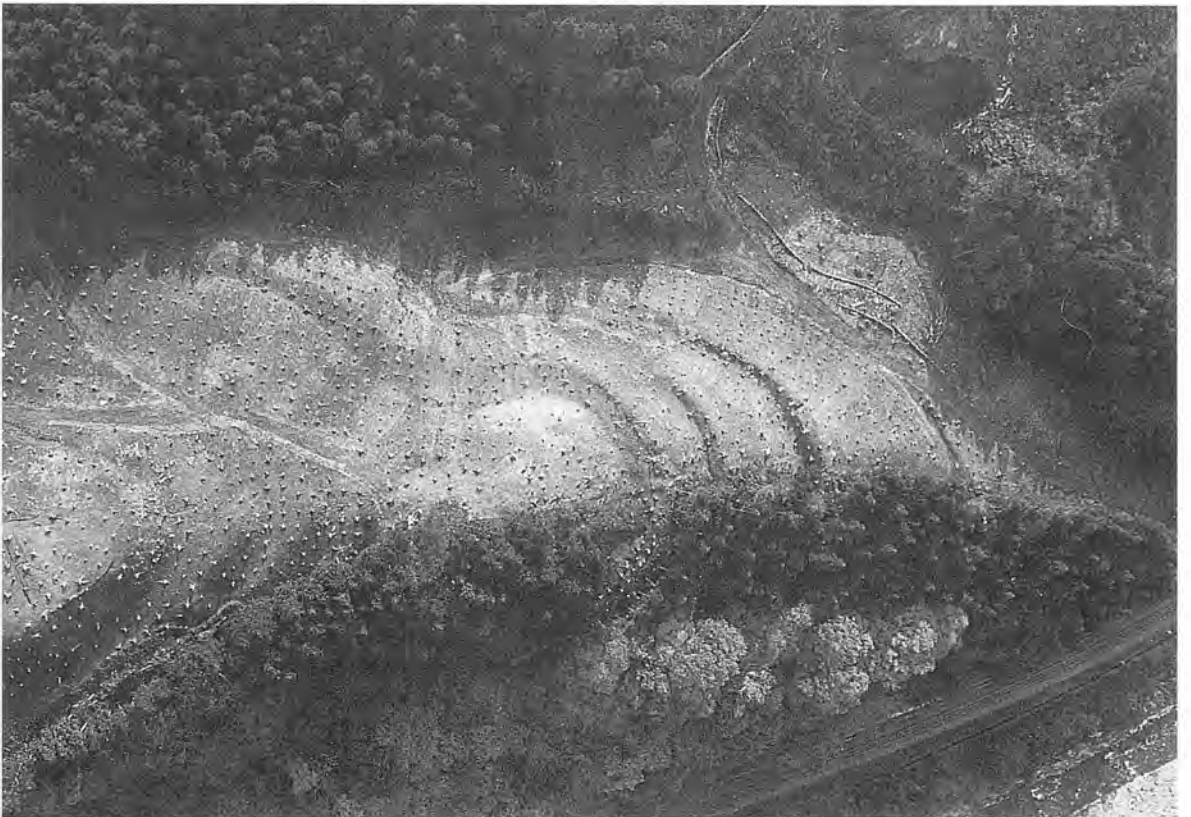
1号曲輪断面



1号曲輪下の2号堀完掘（北から）



（南から）



調査区西側全景

写真図版 25 2号堀跡・2号土塁、空中写真（5）



3号土塁 3号堀・3号切岸完掘（南から）



断面（北側）



断面（中央）



3号土塁断面（中央）



断面（北側）

写真図版 26 3号堀跡・3号土塁・3号切岸



4号堀・土塁完掘（北側）



断面（北側）



4号堀完掘（中央）



断面（中央）



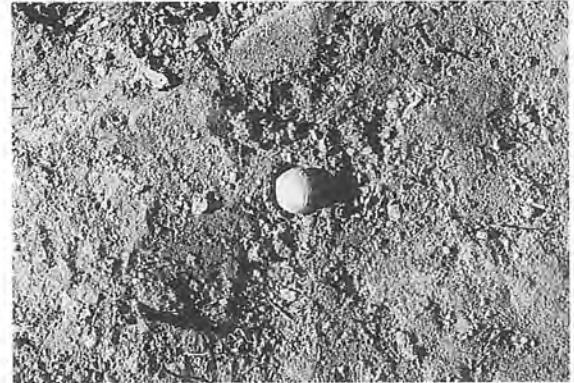
2号曲輪断面



2号曲輪下の4号堀、完掘



実効堀幅検証風景



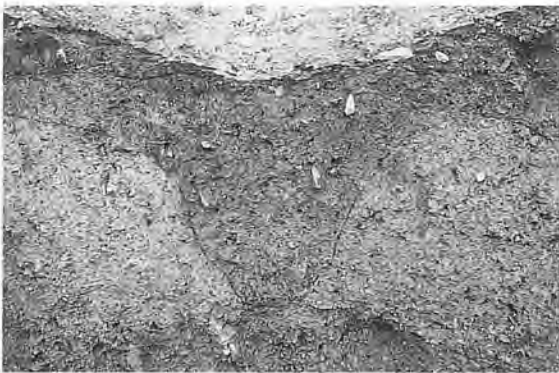
遺物（226）出土状況



5、6号堀完掘（東から）



断面



6号堀断面



5号堀断面

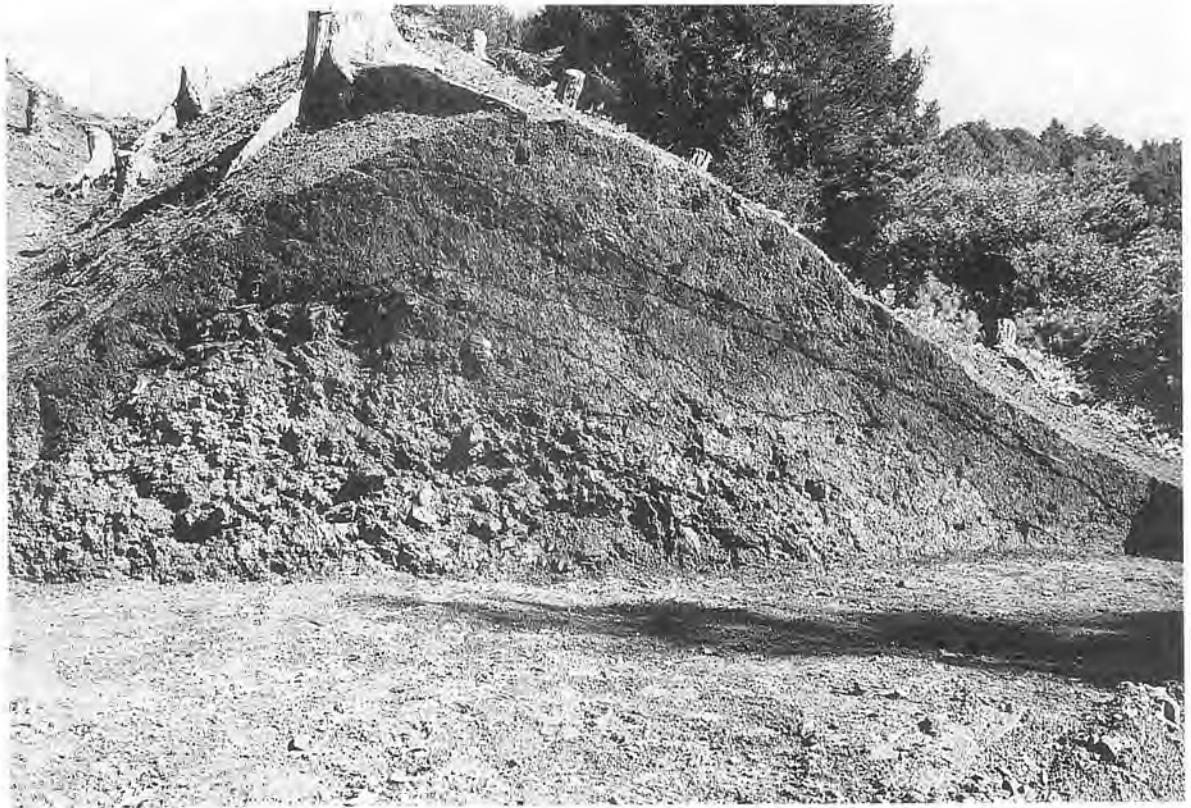
写真図版 28号 5・6号堀跡、5号土塁



5、6号堀西側完掘



5号堀実効法高検証風景



6号土塁断面



5号堀断面



6号堀断面

写真図版 29 5・6号堀跡、6号土塁



7号堀完掘



断面(上部)



断面(下部)



調査区外7号堀跡現況



8号堀断面



調査区外竖堀現況



8号土壘断面



実効法高検証風景



8号堀完掘



8号土壘断面



8号堀断面(北側)



9号堀断面



9号堀断面(北側)



8、9号堀・土壘完掘

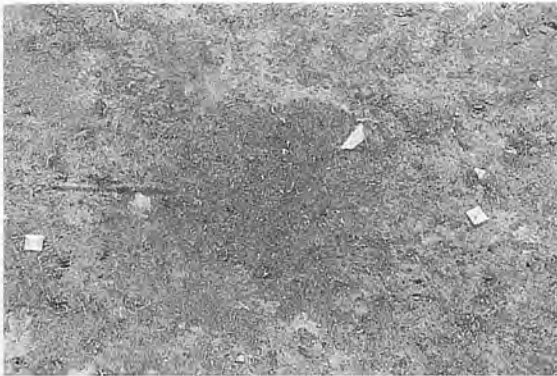


26号曲輪完掘





11号曲輪（主郭）周辺空中写真（6）



P 1 検出



P 1 完掘



P 5



P 7 完掘

写真図版 32 空中写真（6）・1号堀立柱建物跡



1号竪跡住居跡完掘（北から）



埋土断面、柱穴検出状況



P 2 断面



P 1 完掘



P 3 完掘

写真図版33 1号竪穴住居跡



1・2号柱穴列（西から）



1号柱穴列（北から）



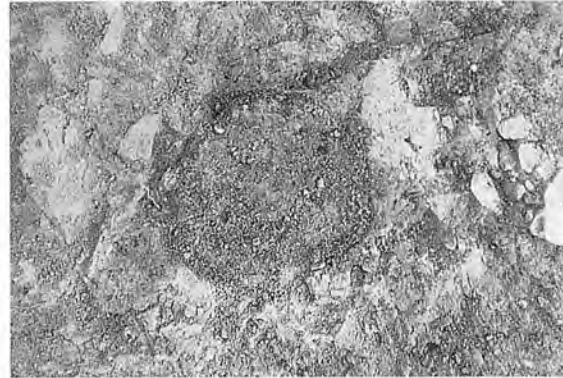
P 1 完掘



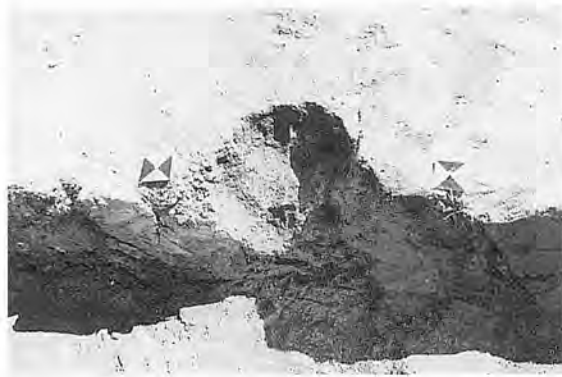
P 3 完掘



P 4 断面



P 5 検出



P 6 完掘



断面



P 1 断面



P 2 断面



P 3 完掘



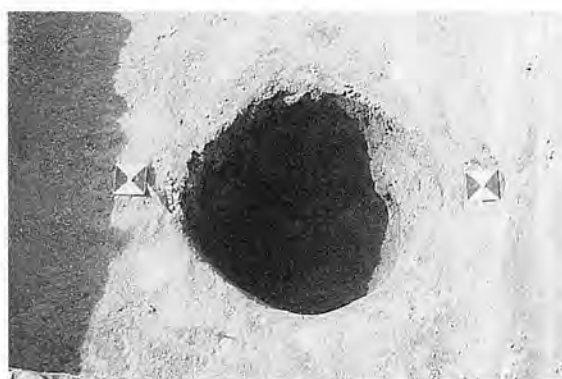
P 5 断面



P 8 断面



P 10 完掘



P 9 完掘



断面



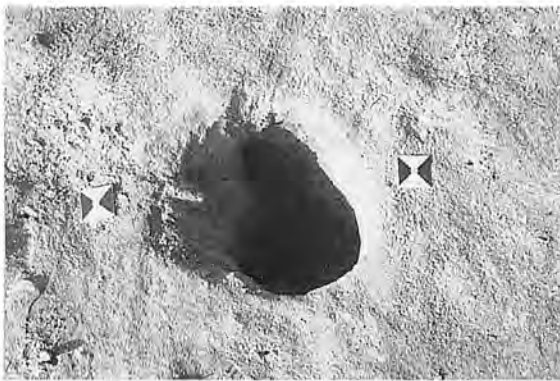
完掘 (西から)



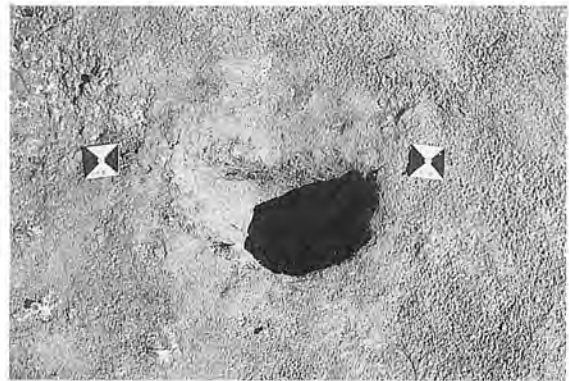
P 1 完掘



P 2 断面



P 2 完掘



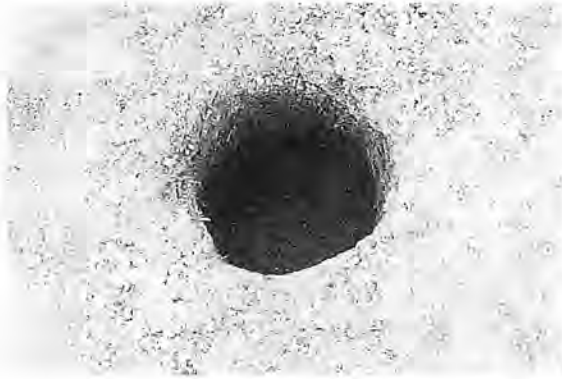
断面



P 4 断面



P 3 断面



P 1 完掘



断面



P 2 完掘



断面



P 3 完掘



断面



P 4 完掘



断面



P 1 完掘



P 1 断面



P 2 完掘



P 2 完掘



P 3 完掘



P 5 断面



P 4 完掘



P 4 断面

写真図版 38 図 5 号柱穴列



完掘（南西から）



検出状況



断面（南から）



断面（南から）



完掘（南東から）

写真図版 39 1号石積





1号石積検出



断面（南から）



完掘（南から）



断面（東から）



1号集石完掘



断面



2号集石完掘



断面

写真図版 40 2号石積、1・2号集石



3号集石完掘



断面



4号集石完掘



断面



5号集石完掘



断面



6号集石完掘



断面

写真図版 41 3・4・5・6号集石



7号集石完掘



断面



8号集石積完掘



断面



9号集石積完掘



断面



10号集石積完掘



断面



11号集石完掘



断面



12号集石完掘



断面



13号集石完掘



断面



遺物(235)出土状況



遺物(167)出土状況



1号土坑完掘



断面



2号土坑完掘



断面



3号土坑完掘



断面



4号土坑完掘

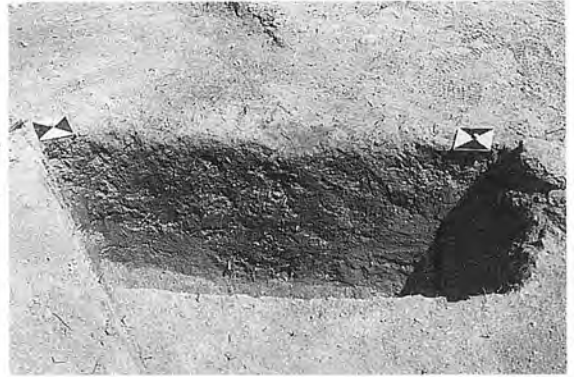


断面

写真图版 44 1·2·3·4号土坑



5号土坑完掘



断面



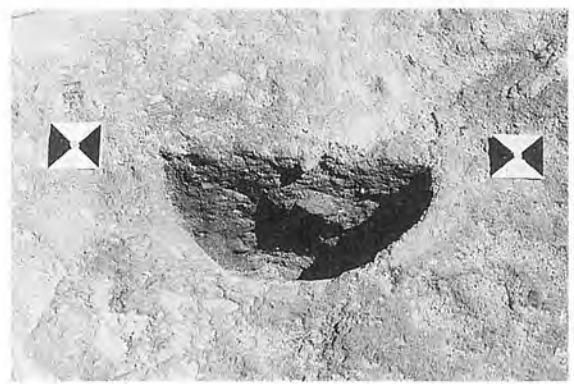
6号土坑完掘



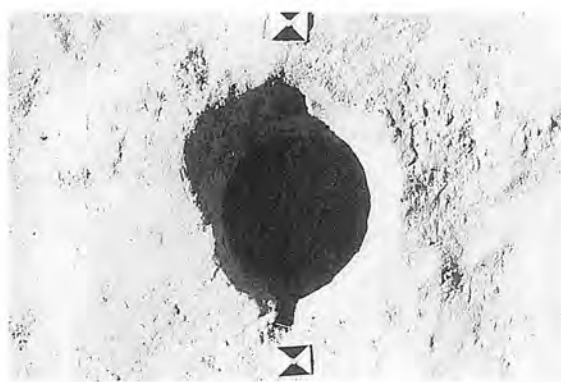
断面



7号土坑完掘



断面



8号土坑完掘



断面



9号土坑完掘



断面



10号土坑完掘



断面



11号土坑完掘



断面



12号土坑完掘



断面

写真图版 46 9 · 10 · 11 · 12号土坑



13号土坑完掘



断面



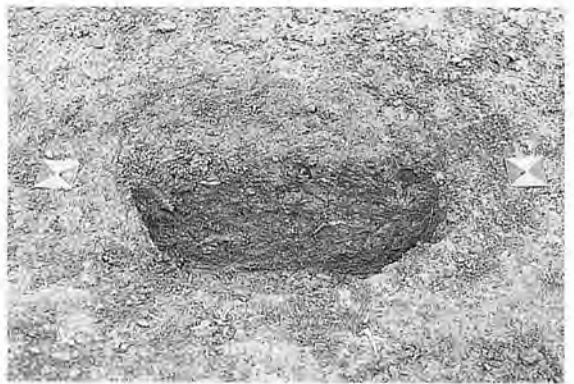
14号土坑完掘



断面



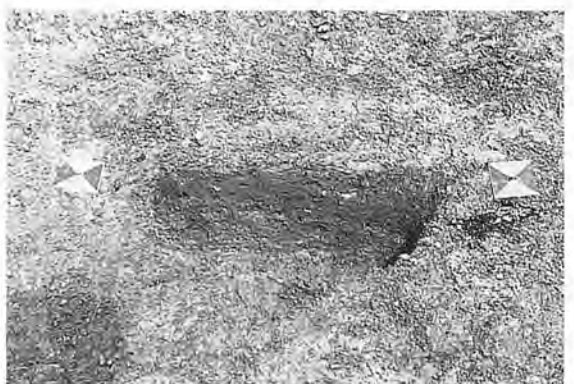
15号土坑完掘



断面



16号土坑完掘

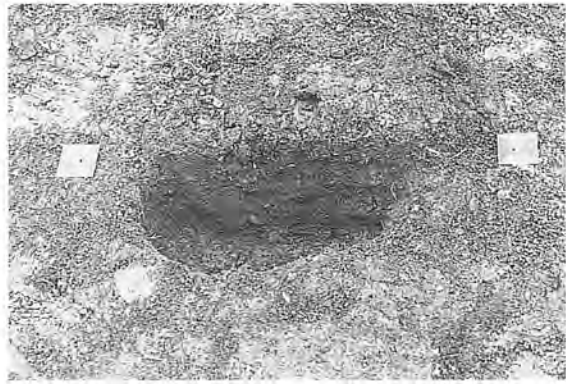


断面

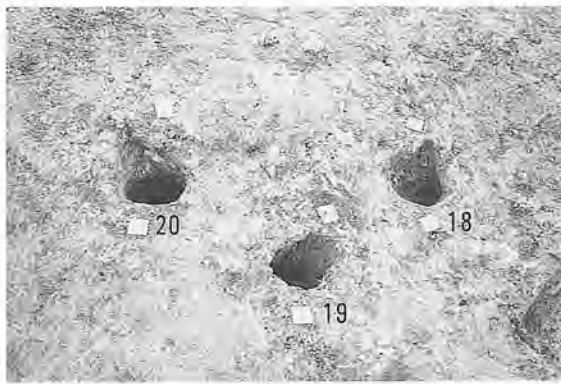




17号土坑完掘



断面



18、19、20号土坑完掘



18号土坑断面



19号土坑断面



20号土坑断面



21号土坑完掘



断面

写真断面 48 17 · 18 · 19 · 20 · 21号土坑



22号土坑完掘



断面



23号土坑完掘



断面



24号土坑完掘



断面



25号土坑完掘



断面



26号土坑完掘



断面



27号土坑完掘



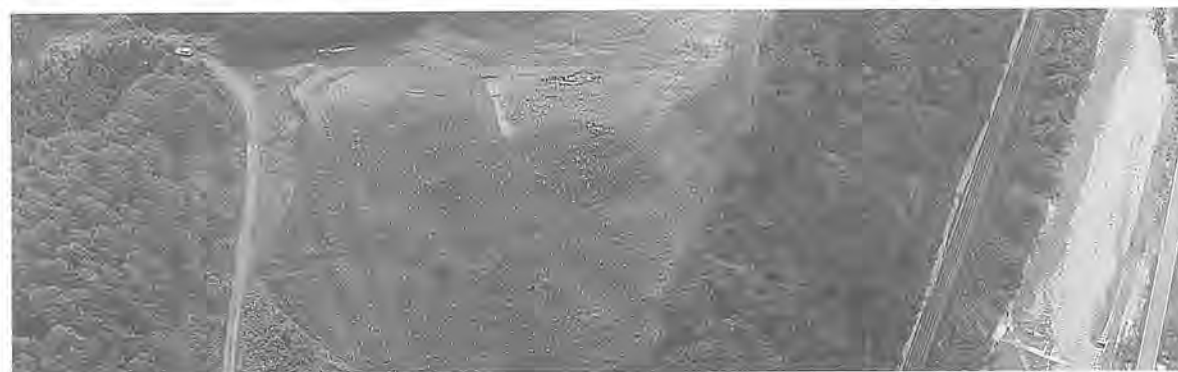
断面



遺物(260)出土状況



28号土坑断面



調査区東側空中写真(7)

写真図版 50 26・27・28号土坑、空中写真(7)



1号烧土平面



断面



2号烧土平面



断面



3号烧土平面



断面



4号烧土平面



断面

写真图版 51 1・2・3・4号烧土遺構



5号烧土平面



断面



6号烧土平面



断面



7号烧土平面



断面

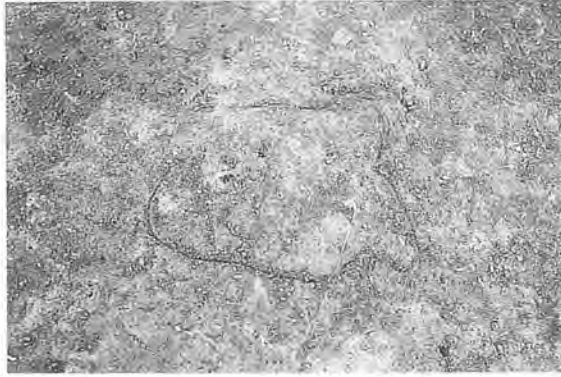


8号烧土平面



断面

写真图版 52 5·6·7·8号烧土遺構



9号烧土平面



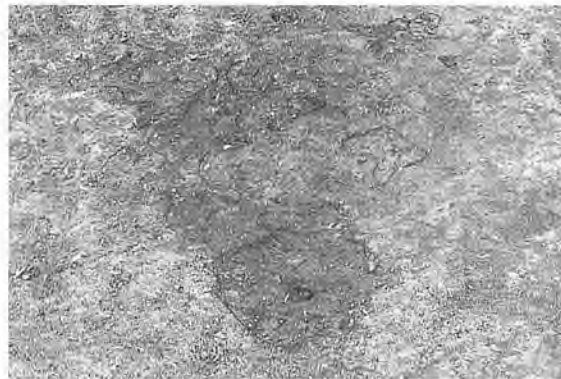
断面



10号烧土平面



断面



11号烧土平面



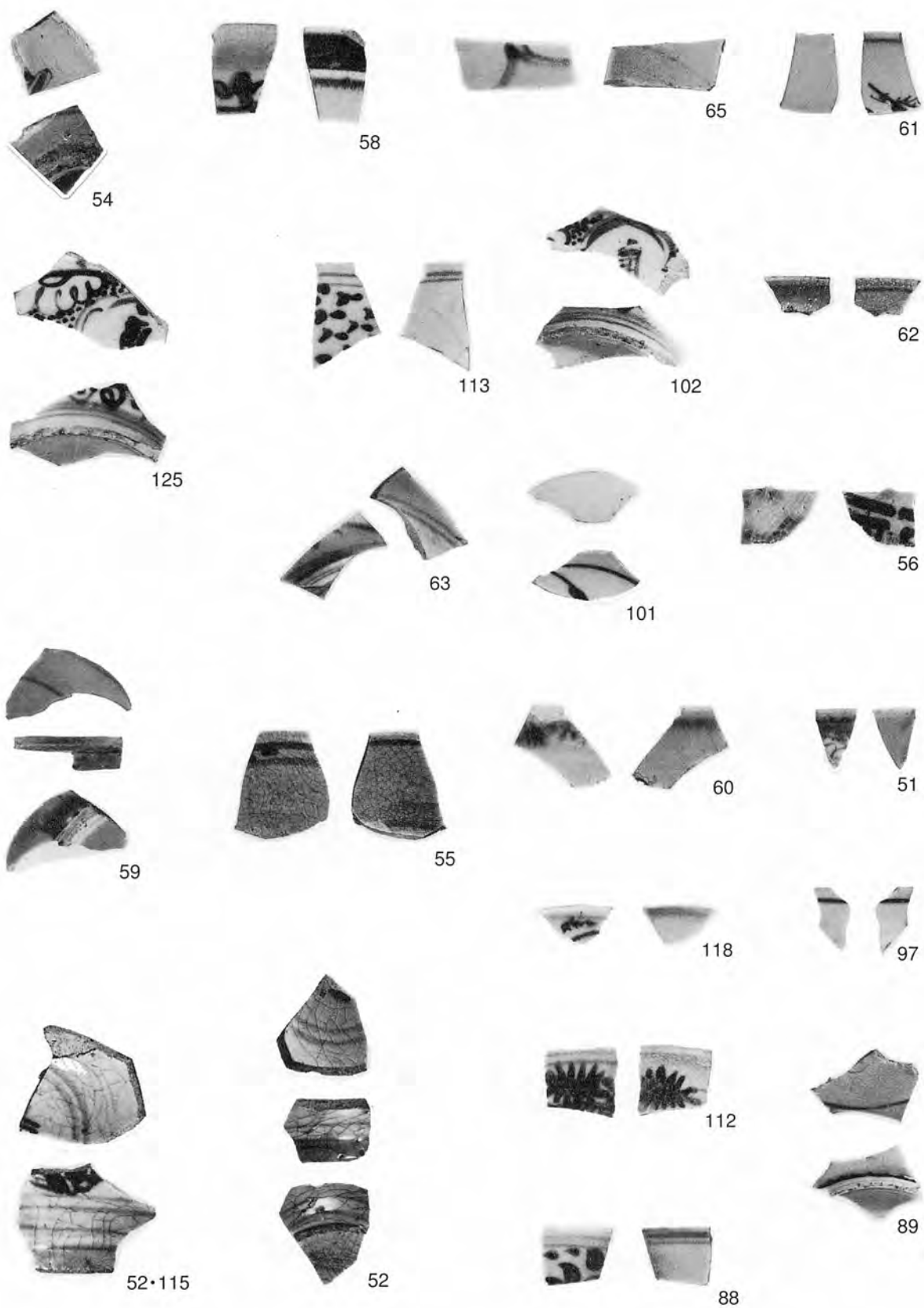
断面



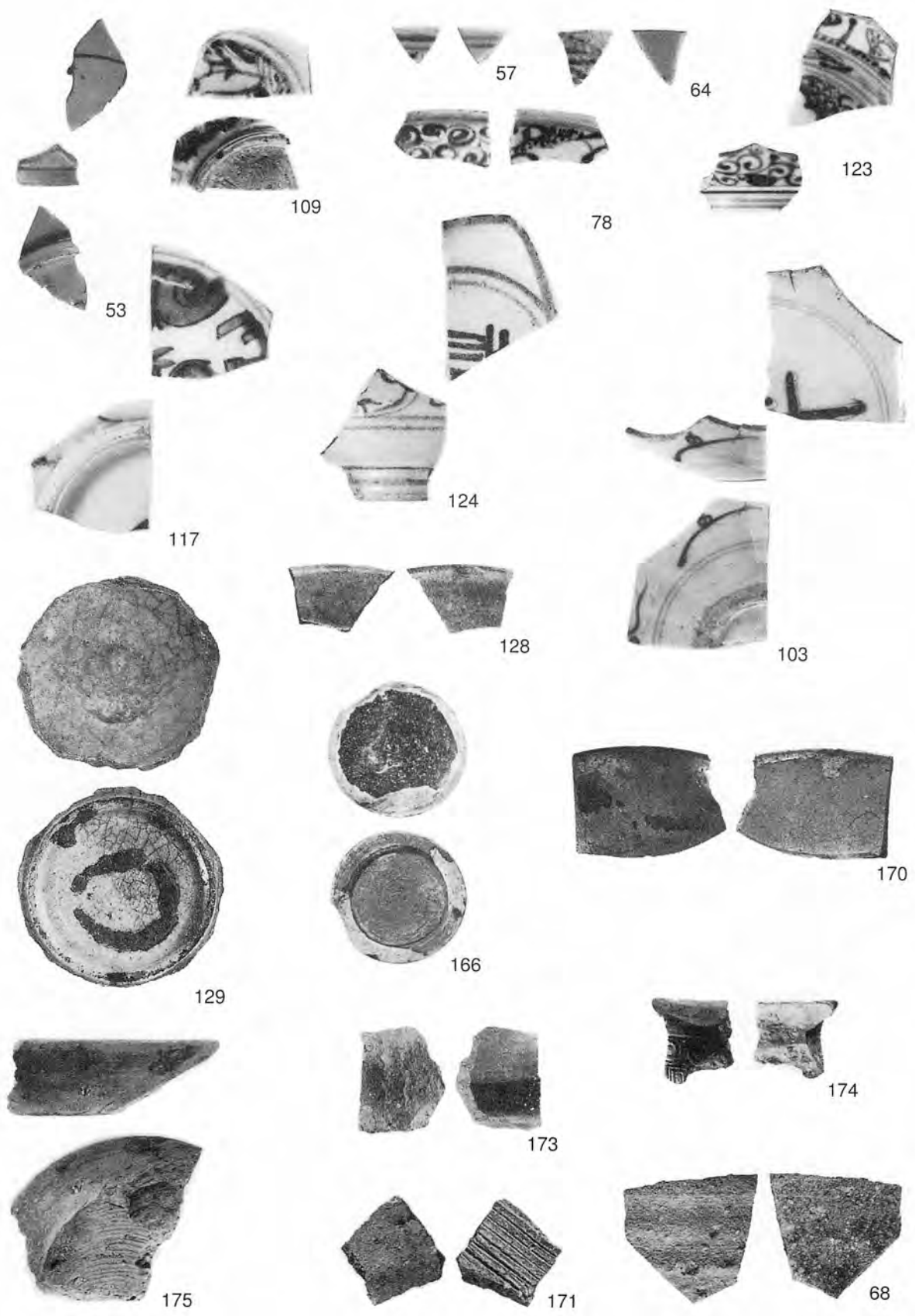
12号烧土平面



断面



写真図版 54 出土遺物 1 (染付)



写真図版 55 出土遺物 2 (染付・国産陶器)





179



205



176



198



180



186



196



202



197



177



185



181

写真図版 56 出土遺物 3 (錢貨 1)



183



178



207



194



182



204



184



203



193



199



191



188

写真図版 57 出土遺物 4 (銭貨 2)



195



189



187



200  
201



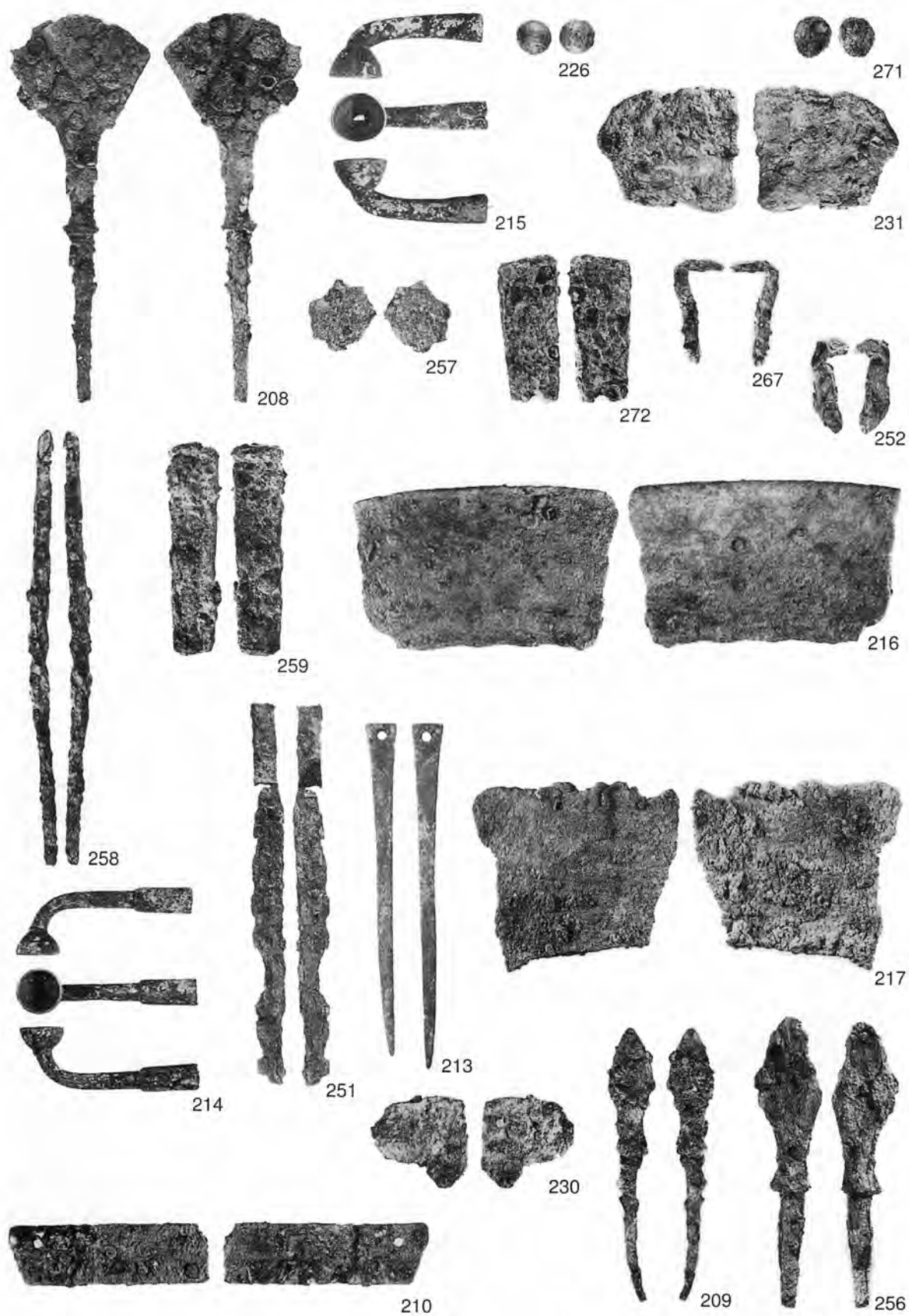
206



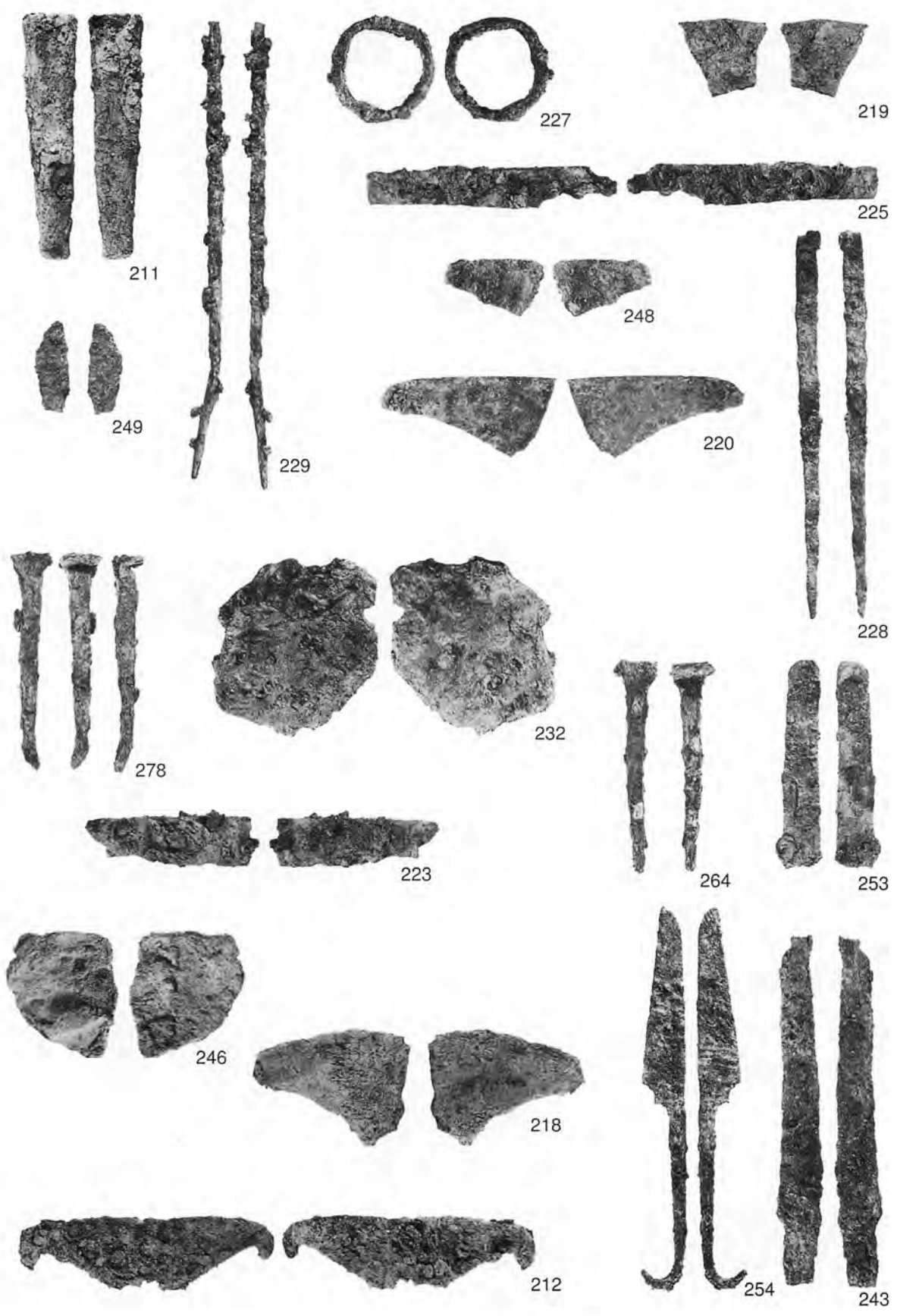
190



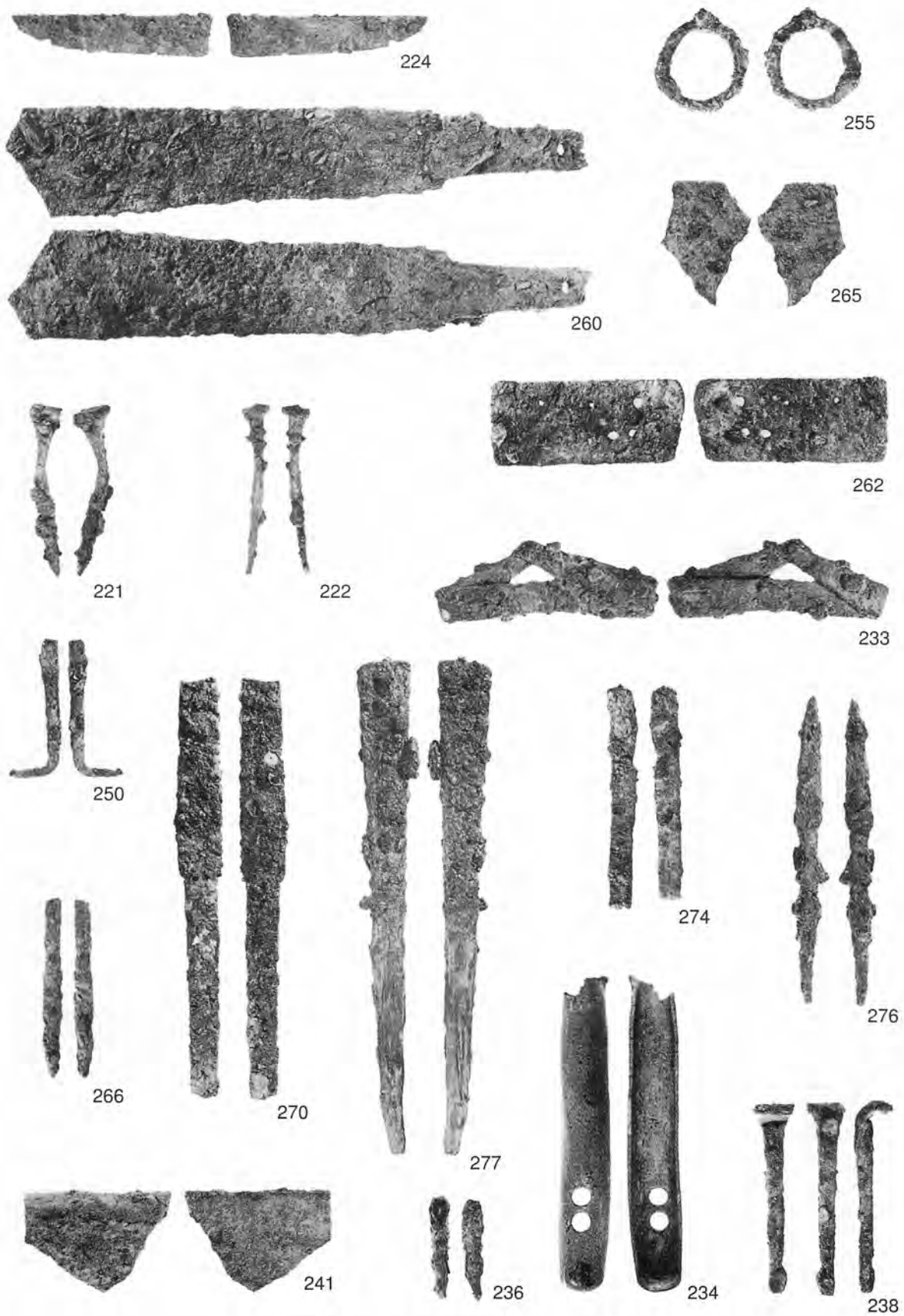
192



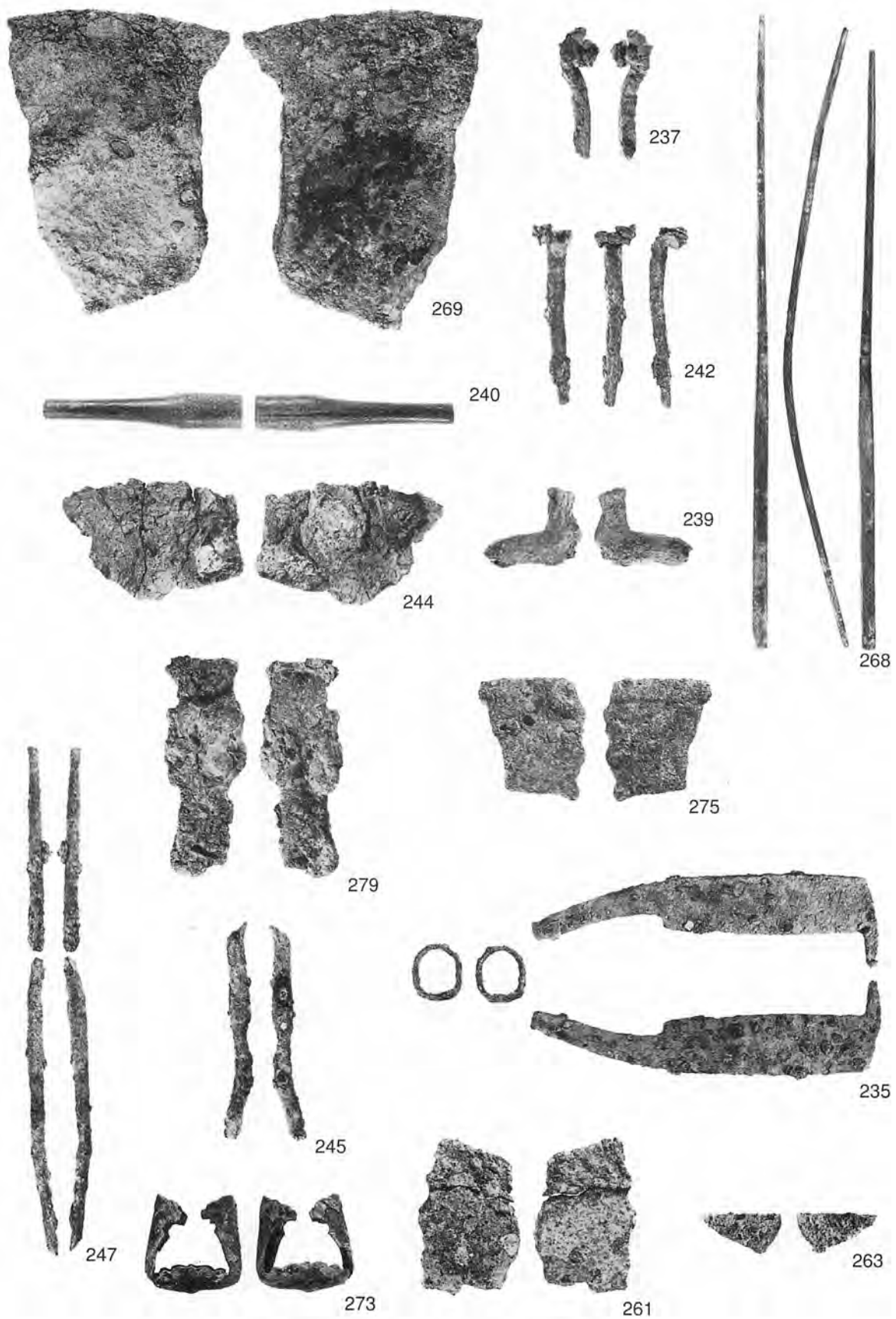
写真図版 59 出土遺物 6 (金属器 1)



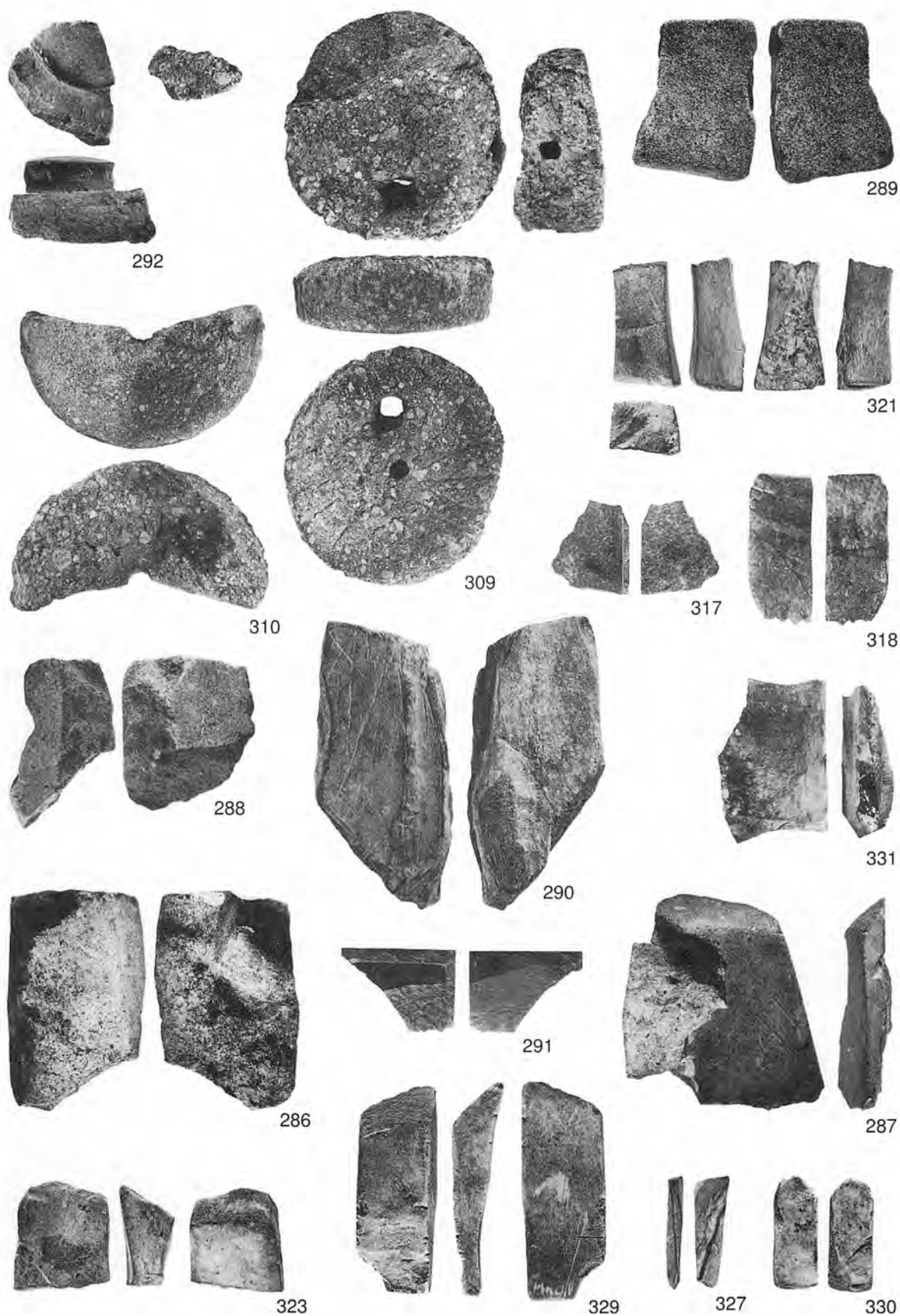
写真図版60 出土遺物7 (金属器2)



写真図版61 出土遺物8 (金属器3)

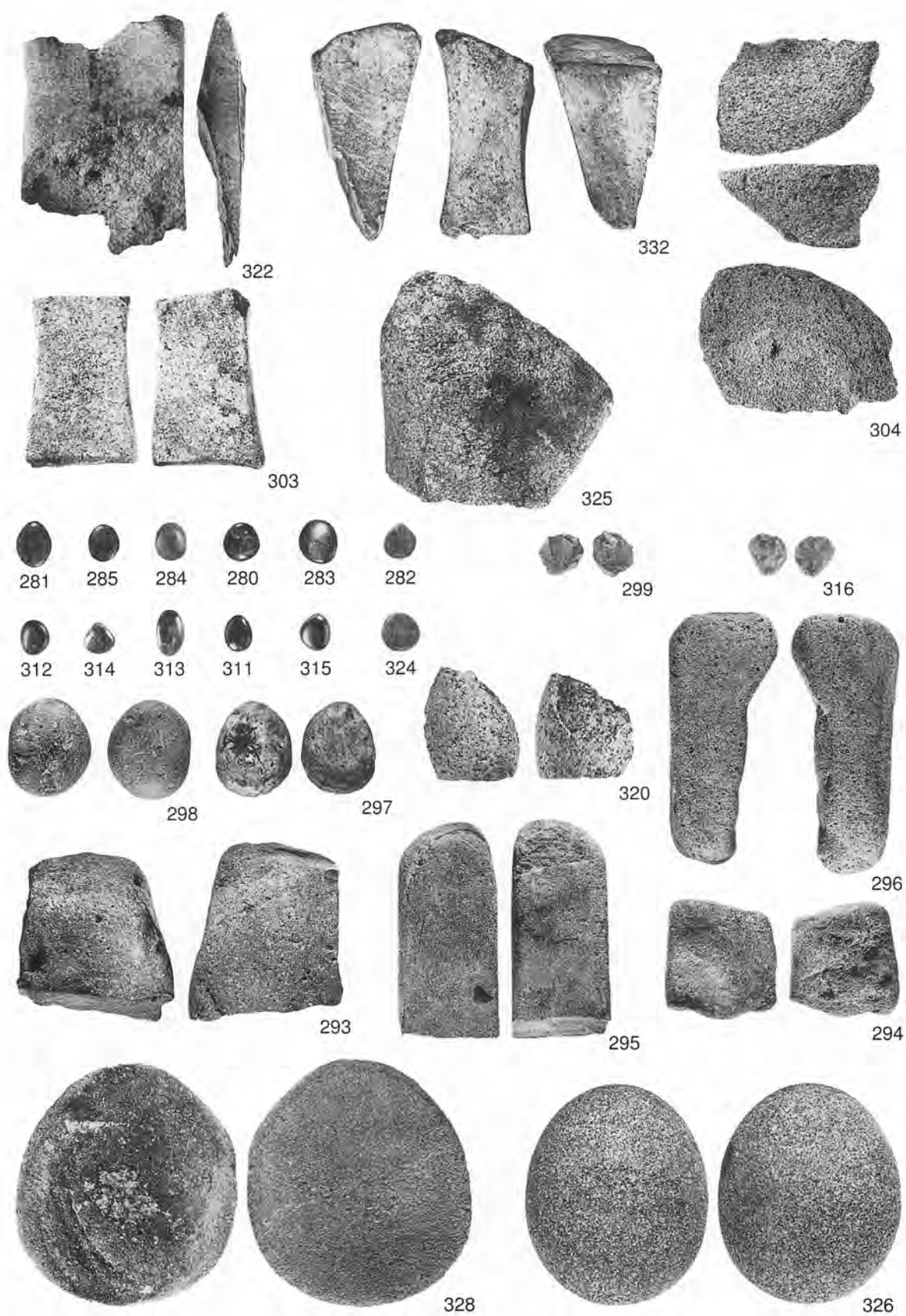


写真図版62 出土遺物9 (金属器4)

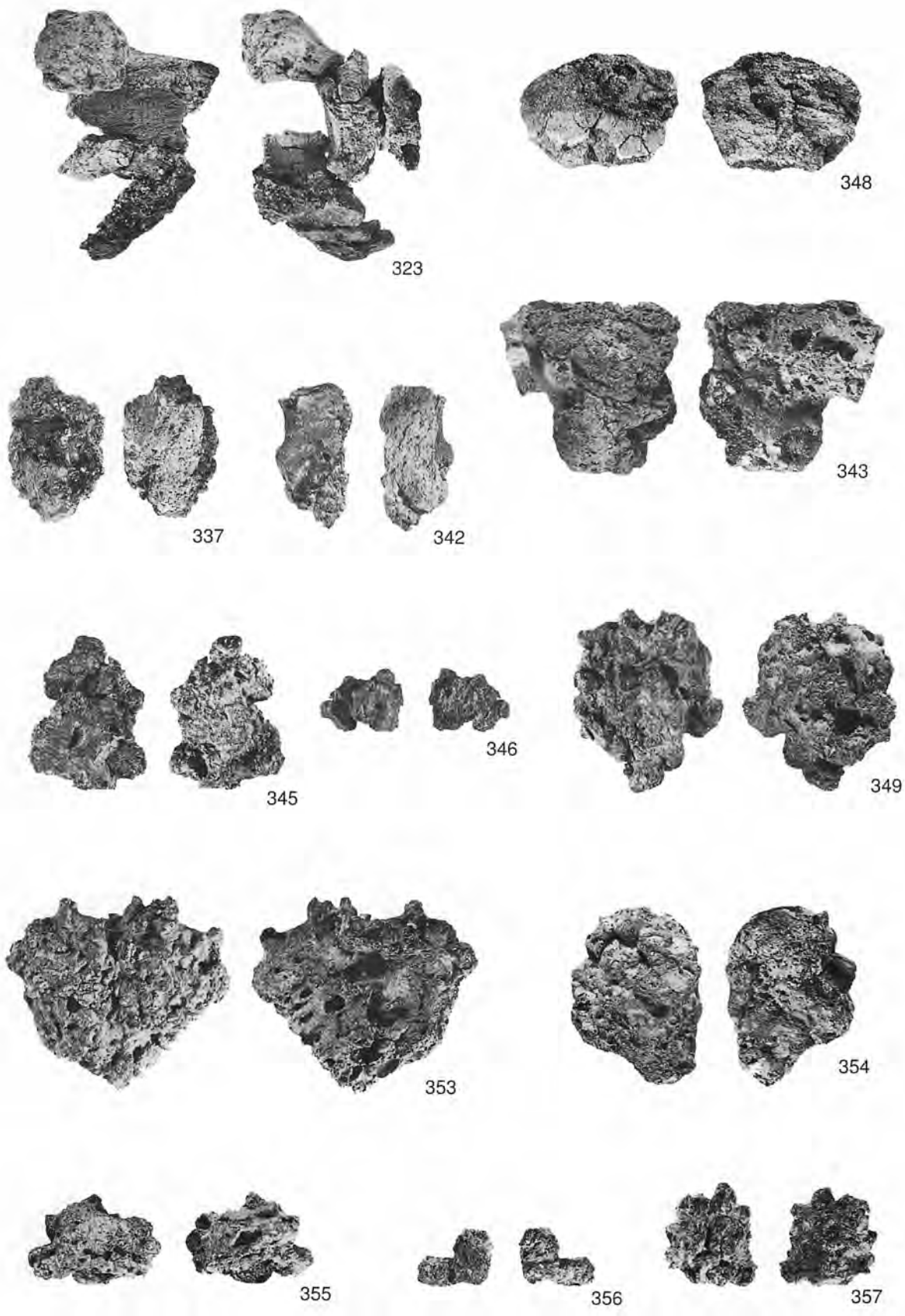


写真図版63 出土遺物10 (石器・石製品1)

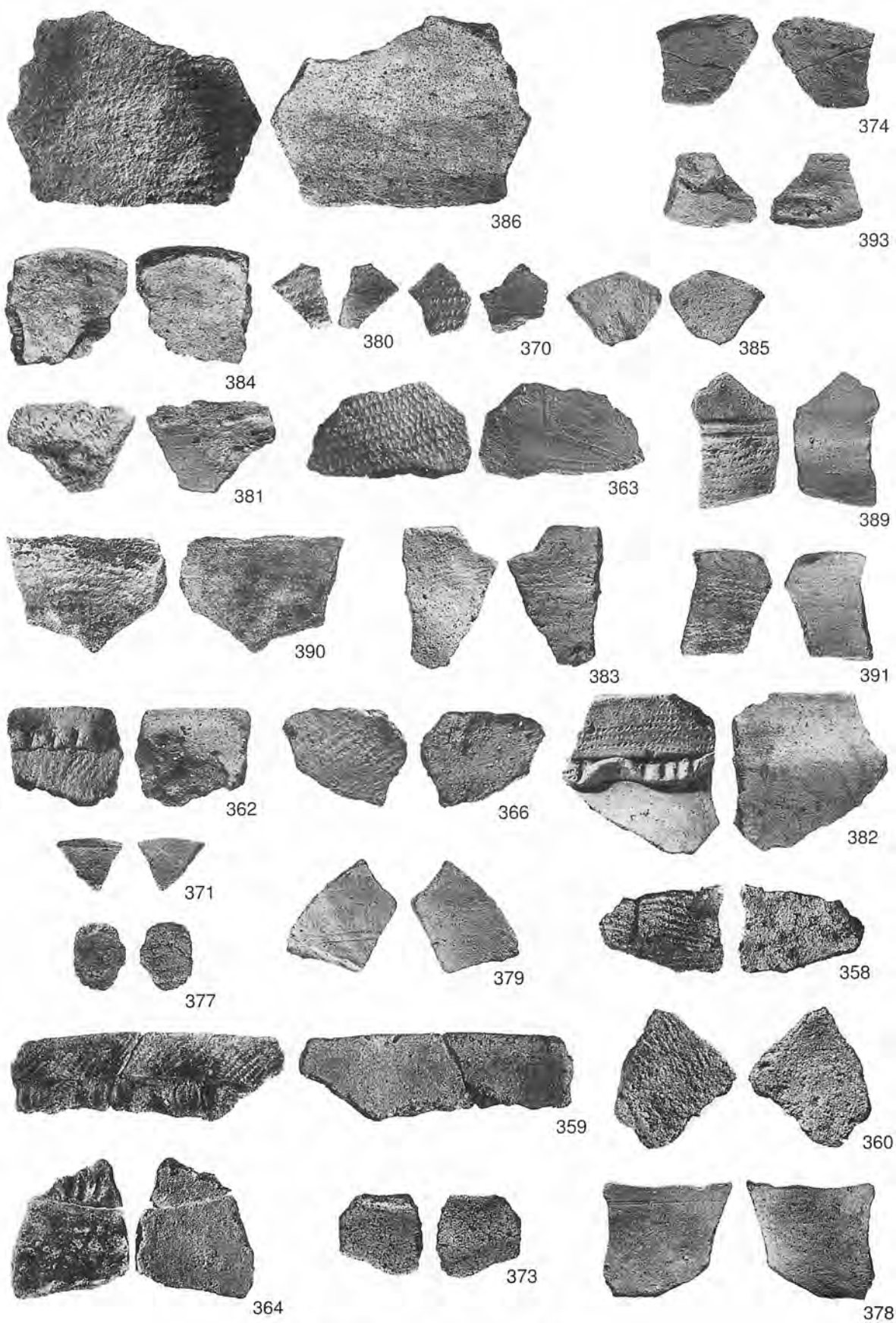




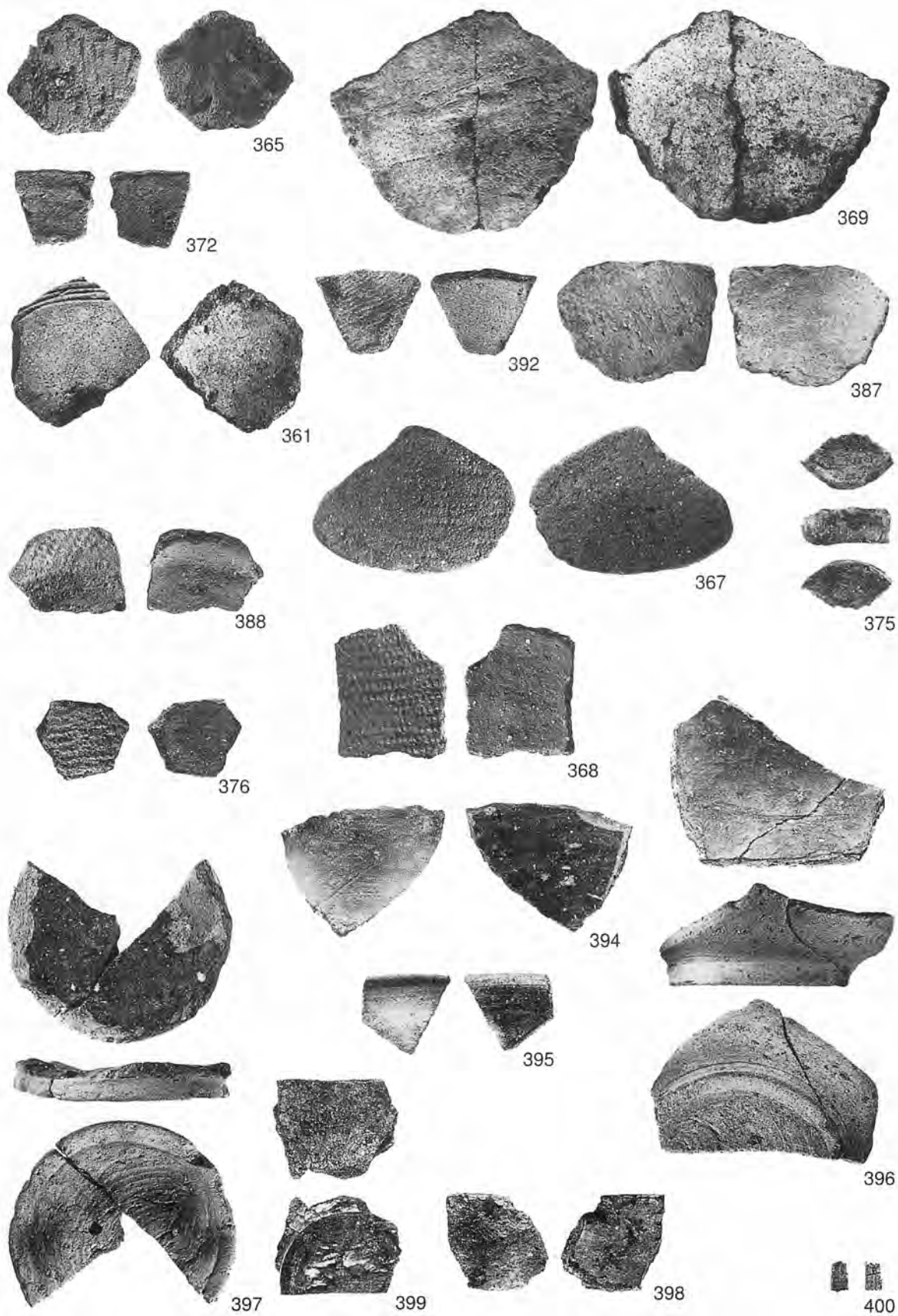
写真図版64 出土遺物11 (石器・石製品2)



写真図版 65 出土遺物 12 (羽口・炉壁・鋳滓)



写真図版66 出土遺物13(土器1)



写真図版67 出土遺物14(土器2)

報 告 書 抄 録

ふりがな	しのだてあとはくつちようさほうこくしよ						
書 名	篠館跡発掘調査報告書						
副 書 名	一般国道283号線改築事業関連遺跡発掘調査						
巻 次							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第353集						
編 著 者 名	小笠原 健一郎						
編 集 機 関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所 在 地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡第11地割185番地 TEL 019-638-9001						
発行年月日	西暦 2000年10月31日						
ふりがな	ふりがな	コード		北緯 。 / 〃	東経 。 / 〃	調査期間	調査面積
所収遺跡	所在地とおのしかみ 岩手県遠野市上郷町 ごうちょうほそごえ 細越第16地割字赤羽 あかばね 根94番地ほか	市町村	遺跡番号	39度 15分 3秒	141度 36分 30秒	1998.4.15～ 1998.11.2	11,550㎡  7,750㎡
		03201	MF76-0298			1999.4.15～ 1999.11.5	
調査原因	所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物	
一般国道283号線改築事業に伴う緊急発掘調査	篠館跡	城館跡 散布地	中世(15～16世紀)	曲輪 30ヶ所 堀跡 9条 土塁 9基 切岸 15ヶ所 獨立柱建物跡 1棟 竪穴住居跡 1棟 石積 2基 集石 13基 柱穴列 5基 土坑 28基 焼土遺構 12基 テラス状遺構 2ヶ所 武者走り状遺構2ヶ所		国産陶器 48点(灰釉、 鉄釉、瓦質土器、摺鉢) かわらけ 1点 中国産磁器 127点(青 磁、白磁、染付、赤絵) 金属器 72点(鉄鏃、 小札、鍋等、刀子、釘) 古銭 32点 石製品・石器 53点 (砥石、石鉢、硯、石臼、 茶臼等)土師器 5点 縄文土器40点 (天王山式等) 炉壁・羽口・鉾滓 木製品(椀)・骨角器	

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員名簿

【職員】

所 長	伊 藤 民 也	副 所 長	櫻 田 次 男
〔管理課〕		〔調査二課〕	
管 理 課 長	川 浪 清 徳	嘱 託	千 葉 芳 夫
課 長 補 佐	山 崎 善 光	〃	藤 島 恵 子
主 査	立 花 多 加 志	〃	新 田 卜 ヨ
主 事	日 影 睦 夫	〃	佐々木 光 重
〔調査一課〕		〔調査二課〕	
調 査 一 課 長	佐々木 勝	調 査 二 課 長	高 橋 與 右 衛 門
課 長 補 佐	佐々木 清 文	課 長 補 佐	中 川 重 紀
主任文化財		主任文化財	
専門調査員	小山内 透	専門調査員	高 橋 義 介
		〃	高 金 子 佐 知 子
文化財専門調査員	赤 石 登	文化財専門調査員	中 田 迪
〃	吉 田 充	〃	工 藤 道 孝
〃	小 原 眞 一	〃	古 館 貞 身
〃	小笠原 健一郎	〃	阿 部 眞 澄
〃	金 野 進	〃	松 尾 芳 幸
〃	鳥 居 達 人	〃	工 藤 徹
〃	金 子 昭 彦	〃	前 田 稔
〃	東海林 淳 美	〃	岩 淵 計
〃	阿 部 勝 則	〃	早 坂 悟 宏
〃	羽 柴 直 人	〃	濱 田 宏
〃	小野寺 正 之	〃	安 藤 由 起 夫
〃	菅 原 靖 男	〃	高 木 晃 彦
〃	長 村 克 稔	〃	千 葉 正 彦
〃	溜 浩 二 郎	〃	佐 藤 淳 一
〃	菊 池 貴 広	〃	半 澤 武 彦
〃	村 上 拓 郎	〃	杉 沢 昭 太 郎
〃	本 多 準 一 郎	〃	中 村 直 美 之
〃	北 村 忠 昭	〃	
〃	丸 山 浩 治	〃	
〃	村 木 敬	〃	
期限付専門職員	小 林 弘 卓	期限付専門職員	鈴 木 聡
〃	江 藤 敦	〃	吉 川 徹
〃	藤 原 賢 徳 (6月退職)	〃	北 田 勲
〃	菊 池 賢	〃	吉 田 里 和
〃	井 上 信 介	〃	原 美 津 子
〃	川 又 晋	〃	齊 藤 麻 紀 子
〃	吉 田 真 由 美	〃	島 原 弘 征
〃	北 田 博 義		

---

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第353集

**篠館跡発掘調査報告書**

一般国道283号線改築工事関連遺跡発掘調査

印刷 平成12年10月25日

発行 平成12年10月31日

発行(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185

電話 (019) 638-9001

FAX (019) 638-8563

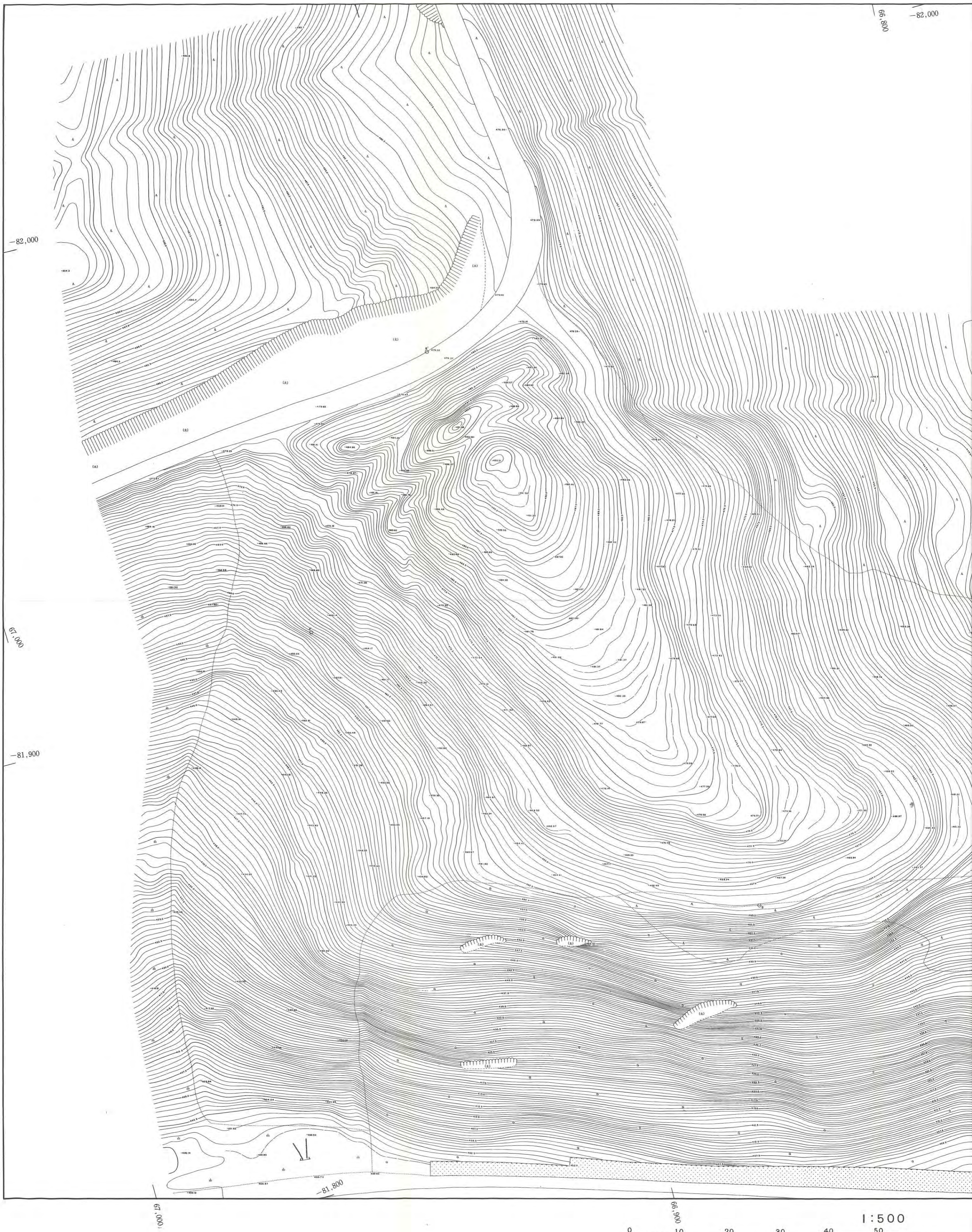
印刷 有限会社橋本印刷

〒020-0015 岩手県盛岡市本町通1-15-29

電話 (019) 652-1354

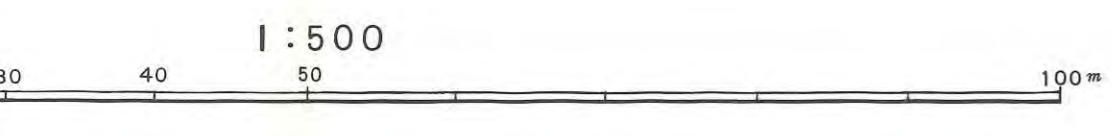
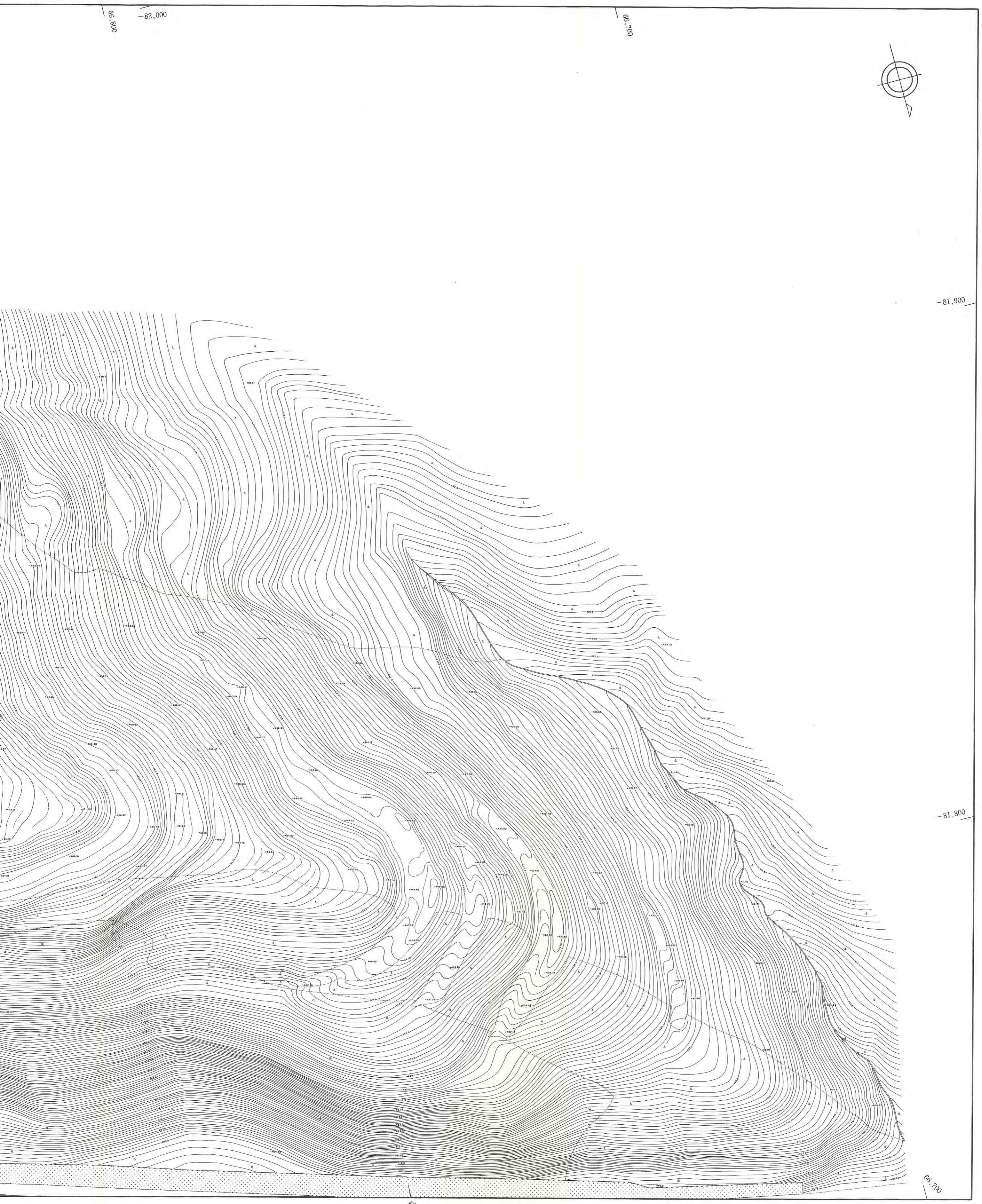
---

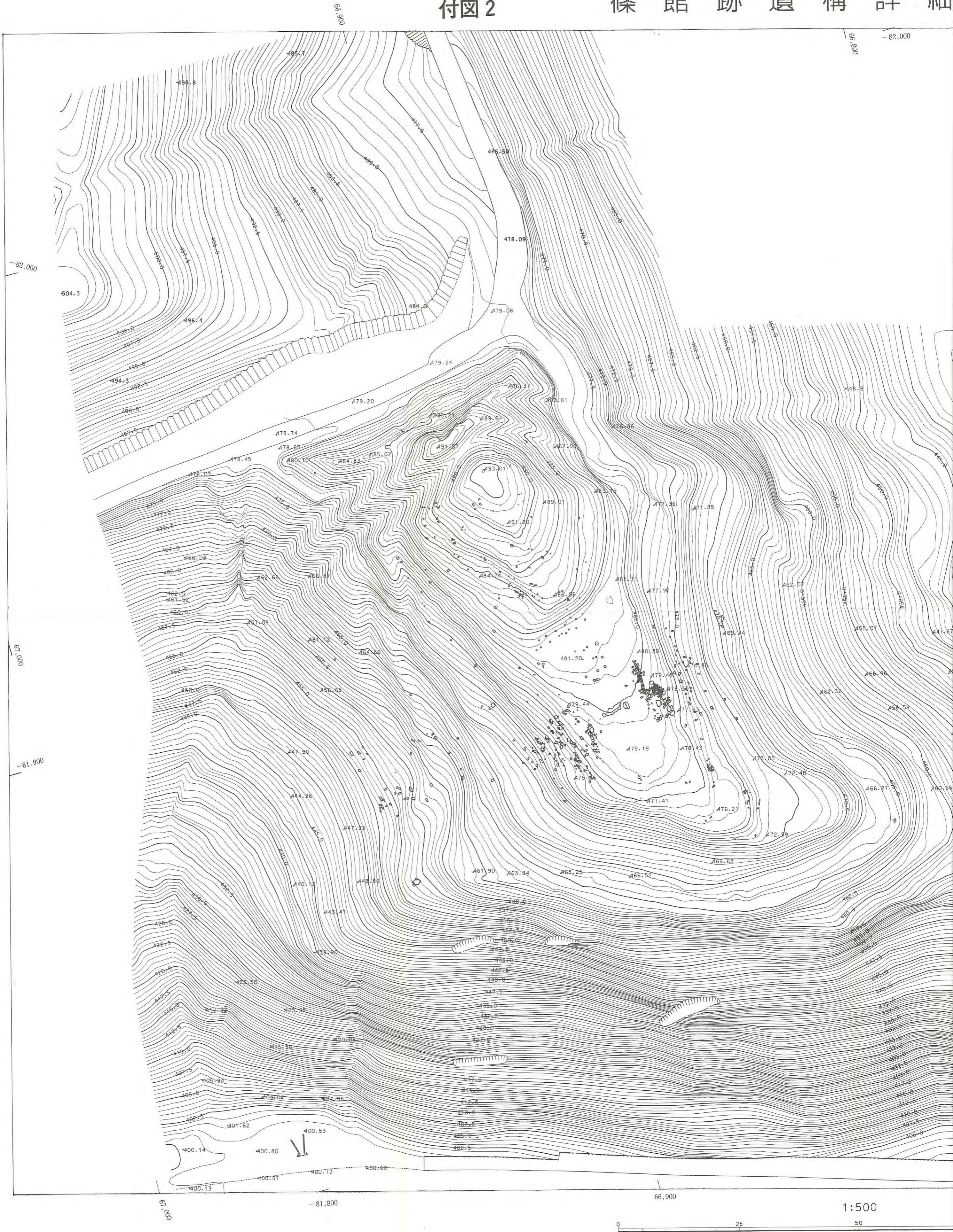
---



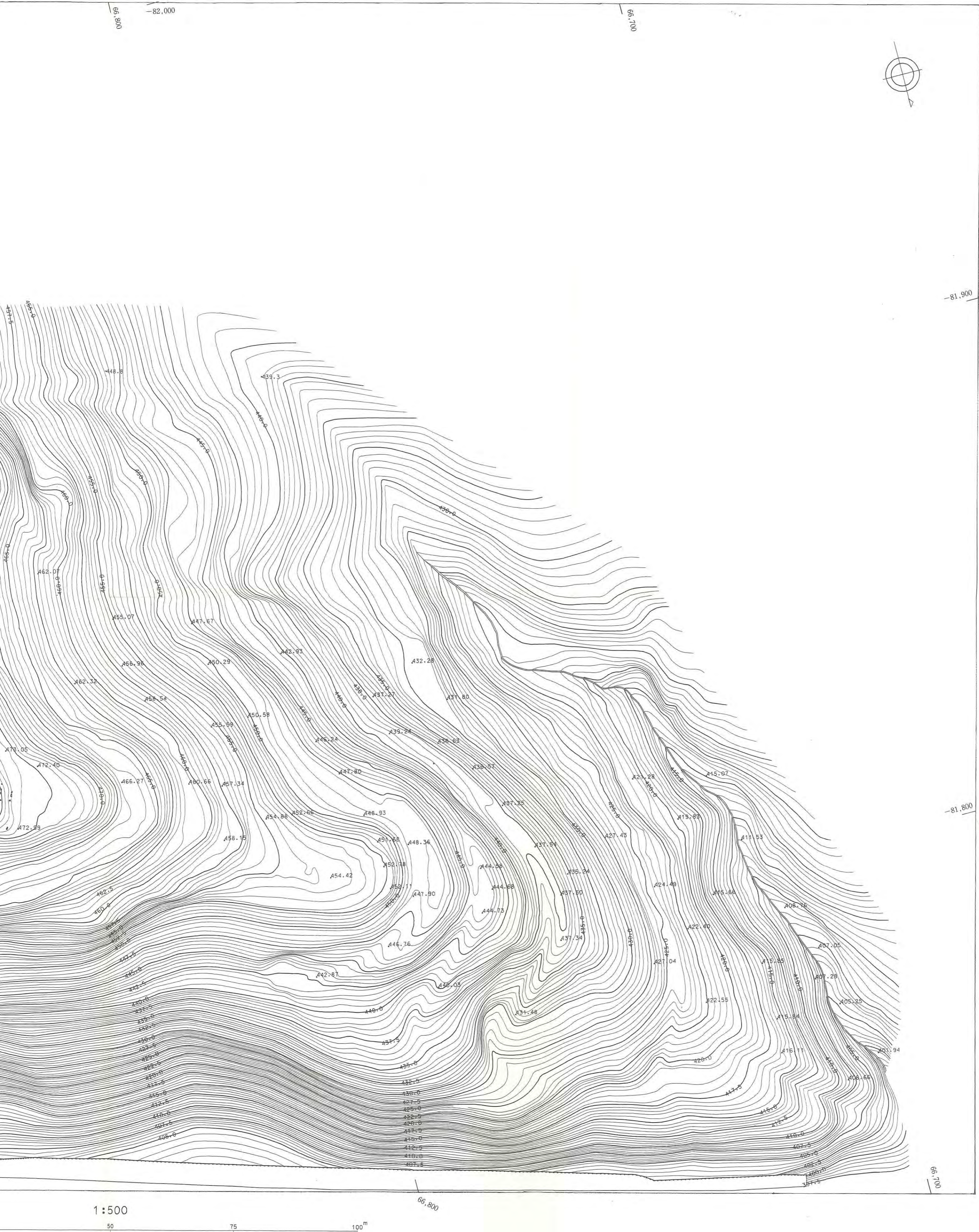


# 遺跡現況平面図





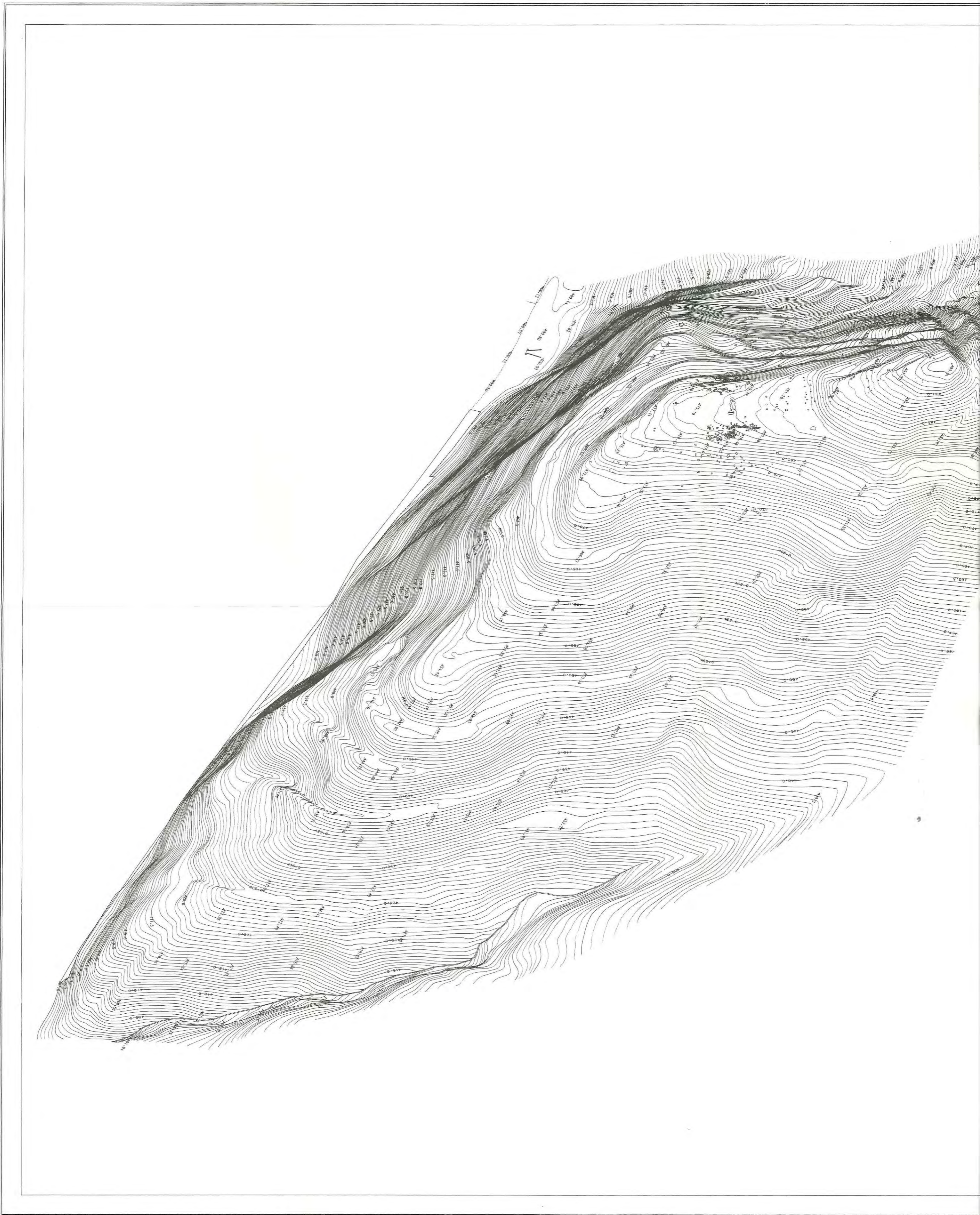
# 遺構詳細平面図



1:500

50 75 100m

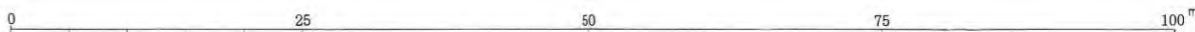
付図3 篠館跡遺構詳細平面図(俯)



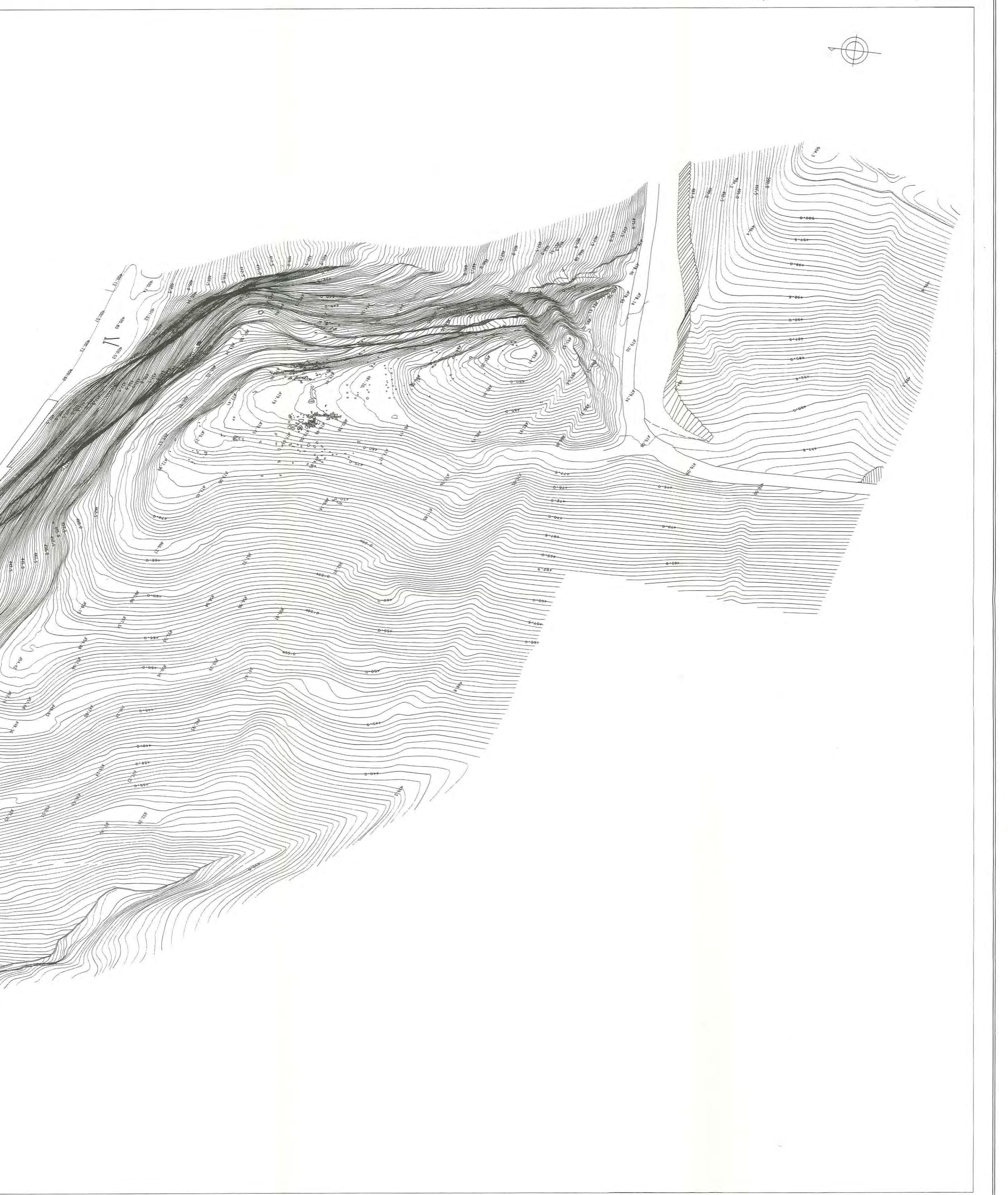
測 図 平成11年11月30日

座 標 系 測X系  
等 高 線 間 隔 50cm

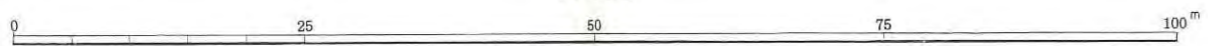
1:500



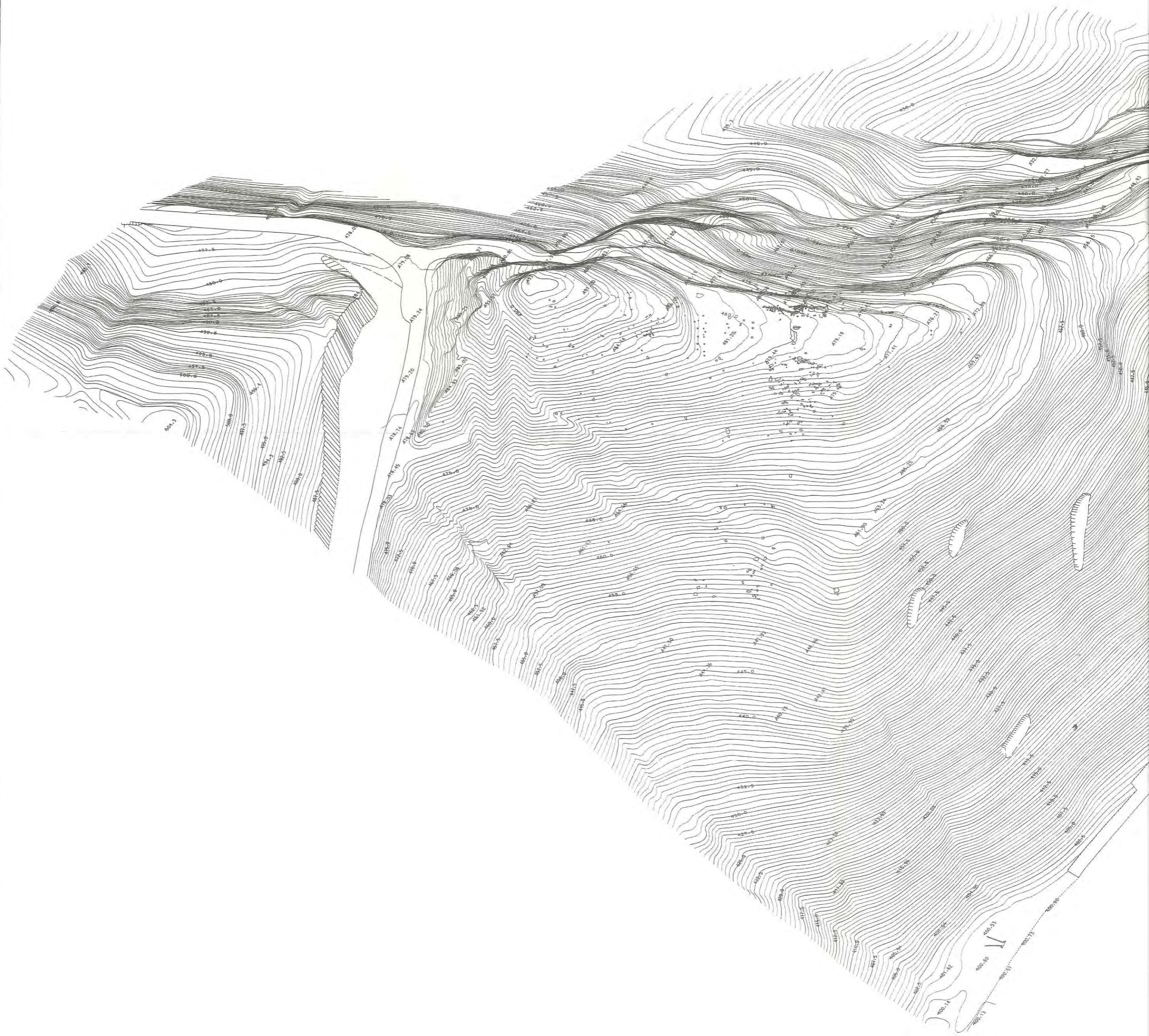
館跡遺構詳細平面図(俯瞰西側)



1:500



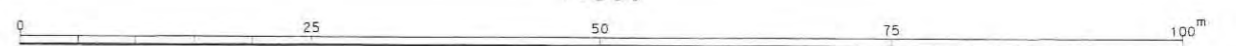
付図4 篠館跡遺構詳細平面図(俯)



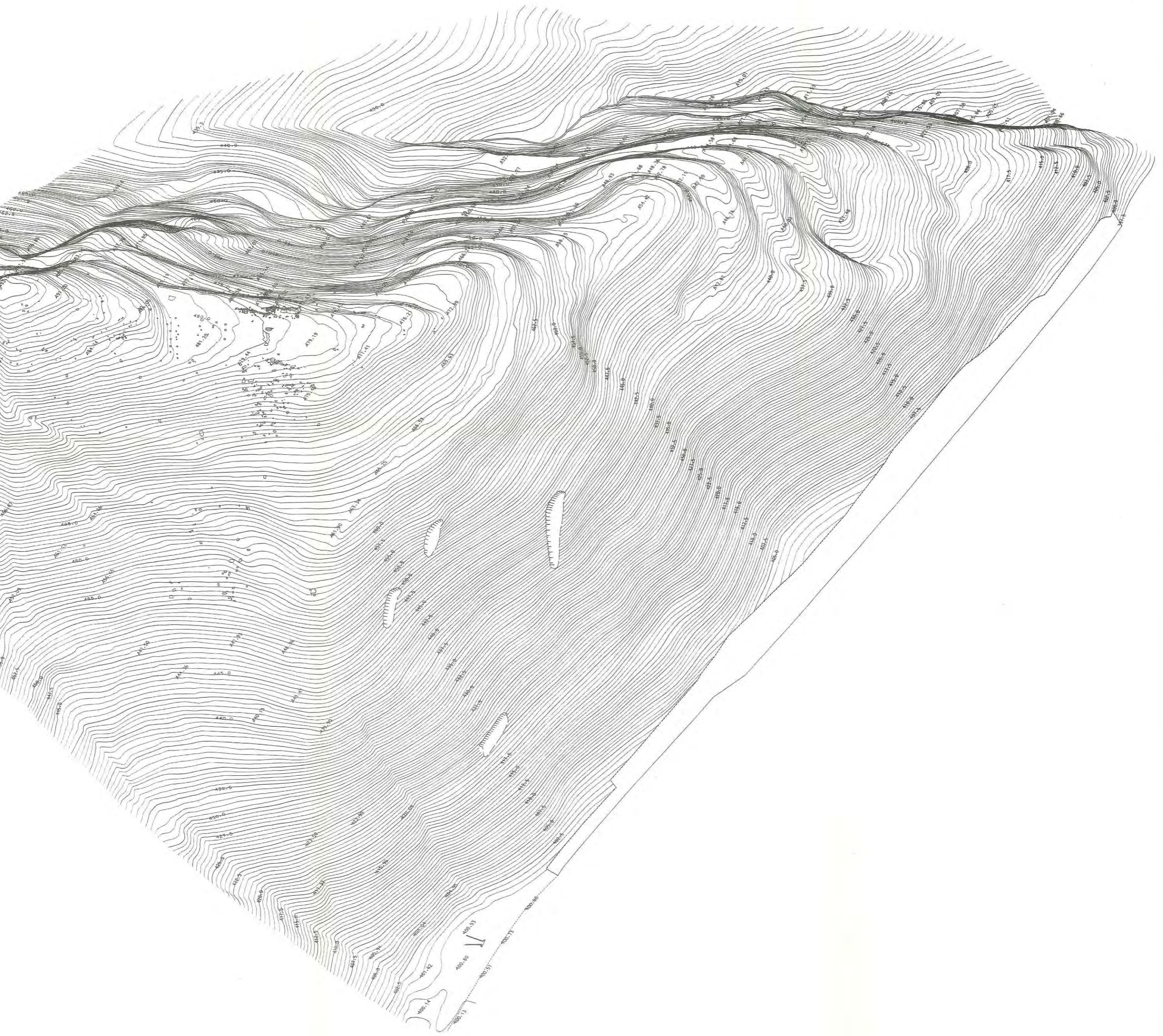
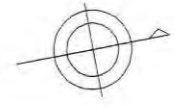
測 図 平成 11 年 11 月 30 日

座 標 系 第 X 系  
等 高 線 間 隔 50cm

1:500



宮跡遺構詳細平面図(俯瞰東側)



1:500

